全てを守れるほど強くなりたい

ジェームズ・リッチマン

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
さやかちゃんを超強化してバトルさせたい。

目次

第一章　井の中の稚魚

そこに貴女がいたから ―― 1
今度こそ、必ず ―― 8
釘を刺そうと思ったのに ―― 15
貴女も聞こえたの？ ―― 26
また間に合わなかった ―― 39
後悔はしてほしくなかったから 49
なんだかやり辛いわね ―― 63
危ない場所に連れ回さないで ― 74
今頃この結界にいるのでしょうけど 88
やっぱり、どこかおかしいわ ― 102
兵器を集めないと ―― 112
煤子って、誰のこと？ ―― 126
穏便に済めば一番だけど ―― 135
何が貴女をそうさせたの!? ―― 144
そんな、どうしてもう ―― 161
どうなってしまうのかしら ―― 172
その気になればできるはず ―― 183

第二章　飛び火の呼び水

気持ち悪いほど穏やかね ―― 190
誰にも頼らないつもりだったけど 200
案外、受け入れてもらえるのかも

214 ここの魔女ならどうにでもなるでしょう ―― 223
238 何故ここに？　いえ、それよりも人違いではないんでしょうね……
248 あの子の過去も変わっている？
263 身勝手な事だとわかっているわ
275 煤子とさやか、その過去には何が…… ―― 287
302 調べ物も頭打ちね ―― 312
312 こっちに行けば接触できるかしら
第三章　燃える滸に佇む者
334 神がいたとしても、私を裁いてはくれない ―― 347
347 あなたはそんなものに屈するべきではない ―― 359
359 いつ見ても綺麗な魔法…… ―― 370
370 大人数だと違うわね ―― 381
381 強いはず、なんだけど ―― 395
395 それがあればお菓子の魔女にだって勝てそうね ――

少しは心配にもなるわよ ―― 409
私の場合は、言うまでもないものだったけど ―― 422
いいえ、貴女も解る時がくる ― 440
第四章　矛盾の解答例
二人が来たのね ―― 447
腕を上げたようね ―― 460
それが貴女の限界ではない ―― 472
今の平穏や幸せを奪うことなんて 480
全てを自分で諦めていたなんて 494
甘えさせないで ―― 508
お手並み拝見といきましょうか 515
自分にも作用する……なるほど、そういう使い方も…… ―― 526
信じる者は救われるのか ―― 539
そこで私が望んでしまったから 547
第五章　狼煙を上げろ
とても怖いし、不安だけど ―― 565
停滞するよりはずっとマシよ ― 580
私の最期の友達 ―― 590
万全、のはず ―― 606
いつもとは違うけど、手応えはある

618
……来る ―――― 630
貴女の力を信じてる！ ―――― 643
魔女はどこ？ ―――― 661
私達なら不可能だとは思わない
675
このままではいけない！ ―――― 691
どうしよう、どうしたら ―――― 707
赤い炎が踊っているみたい ―――― 721
第六章　それが望んだ結末か
この世界に神は居ない ―――― 734
戦線に復帰しなきゃ ―――― 743
ようやくあの敵を…… ―――― 754
不覚を、取った ―――― 767
嘘でしょ ―――― 778
また、戦わなければいけないのね
792
貴女の祈りとその背中に ―――― 804
白馬の軍勢…… ―――― 813
それでいいのよ、二人とも ―――― 826
無駄にならなくて本当に良かった
840
ゲームオーバー ―――― 852

第一章　井の中の稚魚
そこに貴女がいたから

それは剣道部に入部する六年前の出会い。
それは剣道道場に通う一ヶ月前の別れ。
今でも、その時の出来事を鮮明に覚えている。
「ああ……私はなんてことを……」
河原の橋の下で出会ったのは、綺麗な後ろ姿の女性だった。
辺りに散らばる黒い砂を前にして、なんというか彼女は、普通じゃなかった。
「どうかしたんですかー？」
駆け寄った私の、半分の心配。もう半分の興味。
だけど彼女の顔を見た時、私の興味半分は跡形もなく凍てついてしまった。
「ぁあああッ……私は……」
人が、心の底からの悲嘆に苦しむ顔を見た。
美しい女性なのに、悲しみはここまで人を苦しそうにさせてしまうだなんて。
その日は大切な出会いの日でもある。

けどそれは同時に、私の中で大きな何かが変わった瞬間でもあったのだ。
「足りない、これじゃあ足りない……」
彼女は涙ぐんだ声で、黒い砂をかき集めている。
当時の幼い私にはその意味がわからなかったけれど、その歳なりに同情の想いはあった。
「間に合いっこない……」
「あの……」
だから声をかけた。
〝大丈夫ですか〟と、肩に手を触れた。
その時、さっと振り向いた彼女が私を睨み、鋭い目で動きを射とめた。
そして、一瞬だけ口を大きく開いた後、彼女の喉がコクリと鳴って、次の瞬間には、逆に私の両肩が掴まれていた。
「ぁ……」
それがどこか怒りの形相のように見えてしまって。
どうして私に向けられているのか分からなかったから。
それに、何よりも。
「美樹さやか……！」

会ったことがないはずのない人が私を知っていた事が、怖かった。
「期待はしないわ。けど答えて……あなたは今、何年生？」
「さ、三年生……です」
瞬きしない目が私を逃さない。
「……カナメ、っていう子、知らないわね」
「う、うん……知らない」
「やっぱりまだ越してないか……」
そこで初めて、女性は私から目を逸らした。
女性の目は赤く充血し、涙で濡れて、きらきらと光っていて……場違いな感情だとわかっていても、その時確かに私は〝綺麗だな〟と感じたのを覚えている。
「あの、なに……なんですか？　お姉さん、誰なんですか？」
「……」
女性は伏目で私を胸辺りを見た後に、また目を見た。
そこにはもう、悲嘆も怒りも浮かんでいない。
「私のお願い、聞いて貰っても良いかしら」
この人は、悲しまないと、怒らないと、こんなに綺麗な顔をしてるんだ。
「聞いてる？」

「はっ、はいっ！」
「このお願い、どうか受け止めて生きてほしいの……私が今更、貴女へ偉そうに言えることではないのだけど」
　バカな私にも伝わるよう、滑らかに言葉を紡ぐ女性の努力と反して、噛み砕かれた意味は私の頭に届いてはいなかった。
「あ、あの」
　だからまずは聞いておきたかったのだ。
「お姉さんの名前は……なんていうんですか？」
「……」
　半分開いた口が、何文字かの息を吐いた気がした。
「……私、ね。そう……」
　思いついたように長い黒髪を後ろで束ねたその後に、言葉は紡がれた。
「私のことは、〝煤子（すすこ）〟と呼んで。美樹さやか」

　私はあの時の事を、今でも思い出せる。
　煤子さんとの大切な出会いを。彼女の語らぬ想いを。
　記憶は時間と共に色あせて、あの人の顔もはっきりと思い出せなくなってしまったけ

れど。

まだあの時の日々は、私の中に残っているんだ。

だからこそ今、私はやっと後悔し始めている。

「剣道部、やめなきゃ良かったな……」

「ん？　どうしたの？」

呟きに、隣を歩くまどかがひょいと顔を覗き込んできた。

「あ、もしかして今の、出てた？」

「てぃひひ……ばっちし出てたよ、さやかちゃん……」

「あっちゃあー」

「うーん。けど上条君も、さやかちゃんには頑張ってほしいはずだよ？　私も、さやかちゃんには続けてほしかったな……」

「……うーん」

恭介が入院してから一週間が経つ。

あれは不運な事故だった。この国の年間で見れば、よくある事故だ。

けれど、彼の左腕に与えた影響はあまりにも大きすぎた。

温和に、綺麗に微笑んでいた彼の表情に、深い影を落とすほどに。

「またね、さやかちゃん」
「うん。また明日ー」
それで私の周囲の事情も色々と動いたんだけど、これがまた複雑でね。
頭脳明晰のさやかちゃんをもってしても、なかなか上手いこといかないんですわ。

「うーん……」
ベッドの上で天井を仰ぐ。
すん、と鼻を鳴らせば、顔の隣の、乾いて嫌な臭いが薄れた竹刀が感じられる。
「顧問になんて言おっかなぁーー」
今更なんて言えばいいんだろう。
ものすごい適当な良い訳をつけて退部して、一部の先輩にも迷惑をかけたのに。今更どんな顔で戻れば良いのか。
そもそも、戻るべきなのか。そんな必要がどこにあるのか。考えないでもないことだ。うーん。
けれど、私が剣道部をやめるきっかけとなった恭介は、気にせず続けてほしいと言うし……。
でもまた入部すると、そう頻繁にはお見舞いにいけなくなるしなー……何より一部の

先輩が面倒臭いしなあ。

ああ、見舞いにいかないとしても、顧問になんと言えば……。

「……」

私はベッドの脇を竹刀でばしばし当たった少し後で、ぐっすり寝た。

今度こそ、必ず

「おっはよ～」
朝の待ち合わせ場所にまどかがやってきた。
仁美と私を合わせた三人は、クラスでも特に仲の良いメンバーだ。
「おはようございます」
「えへへ、おはよー」
で、私はというとまどかの次にやってきた。
「はぁっ、はぁっ！　ごめーん！」
「さやかちゃん、おそーい」
駆け足でようやく二人に追いついたところである。まさか、まどかとタッチの差で負けるだなんて……くっ……。
昨日、毛布の中で悶々とし過ぎていたのが駄目だったわ。起こしてくれたお母さんには感謝しなくちゃいけない。
……って、およ？　なんだかまどかの感じ、いつもと違うじゃないの。

「おー？　なんか可愛いリボンつけてるねぇ、まどかぁ」
「そ、そうかな？　派手過ぎない？」
「とても素敵ですわ」
鮮やかな赤色のリボン。
うん、まどかには良く似合っている。
「女の子はもっと派手だって良いくらいだよ、まどか！」
「え、えー……そうかなぁ……」
まどかのツインテールをぽしぽしはたきながら、私達は学校へ歩き始めた。
天気もいい。とても良い雰囲気だ。
「それでね、ラブレターでなく直に告白できるようでなきゃダメだって」
「うんうん、さすがは詢子さん！　カッコいいなあ、美人だし」
「そんな風にキッパリ割り切れたらいいんだけど……はぁ」
「仁美は優しいねぇー」
彼女はお嬢様然とした雰囲気が男子の気を誘っている。仁美は昔から、結構おモテになる子なのだ。その手のことで悩まされることは多かった。
けど仁美がそんなに思い悩む必要なんてないと思う。
私のように、狭く汚い靴箱に託された手紙なんかはその場で破き捨てるくらいでなく

ちゃね。
　まぁ、封をしてない果たし状みたいな手紙なら、開いてやらなくもないけど。
「いいなぁ、わたしも一通ぐらいもらってみたいなぁ……ラブレター」
「ほーう？　まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと？　そこでまずはリボンからイメチェンですかな？」
「ちがうよぉ、これはママが」
「さては、詢子さんからモテる秘訣を教わったな？　けしからぁあん！　そんな破廉恥な子は～、こうだぁっ！」
　頭を掻いたり、脇を責めたり、胸を揉んでみたり。
　それにしても、なんて成長しない胸だ！　けしからない！
「や……ちょっと！　やめて……やめっ」
「慎ましいやつめ！　でも男子にモテようなんて許さんぞー！　まどかは私の嫁になるのだー！　うりうり～」
「ごほんっ」
　おっとと、仁美からのストップか。
　命拾いしたねまどか！
「もう、さやかちゃんたら……」

「ふふっ」
さ。学校はもう、すぐそこだ。
早く入ってしまおう。

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くように」
「ん?」
半分眠りかけた耳に、聞き慣れないもったいぶった言葉が飛び込んだ。
先生の顔はやけに真面目だ。一体何があったというのだろう。
「目玉焼きとは、固焼きですか!? それとも半熟ですか!? はい、中沢君!」
「えっ!?」
個人的には半熟の方が吸収が良くて助かるかなぁ、ってぼんやり思う。
ああ、でも固焼きのが器は汚れないし、結局口の中に入る量で言えば固焼きのが良いのかも……。
「ど、どっちでもいいんじゃないかと」
「その通り! どっちでもよろしい!」
そっかぁ……そうだねって感じだ……。
「たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです! 女子の

みなさんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように！」

なるほど、そういえば先生、付き合ってたっけ……。

機嫌が悪いのはつまりはそういうことか。……最近は上手くいってなかったのかな。先生の顔色には出てなかったと思うんだけど。

それにしても、一ヶ月と二日か……早かったね……。

「ダメだったか」

「ダメだったんだね……」

それでも折れないところは、素直に凄いと思うんだけどね、先生。

「そして、男子の皆さんは絶対に卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！」

次は良い男の人に恵まれますように……と、ひっそり願ってみる。

「はい、あとそれから、今日はみなさんに転校生を紹介します」

ええええ、そっちが後回しかぁい！

「じゃ、暁美さん、いらっしゃい」

ガラス戸が開いたそこからは、ガラス越しで見るよりも艶やかな黒髪を湛えた美少女

が入ってきた。
「うおっ……」
とんでもない美人がそこにいた、ってやつだ。
きりっとした表情。まっすぐな姿勢。長い黒髪は育ちが良さそうというよりも、ミステリアスさを強く感じた。

――目、悪かったのかな。顔立ちがそんなだ。今はコンタクトをつけてる？
――髪も二股に分かれている。結んだ痕？　癖？　前は二つおさげだったのかな。
――身体は細い。抱きしめたら折れてしまいそう。

「はい。それじゃあ自己紹介、いってみよう」
転校生の彼女は緊張のかけらも見せず、ただ凛と流すように口を開いた。
「暁美ほむらです、よろしくお願いします」
そして、その目はじっと私を睨んでいた。
「えっ……ぇえ…？」
「？」
いや、違うなこれは。

「……」

彼女は、暁美ほむらは、まどかを睨んでいた。

釘を刺そうと思ったのに

† 8月3日

出会いの日。

煤子さんは涙をぬぐった後、それはもう、涙など無かったことにしたような強い顔立ちになると、地面にこぼれた黒い砂をかき集めはじめた。

土が混ざってもお構いなし。

とにかく一粒残さず集めようと、地面ごとかき集めては、どこかにあった分厚い袋に詰め込んでいた。

「いい、手伝わなくても」

手を貸そうとした私に、煤子さんは強く言った。

けれどすぐに〝あ〟というような顔になって。

「ごめんなさい」

控えめに謝った。

〝自分でやりたいの〟と後付けして、砂を集め終わってから、彼女は立ち上がった。

「あ……」
その時、自分よりもずっと大人に見えた煤子さんの背が、実際にはそう高いわけでもなかった事に私は驚いた。
けれど、膝のストッキングについた土を払う仕草は粗雑なものではないように感じる。
上品で、大人っぽい。背丈よりもずっと。
不思議な人だと、私は彼女に惹かれるばかりだった。
「私はね、美樹さやか」
「は、はい」
ちょっとだけ高めの目線が私を見下ろす。
「とても悪い病気に罹っているの」
「え？」
それは突然の告白だった。
私は彼女の真剣な目を見ては、〝そうですか〟だけを返すことができなかった。
「どんな病気なの？　……です、か？」
「良いわ、硬い喋り方でなくても」
「あ、はぁ……」

「……私は……今まで、無茶なことばかりをやってきたから。それに、最後には欲を出してしまって……そのツケがきたのでしょうね」
「つけ……？」
「借金よ。借金をして、お金が返せなくなって……ボン。もう、どうしようもない」
ふふ、とそれはもう、上品に嗤う人だった。
「これは愚かにも道理に背いて、横道逸れようとした結果よ……もうあの時までは無理ね……生きていられるのはあと……うん。一年もない……」
「え!?」
「今の調子だと……そうね。もう、もって数ヶ月、といったところかしらね」
「そんな……」
彼女の手元で、砂がざぁざぁと鳴る。まるで砂時計のように。
「だからね。もう長くない私のお願いをね……聞いてくれるかしら？　美樹さやか」
「う、うん！　煤子さんのために何か、私にできることがあるならっ！」
知らない人でも、不思議と嘘をついているようには見えない。
そんな目をしていた。だから私は、信じたのだ。
「……時間がないの。だけど、私の今まで生きて、培ってきたことを、出来るだけ貴女に伝えたい。それが、私の望み」

「えっと……じゃあ、私はど、どうすれば……？」
「聞いてほしいの。覚えてほしい。そう、口で言うとするのなら、それだけよ」
膝を曲げた煤子さんの目線が私と並ぶ。
「これは貴女の人生の、これからのためでもある……貴女のために、私は、私の持てるものを貴女に託したい……ねえ。そのつもりで、聞いてくれる？」
「……うん！」
「……ありがとう、さやか」
人が安堵し、柔らかく崩れる顔。
美しい彼女のそれは、一際魅力的なもので。
だから私は、その笑顔に応えなくちゃと、子供ながらに決心したのだった。

†　それは8月3日の出来事だった

――さんって、前はどこの――

――京の、ミッション系――

――とかやってた？　運動系？　文化――

「ん……」

机に突っ伏した顔を上げる。教室だ。夢の中ではない。

……うん。朝から続く眠気は、季節の適温と良く混ざったらしい。教室に充満した二酸化炭素のせいもあるのかな。……僅かな時間だけど、授業前には丁度いい感じの昼寝だった。

「いいえ。やってなかったわ」

「すっごいきれいな髪だよね。シャンプーは何使ってるの？」

顔を前へ向ければ、どうやら転校生の子が質問攻めにあっているようだ。

コミュニティを作るのが好きな女子数人が、彼女をグループに入れようと集っているらしい。

「不思議な雰囲気の人ですよね、暁美さん」

仁美の目にもそう映るようだ。それだけじゃないような気もするんだけど。

「ねえ、まどかぁ、あの子知り合い？」

「え？　うーん……」

目を擦りながら聞くと、どうもぱっとしない答えが返ってきた。
まどかも何か釈然としない様子。
「思いっきりガン飛ばされてたじゃん？」
「いや、えっと……そうなのかな……私が見すぎてたのかも……」
「まさかのまどかがメンチ切ってた説？　あっはは」
睨むまどかなんて想像もできないなぁ。
想像してみたら、ちょっと凛々しくなったまどかが居て、可愛かった。
ぶふっと噴き出すと、まどかがこれまた可愛らしく私に怒った。
「ごめんなさい……何だか緊張しすぎたみたいで、ちょっと気分が……保健室に行かせて貰えるかしら」
「え？　あ、じゃあたしが案内してあげる」
「あたしも……」
「いえ、おかまいなく……係の人にお願いしますから」
靴音が近づいてくる。
……おやおや。話し中だったのに、どうしてこっちに来るのかしら。
「ん……？　え？」
まどかに影が差した。

ぬう、っと近づいたのは、謎の美少女転校生。

「……」

まどかのすぐ近くで、彼女は立ち止まる。

その距離は殴り合いが起こるか、親友同士の会話が始まるか、恋人同士が愛を囁くか。

いずれにせよ、極端なシチュエーションしか浮かばないような距離だった。

……やっぱりまどかがメンチ切ってたのかな？

「鹿目まどかさん、貴女がこのクラスの保健係よね」

「へ？」

おろ、どういうこっちゃ。

「え？　えっと……あの……」

「連れてって貰える？　保健室」

「あの、わたし……」

「今でないと――」

なんか勘違いしてたのかな。

「あのー、転校生。保健係は私だけど」

まどかじゃなくて私なんすよ。それ。

「……え？」

んで、何故面食らったような顔をするのかな、この美少女は……。
「……そうなの？」
「うん。私が保健係……で、兼、清掃係と、風紀係も兼任してる！」
「……そうだったの」
「まどかは生物係だもんねぇ」
「うん」
先生に保健係が誰かを教えてもらったけど、間違えた。そういう感じかな、きっと。
だからまどかのこと見てたのか。なるほどね。
「ほいじゃ、ちょちょいとさやかちゃんが保健室まで連れていっちゃいますよー」
「ちょ、ちょっと」
「じゃあまどか、ちょっと行ってくるね」
「うん」
席を立ち、転校生の手を引て教室を出る。
凛々しい美少女の白い手は細く、柔らかく、まどかのそれよりも繊細そうだった。
「さっきの子達、色んなことずかずか聞いてくるけど、嫌な子ってわけじゃないから。誤解しないであげてね」

転校生を連れながら、一応さっきまでの質問攻めのカバーをしておいた。私が気にかけるようなことでもないのかもしれないけどね。

あのグループの子たちただ寂しがりというか、人と一緒に居たい気質というか……ま、そんな面が強いだけなのだ。

人によっては鬱陶しく感じるところもあるかもしれないけど、彼女達の愛情表現の大事なひとつを、誤解してほしくはない。最初で関係がこじれちゃうと、後々まで尾を引くしね。転校して早々、躓いてほしくもなかった。

「あの……」

「ああ！　そうだっ！」

「え……」

そうだ、そういえば名乗るのを忘れていたよ。

「私の名前は、美樹さやか！よろしくね、転校生！」

「し、知ってるわよ……」

「え!?　なんで!?」

「……さっき自分のこと〝さやか〟って言ってたわよ」

「あ!!　そっか、言ってたわ」

こりゃ失敬。へへへ、けど覚えてもらえたなら何より。

「……美樹」
「さやかって呼んでいいよ、転校生」
「！　そう、さやか…」
「んー？」
「貴女は自分の人生が、貴いと思う？」
お？　変わった質問。でも好きな食べ物とか趣味よりは、切り口が面白いね。
でも答えはシンプルだな。
「うん、もちろん」
「……家族や友達を、大切にしてる？」
「当然。すっごい大切にしてる」
「即答、するのね」
「当たり前だよ。みんな、何もかも尊いよ。私、環境そのものは結構恵まれてると思うしね」
先行く私は向き直り、歩みを止める。
「逆に、転校生はどう思ってるの？」
ガラス張りの渡り廊下。
横から入る陽が、転校生の顔に影を作っている。

「……私のことも、転校生ではなく〝ほむら〟って呼んでもらいたいわね」
「ん！　了解、ほむら！」
彼女のポーカーフェイスからは、感情が読み取りにくい。
……隠そうとしている。うん、そんな感じ。乏しいというわけではなさそう。
「……そうね、私はどうかしら……ええ。家族や友人は、とても大切よ。……それを守るためなら、天秤にかける自分は遥かに軽い……そのくらいにはね」
「ほぁあ……」
なんか、すごいな。結構、熱いこと言ってくれるじゃないの。顔とは違って。
「……じゃ」
無感情に答えたほむらは、私を追い抜いて先を歩いて行くのだった。
「……もう、ちょっとっ。場所、わかんないでしょっ」
私は黒髪を追って、廊下を走るのだった。

貴女も聞こえたの?

不思議な奴だなぁとは思っていたけど。

「うおぉ……」

転校生、暁美ほむらの神秘性は、授業が始まってから本格的に発揮された。

淀みなくボードを走る電子チョークに先生も思わず唸る。

英語だろうと数学だろうと、彼女の快進撃に変わりはなかった。

容姿端麗に頭脳明晰ね。

不思議女子中学生に拍車がかかるのなんの……。

「すごいね……」

私の抱いた感想はまどかも同じだったようである。

「なんかもう、ずるいね！　何教科得意なのよ！」

「何教科だろうね……」

正直、ひしひしと伝ってくる全教科得意の予感に、はやる嫉妬を抑えられない。

私だって、色々頑張ってるんだけどな。比べるもんじゃないってのはわかってはいるんだけど。ちょっと悔しさは感じちゃうよね。

それでも、それでもあの体の細さだ……体育だけは、きっと……。
私は次の時間に来たる体育に、ほんの僅かな祈りを抱いていたのだけれども。

「ふッ」
大空の下、ほむらの細い体は美麗なフォームで宙を舞うのでござった……。
「け、県内記録じゃないの？これ……」
いやぁ。神童なんて話には聞くけど、現物は初めて見たよ。
というかほむらの体のどこに、高く飛ぶバネが仕込まれているのか。
どう見たって虚弱な身体なのに。運動神経が良いの一言で済まない気がするんだけど……いいや、しかし体育だけは！
「……負けてられないね！」
「さ、さやかちゃん？」
「私も県内記録を出す！」
「えー」
まどかの弱気パワーの煽りを貰う前に、さっさと一度飛んだバーを正面に据える。
やるぞやるぞ。私はやるぞ。
「あら？　どうしたの？　美樹さん」

「もう一度、飛ぶ!」
先生は呆れ顔だけど、こっちは本気だ。
「もうやったんじゃ……」
「ほむらのほっそい体で飛べて、私に飛べないはずがない!」
それは私の高らかな宣戦布告である。
周囲で体育座りにかまける軟弱なクラスメイトたちは〝また美樹さんだよ〟とかなんとか言ってるが、気にしない。
ほむらも少々眼球運動だけが挙動不審だが、本当に驚かせるのはここからだ。
「見てなさい! インターハイに出てやるくらいの記録を出してやるんだからぁああ!」
風を切って駆ける。
学年最速の助走で、一気にバーまで。
「……インターハイは高校よ、さやか」
バーを蹴っ飛ばしたとき、何かむっとする一言が聞こえた気がした。

†††††††††††††††††††††

「……今度こそと意気込んでいたのに。何かしら、今回の美樹さやかは」
「まどかが保健係をやっているはずだったのに、おかしいわね」
「今まで、こんな事は起こらなかったのだけど……」
「……いえ。些細なことに気を取られちゃいけないわ」
「キュゥべえとの接触を阻止しないと」

†††††††††††††††††††††

ファストフード店内にて。
「わけわからぁん……」
「わけわかんないよね……」
私は机に突っ伏してぶーたれていた。
うおお……世の中にあんな完璧な人間が実在してるとは思わなかった……いや、むしろ今でも信じたくない……。
頭脳明晰だけでなく、まさか文武両道だったとは。なんとなく嫌な予感はしていたけどさ。
放課後の私達の話題は、当然ながら暁美ほむらに関するものだった。

きっと他の人達のグループだって似たようなものだろう。あと数週間はクラスの話題の人になるだろうね。

……けど、暁美ほむら。私は彼女がただ秀でているだけの人間でないことを知っている。

最初の挨拶の後、保健室へ連れて行った時のことだ。

あの時の短いやり取りは印象的だった。

まどかや仁美とも、それについて話すくらいにはね。

「文武両道で才色兼備……かと思いきや、実はサイコな電波さん。だったりしてねー」

〝貴女は自分の人生が、貴いと思う?〟

「本当にそんなこと聞かれたの?」

「ん。まぁ、良い質問だったけどね」

どこか胸の奥にズン、とくる問答だった気がする。

イマドキの中学生の友人と真面目くさった顔で話し合えるものじゃないけれど、それでも私にとって、自分の生き方の核心に触れるような、そんな。

「……しっかしどこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだ?　あの転校生は……萌えか

？　そこが萌えなのかぁ？」

モテるんだろうなぁほむら。

けど文武両道容姿端麗て、それもはや、狙うとかあざといとかゆーレベルじゃないよな。人間の完成形だよ。

「さやかさん、本当に暁美さんとは初対面ですの？」

「あー……そりゃあ」

そりゃあ……ないはず、なんだけどね。

「懐かしいような感じは、しなくもないなぁ」

「ふふ、なんですか、それ」

グリーンソースフィレオをもりもり齧りながら思い起こしてみる。

会ったっけ、暁美ほむら。

……いや、ないよな、そりゃあ。

そんな名前の子、知り合ってたら覚えてるもの。

「えっと、あのね……？　あんまり馬鹿にしないで、聞いて欲しいんだけど……」

「ん？」

「どうされました？」

私が思い出すのに悩んでいる最中、おずおずと普段主張のないまどかが控えめな挙手

をした。
「昨夜あの子とね……夢の中で、会った……ような……」
「ぶふっ」
「んふっ……」
私と仁美は今日一番の笑いに苦しんだ。
冗談でもなんでもなかったようで、まどかはそんな私らを見てちょっと恥ずかしそうに怒ってたけど。

まどかに電波属性があったことを最大の収穫に店を出て、仁美と別れた。
仁美は予定がいっぱいだ。正統派文武両道のお嬢様は大変なのである。
……ほむらも何かやってるのかな。
細い体でも凄い記録が出せるほどの体捌きを見るに、古武術とか得意そうだったな。
痴漢に襲われても、次の一瞬では手首捻られた痴漢が宙に舞ってホームに叩きつけられてるに違いない。
なんてことを考えている間に、CDショップについた。
クラシックはこっちだ。私はここいらのコーナーに用がある。
まどかはまどかで、自分の興味のあるカテゴリのほうに足を向けた。お互い無理して

趣味の細部を擦り合わせることもないだろう。
私は、なんだかんだで聞きかじっているクラシックの試聴だ。
恭介のために持っていってやりたいというのが一つ。
もうひとつは、まあ、単純に私自身もクラシックの沼にはまりつつあるということだろうか。
「ふんふんふぅーん……」
こうして心を落ち着ける音楽は、剣道部にいた頃も好んで聞いていた。
不思議とクラシックの曲調は、剣の動きや呼吸にも活かされている気がしてならないのよね。
私の場合、まあ、型はダメダメだったんだけど……。
『助けて……』
「……ん?」
声が聞こえた。
『助けて……まどか……!』
「まどか?」
何かの空耳か。
けどヘッドフォンを外しても、まどかに助けを求める幼げな声は続いている。

どこから聞こえる声?　距離は?　誰の?
なんだか噛み合わない。これは一体どういうことだろう。
「……あ」
辺りを見回して声を主を探していると、私と同じようにふらりと歩き回るまどかの姿が見えた。
「何だろ」
誰がなにを、何故まどかに助けて、なのか。
これは私の直感だけど、良くわからないことにまどかを巻き込ませたくはなかった。
私は小走りで彼女に近づき、肩をポンと叩いてやる。
「聞こえた?　まどか」
「さやかちゃん、うん……」
どうやら本人にも聞こえていたみたいだ。
周りにいるお客さんや店員さんは無反応だけど……?
いや、考えるならそもそもヘッドフォンしていたのに声が聞こえた時点でおかしい。
奇妙だ。
「どこ?　どこにいるの?」
「どうしたー、出てこーい」

声がするらしき方角は、不思議と伝わってくる。
それを頼りに階段を登り、私達は次第に人気のない工事中のフロアへと導かれていった。
何も入っていない空きの階層。寂れた空白階。
突然、真上から激しい物音と共に、何かが振ってきた。
「きゃ！」
埃かぶった何かが落下してきた。
「助けて……」
白い小動物だ。
「あなたなの……!?」
「え、なにこれ、猫？　じゃない……」
猫だと思った。けど、猫ではない。
薄汚れた床の上に落ちてきたのは、白猫らしき不思議生物だった。
耳からは謎の肢体が伸び、そこに輪がついている。ファンシーな見た目だけど、ぬいぐるみではなさそう……。
いや、というか、なんでこれ、喋れるわけ……!?
だが私の驚きはそれだけに留まらなかった。

じゃらりと天井から鎖が落ち、天蓋のパネルが壊され、破片が床に散らばる。
そこには、もっと不思議な装いの人間が降ってきたのだ。
「そいつから離れて」
暁美ほむら。完璧超人だけど不思議なところもある、謎の転校生。
ほむらは見たこともない装いを身にまとい、私達を……なんというか、睨みつけていた。……ほむらだよね?
「だ、だって……この子、怪我してる」
その殺気はまどかにも伝わったらしい。
ほむら、らしき人物が一歩踏み出すと、まどかは謎の白い猫を抱きしめた。
「ダ、ダメだよ、ひどいことしないで!」
「やめなよ」
「貴女達には関係無い」
「何よそれ、関係あるわよ」
私はまどかへの殺気を遮るように立ちはだかる。
よくよく正面から見てみれば、このほむら。本当に奇妙な格好をしている。
なんというか、ひらひらしているスカートとか、服とか、色合いは落ち着いてるけどデザインはとても派手。

この時、なんともなしに私がイメージした単語が、魔法少女。それだった。
日曜にやっていた小さな女の子向けのアニメを想起させる。そんな格好だ。
「あなた達には何の関係も無い。早くその白いのを置いて、帰りなさい」
「だってこの子、私を呼んでた……」
「気のせいよ、帰りなさい」
魔法少女みたいな姿をしたほむらは執拗だ。
意地でもこの白猫らしい奴を手に入れたいらしい。
けど、そうはいかない。
この白猫は、私達を呼んでいたのだから。
「聞き間違えなわけない、私も聞いたよ！　この生き物、まどかを呼んでた！」
「え？」
コスプレほむらが一瞬驚いてみせた直後、その意外な一面を遮るようにして景色が歪む。
「!?」
うねる世界。塗り替わってゆく恐ろしげな景色。伸びる有刺鉄線。
「な、なにこれ……」
まるで抽象画の絵画の中の世界みたい。

「……いこう！　ここはマズい！」

今の一瞬で何が起こったのかは、私にはわからない。

それでも私はこの場にいけないと思った。

まどかの手を引き、もと来た道へと走り出す。

この景色から逃げるために。あるいは、ほむらから逃げるために。

また間に合わなかった

改装中のフロアはお化け屋敷のような殺風景さだったが、今はそれすらもまだマシだと思える悪趣味な空間へと変貌していた。

ダークな色合いの絵本でコラージュでも作れば、ちょうどこのような光景になるのかもしれない。

意図不明のオブジェが立ち並び、遠くの方では奇妙なお髭の綿飴らしき生き物がうろついている。

不思議。ただ、それだけでは言い尽くせるものではない。

どこか危険な臭いもするメルヘン。

推察するまでもない。ここは危険だ。

……一刻も早く、抜け出さないと！

「ていうかまどかっ、その、生き物!?　そいつのせいじゃないの、これ！」

「わ、わかんない、わかんないけど……この子、助けなきゃ……！」

まどかと並走する。走って抜けられる世界なのかどうかはわからないが、それに賭ける他ないシチュエーションでもあった。

さっきから遠くにいるもじゃもじゃの変なやつが、こっちに近づいて来ようとしてるしねうう！

「助けてとは言われてたけどさっ、私達にどーにかレベルじゃないと思うよこれっ！」

「け、けどっ」

「まぁなんにもわからないし、見捨てたりはしないけどさぁ……ッ！」

目の前に広がるソレを見て、思わず立ち止まった。

「きゃっ……」

勢いづいたまどかの肩を掴んで、私の傍に引き寄せる。

すぐ目の前を、禍々しい有刺鉄線の束が通過していった。

今のまま走っていたら、鋭いトゲに巻き込まれていたかもしれない。

「あ、ありがと……」

「……ここ、どんどん道が変わっていく」

一歩退く。

さらに二歩退く。

……物理法則、仕事しろよ。どうしてあんな無機物みたいなものが勝手に動くんだ。

左右を確認する。

今目の前を掠めて行った有刺鉄線らしきものは、既に私達の周囲を広く囲んでいた。

「……これって、もしかしてまずいんじゃない」

悪夢のようなこの異世界について、私はほとんど知らないけれど。

たった今、悪意ある〝何か〟に捕まったという事実は、私にも理解できた。

『Das sind mir unbekannte Blumen!』

『Ja, sie sind mir auch unbekannt!』

『Schneiden wir sie ab!』

不思議な歌と共に近づいてくる綿毛の生き物。

まどかの抱える猫とは全く別次元の、恐ろしげな姿。

手元にある大きなハサミからは、私達への害意しか感じられない。

少なくとも、お友達になってほしいようには見えなかった。

「どうしよう……！」

「……落ち着いてまどか、大丈夫、今考えてるから……！」

有刺鉄線の内側に入り、のろのろ近づく奇妙な綿毛達。

どんどん中央へと追い込まれていくけれど、どうしようもない。万事休す。

けど、考えろ。私にしかできないんだ。考えろ。

この状況を乗り切るにはどうすればいい。

――どれか一体を無理やりに蹴散らす？

――根性で有刺鉄線を乗り越えるか……

――切れ味次第だけど、ハサミを無理やりこじ開けられる？

――投げられそうなものは無い？

――こんな時に木刀でもあれば

思考は巡る。けど答えは出ない。最善策と呼べるものが浮かばない。駄目だ。甘えるな。私とまどかの両方が助かる道を探すんだ。ああけど、それでも無理なら。次善策が取れるとするならば。

――そうね、私はどうかしら

――家族や友達は、とても大切よ

――けれどそれを守るためなら、天秤にかける自分は遥かに軽い

――そのくらいにはね

あの時のほむらの言葉を、ふと思い出した。
答えを聞いた時はいきなりだったし、〝ほああ〟とか、〝変な子〟くらいにしか思わなかったけれど。
ああ。心の奥底ではほむらと同意見だったんだな。
ふっと微笑む。
次善策。良いじゃないの。
まどかを有刺鉄線の向こう側に逃がす。それならどうにかできるかもしれない。
「ねぇまどか」
「う、うんっ……！」
彼女の肩を掴み、目を見る。
優しい目。言えばきっと反対するだろう。
けれど、時間がない。周囲には謎のモンスターが迫っている。
無理やり説得してやらなくては。
「まどか、落ち着いて聞いて、ここから抜け出す――」
決意を込めた作戦を伝えようとした時、私達の周囲は山吹色の閃光に包まれた。

「うっ……あれ？」
「これは……？」
眩しさのあまり、目をほとんど瞑っていたので全てはわからなかったけれど……一部だけは垣間見ることが出来た。
金色の光が飛び交って、綿毛のお化けを蹴散らし、有刺鉄線を砕いていくその様を。
「危なかったわね。でももう大丈夫」
落ち着いた雰囲気の声の主は、階段を降りてやってきた。
それは、ちょっと不可思議な格好はしているけれど……とても綺麗な女の子だった。
それはまるで、ほむらと同じような……。
「あら、キュゥべえを助けてくれたのね、ありがとう」
九兵衛？
「その子は私の大切な友達なの」
「友達……」
「……」
白い猫を見て彼女は言った。
名前か。なるほど、白い猫はきゅうべえというらしい。
「あ、あの。私、呼ばれたんです、頭の中に直接この子の声が……」

「ふぅん……なるほどね」
「私も聞こえました」
「あなたもね？　まあ当然か」
垂れ目が私達の姿を流し見た。
上から下まで。服を見ている？　いや、制服の学年を観察しているのか。
「その制服、あなたたちも見滝原の生徒みたいね。二年生？」
「あなたは？」
「そうそう、自己紹介しないとね……でも、その前に……ちょっと一仕事、片付けちゃっていいかしら」
ああ。今日は驚くことの連続だ。
白い銃が宙に舞い、列を成し、宙に固定される。
「うわー……」
終始、口を開きっぱなしだったと思う。
大量の銃から撃ち出される光弾。降り注ぐ衝撃。倒れていくモンスターたち。
それは、大玉の花火を目の前で何発撃たれても足りない衝撃だった。
今なら、材質不明の砂埃が肺に入っても気付けないだろう。
目の前で繰り広げられた巻き毛少女の射撃ショーは、私の人生で遭遇したことのない

ような、綺羅びやかでいて鮮烈な見世物だった。
「す、すごい……」
「……空間が戻っていく」
辺りを光弾が一掃したところで、風景はもとの寂れたフロアに戻っていった。
そして私は、灯りの無い部屋が端まで見渡せないことを思い出す。
フロアの奥から、慎ましい足音が聞こえてきた。
「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐに追いかけなさい」
巻き毛の人が闇へ話しかけると、言葉に応えるように人影が現れた。
仏頂面の転校生、暁美ほむらだ。
「今回はあなたに譲ってあげる」
「私が用があるのは……」
「飲み込みが悪いのね、見逃してあげるって言ってるの」
言いかけたほむらの言葉を遮るように、女性は強い口調で畳み掛ける。
……〝見逃してあげる〟。荒っぽい表現だ。
二人の関係がなんとなく浮かび上がってきた。
「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」
「……」

けれどほむらの顔には、何か別の感情があるように見える。
どうしても引き下がりたくない。
もどかしさ……それに似た感情。
逡巡があったものの、ほむらの姿は闇の中へ翻っていった。
「……ふぅ」
まどかは事態の騒乱に収集がついたことへの安堵で。
「はあ」
私は正体不明のやりきれない気持ちを吐き出すために、ためいきをついた。
「ありがとうマミ、助かったよ」
「お礼はこの子たちに、私は通りかかっただけだから」
今更かもしれない。けど私は改めて、顔を硬直させて驚いた。
猫が喋った！　と。……本当に今更なんだけどね。
「どうもありがとう。僕の名前はキュゥべえ！」
「あなたが、わたしを呼んだの？」
まどかの順応性は、私にはよくわかりません。怖くはないのかな……。
「そうだよ、鹿目まどか。それと美樹さやか」
「……え……何で、私たちの名前を？　怖……」

「僕、君たちにお願いがあって来たんだ」
「お……おねがい？」
助けて、とはまた別に？
……いや、普通に怖いんだけど……。
「僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ」
……ああ、そういう……。
ほむらの姿や、マミと呼ばれた女の子の姿を見て、そんな連想はしていたけれど。
まさか本当に魔法少女なんて単語が飛び出てくるとは思わなかったよ……。

後悔はしてほしくなかったから

現実は小説より奇なり。なんて言葉、恭介の時だけで十分だなとは思ったんだけど。
不可思議な現実というものは、小説よりもずっと広いジャンルでもって、突如として訪れるのです。
だがしかし。誰が予想できるか、魔法少女。

――僕は、君たちの願いごとをなんでもひとつ叶えてあげる

「なんだろ、それ」
毛布の中で、夕べの会話を思い出している。
同じ見滝原中学の上級生、マミさんとの話だ。
魔法少女という存在。
魔女という存在。
一日の中に詰め込むには、あまりにも突拍子もない情報ばかりだった。

――願いから産まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから産まれた存在なんだよ

――理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのる

――キュウベえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある

ベッドからはみ出た右手に力が入る。竹刀を握りしめ、ギシリと音が鳴る。

昨日の夜からずっとこのままの体勢だ。

つまり、私は寝てません。

一晩ずっと考えていたけれど、いまいち結論は出ない。

何を考えていたかって、それはもちろん魔法少女のことについてなんだけど。

眠気でモヤっとした頭では、そんな難しい事は考えられないようでありますな。

「おはようさやかちゃあ」

「おあよーー」

まどかも同じ感じらしく、少し安心する。

学生としてはちょっとオイオイなコンディションだけど、お互い真面目に考えていた証である。私は悪いとは思わないよ。

「おはようございます……あら、二人とも眠そうですねぇ……」

「ははは、今日の英語は寝かせてもらおうかなって……」

「もう……」

英語は今更勉強することもないし、まぁ大丈夫でしょう。

今日は魔法少女についてじっくり考えたい気分なんだ。

「おはよう、さやか」

ほら、例の白猫モドキのキュゥべえもいる。

「おはよおー」

「え？」

キョトンとした仁美の顔。

私？　私の顔に何かついてる？

『あ、さやかちゃん！』

「うえぇ!?」

突然、まどかに囁かれたような感覚に襲われた。

こいつ、直接脳内に……。

『頭で考えてるだけで、会話ができるんだって』
『なにっ！』
　そんなの聞いてない！　すごいな魔法少女！
『だからキュゥべえに普通に話しかけるのは怪しまれるよ……』
『あ』
「やれやれ……」
　仁美が不思議そうな目でこちらを見ている。
　助け舟を借りようとまどかの方に目配せすると、「えー」と念話で断られた。
「えー」て。念話で「えー」て。

「今は僕が中継役になってるから話せるけど、普通は魔法少女にならなきゃ無理だからね」
『そうなんだ……ふーん、一緒に何人かで魔法少女になれば、カンニングも楽勝だね』
『そういう使い方は良くないよ……』
　そう考えてみると、色々な使い道が思い浮かぶ。
　カンニングなら百選練磨、クイズ番組でも一攫千金！
　テレパシーのおかげで携帯代も浮くし、良い事尽くめ！

……ああ、かけられる相手が個人じゃちょっと不便か。
おっと、いけない。またやってしまうところだった。
深く考えすぎて周りが見えなくなる。視野狭窄。私の悪い癖が出てきてしまったみたいだ。危ない危ない。
まったく……それでも、考えると楽しくなっちゃうんだから。魔法少女って怖いよなぁ。
まぁ……もちろん。
相応に、覚悟はいりそうなんだけどね。

――だからあなたたちも、慎重に選んだ方がいい
――キュウベえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある
――でもそれは、死と隣り合わせなの

――んー……んぅ～……
――どうしたの？　美樹さん
――あっ、いやぁ、なんていうか、教えられたことがあって、それで教訓にしてるだ

けなんですけど

――ちょっとでも〝美味しい〟と思えた話には、警戒するようにしてるんです

――？　そうね。なんでもよく悩むに越したことはないわ

†　8月4日

蝉がよく鳴く、暑い日だった。

約束の場所まで歩いていく途中はゆるい坂道で、先はふらふらとした私の足取りのように揺れて見える。

「大丈夫？　ちゃんと水を飲んで」

「おはようございまあす……」

坂の上の煤子さんのもとにたどり着いた私には、一本のペットボトルが手渡された。

ほどよく塩の足されたスポーツ飲料を半分飲み干し、息継ぎをする。

「少しずつ飲まないとお腹を壊すわよ」

けど私は煤子さんの言葉を振り切り、残りあと指一本くらいのところまで一気に飲んでしまうのだった。

「もう」
「ぷはぁー！」
煤子さんは麦藁帽子を被っていた。
シャツに、スカートに、タイツを履いている。
夏だというのに、とても暑そうな装いだ。
けれど不思議と彼女は、汗ひとつかいていない。
煤子さんの乾いた頬を見ながら、腕で額の汗をぬぐい、思う。
そこに存在しているはずなのに、存在していないような人だな。って。

近くの林道まで歩き、まばらに木陰のかかったベンチへ腰を下ろす。
座り、長い黒髪を掃い、脚を組んでから、煤子さんは話を始めた。
「さやかには、守りたいものってある？」
「守りたいもの？」
「そう、身を呈して、何かを捧げて……そうしてまで守りたいものよ」
「……どういうこと？　えっと、大切なものは守りたいけど…」
「んー……大切なもの、それでもいいかもしれないけど。それが何かというのは、ちゃんとそれぞれを言葉に出したほうが良いわね」

「……」

深く考えてしまう。

煤子さんの表情を伺おうとしてみたが、彼女は正面の林をじっと見つめていた。ヒントはくれそうにない。自分で考えなさいってことだ。

「……お父さんとお母さんは、守りたいなぁ」

「ええ」

「あと友達！　たくさんいるよ、恭介と、みーちゃんと……」

「なるほど」

「煤子さんも！」

「ふふ、そう、ありがとう」

煤子さんは噛ってくれた。煤子さんがたまに笑ってくれるのが嬉しかった。

「けれどさやか。そうね、たとえ話をしましょう」

「うん」

「私は重篤な末期の癌に冒されていて、余命はあと1ヶ月もないとする」

「え」

「もちろん違うけど、例え話よ」

「なんだぁ」

「……私を助けるためには、莫大なお金が必要なの」
「え、お金……どれくらい？　払えば」
「そうね。じゃあ百億くらいだとしましょうか。イメージできる？」
「げえ、ひゃ、ひゃくおく……？」
「さやかはそんな私を守れるかしら？」
「……ま、もれるの？　いや無理……かなぁ……」
お金について詳しくはないけど、それが普通の人生ではほとんど関われないものだということは、なんとなく察することができた。
「……難しすぎるよ。そんな、私のおうちそんなお金持ちってわけでもないし、私もおこづかい少ないし……」
「じゃあこうしましょう」
「？」
「さやかにはお金がない。けれど、百億円のお金を、銀行から借りることができる」
「……え」
「それを使えば、私を助けることができるわ。どうする？　もちろん借金は私ではなく、さやかのものよ」
「……う、ぐ」

そんな大金、きっと働いても働いても返せそうにない。
「難しいわね？」
「……むず、かしい」
「ふふ」
煤子さんとの会話では、こんなやり取りが多かった。
私を悩ませるような問いかけをして、どうにか頑張って答える。そして答えたら、更に悩ましい問いかけをする。
たまに意地悪だなって思うことはあったけど、そこに悪意がないことは、煤子さんの顔を見ればわかることだった。
「じゃあ次のたとえ話をするわね、さやか」
「うん」
「……そうね、その前にまず、さやか、あなたの家の玄関には、何がある？」
「え？　靴かな？　五つくらい？」
「じゃあ他に。靴以外では何があるかしら」
「えーっと、傘でしょ？　バットでしょ？　あとはスプレーとブラシ……かな。お父さんがよく使ってるの」
「なるほどね。じゃあ本題に入りましょう」

「？　うん」

　煤子さんが姿勢を正した。

「さやかはお父さんとお母さんを守りたい、と言った」

「うん」

「じゃあ、ある日さやかが家に帰ると、そこには……さやかのお父さんとお母さんを殺そうとする、強盗がいた」

「え！」

　またそういう意地悪そうなことを言う！

「強盗の身長は１６０ｃｍ。愚かで小柄な青年。だけど手元には木刀が握られていて、しかも彼は剣道を経験したことがある」

「わわわ」

「普通ならお父さんとお母さんが一緒になればなんとかできなくもないけれど、二人は既に手と足に怪我をして、身動きはできないわ」

　１６０……私より大きい。それに木刀……。

「ううう……」

「強盗の青年は今まさに、玄関の少し先の廊下で両親に木刀を……」

「いや！　そんなのやだ！」

「……さやかが手を伸ばせる玄関にあるものには、幾つかの靴、一本のバット、ブラシ、あとスプレーがあるわ。さあどうする？」

ええと……どうすればいいの？

靴で……投げたり……えっとえっと……バットで……ああ、でも剣道やってる人……。

「というよりも、どうなると思うかしら」

「……私じゃ、なんもできないよ」

「……わかるみたいね？」

「うん……だって相手は私より大きいんでしょ？　しかも、木刀なんて持ってるし」

「そう。さやかでは、バットを握っても難しいでしょうね」

金属バットは確かにボールを打つ道具だけど、それを私が使ってどうこうできるとは思えない。

「もちろん、こんな状況はそう起こるものではないわ」

「うん……」

「けれどねさやか。私が今抱いている未練はね、悔しい気持ちはね、そういうことなのよ」

煤子さんの目に、暗い影が落ちる。

「ちゃんと不安定要素を排除していれば……気構えをもっていれば……私にもっと力があれば……」

「……」

「莫大なお金……強大な敵に勝つための力……それを事前に備えておければ……」

これさえあれば。あったのなら。

煤子さんは度々、そんな後悔に苦しんでいた。

「……失ってから、自分には何が足りなかったのかがわかる。失ってから、何が間違っていたのかがわかるのよ。さやか」

「うん……じゃあ私も剣道習えば、良いんだね」

「……ふふ。まあ、そうすれば、今話したことが起こっても大丈夫ね」

お母さんがそうするように、煤子さんが私の頭を優しく撫でてくれた。

「後で後悔しないように、よく備えておくことよ……さやか。いつでも落ち着いて、間違えないよう、慎重に。甘い言葉や、美味しいと思うような話には、すぐに流されてはダメよ？　……耳当たりが良い話には、最大限に警戒すること……」

「うんっ」

「……はあ。言いたいことって、沢山出てくるものね」

「へへへ、わかるよ！」

「ふふ……リフレッシュしましょうか、少し暑いけれど、走る？」
「うん！　私、走るの好き！」

†　それは８月４日の出来事だった

なんだかやり辛いわね

「……ん」
微睡み。心地よい過去が現実の頭に滲むような夢。
「こおら」
「ふげっ」
堅い教科書の角が頭へのしかかった。
「最初から居眠りとは、良い度胸だぞ。美樹」
「……あえ?」
見回せば、クラスメイト全てが私の方を向いていた。
あのちょっと怪しい雰囲気の転校生、暁美ほむらでさえも。
……うん。宣言通り、英語で寝ちゃってたらしい。
「あひゃぁー、やっひまいまひた」
「涎を拭きなさいっ」
私の授業態度への減点を糧に、教室はちょっとした笑いに包まれた。

どうやら私は念話の途中で居眠りしてしまったらしい。
えっと……まどかやマミさんとどこまで話したっけ。
正直、眠かったのもあってうつらうつらと空返事ばかりをしていた気がする。内容が曖昧だ。
『もう、さやかちゃん』
『たはー、だって寝不足すぎるんだもーん』
随分と先に進んでしまった板書をがりがりと書き進めていく。
授業が終わる頃にやっとノートが取れそうなくらいだ。こういう時、速記を覚えてないのが悔やまれる。けど多分速記のノートじゃ提出してもダメなんだろうな。
……ああ。そういえば、ほむらの話をしていたんだっけ？
ちらりと、ボードの手前にいるほむらの後ろ姿を見る。
綺麗な黒髪。とても綺麗な……。
……前を走る煤子さんの、左右に揺れる黒いポニーテールを思い出した。
マミさんはほむらに敵対心を持ってるけど……そこまで悪い奴なのかな。
『きゅぶぶ……』
キュゥべえの姿を探そうと見回すと、白い奴はまどかの鞄の上で居眠りしていた。

私もそうやって、堂々と居眠りがしたいものですよ……。
「美樹、じゃあここ、答えなさい」
「え？　3と4？」
「……ん、正解です」
そろそろノートも書き写せそうだ。ガンバレ、あたし。

「はい」
まどかの箸が摘むのは、ぷりぷりした美味しそうな卵焼き。
「んあむっ」
それを咀嚼もなしに一呑みにしてしまうのは、謎の白猫。
美味しそうな料理なのに味わいもしないなんて、罰当たりな奴め。
「まどか、私にもひとつ！　どうかひとつ！」
「えー、これはわたしの分だよぉ」
「ぐぬぬ……じゃあ仕方ない！　せめて、よく味わって食べてくれぇ……」
「な、なんでそんな顔するのー!?」
とまぁ、いつもこのような感じで、まどかの弁当を食べているわけです。
「ありがとう！　はい唐揚げ！」

「えへへ……」
　私があげるのはいつも唐揚げだ。
　当然。だって私の弁当には、唐揚げと白米しか入ってないのだから。
　もちろん、野菜だって食べるけどね。嫌いなわけじゃないよ。
「……ねえ。さやかちゃんは、どんな願い事にするか、決めた？」
「……」
　まどかの顔を見て、箸を休める。
「わたし、昨日の夜ずっと、色々考えてたんだけど……全然浮かばない、っていうか」
「じゃあ、一緒に満漢全席食べよっか？」
「そ、それじゃつりあわないよお」
「そうだよね、釣り合わないんだよね」
　箸を唐揚げに刺して、頬張る。
　三十回噛んで呑み込むまで、まどかもキュゥべえも黙って私を見ていた。
「満漢全席も、宇宙一のオールラウンドアスリートも、五千年モノのストラディバリウスも。色々考えたけど、やっぱ命のが大事だったよ」
　保温機能の高い弁当箱の中で未だに温かい白米を、がつがつと口の中に掻き込む。
「ぷふぅー……んまいっ」

「……やっぱり、何事も命がけで打ち込めない大人になるのかな、わたし」

「……」

まどかの表情は、見滝原に来たばかりの頃のそれに戻っていた。

この憂いと陰りのある顔に、何度悩まされたことか。

「心配ないって、まどか」

「……？」

「大人になってから見つけてもいいんだからさ」

そう。

満漢全席もアスリートも、何だって現実で不可能なわけではない。

人間、諦めなければ何でもできるものだと思う。

夢のために命をかけるだとか、そう焦るにはまだまだ早いと、私は思う。

それに、夢破れた大人だって世の中にはもっと大勢いるものだ。

何事にも本気で打ち込めない人間なんて、岩をどければうじゃうじゃいるものだよ、きっとね。

なんて話が、まどかの慰めになるとは思えないから言わないでおくけどさ。

「ん……」

ぴり、と、空気を伝って張り詰めたものが伝わった気がした。
「……」
扉の方を向くと、ほむらが立っていた。
けど違う、これは……ほむらの視線はこちらを見ていない。彼女が見ているのは……？
ああ……なるほど。
顔を横に向け、遠くを見据えると、隣の棟の屋上にマミさんが立っていた。
ソウルジェムを手に構え、こちらを見守っているようだった。
『あら、気付いたのね？』
『ええ、なんとなくっていうか……』
『ふふ。ここにいるから、安心して。手出しはさせないわ』
『は、はい。ありがとうございます……』
面倒見の良い、優しい先輩だ。ほむらへの対抗意識もありそうだけど。
ともかく、これは良い機会だ。
「魔法少女の話？」
私はほむらに訊ねた。
ひょっとしたら、お昼のお誘いかも……。

「そうよ」
　そういうわけではなかったみたい。まぁ当然か。
「魔法少女の存在に触れないようにしたかったけれど、それも手遅れのようだから。せめてもの忠告をしにきたのよ」
「魔女の結界だっけ？　私たちがあそこに迷い込んだから？　……あ」
　いや、ちょい待ってみよう。
　それは少し違うかな？　全部間違ってはいないだろうけど。
「キュゥべえと出会ったからってわけね」
「……そうよ」
　――なるほど。あの時私たちを遠ざけようとしたのは、そんな理由があったのか。
　マミさんの言ってた通りってわけね。
「それで、」
　――しかしマミさんがモールの近くにいたのは偶然らしいけど、どうしてほむらあの場所に居たんだろう。
　――ああ、それはキュゥべえを追っていたからか。私たちを魔法少女にしたくないわけだし。
　――あれ、なんか違和感あるな。なんだこれおかしいぞ。ん？

「どうするの？」

――ほむらは私たちに魔法少女としての素質があることに気付いていた。それは学校で出会った時からだ。

――私に意味深な話をしてきたり、まどかに対しても、きっと何かアプローチをしてきただろうから間違いない。

――けどやっぱり違和感はある。キュゥべえと契約させないようにするだけなら、脅迫でもなんでもすればいいのに。

――そうはせずに、あえてキュゥべえを狙う。随分と私たちにソフトタッチだ。

――なぜキュゥべえを？　私たちが友達だから？　そりゃ考えすぎか。

「貴女達も魔法少女になるつもり？」

「私は……」

気になるな。

「ねえほむら。どうしてそこまでして、私達に魔法少女になってほしくないの？」

「……」

表情は固まったままでわからない。

けれど言葉を受けて、口を閉ざすような奴ではなかったはず。受け答えにラグのないタイプの人間だ。何かを考えている。

「そいつを消して済むのなら……それが楽だから、よ」
「……」
歯切れは悪かったけど、嘘を言っているようには見えない。
けれど質問に答えてもいない。
「私達を魔法少女にしたくない理由は何？」
「……」
一瞬だけ目が泳いだ。
……ん、泳いでいたわけじゃなかった。
ほむらは〝見た〟のだ。隣の棟にいる、マミさんを。
そのジェスチャーはある意味で、気持ちの片鱗を語っている。
「危険だからよ」
きっと嘘ではないのだろう。けどそれだけじゃないことを、私は薄々感じている。
「ねえ、まど……」
「え？」
「……いえ」
「さやか、昨日の話、覚えてる？」
「昨日の……」

――貴女は自分の人生が、貴いと思う？
――家族や友達を、大切にしてる？

そう。こういうことだったわけだ。
だからあえて訊いたのだ。キュウべえと出会うことを、ある程度想定して。
けど、本当はまどかに言いたかったのだろう。最初に声をかけたのは私ではなくまどかだったから、多分間違いではない。
「それを守るためなら、天秤にかける自分は遥かに軽い、っていう話よね？」
「……仮に貴女がそうだとしても。今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないで」
クールビューティの静かな睨み。おお、怖い。
「……でないと、全てを失うことになるわ」
振り返り際に苦虫の脚を食ったような顔を見せて、屋上から立ち去ろうとする。
「ま、待って」
「……」
ほむらを呼び止めたのはまどかだった。

「ほむらちゃんは……どんな願い事で魔法少女になったの……？」

「……貴女もよ、鹿目まどか」

半分開いたドアへ、ほむらは消えていった。

危ない場所に連れ回さないで

授業も終わり、待ちに待った放課後だ。
学校の固い椅子は、さやかちゃんのやわらかヒップには合わないのですわ。
『マミさんの魔女退治見学、いきますか！』
『うん！』
よし、と意気込んで、剣道用具を詰め込んだ鞄を肩にかける。
これからマミさんの魔女退治を見させてもらうツアーに出かけるのだ。
実際に闘っている姿を見ないと、覚悟も何もあったもんじゃないからね。
「……さやかちゃんのそれ……部活の？」
「そだよー」
「……」
持っていくんだ……と、まどかの顔が優しげに呆れていた。
本当は顧問に謝ろうと思ってとりあえず一式持ってきたんだけど、まぁ今日は魔法少女について考えたいし、色々理由をつけてやめておいたのである。
「あら、さやかさん、部活へ？　また明日」

私の姿を見た仁美は朗らかに手を振って去ってゆく。
一緒に帰れない言い訳をせずに済んでよかったけど、部活復帰しなくてはならなくなったのではないか？　これは。
ま、いっか。

「暁美さん」
「今日こそ帰りに喫茶店寄ってこう」
教室の片隅では、支度を済ませたほむらに再び女子が群がっていた。
やっぱり可愛い子には、何度か根気強くアプローチをかけるようだ。
「今日もちょっと、急ぐ用事があって……ごめんなさい」
けどもうそろそろ、ほむらを誘うことも諦めそうである。
本人の意思だしとやかく言うことではないんだけど、このままいくと、彼女は孤立してしまうかもね。
まぁ、ほむらの場合は自分からそうなろうとしているんだろうけど……魔法少女という立場のこの冷淡な対応が無縁とは思えない。
友達想いなんだか、違うんだか。
「さやかちゃん？」

「ん。ごめん、行こっか」
　約束の場所は、マミさんと初めて会ったフォーリンモール。そこのファストフード店だ。あそこは少ないお金で駄弁るのに丁度良い。
　早めに向かって、わかりやすい席で待っていよう。
「あら、来たわね。こっちよ、二人とも」
　しかしショップに入ると、既にマミさんは座っていましたとさ。
　ちょっと早くないですか、マミさん。いつから居たんですか……。
「遅れてごめんなさい」
「いいわよ、まだ約束の時間でもないしね。私が早く来ただけよ」
「あはは、次からは三十分前に来てテーブルを掃除してます」
「体育会系のノリとはちょっと違うんじゃないかな、さやかちゃん……」
　小腹満たしに頼んだハンバーガーを小突きながら、これからの話題へと入る。
「さて。それじゃ魔法少女体験コース第一弾、張り切っていってみましょうか。準備は良い？」
「おう！」
「は、はいっ」
「ふふ、良すぎるくらいね」

敵を知るにはまず何よりも敵から。魔女がどんなものかを知っておかないと、こっちも振る舞いようがないからね。

威力偵察だ。いや、ちょっと違う？

「あっ、そうだマミさん。こんなのも持ってきたんですよ、ほら」

鞄からずるりと取り出す、一本の竹刀。

「聖剣ミキブレード！」

「本当に部活セット持ってきたんだね……」

「何も無いよりはマシかなって思って」

「まあ、そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」

けど何故に苦笑いなんです？　マミさん。

いや、竹刀で勝てるとは思ってないですけどね。なんとなく。

「まどかも、そんなのほほんな顔してるけどー……何か持ってきたんでしょ？　知ってるんだぞー私」

「え、えっと、わたしは……」

躊躇の表情。

だんまりではなく焦燥。意味はわからないが、実際に何か持ってきたようだ。

マミさんを見てから鞄を気にしていたしね。

「笑わないでね？」
「うむうむ」
「何かしら、ふふ」
　マミさん、既に笑ってますよ！
「これです……」
　開かれるキャンパスノートならぬ、キャンバスノート。
　昨日迷い込んだ魔女の結界とタメを張れるほどファンシーで、パステルな世界が、ノートいっぱいに広がっていた。
　そこには魔法少女姿のマミさんのスケッチや、そして……やたらとキュートでプリティな意匠の服を着たまどかもいる。
「うふふっ」
「あーっはっはっはっ！」
「えっ、ええっ!?」
　いや、まさかこういう形からくるとは思わなんだ。
　そうか、いやそうだね。魔法少女だもんね。衣装は大事だ。
「ご、ごめんなさい、意気込みとしては十分ね」
「ひ、ひどいですよお」

「あはは……いやぁー、でも良いんじゃないこれ」
「本当に思ってる!?　さやかちゃん！」
怒った顔に一切の迫力を感じないところはお父さん譲りっぽい。
や、今はそんなことではなく。
「いやぁ、うん、もちろん良いと思ってるって！」
「怪しい！」
「形から入るのは大切だしさ！　何だってね！　ほら、稽古もそうだし！」
「……うう」
型を覚えずに剣道をやってきて強くなった私の、心からの本音だった。
形から、っていうのは、意外と大事。結局今はいつもの型に戻っちゃってるけど。

学業から非日常への転換。
休憩と覚悟は終わり、私たちは町へ出た。
先頭にマミさん、その後ろを私とまどかが付いてゆく。
「これが昨日の魔女が残していった魔力の痕跡」
黄色い光を発するマミさんのソウルジェム。
一定間隔で灯りは幻想的に、ぼんやりと明滅する。

「基本的に、魔女探しは足頼みよ」
「……この光が早く点滅すると」
「そう、魔女が近いってわけ」
「うひゃー、大変ですねえ」
ガイガー片手に探しているようなものだ。
広い見滝原を、こんな途方も無い方法で探すだなんて。もっと効率の良い方法があれば良いんだけど。
「こうしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿ってゆくわけ」
「地味ですね……気が遠くなりそう……」
「ふふ、そうね……でも近くに魔女がいないっていうのは、とても良いことなのよ」
まあ確かに。それもそっか。
「結構歩きましたけど……光、全然変わらないっすね」
「取り逃がしてから、一晩経っちゃったからね」
もう随分と歩いて、空も茜の気配を帯びてきた。
「まどか、脚大丈夫？」
「うん」
やっぱりまどかも疲れているようだ。顔色は少し曇っている。

足取りもどこか重く、歩くたびに踵を擦りかけていた。
「魔女の足跡も薄くなってるわ」
「まだ遠いのかぁ……」
「あの時、すぐ追いかけていたら……」
「仕留められたかもしれないけど、あなたたちを放っておいてまで優先することじゃなかったわ」
「あっ……ご、ごめんなさい」
「いいのよ。人助け、それが魔法少女の本懐なんだから」
あの時追いかけていれば。
……けど追跡を中断したのは、ほむらの事もあるのだろう。
彼女がいてもいなくても、私たちはお荷物だったというわけだ。
ああでも、それは言い方が悪いか。
「マミさん、あの時は本当にありがとうございました」
「ふふ、改まらなくても」
「いえ、こういう大事なことは。心から感謝したいです。本当に助かりました」
「……やだ、ちょっと気恥ずかしいわねっ、ふふ」
先を歩くマミさんの歩調が、少しだけ速くなった。

「そういえば、マミさん」
「ん、何かしら」
「ソウルジェムの灯りだけじゃなくて、他に探す手立てっていうか、目星とか、無いんですか？」
「見当をつける、って意味では、探す場所を最初に絞ることはできるね」
　傾向があるのか。それは気になる。
「住宅地なんかではあまり見ないけど、人が多い繁華街や、逆に人気の無い廃墟では多いかな」
「繁華街、廃墟……」
「両方とも、人の感情に大きく影響される場所だからね」
　なるほど。なんとなく、フィーリングでわかったので頷いておく。
「交通事故、傷害事件……人あるところには魔女がいるもの。そこがひとまずは最優先になるけど、いなければ人気のない所を探すわ」
「はぁー……」
　斜陽が影を伸ばしてゆく。
　今日の夕日は明るそうだ。

寂れたビル街には通行人もいない。
工場と小さな廃屋が並ぶ、ちょっと気味の悪い所だ。
見滝原に住んでいても、なかなかこんな場所にまで来ることは無い。
「ここに魔女、いるのかな……」
「反応は強くなってるわ」
「あ、本当だ」
「！」
手の上のソウルジェムには変化が見られた。
点滅の強さは顕著だ。けど、どうしてか過ぎった不安に、私は上を向いた。
「……！」
建物の上。そこには、髪と裾を風に揺らす影があった。
人だ。
屋上に見えた全体像に、ただ景色を見下ろしているわけではないということはすぐにわかった。
「マミさん、上に人が！」
「！」
指で示した先には、若いＯＬが足元をふらつかせている。

あんな高い場所にいるというのに、目は地平線だけをぼんやり眺めている。
とても正気の沙汰とは思えない。自殺する気か。
「あ、危ない……！」
周りを見る。
コンクリートの地面。オフィスビルは高い。頭から落ちれば即死だ。
持ち物は竹刀、剣道セット、制服、携帯……何も使えない。
周りに緩衝材になり得る物もない。落ちてくる人を受け止めるだけの力も私にはない。
無力だ。
でも、ひとりじゃない。
「マミさん！」
「任せて」
黄金の光がマミさんを包み、輝きが収まる前に、魔法の帯はビルへと伸びてゆく。
柔らかなリボンはＯＬさんの落下を柔らかく受け止め、緩やかな動きで地上へ降ろした。

救助成功だ。さすが魔法少女。こんなことまでできるなんて……。

「マミさん……」

「大丈夫、気を失っているだけよ」

「……よかったぁ」

眠るような穏やかな表情。きっと、落ちる最中に気絶してしまったんだろう。

「可愛そうに」

髪を撫で、整える。血色の悪い人ではなかった。……若いのに。どうして自殺なんか。

「……ん、マミさん、首もとになにか」

「魔女の口付けね、やっぱり」

「魔女の口付け？」

「ええ。魔女が人につける、……標的の印、みたいなものよ」

「……」

入れ墨のようにくっきりと刻まれた口付けに手を触れ、擦る。

「この人は気を失っているだけ。大丈夫、行きましょう」

「……はい」

この人は、今まさに死にかけた。

魔女の手によって。
私はそのことを噛み締め、廃屋に歩を進めるマミさんの後を追った。

「準備は良い？」
「は、はい」
「……」
「……さやかちゃん？」
「美樹さん、どうかした？」
「あ、いえ、なんでもないっす」
竹刀を握る手に力が入りすぎていた。
いけないいけない、こんな精神じゃ。
常に平静な心を保つんだ。取り乱さず、悲観せず、後悔しない。
そのためによく考え、よく見極め、自己を貫く。
大事なことは既に教わったじゃないか……。
「んッ」
ばちん、と両掌で頬を叩く。いってぇー。
「あう、美樹、さん？」

「……さっきのがちょっとショックでした。けどもう大丈夫……行きましょう」
「……ええ、そうね。早く片付けてしまいましょう」
私はマミさんの後に続き、奇妙な鏡のような空間の裂け目に踏み込んでいった。

（……さやかちゃんはいつも自分に正直で、自分のことをよくわかってる。マミさんには、きっとさやかちゃん、不安定なように見えたのかもしれないけど……きっと、自分に漠然と、鈍感なだけで……わたしのほうがもっと、不安定なんだ）

今頃この結界にいるのでしょうけど

「ふわぁー……」

赤と黒のマーブル模様が空を流れている。

他にもこの空間を言い表す言葉はいくらでもあるんだけど、注視すればするほど目がチカチカするので、正直あまりじっくり観察したくはない……。

「あ」

そんな風景の中に、ひときわ動きの強いものを見つけた。

それは真っ白な体、立派な黒いお髭の……。

「まどか、下がって！」

「えっ!?」

モールで迷い込んだ時に見かけた奴だ！

左手でまどかを押しやり、前に出る。その直後、異変が起こった。

庭師のような使い魔が整備するぐちゃぐちゃの茨の壁の上から、蝶の翅の使い魔が飛んできたのである。

「くるならこい……」

右手に握った竹刀の先を、飛来する使い魔の額のやや上に合わせる。
左手を沿え、小指から順に握る。
私の精神はそこで落ち着いた。
飛んでくる未確認生物が、ただのボールのようにも思えた。
正面から飛んでくるボールは速球かもしれないし、変化球かもしれない。そのどちらでも構わない覚悟はできた。
精神的には相手をギリギリまでひきつける。反面、体はすり足で前に出た。
相手がいつ軌道や速度を変えるかわからない。ならば、早く前へ。
そして叩くならば、より強く。
相手側の五十の速さだけで叩くよりも、こちらが近づく五十の速さを合わせ、百で叩けば良い。
「……！」
私は前へ踏み込んだ。声は出さない。
この激しさはまだ、剣だけに込められる。
踏み込みと同時に竹刀が上へ上がる。
そのままゆらりと下へ。
「いざ……」

崩れた右の下段が形作られた時には、髭のボールはカーブ気味に軌道を逸らし、私の左肩を狙っているらしかった。

しかしそこは既に、私の切っ先が届く範囲だ。

「ハアッ！」

斜め下からの型破りな袈裟斬りが炸裂した。

「……」

……はずだった。

手ごたえだけでも、空を斬ったことはわかる。

「もう。生身なのだから、無茶をしては駄目よ？」

「あー……」

振り向けば、ジェームズ・ボンドのように自然体でマスケット銃を構えるマミさんがいた。

一連の私の独断を見咎めているような顔だ。

「ごめんなさい」

「まあ、私が気付いていなかったらと考えると、良い動きではあったわ、美樹さん」

「……へへ」

竹刀を下ろす。

剣を振って怒られることはいくらでもあったけど、褒められたのは久しぶりだ。
「けれど、普通の竹刀では二体目で折れても不思議ではないわ……魔女と戦うには、魔法少女の力がないとね」
黄色いリボンが竹刀をしゅるりと包み込み、輝く。
「気休めにはなるけれど、私のそばを離れないでね？」
「おおっ」
「わぁ」
リボンがほどけた後の私の竹刀は、綺麗な白磁の模造刀へと進化を遂げていた。
「す、すごいすごい！　ミキブレードが真の姿にっ！」
金の装飾もゴージャスで綺麗。西洋の偉い騎士が持っている剣よりも、よっぽど強そうだ。
しかも軽い。何で出来てるんだろう？　光沢は金属のような磁器のような……。
「どんどん先へ進むわよ」
「はい！」
「は、はいっ」
ああもう、とにかく行こう！
わからないことばっかりだ！　楽しいなあ！

強くなった竹刀を意気揚々と強く握り締め、マミさんのあとをついてゆく。
戦うマミさんの姿は、美麗。その一言に尽きた。
長いマスケット銃を取り回し、引き金を引いて撃鉄を落とせば、必ず一匹の使い魔を撃ち抜いてしまう。
近づいた敵は、マミさんから伸びるリボンによって切り裂かれてゆく。
遠近問わず。
昔やったゲームの、ラスボスを倒した後に使えるようになる裏キャラクターを思い出した。
使えば無敵。まさにそんな光景だった。
マミさんが一体の敵を撃ち抜くごとに、私の剣を握る手はどんどん弛緩する。
それは美しい戦いに見惚れているところもあるかもしれない。
けどもう一方で、あまりにも無力すぎる自分に脱力していたのかも、しれなかった。
……って、バカだよね。
剣を習ってから、この道では一端なりの自信があった。
事実、いざとなれば、襲い来る悪漢から誰かを守れるくらいにはなっていたのに。
魔法少女、そして魔女。この二つが関わっただけで、私の剣術なんて、とんでもなく

無力な存在になってしまうんだな。

どこかで役に立てると、脚光を浴びるのだと、心の片隅で思っていた自分がバカらしくなる。

「さやかちゃん……？」

「ん？　どした？」

「ん……なんでもない」

……まどかにはわかっちゃうかな。私のそういう、馬鹿みたいなところ。

「そろそろ最深部よ、しっかりね」

GERTRUD

薔薇園の魔女ゲルトルード

「見て、あれが魔女よ」

廊下の先には、広い空間が広がっていた。

ここまでの道のりも随分荒れ放題ではあったけど、さすがにここから飛び降りることはできないだろう。

『うじゅじゅじゅ……』
「げっ……」
空間の中央で鎮座していたそいつは、使い魔とは比べようもないほどの巨躯をもつ……どろどろした頭の〝何か〟だった。
おそよ一言、二言では説明のしようがない、おぞましく混沌たる姿。
「グロ……」
女子中学生らしく、そんな表現で落ち着いた。
「あんなのと戦うんですか……？」
「大丈夫」
けれど、マミさんの表情は今までとなんら変わらず、むしろ一層の自信が浮かんでいるように見えた。
「負けるもんですか」
単身、マミさんは広場へと降り立った。
「私だって、いつまでもか弱い魔法少女ではないのよ」
前へ前へ、魔女に近づいていく。
マミさんが歩み寄るにつれ、人の大きさとの対比がより明確になり、魔女のサイズがはっきり見えてきた。

あれは……相当デカい。
私が今握っている剣でどうにかできるレベルの相手でないことは、本能的にわかる。
「マミさん……」
まどかが私の服を掴む気持ちも良くわかった。
……階級で言えば完全に他流試合なんですけど、平気なんですか？

「さあ、始めましょうか？」
靴が小さな使い魔を踏み潰したそれが、戦いの始まりだった。
『うじゅじゅじゅ！』
相手からしてみたら、ちゃぶ台をひっくり返すくらいの労力なのかもしれない。
けど人にとってその〝椅子の放り投げ〟は、金属コンテナを投擲するくらいのダイナミックさと、死の気配を感じさせた。
「甘いわね」
私たちの方が心臓を鷲掴みにされた気分だったが、マミさんはこの空間において一番穏やかな心を持っていた。
人には不可能な高さで大きく跳び、素早くリボンを展開してマスケット銃を取り出す。

数は四挺、うちの二本を掴み、手を伸ばすと同時に撃ち放つ。
光弾は緑色のゲル状の頭にクリーンヒットし、ゲルが飛び散る様は高速道路トラックが大きな水溜りを踏みつける場面を想像させた。
……けど。
「効かないか」
魔女の頭部は再生していく。
ゲル状の頭は、裂傷も刺傷も関係なく修復するだろう。
一発目のマスケットを棄てて、二発目を握ったマミさんは、その狙いを近づく使い魔たちに変更。
空中で冷静に狙いを定め、着地と共にすばやく位置取りを変える。
「頭が駄目なら胴体だけど?」
円形の戦場を駆け、魔女からの茨攻撃を避けるマミさん。
その間にも彼女のリボンは、場に張り巡らされてゆく。
……蜘蛛の巣。そう見えた。
「そろそろ私に手番を下さる?」
走るマミさんが、張られたリボンの一端を掴み、引っ張った。
するとどうなっていたのか、連動するようにして空間の天井が崩れ、その真下の魔女

へコンクリート片を落下させる。
人間なら即死だったかもしれない落石。
『うじゅ……』
けれど、魔女はまだ生きている。このままだとまずいんじゃ……。
……あ、いや、そうか。なるほど？
それだけじゃなかった。
既にマミさんは大きく引き抜いたリボンを、次々にマスケット銃へと変換していた。
その数六挺。次に繋がる攻撃だったのだ。
「行くわよ」
リボンが四挺のマスケットを真上に跳ね上げる。
銃に気を取られた魔女が、頭を上へ持ち上げる。
全ては計算済みだ。
「そこ」
ドウン、ドウン。大きな音。二発は容赦なく、魔女の胴体に叩き込まれた。
頭部とは違い、真っ白な衣のような胴体には、螺旋を描く固形の弾痕がくっきりと刻まれる。
『ビギィイイイ！』

「効いてる！」
「マミさんがんばって！」
「ふふっ、いけるわね」
激昂する魔女の攻撃は強まる。暴れ散らし、茨を振り回したりと凄まじい勢いだ。
マミさんは四方から迫る茨を避けつつ、攻撃の隙を伺っているが……。
魔女も魔女。相手も隙を見せなかった。
ゲル状の頭部は常にマミさんの方向へと向けられ、離そうとしない。
――頭を盾に、体を守っている。
最初は露骨な動きを隠すために自然体でいたけれど、魔女もついに本性を現したのだろう。
『ギィイイイイッ！』
茨の攻撃は休むことを知らない。
鞭のようにしなり、マミさんのいた空間を強く叩き、床を砕く。
彼女は防戦一方のようにも思えた。
……けど。
「忘れたのかしら、まだ四つ撃ってないのがあるけれど」
逃げ回るだけのように見えたマミさんが、不意にリボンを伸ばした。

そのリボンは魔女の茨を一本を断ち切り、かつ、まだ伸びる。
そうして地のスレスレ、床に落ちかけたマスケット銃四つをキャッチする。
リボンは器用に絡まり、銃を固定し、引き金すらも締め付ける。
『……！』
リボンによる銃の遠隔操作。
魔女が顔を動かす前に、光弾はマミさんとは全くの別方向から斉射された。
大きな魔女の体がびくりと跳ねる。
四発全てが胴体に命中。その衝撃によるものだった。
「やったかしら」
「あ、マミさんそういうセリフは駄目……」
一瞬は沈黙した魔女が飛び起きる。
「きゃっ」
それだけで、辺りに飛び交っていた〝無力〟だと思われていた使い魔たちが群れになり、列を成し、それが黒く細い茨へと変身して、マミさんの足を掬い取った。
宙吊り。そんな、絶望的な体勢だ。
「マミさーん！」
「なーんてね」

すると円形の戦場に張り巡らされていたリボンが、意思を持ったように動き始めた。
互いに空中で蛇行し、幾何学模様を形成しながら魔女のほうへ狭めていく。
それはいつの間にか魔女を包囲し、張り付き、相手の動きを完全に封じ込める拘束具に変化していった。
「未来の後輩に、あんまり格好悪いところ見せられないもの」
『ギッ……！』
「すごい……！」
黄色いリボンのフェンスはあっという間に、容易く魔女を床へ磔にする。
もはや相手は飛ぶこともできない。
「惜しかったわね」
いつの間にか足に絡まる茨を切り離したマミさんが宙で返る。
そしてリボンを手にし、本日最大の大技を展開して見せた。

螺旋を、筒を描くリボン。
光り、形を成す。
それはまさに大砲。

……はは。そんなものを空中で、どうやって撃つつもりなの？

「ティロ……」

抱えてるよ……。

「フィナーレッ!!」

言葉と共に、勢い良く落ちたハンマーが魔法の火花を散らす。

巨大な筒は弾丸ではなく、光線を吐き出した。

光の砲撃はまっすぐ魔女の背中か腹部かを貫き、一瞬それが膨らんだかと思いきや、爆発した。

デフォルメされた薔薇の花びらが空間を舞う。

砕けた茨がキラキラと散る。

ティーカップとコースターが落ちた、そこには――

「ふう」

余裕の、一息。

「……ふふ」

「！」

そして見惚れてしまいそうなほど、どこまでも優美な笑顔だった。

……魔法少女、すげえ。

やっぱり、どこかおかしいわ

「すごい……」
「……」
異空間の景色は掠れて揺らぎ、元の寂れたオフィスへと変わる。
目まぐるしい非日常がようやく終わった。と思ったら、空から小さな石が降ってきた。
丸い球体に、針みたいな……なんだろ。
「これは……？」
「これがグリーフシード、魔女の卵よ」
「卵……」
つまりは魔女の大元だ。名前からして孵化するのかな。
「運が良ければ、時々魔女が持ち歩いてることがあるの」
「ええ……運が良ければって……」
「大丈夫、その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なものだ」
物知りらしい白猫が太鼓判を押してくれた。うーん、役に立つ……魔女の卵かあ。

「そうなの？」
「ええ、何に役立つかっていうと……」
マミさんが自分のソウルジェムを小さく掲げて見せた。
「私のソウルジェム、夕べよりちょっと色が濁ってるでしょう？」
「おー、そうですね」
どこか黒い色が混ざっているようにも見える。
光の象徴のように輝く黄色の中に沈む黒は、どこか妖しく、不吉だ。
「でも、グリーフシードを使えば……ほら」
「あ、キレイになった」
「ね？　これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りっていうのが、これ」
ソウルジェムをグリーフシードで浄化、魔力を回復させる。
魔力が無くなったらどうなるんだろう。魔法が使えない？　ＭＰが切れたら死ぬタイプのゲームもあるけど……。
「このグリーフシードを巡る争いは、どの場所でも絶えないのよ」
ひゅ、と、マミさんの投げたグリーフシードが空を切った。
もしや魔法少女に必要な儀式か何かだろうか？　とそちらへ顔を向けて、理解する。

「……」
建物の陰に、グリーフシードを受け取ったほむらが姿を現していたのだ。
彼女の魔法少女姿は少なからず、私たちに緊張を与えた。
「あと一度くらいは使えるはずよ。あなたにあげるわ、暁美ほむらさん？」
「……」
「それとも、人と分け合うのは不服かしら」
ほむらは不機嫌そうに眉を吊り、まどかは私の腕にすがった。
マミさんは明らかにほむらを敵視している。
私はほむらの心境を想った。
少しだけ、切なくなった。
「あの。ちょっと待ってください」
考えるよりも先に体が動いてしまった。
やってしまった、と思った。
「どうしたの？　危ないわよ、美樹さん」
ほむらとマミさんの間に割って入った私への、真剣な注意だった。
その本気が冷たく、私は嫌だった。

だって、二人の間にいることがいけないということは、危ない何かが行われる……ってことかもしれないから。

わかってる。だからこそ嫌だった。

「だって、そんなのおかしいですよ。確かにほむらはマミさんの友達のその、キュゥべえを虐めたかもしれないけど」

「事実だよ」

「……だけどそれは、私達の身の安全を考えてたからこそなんじゃ、ないですか」

ほむらは何も語らない。感情の読めない目で私を見ている。

「楽観しすぎよ……もしそうなら、魔女が現れる前にキュゥべえを攻撃なんてしないもの」

そもそもこの子を傷つけるなんてやりすぎだけどね、と付け加えた。

鋭い目のマミさんは怖かった。その魔法少女の姿も威圧感があった。けれど、私は引き下がるわけにはいかない。それだけの確信があるんだよ。

「攻撃しなきゃいけない理由があったんでしょ？　ほむら」

「……」

「うん……そうだよ。だって私達を魔法少女にしたくないなら、わざわざキュゥべえでなくても、私達自身をどうにかすれば良いんだもん。でしょ？」

「！」
　ほむらの瞼がわずかに動いた。
　反応があるということは！
「ねえほむら、」
「話すことは何も無いわ」
　その瞬間、ほむらの姿は消えた。
「え!?」
「！」
「あ、あれ?」
　忽然と、ほむらの姿は消えてしまっていた。
　まるで、そこにいたのが嘘であったかのように。

「……あれ、私は……?」
　目を覚ましたＯＬさんが額に手を当て、熱を探る。
「や、やだ、私、なんで、そんな、どうして、あんなこと……!?」
「大丈夫、もう大丈夫です」
　マミさんは混乱する彼女を介抱し、優しく撫でていた。

……一般人への対応が手慣れている。まるで、長らくずっと……いや。マミさんは事実、そうなのだろう。

こうして、今日の魔女退治見学はハッピーエンドで落ち着いたのであった。

誰も傷つかなくて、本当に良かったと思う。

けど……心残りはある。

孤立したほむらだ。

部外者の私がこんなことをいうものではないけど、それでもどこか切なくなる。

どうしてだろう。

「ちょっと、悪い夢を見てただけですよ……」

「うぁあっ……私っ……！」

「……ふふっ、さやかちゃん、帰ろっか」

「そう、だね」

一件落着、なんだろうか。

私の胸の奥につかえた違和感は、結局最後まで取れる事はなかった。

……あ。

竹刀、結界の中に消えちゃったよ……。

部活、もうだめだなぁ……いや、最初からあんまり乗り気じゃなかったけどさ……。

†　8月7日

「はい」
「ありがとうございます！」
煤子さんの待つベンチを訪れる度に、彼女は近くの自販機で冷たいジュースを買ってくれた。
夏の灼けた道を歩いてきた私にとっては、今や安っぽいスポーツドリンクも、それまで流した汗を全て補ってくれる命の水だった。
今頃に邪推してみれば、それは煤子さんが私を呼ぶための理由のひとつだったのかもしれない。
けれどあの時の私は、今の私がそう言えるけど、決してジュースのためだけに、毎日あそこへ通っていたわけじゃないんだ。
「今日も暑いわね」
「そーですね……」
ぱたぱたとシャツで仰ぐ煤子さんの姿が、何故かとても大人っぽく見えた。

いつか絶対に真似しよう。真似できるようなかっこいい女の子になろうと思った。

「てやっ」
「ふふ、甘いわよ」
ちゃんばらごっこ。
当時は男の子に混じってよくやっていた遊びではあったけれど、煤子さんと出会うことで、それは遥かに質の高い、〝技術〟へと昇華した。
煤子さんが用意してくれた軽くて柔らかめの素材でできた木刀を振るい、打ち込む。
「ほら、足がもたついてる。1・1・2よ、さやか」
「うーあー！　脚の動かし方よくわかんないよー」
ばっばっと激しく動いてズバッと決めるのが強いと思っていた私の苦悩だった。
根本から型を変えるのは、大きな戸惑いと苦労を強いられる。当時は小学生だし、それも仕方ない。
「じゃあさやか、次はさやかが私の攻撃を受けてみなさい」
「ええ？」
「私は1・1・2の動きで攻めていくわ。復習ね？」
「へへん、煤子さんの教えてくれた動きなんて怖くないよーだ！」

「あら、そうかしら？　じゃあ今から打つわよ？」
「いつでも来いだ！」
「良いでしょう」
タイルを強く擦る音が聞こえ、私は身構える。
「やッ！」
私は身構えていたというのに、剣も正面に構えていたのに。
煤子さんのその動きは、目で追いきれるものではなかった。
唯一わかったのは、靴が地面を擦る、耳に残る独特のリズムだけ。
「痛あっ!?」
今日習ったばかりの動きをお手本通りに取り入れた攻撃は、私の脳天へ綺麗に決まったのだった。

安いカップアイスを食べながら、木陰のベンチで一息。
煤子さんの隣はとっても落ち着く。
「習ったことや経験したことは、よく実践しないとダメよ」
「ふわぁい」
「上辺だけで理解してはいけないわ。無知は罪。共感できないものでも、よく考えない

と、自分のためにならないの」

こうしてほぼ毎日、煤子さんは私に対して言葉を贈ってくれる。

半分わかっていなくてもそれを聞くのが、私の日課だった。

ちゃんばらごっこをして、走って、勉強して、お話して。

当時はそれら全てが私を大きく育ててくれるだなんて思っていなかった。

ただただ、お母さんのように優しく、お父さんのように厳しく、真剣に私と向き合ってくれている煤子さんと一緒にいるのが楽しかったんだ。

自転車を押して、煤子さんの背中で束ねた長い黒髪の揺れを見るのが。

時々俯く煤子さんの麦藁帽の中を覗き見るのが。

その年の、ううん、人生の、私の最高の思い出だったんだ。

†　それは8月7日の出来事だった。

兵器を集めないと

今日は日曜日だ。

「……」

懐かしい夢を見た。

最近は良く見る、煤子さんとの日々の夢だ。

どうしてだろう、思い出してしまうんだよな。

最近、どうしてかな……。

「お？」

ふと、頭の中で二つのかけ離れたピースが結びついた。

煤子さんと、どうしてかふと思い浮かんできたほむら。その二つがである。

そうだ。そうだよ。煤子さんとほむら、よく似てる……気がするんだよ。

雰囲気は煤子さんの方が断然柔らかくて、髪も結んでいたけど……両者はよく似ている。

「……」

煤子さんとは一ヶ月くらい、ほぼ毎日会って、一緒に遊んでもらったり、色々なことを教えてもらっていた。

小さい頃の一ヶ月は長い。その中の出来事全てを覚えているわけではないけれど。

……でもほむらの顔、煤子さんとそっくりだよなぁー……？

暁美　煤子？　……うーむ。

「お姉ちゃんなのかな？」

だとしたら？

「……」

煤子さんは病気に罹っていたと聞いた。

彼女と別れ、煤子さんが消息を絶ってからは一度も会っていない。

自分なりに、似た人がいないものかと探したこともあった。けど、二度と会うことはなかった。

「……煤子さん、か」

もしも。もしも煤子さんがほむらのお姉ちゃんなのだとしたら。

煤子さんは……ほむらのお姉ちゃんは……。

「だあっ」

毛布を跳ね上げ、パジャマを脱ぐ。
私服に着替えて、……ああそうだ、携帯を開いてなかった。
着信なし。うん、なるほど。
今日の予定は特に無し、ってことだね？
「……煤子さん」
そう。
思えば、煤子さんとほむらは瓜二つだ。昔のあれだ、思い出補正みたいなのが効いてるだけかもしれないけど、絶対に似てるはずなんだ。
接点なんて少しもないかもしれない。
推測なんておこがましい。私のただの想像に過ぎない。だけど。
「……けど、あの人に少しでも近づきたい」
また会いたい。
会えなくても、彼女の片鱗に触れていたい。
燻っていた心に火が点いた。
「行ってくるっ」
私は走り出した。

あの場所へ行くには、坂を上らなくてはいけない。
その前にちょっとだけ走る必要もある。
小さな子供の基礎体力を作るには丁度良い距離だし、車も通りにくい絶好のコースだ。
それに今更気が付いた。
……あれから。
煤子さんと別れてからは、この道を走っていない。
あの日々では嫌になるほど走った道なのに。
理由はわかる。走るとあの人を思い出し、切なくなってしまうのだ。
だから私はコースを変えた。逃げるように。
背の高い林。
三十分に一台だけしか自転車が通らないような曲がり角にある、五人掛け幅のベンチ。
「……」
いるはずがないのに、そこへたどり着いた私は落胆した。
誰もいないベンチの上には、誰かが置いていった缶コーヒーがある。
真ん中には凹み。振ってみれば、案の定、中身は無かった。

「そりゃ、そっか」
缶をゴミカゴに放り投げて、ベンチの上で横になる。
「……」
日を透かした広い葉。
薄く延びた雲。
まるで、あの頃に戻ってきたみたいだ。
「……よし！」
ノスタルジックになる前に決心した。
「ここに来ても手がかりなんて無い。ほむらを探してみよう」
私の中にある唯一の手がかりはここだけ。
あとはほむらのことなど、一つも知らない。
けれど、休日にじっとしていられるほど私は我慢強くない。
９９％無駄なことだとしても、１％の無駄じゃないかもしれない事のために行動するのも、時には必要なのだ。
「何故なら今日は、暇だからっ！」
私は一人笑いながら坂を駆け下りた。

ほむらを思い出す。
自己紹介らしい自己紹介はなかった。
わかるのはその姿と、優秀さと、胡散臭さ。
転校生なんて二日も経てば何かしらわかるはずなのに、好きな食べ物も趣味もわからない。
魔法少女だっていうことくらいしか……。
「あ？」
人気のない道の途中に立ち止まる。
そうだ。ほむらは魔法少女じゃないか。
何も律儀にありきたりな方法を使う必要なんてない。
蛇の道は蛇に聞くべきでしょう。
「……えー、ごほん」
まずは咳払い。
「……きゅーうべー……」
ぼそりと声に出して呼んでみた。
しかし、現れない。……まぁ、こんなんで来るはずもないか。
「……願い事決まったよー……」

「本当かい？」
「うっひゃあ!?」
　さすがに腹の底からびっくりしましたよ。
「す、すす、すごいねキュゥべえ、ていうかどっから沸いたの？」
「呼ばれたから来たのに、僕は虫か何かかい？」
「ごめんごめん」
　キュゥべえのふわふわな体を持ち上げ、肩の上に乗せる。
　猫くらいの重さはあるかな、と思ったけれど、意外と軽い。ハムスターでも乗せているような気分だった。
「悪いねキュゥべえ、ちょっと聞きたいことがあってさ。願い事が決まったわけじゃあないんだ」
「なんだ、残念だな」
　残念そうな声だけど、顔は相変わらずの無表情だ……。
「ねえキュゥべえ、ほむらがどこにいるか知らない？」
「ほむらを呼ぶために僕を呼び寄せたのかい？」
「いやーほんとごめん、通信士だと思ってさ！　ね？」
「テレパシーの中継役も同じようなものだけどね……残念だけどさやか、それはできな

いよ」
「え、なんでー」
キュゥべえを両手に持ち、とぼけた顔を正面に見据える。ほんと表情の読めん奴だ。
「僕が通信士というのは良い喩えだね、さやか。向こうが僕のテレパシーを受け取ろうとしなければ、何の反応も掴めないんだ」
「着信拒否？」
「電源を切っていると表現するのが近いかもね」
「音信不通かぁ……」
行く宛てがないので走るわけにもいかない。早くも青春の1ページごっこが終わりですよ。
仕方がないので、無用の呼び出しを食らったキュゥべえと並んで、日曜の閑静な道を歩くことにした。
「ほむらと会って、どうするつもりだったんだい？」
「んー？　どうするって、話すだけだよ」
「あんまりお勧めはしないよ……」
「なんでさ？」
「彼女はイレギュラーだからさ。僕は暁美ほむらと何の契約も交わしていないのに、彼

女は紛れもなく魔法少女なんだ」
　ん？　と、私の上に思考の低気圧が生まれる。
「キュゥべえ、ほむらと契約してないの？」
「うん。何故彼女のような魔法少女がいるのか、まったくわけがわからないんだよ」
「……へー……」
「だからほむらには注意したほうが良いよ、さやか」
　しばらくは雲を見上げながら歩いた。
　上の空で考えるために。

「あら？」
「やあ、マミ」
「こんにちは、マミさん」
　手がかりひとつ掴めなかった私は、寂れたケーキ屋の手前でほむら捜索を諦めた。
　月曜日がやってこないわけじゃないのだ。いないなら学校で会えばいいだけのこと。
　当たり前の日々のサイクルを、甘いものと一緒に摂取しようと考えたわけ。
　陳列されたケーキを横目に見た私はそういえばマミさんの部屋のキッチンにバニラエッセンスの瓶があったようなことを思い出し、そうだマミさんちに行こうということ

で、彼女の家にやってきた。
そりゃあもちろん、ケーキを見てマミさんの部屋で飲んだ紅茶の味を思い出したということもあるんだけど……。
「うふふ。日曜日はさすがにいいかなとも思ったんだけど、どうしたの？」
さすがにいいかな、とは魔女退治のことだ。
普通の休日にまで気を張ることはないというマミさんの配慮から、今日は魔女退治見学は無しになったのである。
「ん、美味しいケーキね」
「あは、ですね！　へへへ」
もんすごく美味い紅茶を啜りながら、美味しいケーキ。
日曜日にピッタリの、理想的な昼下がりだった。
「細い道にある小さなお店のケーキで、周りのお店に押されて値段が二年くらい前から吊り上がり続けてるんですけど、味は最高ですよ」
「へぇー……見滝原のお菓子屋さんには詳しいつもりだったけど、初耳だわ」
予想通り、マミさんはデザートが好きらしい。
持ってきてよかったー。
「はい、今日は悪かったねえ、キュゥべえ」

「やった」
　というわけで今日の苦労人、キュゥべえ君にも一口おすそわけ。
　マミさんは私達を微笑ましそうに見つめていた。

「暁美さんの居場所？」
　フォークを唇に当てて、マミさんの首は傾いた。
「はい、同じ魔法少女として知らないかなって」
　まぁ、あまり期待はしていなかった。だってマミさんとほむら、そんなに接点なさそうだし。付き合いの長さでいえば私と変わらないだろうから。
「魔法少女同士といっても、わからないわね……魔女の反応をたどっていけば会えるかもしれないけど」
「あ、やっぱり魔法少女同士でもわからないもんなんですね」
「そうねえ……テレパシーの範囲にも限界はあるし、そもそも魔法少女と付き合ったこともそう多くはないから。ジェムの反応を追えばあるいは……だけど」
　〝検証しようと思ったこともないわ〟と、マミさんは三つめのショートケーキのイチゴを片付けながら言う。
「でも美樹さん、どうして暁美さんに？　お節介かもしれないけれど、人の少ない場所で

彼女と接触するのは危険よ」
「うんうん。マミからも言ってよ、どうも興味があるみたいで、危なっかしいんだ」
たしなめるような目を向けてきたので、ついつい背けそうになってしまう。
どうしても癖で、しっかり見返してしまうんだけど。
「……んー、マミさん、本当にほむらの事が危なく見えるんですか？」
「見えるわよっ」
「きゅぶ」
「うわ」
目の前に白猫が突きつけられる。さすがにたじろいだ。
「そりゃあキュゥべえがぼろぼろだったのはほむらがやったかもしんないですけど……」
キュゥべえを受け取り、ほっぺをむにむにする。
うにょうにょと皺を作る顔は、表情を持ったようで面白い。
「美樹さん、随分とあの子を擁護するけど……あれには意味があるっていうの？」
ありそうじゃないですか。なんて口にしたいんだけど、なかなか言える言葉ではなかった。勘だし。
仕方ないのでガラステーブルの裏面に、皺を寄せたキュゥべえの顔を押し付けてみ

る。
「ぎゅぶぶ」
「チャウチャウ」
「やめなさいっ」
グラニュー糖のスティックでピシャリと叩かれた。
なんとなく、ほむらがキュゥべえをいじめた理由を掴んだ……かもしれない。んなわけないか。

「魔法少女は、みんなの日常を守る存在なの」
胸の中のキュゥべえを優しく撫で、マミさんは語る。
「大きな力はつい、振るってしまいたくなるかもしれないけど……それはいつだって、正しい方向で使わなくてはダメよ。たとえ十回助けられたって、一回の不信を抱けば……守られる側の人は、怯えてしまうもの」
寂しそうな顔だ。
「信用を築くことだって、魔法少女として大切な能力だし……」
逆を言えば、人はそれしか頼れないのよ。
マミさんはそう言った。

命と力に直結する損得勘定。
私は魔法少女の世界での厳しさを知った。

確かにマミさんの言う通りだ。
何かある感じがする。きっとそこまで悪い人じゃない。
……そんな曖昧な理由じゃ、背中を見せることなんて、できないんだ。
じゃあほむらは、一体？
それはきっと、明日、明らかになるんだろう。直接聞いてやればいいんだからね。

煤子って、誰のこと?

悩みを抱えたまま明日はやってきた。
何の悩みかって?　年頃の女の子には色々あるのです。
部活とか。
「あ、竹刀持ってきたんだ」
教室の中で、一際目立つ竹刀を掲げてみせる。
「うん、予備の一本!　これをなくしたらマズイ!」
一昨日の魔女退治に持ち込んだ聖剣ミキブレードは、マミさんの魔法の力によって本物の聖剣へと生まれ変わり…。
そしてなんだかんだで……その、結界内に取り残されて消えた。
結界での忘れ物には気をつけようね……。
「剣道部、戻るつもりなんだよね?」
「うっ!?　その目はなによ!?」
疑わしいと言いたげな、あからさまな上目遣いだった。

けどそれに見透かされているからこそ、私の心は揺らいでいることも明らかなのだ。
「……どうしよっかね、悩んでるんだよ、まだしばらくね」
「どうして？　さやかちゃん、声だけでもかけるとか、顔を出すだけでもとか言ってたじゃない」
「んー……勢いでやめちゃったところもあるから、反省はしてるけどさぁ……でも、これからのこともあるから、おいそれとはね」
「あ……」
そう。魔法少女になれば、きっと部活との両立は叶わないだろう。
部活に入りたいとは思う……けど魔法少女になるかもしれないと揺らいでいる以上は、決断をするべきじゃあない。
ならどうして、剣道用具を持ってきたのかって？
……気分です、ハイ。

音も無く彼女は入ってきた。
「……」
暁美ほむら。
「あ……」

「うし」
「あ、さやかちゃん……」
長髪をひらりと翻す優雅な様を見て、私の足は勝手に動き出す。
ほむらが自分の席に座ろうとする前に、私もそこへたどり着いた。
着席の間際、邪魔者に気付いたのか、ほむらが私の目を見た。
「何」
「いやいやそんな、転校生に圧力かけてるとか、そういうんじゃないから！　楽にして聞いて！」
「……」
どの道、自分の席の前だ。彼女は自分の席に座りたい。
私は話が長くなるからと座るように促す。
なんとなく、私の話を聞かなくてはいけないモードの出来上がりだ。
「……聞きたいことって、何」
「んー、ちょっと、ほむらについてなんだけど」
「部活には入ってないし、シャンプーは普通の石……」
「ああ、そういう自己紹介でするような事でもなくてさっ」
〝せっ〟というものに多少追求したい気配が感じられたが、後回しだ。

「えっと、あのさ」
出したかった言葉。聞きたかった答え。鼓動が早まる。
「ほむらって、お姉ちゃん……いる？」
「はっ？」
珍しい顔で見返された。
素で驚くほむらの表情だった。一瞬、〝脈ありか？〟とも思ってしまった。
「い、いるの？」
「いえ……そんなこと聞かれたのは初めてだったから」
ああ。
「……えっと、煤子、っていう人、親戚とかでもいない？」
「ススコ……？　いないけれど……」
「そか」
そっか。いないんだ。
「いやぁ、もしかしたらなーくらい思ってたんだけど、勘違いかぁ、ごめんね！」
「そう……」
いないのか。

他にも、キュウベえについてとか。聞きたいことは色々あった。
魔法少女についても、もちろん、ほむら自身のことについてだって、興味は沢山ある。
けど、それ以上は会話を続ける気になれなかった。
全ての興味が、根こそぎに流されてしまったんだろう。
私の心に深く根ざしていた、思い出の残りかすと一緒に。
「……」
その日の授業では、ぼんやりと空を眺めていた。
煤子さんのことを考えようとしたけど、理性がそれをやめた。
あの人について考えても、私の頭の中にかかる霧が晴れることはない。
私の思考回路を迷わせるだけ。
だから、理性が肩を叩いてくれる。
もう、そこへ行ってはならないよ、と。
あの日々の思い出はやがて、今よりもずっと思い出せなくなって……いつか完全に掠れきってしまうのだろうか。
大人になってしまった子供が、妖精の森に迷い込めなくなってしまうかのように。
「……恭介んとこ、いくかな」
ちょっとぶりに、あいつの顔を見に行こう。

買ったCDも聞かせてやらなくちゃ。

今日はマミさんの魔女退治見学。

ただその前に、恭介に会うことにした。少し遅れると、マミさんには伝えてある。

「上条君喜ぶね」

「うん、だといいんだけどね」

音楽の感性なんて私には備わっていない。

そりゃあちょっとは聞いて耳も慣れたが、恭介に敵う程であるわけもない。

私なんかが選ぶ曲で満足してもらえるかどうか、ちょっと不安だ。

入院して最初の方は思い出したくもないのかいじけていたけど、最近はあいつの気分もそこそこ持ち直している。

まあ、きっと平気でしょう。

「せっかく私が行ってやるんだし！　お世辞でも喜んでもらうけどねっ！」

「あはは」

年頃の男の子だ。ノックを欠かしてはいけない。

「よっす」

「さやか」
　部屋に入ると、来るまでに呆けていたであろう恭介の表情が、少しだけ明るくなった。
　私は自分の荷物を、やたら沢山並んでいる椅子のひとつにどかっと乗せ、恭介のベッドの端に座る。
「来てくれたんだ、ありがとう」
「そろそろ私が恋しくなる頃かなー?　って思ってね!」
「あはは、まあね」
「む、そういう大らかな受け止め方されると私が恥ずいだけじゃんか」
　それでも朗らかに笑う恭介に内心で安堵し、カバンから例のブツを取り出す。
「これは……」
「そろそろ新曲聴きたいかなって、ね?」
「ありがとうさやか。丁度聞きたいと思ってたんだよ、これ」
「嘘ばっかし!」
「ほんとだよ?」
　ああ、なんだかんだ。
　恭介と一緒にいるのは楽しい。

ＣＤウォークマンのイヤホンを分かち合い、互いに音楽を楽しむ。
視聴したときよりも音質が悪いのは、愛嬌だ。
「……」
横目に見ると、恭介の目は潤んでいた。
無力感に苛まれている彼の、静かな悲しみが見て取れる。
……恭介の手も、願えば治せるんだろうな。
けど、私がそれを治してどうなるというのだろうか。
恭介が喜ぶ？　ま、喜ぶだろう。
でもそれでいいはずがない。
恭介の人生を無闇に操るなんて、そんなことはしたくない。
何よりも、私の願い事は、言っちゃあ悪いんだろうけど、恭介のためだけに使うようなものではない。
使う時が来るとするならば、それは……。
「おまたせっ」
「ん」
前にきつく恭介に言い聞かせてやった言葉がある。

入院して、症状を聞いたばかりの恭介は荒れていたけど、そんなやり取りで沈静化したと言ってもいい。

けれど最近はどうにも、内に溜めたやるせなさや悲しさが、再び溢れているようでもある。

「CDじゃ励ましにはなんないよね……」

「？　上条君、まだショックなのかな」

「ショックは和らいだかも。衝動的ではなくなった感じだよ。だけど、受け止めたからこそ辛いみたいなんだ」

「……そうだよね、冷静になればなるほど、そうだよね……」

音楽に対する考え方を変えようとしても、やはり左手が動かないのは痛手だ。

片手では演奏者にはなれない。それが彼の取り組んでいた音楽だったから。

穏便に済めば一番だけど

「ティロ・フィナーレ！」
大砲が魔女を貫く。
黒い煙を血の様に噴き出して、魔女は散り散りになって消滅した。
「す、すごい」
「どっしぇー……ほんと魔法少女って、見てて飽きないなぁー…」
「もう、見世物じゃないのよ？」
そう言いつつ、マミさんはどこか得意げだ。
程なくして魔女の結界も解けて、マミさんが街灯の上から降りてくる。
なるほど、変身してなくても単純な体の丈夫さも飛躍的に上がっているらしい。
「あれ？　グリーフシード、落とさなかったんですかね」
「そういえば……」
薄明かりの中、地面にそれらしき物の姿はない。
黒く小さな宝石を捜していると、唐突に白い影が現れた。

「今のは、」
「うわっ、びっくりしたっ」
「……今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね、グリーフシードは持ってないよ」
　キュゥべえだった。いきなりは怖いよー。
「魔女じゃなかったんだ……」
　うん。かくいう私もさっきのは魔女だと思っていた。
　魔女か使い魔か。どっちも同じようなもんじゃないのかな。
　その違いは魔法少女にしかわからないのだろう。
「何か、ここんとこずっとハズレだよね」
「使い魔だって放っておけないのよ。成長すれば、分裂元と同じ魔女になるから」
「そうですね」
　心の片隅で、人を食べさせれば……と考えてしまったけれど、すぐにやめた。
「さぁ、行きましょうか」
　魔法少女の活動とは、地道なものである。
「二人とも何か願いごとは見つかった？」

帰り道の質問に、ついぐっと、胸を圧された気がした。
単純な、来るであろう質問なのに。困った時はパスだ。
「んー……まどかは？」
「う～ん……」
我が親友もまだ、願い事を決めかねているらしい。当然だろう。
重い決断だ。なかなか決められるものではない。
「まあ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」
「マミさんはどんな願いごとをしたんですか？」
「……」
それは不気味な、きまずい沈黙だった。
空気を重さを悟った私とまどかは、唐突におろおろし始める。
けど何故だろう、この理不尽。歩道を歩いてたら癇癪玉を踏んだ気分ってきっとこれだ。
「いや、あの、どうしても聞きたいってわけじゃなくてっ」
「ああ、ごめんなさい。私の場合は……考えている余裕さえなかったってだけ」
遠い目が見る先を幻視する。
「後悔しているわけじゃないのよ？　今の生き方も、あそこで死んじゃうよりは、よほど

良かったと思ってるし……」
　彼女の願い事。私達が決めかね、彼女が叶えようとする違い。
　背中を押す〝何か〟の違いがあったのだろう。決定的な何かが。
「でもね。ちゃんと選択の余地のある子には、きちんと考えた上で決めてほしいの。私にできなかったことだからこそ、ね」
「……ねえ、マミさん」
「え？」
　そんな魔法少女の先輩に聞かなくてはならないことがあった。
「魔法少女に一番必要なものって、何だと思いますか？」
「一番必要なもの、かあ」
　曇り空を見上げて、うーんと可愛らしく考える。
　その様は大人っぽいようで、子供っぽいようで、私の中では〝おう、いいな〟って思えるものだった。
「夢を壊すような答えになっちゃうのかな……根気？」
「こ、根気……」
　魔法少女というよりも、熱血スポーツのようなテーマだ。
「うーん、やっぱり、長い戦いになるわ……一生を通して、魔女とは戦っていくんだもの

「……」
「そうですよね……大変そう」
「けど悪いことばかりでもないの。良い事だってあるわ」
「良い事？」
「うん」
　可愛らしい笑顔をこちらに向ける。
「人を助けるって、やっぱりやりがいがあるもの……人を助けたい、助ける、その意志が大切だとも、言えるわね」
「ほへぁ」
「気の抜けた返事ねえ、美樹さん」
「あはは……」
　人を助ける。
　うん、私には合ってそうだ。

「……」
　自室のベッドに寝転び、竹刀を見やる。
　ささくれ一つない、新品のままの二本目の竹刀だ。

「これで何ができる?」

つい蛍光灯に掲げ、影を仰ぐ。

丸くぼんやりとした、およそ凶器には見えないシルエット。

振ってみればその実、突かない限りはほとんど人を傷つけることもない無害な武器だ。

これを振り続けて、そこからどうしようか。

私はそれを考え続けていた。

「家に強盗が押し入ってて、両親が襲われてる、なんて」

数年前に気付いていた事も口から漏れる。

そう。守ろうとするものは限られている。

守れるのはいつだって、自分が運よく居合わせた時だけ。

一ヶ月前の痴漢も、二ヶ月前のスリも、三ヶ月前のひったくりも。

悪事を止めて人を守れるのは、私がそこに当事者として居た時だけなのだ。

私には守りたいものがある。

それは両親であったり、親友であったり、友達であったり……私が知り合った全ての人だ。

私は、私が出会った全てのものを愛おしく思う。だってそれら全てが、今の私を形作

り、成長させているんだもの。
でもそれら全てを守ることなんてできやしない。
だってそうしたいと願う私は、ここに一人きりしかいないんだもの。
「魔法の剣を握れば、それが変わるっていうの？」
答えは見出せない。
魔法少女？　なんだそれは？　と未だに思う自分もいる。
だけど、確固たる力を掴む機会はそこに、確かにある。
竹刀の影は揺れっぱなしだ。

「貴女は無関係な一般人を危険に巻き込んでいる」
「あら……誰かがいると思ったら、暁美さんだったのね」
夜の公園で、二人の魔法少女が邂逅していた。
「……」
一人は暁美ほむら。つい最近、見滝原へとやってきた謎多き魔法少女である。
「相変わらず……いえ、やめておきましょうか？」
「……」

巴マミはほむらに対し、敵意を隠そうとしない。
もちろん、まだ決定的に手を出すまでにはいかないが。
「彼女たちは一般人。だけどキュゥべえに選ばれたの、もう無関係じゃないわ」
「貴女は二人を魔法少女に誘導している」
「それが面白くないわけ？」
「ええ、迷惑よ……特に鹿目まどか」
「ふぅん……美樹さんは？」
「……何？」
聞き返そうとして、すぐに納得した。どうやら巴マミは、鹿目まどかにだけ気をかけた自分が気に入らないらしい。
「美樹さんは迷惑じゃないって？」
「……〝特に〟鹿目まどか、と言ったの。深い意味は無いわ」
「……そ、酷い人ね」
深い意味はない。しかし、自分がまどかにあらゆる物事の比重を置いているのは事実だった。
暁美ほむらは自身が冷酷な人間であろうとすることについて既に覚悟は済んでいる。
多少の軽蔑は甘んじて受け入れるつもりが。

それが、かつて別の時間軸において、自分の先輩であった相手であろうとも。

「でも、あなたも気づいてたのね。あの子の素質に」

「彼女だけは、契約させるわけにはいかない」

「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？　弱い人なら契約してもいいの？　……臆病で卑怯ないじめられっ子の発想ね」

覚悟はあるし受け入れるだけの決意もした。しかし面と向かってこう言われ続けるのも気持ちのいいものではない。

何より、無駄な争いは望むところではなかった。

可能であれば巴マミと敵対したくはないのだ。

「……貴女とは戦いたくないのだけれど」

「だったら、二度と私の目の前に現れないようにして」

それでも巴マミは頑なだった。

「話し合いだけで事が済むのは……きっと、今夜で最後だろうから」

閉鎖的で、猜疑心が強い。

何より、ほむらから見て〝この〟巴マミは……他の魔法少女に対して〝怯えている〟ようにも見えた。

何が貴女をそうさせたの!?

竹刀を振る手が止まる。
「……本当なの」
恭介の病室で、それは告げられた。
他でもない恭介自身から。
「ああ、ほんのさっき、言われたよ」
ベッドの上で窓の外を眺めながら言う彼の声には、生気がこもっていない。
声帯に空気を通しただけ。そんな声だ。
「どうやっても?」
「ここの医者が言うんだ、間違いはないさ」
竹刀を再び振る。振りながら考える。
「もう、治る見込みは無いって。現代の医学じゃあ、到底不可能だって」
強く振る。兜を叩き割るくらいに強く。
「……諦めろってさ」

涙ぐむ彼の声で、私の竹刀を握る手が止まった。
「……悔しいよ、さやか……全てが恨めしいんだ。何もかもが、この世の全てが敵のように思えてしまうんだ」
「恭介……」
「僕はなんて弱いんだろうね、さやか……ただ、片手が駄目になっただけなのに。こんなにどうしようもないくらい荒れて、嘆いてさ……僕は、こんな僕は」
「恭介は弱くなんてない」
竹刀を振る。白い壁を睨む。
「……やりきれなくも、なるでしょ。そんなの」
「……」
しばらくの間、病室に嫌な沈黙が続いた。
「……ねえ。恭介はこれからどうするの？　いや……恭介は、どうしたいの？」
正直、酷な質問だったと思う。
「何もしたくない」
けど、打ちのめされきった彼は答えてくれた。
自棄っぱちだからこそ、素直になっているんだろう。
「恭介は……この世に一つの希望も無いっての？」

「なくなった」
「本当に?」
「ああ……小さい男だろ?　僕は」
「そんなことはないって……」
　仕方が無いとはいえ重症だ。参ったな。
「じゃあさ……恭介。例えばだけど……自分の左手とあたしの生命だったら、どっちが大事?」
「……」
　竹刀を振りながらの間にも、ベッドの上の振り向く音は聞こえてきた。
「どうよ」
「……選べない」
「左手でしょ」
「……さやかに嘘はつけないな。軽蔑してくれていいよ」
「するわけないじゃん」
　まだ、竹刀を振り続ける。
「正直、僕は、恐ろしいんだ……きっと、家族でさえ、僕は……この腕のためなら、もしかしたら……」

「それでいいんだよ、恭介、それだけ大切なものだったんだよ」
素振りをやめ、竹刀を椅子の上へ乱暴に放る。
「……酷い人間だ、僕は……ごめん、さやか……」
「親友でしょ、構わないって……それに」
額の汗を拭い、恭介の顔を見る。抜け殻のような、血の気の無い蒼白な顔。
「あたしの夢と恭介だったら、私だって多分、自分の夢を選ぶだろうしね」
「……さやか。ひどいやつだな」
「あのねぇ。あたしが生命に代えても恭介が欲しいって言ったら、どう思う？」
「……嬉しいけど、ちょっと気持ち悪いね」
「へっへへ……気持ち悪い言うな。あたしもそう思うけどさ」
涙ぐんだ彼の肩を強めに叩く。
「今すぐじゃなくていい。元気だしなよ、恭介」
「……ああ。ありがとう、さやか」

面会も終わり、廊下へ出てきた。
まどかは椅子の上でキュゥべえを撫でながら暇を潰していたようだ
「よう、お待たせ」

「おか……って、さやかちゃん、なんか汗かいてなあい?」
まどかは私の額を見て気付いたようだ。これはうっかり。
「あはは、ちょっと素振りしてた。大丈夫、まどかが想像してるみたいないやらしいことはしてないから」
「そ、そんなこと考えてないよ!?」
「あ、そう?」
「もう……だけど静かにしないと、上条君だけじゃない他の人にも迷惑になるよ?」
「あっはっは、大丈夫、あそこ無駄に広いからねー」
「そういう問題じゃ……」
恭介のことは、まだまどか達には伏せておくことにした。
腕が治らない。それを言うべきかどうかは、本人から確認をとってからの方が良いだろう。
今日だって、話すまでに間があったのだ。躊躇するに違いない。
恭介だって自分が惨めだと思う姿を、あまり見られたくないだろうから。
そんなことを考えて、病院に併設されている大きな駐輪場内を歩いていたんだけど。
「……!」
院の外壁に、それどころじゃないものが見えてしまった。

「さ、さやかちゃん……あそこ……」
「グリーフシード！」
「本当だ！　孵化しかかってる！」
ああ、キュウベえのお墨付きまでもらってしまった。時間の猶予は短いか？
「嘘……何でこんなところに」
白い壁に打ち込まれたように存在するそれは、禍々しい輝きを放ちながら壁を侵食している。
ちょっとずつ。けどナメクジの行進なんかよりは比較にならないほど速く。ああ駄目だ、どうも長く待てるタイプのやつじゃなさそうだ……。
「マズいよ、早く逃げないと！　もうすぐ結界が出来上がる！」
「まどか。マミさんの携帯、聞いてる？」
「え？　ううん」
しまった。学校で会えるからって失念してた。
迂闊だ。こういうケースだってあり得るだろ。私はバカかっての。
「まどか、ごめん。手分けしよう。先行ってマミさんを呼んで来てくれる？」
「うん！　けど、さやかちゃんは……？」
「あたしはこいつを見張ってる」

「そんな！」
　いざとなれば避難誘導くらいはできるかもしれない。
「無茶だよ！　中の魔女が出てくるまでにはまだ時間があるけど……」
「何？」
「結界が閉じたら、君は外に出られなくなる……マミの助けが間に合うかどうか」
　なるほど。リスクが大きいな……けど。
「結界が出来上がったら、グリーフシードの居所も分からなくなっちゃうんでしょ？」
　グリーフシードは魔女の本体だ。
　本体が動く前にグリーフシードの位置を捕捉しておかないと、被害が拡大していくかもしれない。
　病院が巻き込まれてからでは、大勢の犠牲者が出るかも。
「放っておけないよ」
「じゃあまどか、先に行ってくれ。さやかには僕が付いてる」
「うん」
「まどか、ダッシュ！」
「う、うん！　すぐに連れてくるから！」
　彼女はよろけながらも、彼女なりの駆け足で病院から離れていった。

「マミならここまで来れば、テレパシーで僕の位置が分かるだろう」
「うん」
「ここでさやかと一緒にグリーフシードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるから」
「ありがとう、キュウべえ」
私はキュウべえを抱きしめ、広がっていく異空間にじわじわと飲み込まれていった。

お菓子だらけの空間。
糖分たっぷりの物で溢れ返っているというのに、甘い匂いは一切ない。
きっと、ここにあるお菓子は食べられないのだろう。
時々小さな使い魔らしき生き物が、結界の中を歩いているようだ。
その気配を察して物陰に隠れる。
あんな小さな生き物相手に無力なのは歯がゆいけど、魔法少女じゃないのだから仕方がない。
何をしてくるかわからないのだから。
「怖いかい？　さやか」
「え？」

「この結界がさ」
「うーん」
　怖い？　怖い……か。脅威だと思う。けど怖い……か。ピンとはこないな。
「願い事さえ決めてくれれば、今この場で君を魔法少女にしてあげることも出来るんだけど……」
「……」
　足を止める。そして、思わず微笑む。
　ああ、まあ、そうなんだよね。だから怖いとは思わないんだ。
　グリーフシードの見張り。それはただの方便でしかなくて。
　本当のことを言えば、私はただ一人になりたかっただけ。
　まどかにマミさんを呼ばせ、誰にも邪魔されないような状況を作りたかった。
　何より、私のせいでまどかの決断を焦らせないように。
　仕方ないことなんだと思わせられるように。
　私は、この時を待っていたんだ。
「さやか?」
「キュゥべえ……良いよ」
「!」

「契約しよっか」
「待ちなさい！」
凛々しい声が後ろから聞こえてきた。
「ありゃ」
つい、にやついた顔のまま振り向いてしまう。
「ほむら」
「……さやか……」
そこには少し息を切らせたような、魔法少女姿のほむらが追いついていた。
私からは少しだけ距離を保ち、こちらの様子を窺っている。
猜疑心？　不安？　いや、やっぱり疑念？
……よくわからない。
「……鹿目まどかと、巴マミは？」
「まどかなら、マミさんを呼びにいったよ。まだもうちょっとかかるんじゃない？」
「……そう」
「ほむらは何しにきたの？　っていうか、どうしてまだ現れてもいない魔女を……」
うっすら浮かんだ汗を指ではじき、再び凛とした、今度は疲れのない余裕の冷静さで、私を見据えた。

「契約するのはやめなさい、さやか」
「どうして」
「……魔法少女になってはいけない」
　また、この複雑な表情だ。
　私にはほむらの意図が読めない。
「あたし、人の目を見れば何考えてんのか、だいたいわかるの」
「何……」
「テレパシーでもなんでもないけどさ。人の性格とか、考えてることとか。そういうのがなんとなくわかるんだけどさ」
「……」
「ほむらの目を見ても、何もわからない」
「……さやか」
「目的は隠すし、行動を見ても、なんも読めない」
　意図的に隠している。なにか分厚いもので、覆っているかのように。
　そんな彼女を見ると……苛々する。
「ねえ。正直に、隠していることを話すなら今だよ、ほむら。ここにはマミさんもいないし……まどかだっていない」

ほむらを睨む。空気が一変して、急速に張り詰めてゆく。
「私に契約するなって、ほむらは言ったよね」
「……言ったわ」
「ならさ。ここで隠している事、すぐに打ち明けてよ」
「なっ……」
驚きの表情。なんだ、案外抜けてる所があるのか。
彼女は何かを隠している。言いにくい事を隠している。それは契約について？
「でないと私、この場でキュゥべえと契約して、魔女を倒しにいくから」
「さやか！　それは……！」
「何よ、契約するかどうかは私の勝手。本気で止めたいのなら理由を言ってよ」
キュゥべえを正面へ突き出すと、近寄ろうとしたほむらの脚が止まった。
「？」
「……くっ」
キュゥべえと私を見比べて動くことができない。
おどおどと頼りない姿に、私はまた苛立ってしまう。
ああ、そうか。この苛立ちは。
うろたえる情けないほむらの姿が、似ても似つかない煤子さんとそっくりだから……

こんなにも心がささくれるのか。
「……そんな顔で、そんな顔するな」
「何故……」
「何故？　何がよ、はっきりしてよ、私はね、」
「どうして!?　さやからしくない！」
「はぁ?」
　唐突なほむらの叫び。感情の発露。
「どうして貴女は、私が知ってる美樹さやかじゃないの！」
「……！」
　互いの違和感がちょっとだけ触れ合い、私の頭に静電気が走った。
「何が貴女をそうさせたの!?」
　不満？　戸惑い？　葛藤？
　顕にされているにも関わらず、全く読むことのできないほむらの感情を前に、私の思考は停止した。
「確かに貴女は冷静よ！　それはわかる、けど……けど全てを受け止められるというの!?　そんなのありえない！」
　畳み掛けられる言葉。自問混じりの叫びがお菓子の空間に響く。

「誰も人を理解しようとはしない……誰も、上辺の興味は抱いても、それを認めるわけじゃない！　もう誰にも頼らないと決めたのに、それなのに、……！」

「っ」

叫びに涙も加わった。言っていることの意味もわからない。

狂気だ。短絡的に判断するならそう感じた。けど、これは……。

少ししてほむらは涙を拭い、感情を押し殺した目に戻った。

「……もういい。全てあなたの好きにしなさい、さやか」

「……」

「ただし、ここの魔女は私が始末する……あなたの出る幕ではない」

ほむらは私の真横を抜け、結界の奥へと駆けていった。

去り際には流し目も無かった。

ただ冷たい目で、動かぬ表情で、私を抜き去っていったのだ。

「……なんか、諦められた」

彼女は私の何かを見限った。何かって？　きっと私自身をだ。そんな分かれ方だった。

失礼な話だ。言いくるめられてもいないのに、勝手にしろだと。

「怒った。もう本当に怒ったかんね、私」

ただでさえほむらと話していると頭の中に霧がかかるっていうのに。
最後にバカでかい濃霧を吐いて去ってしまうなんて。
そんなの許せる？　私なら許せないね！
意味深なＹｅｓ／Ｎｏの質問を３０回分岐させられた挙げ句に結果が出ないようなものだ！
最初から他人を見下して！　何も始まってさえいないのに見捨てやがって！
まして、煤子さんとそっくりな、あの顔で！
「キュゥべえ！　聞いて！」
「言ってごらん」
白いふわふわを両手で持ち上げる。
「冷静になれ、慎重になれ、そうは言われ続けてきたけど……私はどーしても、がんがん突き進むこの癖だけが直らない！」
「何の話だい？」
「抑えつけられても、どうしても曲げられない背骨が一本あるせいで苦労したことも、ちょっとある！」
これは理性ではない。感情の問題だ。わかっている。
「けどやっぱ契約する」

「ほう」
　赤い瞳に、今にも吸い込まれそうだ。
「ねえキュウべえ。私って魔法少女になったら強いかな」
「今よりは強くなれるよ」
「不安になる言い方だね、それ。あんま強くならないの？　マミさんくらいになる？」
「マミは最初こそへっぽこだったけど、修練を積んで強くなっていったんだ」
「比較に私を出してほしいね。キュウべえ、契約したばっかりのマミさんと契約したばっかりの私だったら、強さの割合でいえば何対何よ」
「魔法少女としての素質かい？　様々な要因が関わってくるから正確にはわからないけど正直に言うよ、およそ三対一だ」
「ぐふッ」
　い、いかん。今のはさすがにちょっぴり決心が揺らぐ。
「けど相性っていうのもあるからね。さやかがどのような願い事で契約するかによって、使える魔法の形も大きく変わってくるはずだよ」
「ほほう、詳しく聞きたいところ……だけど、願い事はもう決まってるんですね」
「良いのかい？」
「私の本質だもんね。変わるものじゃないよ」

たとえ私が三人束になってマミさんと同等の力しか持たない魔法少女だとしても、それくらいで私の願望は、夢は、揺らぐことはない。

恭介の左手ほどもね。

「ちゃんと一言も漏らさず聞いて、私の願いを叶えてよ。キュゥべえ」

「いいだろう。君は何を望んで、その魂を差し出してくれる?」

私の願い。なりたかった私。

まるで夢、御伽噺の勇者。教室で言えば数年来の友達も笑うだろう。

けど私は本気だ。

漠然とした指標のひとつが、形として成り立つというのであれば。

魂だろうが寿命だろうが、喜んで差し出してやるわ。

何を対価に差し出してでも大きすぎる、私の傲慢な願いこそ――

「全てを守れるほど、強くなりたい」

そんな、どうしてもう

「さあ、受け取るといい、それが君の運命だ」
私の内から大切なものが輝きを放ち、形を成して現れた。
それは私の願い。私自身。私の魂。
変身の方法が頭の中へ入ってくる。
力の出し方。抑え方。感覚として直接入り込んできた知識に一瞬びっくりしたが、それらの有用性を認めた私はすんなりと受け入れることができた。
私は魔法少女となった。
そして、今の私は普通の中学生だった私よりも、より多くの事ができるはずだ。
青い宝石がそれを教えてくれる。
結晶化した私の信念。
これからはもう、この影を見間違える事も、疑うこともないだろう。
ソウルジェム。
私は私であることを忘れることを忘れない。

「手の中にあるこれが運命なわけじゃない。運命はこれから作ってくものだ」
パシ、と右手で受け取る。
ふわりと浮くような衝撃を受けた体を両脚で支え、持ちこたえる。
「――よし」
ああ、身体が軽い。
「おめでとう、美樹さやか。これで君も魔法少女……」
「待ってなさいよほむら！」
キュゥべえが何か言っていたが、それどころじゃない。
私には怒るべき相手がいる。倒すべき魔女がいる。まずはそれからだ！
「おおっ、やっぱり足速ッ！　そりゃ大会記録も出るわ！」
変身はいつでもできる。
けど、変身せずとも体が軽やかだ。マミさんも一度だけ見せていたし、効果のひとつなのだろう。
人間状態でも、ある程度は問題なさそうだ。
けど今は、自分の力を試してみたい。
私の願いがどれほど使えるのか。
魔法少女の私がどこまで戦えるのか。

まどかを後から来るように言っておいて正解だった。
彼女が一緒にいたら、きっと私の決断に流されてしまうだろうから。
私は私の意志で魔法少女となったのに、まどかをそれを巻き込むわけにはいかない。
「変ッ、身！」
宣言しなくても変身はするだろうけれど、それでも叫んだ。
記念すべき第一回目の変身なのだ。盛り上がっていこう。
青い輝きの球体に包まれる。
全身に、私の意志が鎧となって纏わりつく。
体が軽い！　こんな気持ち初めて！
「それに、これッ」
何もない空間から一本の刀身が伸びる。
右手で勢いよく抜き放ち、光の球を一閃。
私は卵の殻を破る様に、繭を裂くように、変身空間から脱出した。
右手に握るは、真・ミキブレード。
ハンドガードがついているから、日本刀ではなくサーベルだろう。
……使いやすそうだ。
「へっへ、こういう武器になってくれたかぁ、私の願いっ」

ついつい顔がにやついてしまう。
だって自分の可能性が広がったんだもの。
魔女を倒してソウルジェムを保つ。
日常的に、息をするように人を守ることができるのだ。
胸が高鳴って、何が悪い!?
「おっ?」
クッキーの滑り台から使い魔が降りてきた。
一ツ目の小動物ナース。四足歩行目玉親父。まぁ、へんてこな小さい化け物ってことだ。
「何事も最初は基本から、ってことね」
その数を見ればそれがザコ敵であろうことはなんとなくわかる。
一匹。二匹。
十匹。二十匹。
まだまだ現れる。さっきまでは静かな結界だったのに、急速に慌しくなり始めた。
……!　そうか魔女か。
魔女が生まれそうなんだ。だから使い魔も一気に増え始めた。

ひょっとすると、ほむらが奥で暴れているのかもしれない。それが使い魔たちを刺激した可能性もある。

今、私がやらなくてはならないことは一つ。

「私がほむらより先に、魔女を倒してやるんだから」

最初だからまずは使い魔から、なんて温いことは言わない。

私の願いは〝強さ〟だ。

使い魔で試し切りをしなければ不安になる程度の力など願ってはいない。

傲慢？　慢心？　力に酔っている？　関係ないね。

「道を開けろ！」

地面に叩きつける右足の震脚。

轟音に揺れる一帯。飛び散る衝撃波。

床を基点に生まれた青白い魔力の爆発は、集まり始めていた使い魔の集団をまとめて消し飛ばした。

Ｃｈａｒｌｏｔｔｅ

お菓子の魔女シャルロッテ

人形は着席した。
足長椅子に着席した彼女は、悠然と部屋を見下ろしている。
使い魔を倒し、結界内を荒らされ。
生まれたばかりとはいえ、目の前に居座る侵入者への怒りは強かった。

「間に合った」
侵入者である暁美ほむらは、指で顎に滴る汗を弾いた。
「あなたには、何としても消えてもらわなくてはならない理由がある」
次の瞬間、汗を弾いた指にはハンドガンが握られていた。
そのままスムーズな動きで、照星を魔女へと向ける。
何も言わない。ただ銃をわずかに揺らし、引き金を引き続ける。それだけ。
普通ならば、爆音と共に弾丸が相手を襲うのだろう。しかし結果は違っていた。
「さっさと本性を見せてもらうわ」
暁美ほむらによって撃ち出された銃弾たちは、空中で綺麗に配列されていた。
綺麗な円形に並ぶ弾丸、およそ十三発。ほむらはその空洞から、時を止められた魔女

を睨んでいる。
「巴マミが来ないうちにね」
そして時は動き出す。
オートマチックの十三発は寸分のズレもなく、同時に発射された。少なくともほむら以外の存在にはそう見えるだろう。
小さく密集するようにして撃ち出された弾丸は、斜線上に座っていた魔女の身体を容赦なく刳り抜いた。
『……!』
弾は貫通した。が、衝撃は魔女の体を浮かせた。
O字に穿たれた、小さな魔女の体を。
『……!!』
だがこの魔女はそれだけで終わることはない。
突然の敗北などはありえない。
彼女には執着がある。
彼女の執念が根負けするまでは、彼女が消滅することなど、万に一つもない。
不意打ちでは絶対に〝納得しない〟。彼女はそんな性質をもった魔女だった。
つまり。

『がぁあああぁあ』
「出たわね」
全力の魔女を倒さなければならないのである。
骸から脱皮するように生まれた、巨大な蛇のような魔女を。
「けど、あなたがどんなに速かろうとも、どんなに硬かろうとも意味はない」
魔女は体をうねらせながら、悪魔のような大きな口を開いてほむらに襲い掛かる。
そして口は閉じた。
『……！』
「どうせあなたは負ける」
口を閉じた魔女の頭の上で、アサルトライフルを構えたほむらが躊躇無く引き金を引いた。
『がぉおおおぉおお！』
穴だらけの頭を、怒りに任せて振るう。
蛇の体。しかし先端の顔は、明らかな〝不機嫌〟な表情を見せている。
「この口径でも効果は薄いわね」
暴れのた打ち回る魔女を尻目に、ほむらはゆっくりと床を歩いていた。

しばらくはその場で暴れていた魔女だったが、ほむらが全く違う場所に居ることに気付くと、さらに不機嫌そうに表情を歪めた。

ほむらの位置は、魔女がいる場所と全くの別。

結界の端と端で、片や見当はずれに暴れ、片や冷静に観察していたのである。

「いっそのこと、ナイフで切り分けた方が弾を無駄にしなくて良いかしら」

『……!』

「あら、馬鹿にされていることはわかるのね」

『がぁぁあぁぁあ!』

魔女は胴を伸ばして、空間の端にいるほむらへ一気に襲いかかる。

牙を剥き、体をバネに飛び掛る魔女のエネルギーは計り知れない。

「愚直ね」

ほむらの狙いはそれだった。

爆弾を口の中へと投げ込み、炸裂させる。

だが爆発が最も効果を出すためには、口だけではいけない。

魔女の全身をくまなく同時に爆破しなくては、一撃必殺の決着とはならない。

とぐろを巻く相手では、上手く爆弾を投げ込めない。

だからあえて遠くまで一旦距離を置いて、相手に攻めさせた。

体を一直線に伸ばす、その瞬間のために。

巨大な衝撃だった。

爆発ではない。激突だった。

ほむらは左手の盾を使用することができなかったのだ。

「なぜ……」

右手に爆弾、左手に盾。柄にもなく、彼女はそのまま動きを止めてしまっていた。

「何故、だって……!?」

『……!』

巨大な牙に対して、華奢すぎる一本のサーベルが競り合っている。

ギリギリと音を立て、どちらも折れることも砕けることもなく均衡して、その場で動きを止めている。

「決まってんでしょほむら、そんなの当然……!」

刃が青く煌めく。

『!』

鋭い牙に亀裂が走る。

「あんたじゃないッ……私の出る幕だからだ!」

力の均衡を破って振り下ろされた輝く一撃は、魔女の顔面を真っ二つに叩き割った。

どうなってしまうのかしら

「さやかッ！」

焦りから出たほむらの叫びを聞く前に、私は異常を察知していた。

斬りつけて真っ二つにしたはずの顔面。その切れ目から、新たな〝顔〟が見えていたのだ。

『ぎゃぉおぉんっ』

脱皮するようにして、新たな魔女の顔が襲い掛かる。

均一に並んだ鋭い牙。噛まれれば挽き肉だ。

「――」

サーベルの峰を牙に押し付け、勢いを逸らす。

峰は白い牙の表面だけを削って、魔女の突撃を真後ろにやり過ごした。

『……？』

目を瞑って襲い掛かってきた相手からしてみれば、いつの間にか自分が通り過ぎたようにしか思うまい。

「どうした、私はこっちよ」

『……！』

わかったことが3つある。

私の武器は丈夫だということ。

私の体は強力だということ。

そして……。

「格下が相手の打ち合いじゃ、一日中やってても負ける気がしないわ」

『がぁあああぁあ！』

白いマントで体を包む。

サーベルは、裾から剣先だけが伸びている。

『おおおおおおぉおっ！』

相手は概ね蛇のような身体を持った魔女だ。

動きは速いが、単純で直線的。エネルギーに任せた暴力的な攻撃が癖らしい。

いや、癖というよりも性質だろうか？　知能は高くなさそうだし、このパターンを変えることはないのだろう。

「さすがにそんな攻撃、不注意でもしなけりゃ当たらないって」

マントを翻し、斜め前方に跳ぶ。

蛇の頭部は床を抉った。

……ここまでわかりやすいと、ただの人間だった私でも、瞬発力に任せて避けられるかもしれない。さすがに無いか？

「ちょっとちょっと、初陣なんだ。せめて〝魔法少女で来て良かった～〟って思わせてちょうだいよ？」

『～!!』

あ。馬鹿にしていることはわかるんだ。

（美樹さやかが契約した、それはわかる……けど）

暁美ほむらは、魔法少女になったばかりのさやかと、お菓子の魔女との戦いを見ていた。

単調な質量攻撃を繰り返す魔女の動きを遠くから目で追う事は簡単だった。

だが、それを軽々とかわしてゆく魔法少女の姿だけは追いきれない。

（なんて速さなの……!）

地に足を付けたまま、フットワークでもするかのように魔女の攻撃を回避する。

一見簡単かもしれないが、彼女は常に地上で避けている。

魔女の体は蛇であり、多角度からの噛み付きは当然、時として尻尾を振るい、なぎ払うこともある。

だがさやかはそれらを全て、〝地上〟で回避し続けていた。

（……なるほど、いくら尻尾をなぎ払おうとも、重心付近の動きは緩慢……さやかは常に、魔女の重心に陣取って回避し続けているのね）

その動きに派手さはない。

が、機敏に躱し続ける〝巧さ〟は、かつて見た美樹さやかの動きとは一線を画している。

『ぎゃおんっ！』

いつの間にか、魔女の体表には無数の傷が刻まれていた。

我を忘れて怒り、無理にのたうち回り、飛び掛る度に、魔女の傷口はどんどん開いてゆく。

標的に執着する魔女といえど、無限の修復力をもつわけではない。全身に受けた傷には、着実に動きを鈍らせていたのだ。

マントの裾の奥で、サーベルの切っ先が光る。

「うん。体の動き、悪くない……これからどんなに脱皮されようとも、叩き潰す自信はあるね」

マントの中からゆらりと、青白いサーベルが突き出される。
『……』
もはや魔女の目には、喰う事への執着など無かった。
自分が〝喰う側〟ではないと、思い知らされてしまったから。

サーベルを両手に一本ずつ握り、重さのままにゆらりと構える。
魔女にはもう、抵抗する気配が見られない。
既に戦いを諦めているらしい。
執拗に噛みつこうとするところも、それができないことを悟って拗ねるように戦いを放棄するところも、どこか子供っぽい。
しかし子供っぽいからといって、私の剣を掲げる手が躊躇することはない。
「覚悟」
頭の上で二本の剣をまとめ持つ。
サーベルは光と共に熔けて混ざり合い、長く幅の広い、大きな両刃の剣へ進化を遂げる。

魔法の両手剣。
刀身から噴出す淡い光のオーラ。
体感でわかる、二倍の力とは一線を画したパワー。
直立の体に直立の剣。
振り下ろせばその時点でこの戦いは終わると、私の本能は気の早い福音を鳴らしている。
だからこそ、私は自信たっぷりに技名叫ぶのだ。
「〝フェルマータ〟！」
大きな半円の弧を描き、両手剣は軌道上の全てを切り裂いた。
振り下ろした剣から放出される清浄な蒼い力。
エネルギーの奔流は辺りの空気を巻き込み、しばらくの間、私の髪をなびかせる追い風となった。
しばらくして大技が終わった時、目の前に残るのは、巨大な傷跡だった。
結界の奥、向こうの壁にまで続く大きな地割れは深く、底は暗かった。
魔女の姿は跡形もない。大きなダメージによって消滅してしまったのだろう。
結界も、私の剣の跡を起点として崩壊を始めたようである。

両手剣を肩に担ぎ、ふん、と息を鳴らす。
きらきらと眩い明滅と共に消えてゆく結界を眺めて、私は自分の心の靄が消え去ったことを認識した。
……きっと、これこそが私の渇望していたものなんだ。
守る力。
それが本当に、絶対的に力であることは皮肉にも思う。
けれど守るためには時として、力が必要なのだ。
勧善懲悪とかそういう話ではない。もっとシンプル、大きな負のエネルギーを退ける為に、力が必要なのだ。
景色はもう、病院の外へと変化していた。
お菓子の毒々しい世界から一変しての、淡白な白と灰色の世界だ。
「……さやか」
私の後ろで、ほむらが小さく呟いたらしい。
「言われた通り、私の好きにさせてもらったよ」
私は振り向きもせずに答える。
ゆっくりと一歩ずつ近づいてきていたほむらの足音が止まった。
「別にほむらがどうこう言ったから、ってわけじゃない。私自身が望んで契約したの」

両手剣が消滅し、おぼろげな魔力の光の粒となって私の身体へと還る。……ああ、ちょっと疲れたかも。

「……そうね」

「そうよ」

向き直り、ほむらの顔を見た。

彼女はやっぱり、諦めたような顔をしている。

私は正反対に、彼女に対して怒りを抱くでもなく、微笑みかける。

「これでもまだ、私に隠し事しちゃうわけ？」

「……なおさら言いにくくなったわ」

「へえ」

そういうものなのか。

「……覚えておいてほしい事がある」

「ん？」

二人が駆ける慌ただしい足音が、かすかに聞こえてきた。まどかとマミさんだろうか。

「……私は決して敵ではないわ、さやか」

マミさんの姿が視界の向こうで角を曲がった瞬間、ほむらの姿はその場から消えてい

た。
　私の姿を見て驚いたまどかとマミさんが止まり、再び、今度は更に急いだ調子でこちらへ走って来る。
　いなくなったほむらの姿を茜空に見て、私はこぼす。
「敵じゃないなんて、最初からわかってるてーの」

　駆け寄ってきた二人は、私の姿を見るや否や、怒った。
　表情だけのものだ。しかしそれですらもすぐに引っ込めて、哀しげな顔になる。
「……もっと早く来ていれば」
「ご、ごめんなさい……さやかちゃん……」
　二人はほむらが来ていたことを知らない。
　間に合わず、私が契約して魔女を倒したと勘違いしているらしかった。
　私にとっては都合の良い解釈だが、本心は打ち明けておこう。
「どうせ、契約するつもりだったんだよ。どうしても叶えたい願いがあったんだ」
「願いって……」
「……鹿目さん」
「あ、ごめんね。さやかちゃん……」

人の願い事を簡単に聞くもんじゃない、というマミさんの視線はまどかに刺さった。
私は喋っても構わないのだが、まあ、まどかのためならそれもいいかなと思う。
私は全て納得した上で契約した。
ほむらの事もあるけれど、そんな衝動的に契約に漕ぎつけたわけではない。
私自身の考えがあっての結論だったのだ。

とはいえ、釘を刺されたり、注意事項を伝えられたり、まどかにやきもきされたり、色々なことをされた夕方であった。
「グリーフシードの使い方の確認をしようか?」
「覚えてるからいいよ」
キュゥべえも追い払って、私は一人、自室のベッドで仰向けになる。
「……」
ソウルジェムを噛み、天井を見上げる。
何を考えるでもなかった。
わたしはすとん、と、当然のように眠りに落ちた。
ベッドに入るまでに何かを考えていたわけでもなければ、ソウルジェムを口に入れてどうこうしていたわけでもない。

ただ考える事もなかったので寝た。それだけだった。
それが当然であるかのように。

その気になればできるはず

† 8月10日

〝なんでこんな面倒な動きを〟と内心馬鹿にしていた私だったけれど、実際に動きがスムーズに運ぶようになって、改めて煤子さんの教えの凄さを知った。

「飲み込みが早いわね、その調子よ」

「はい！」

元々運動神経の良かった私は、煤子さんも驚くほどの早さで動きを習得していったらしい。

この時にやっていた練習といえば、歩きながら続けざまに面打ち、胴打ちをしてくる煤子さんに対して、右半身を向けながら攻撃を受け止めつつ後退するというものだった。

右手は棒で守り、けど左手も意識させつつ。

この練習が何を成すのかはわからない。
煤子さんに訊ねれば「役に立たないものはないわ」と言って、「何に役立つのかを考えてみなさい」と、逆に私に考えさせる。
だから私は練習中に、これが何に役立つのかを考えていた。
この横向き後退だけではない。素早い後ろ歩きやしゃがみ歩き、竹刀さえも使った咄嗟の動きなど、沢山の動きを教えてもらった。
それら全てを、私の日常の役立ちに結びつけることは難しかった。
けれど、運動は好きだったし、動きそのものの合理性は理解できた。
だから続けられたのだ。
何より……。
「そう、良いわよ。無駄がなくなってきたわ」
「へへっ……」
煤子さんに褒められるのが、嬉しかった。
「これ、好きなのね？」
「んっ……んくっ……」
「ふふっ……どう？」

「……美味しい！」
「こら、口元、こぼしてるわよ」
運動の後のスポーツドリンクは美味しい。
煤子さんと二人きり、誰も居ない閑散とした道。
去年までは友達と遊んでいたこの夏休みも、すっかり煤子さんとの時間に取って代わっていた。
それまではずっとゲームや公園だったのに、不思議なものだ。
そして、夏休みといえば……。
「さて、運動で汗をかいたところで……宿題を見せてくれるかしらね」
「う」
煤子さんは運動だけでなく、勉強も教えてくれた。
運動は楽しい。それがよくわからない動きであっても、覚えるのは苦じゃないから。
けれど、当時の私にとって勉強だけは、どうも苦手な分野だったのだ。
煤子さんと過ごす時間は、不思議とゆっくり流れていくような気分にもなり、そんな思い込みも相まって……苦しい時間は長いように思えた。
「目算で４０点、相変わらずね、さやか」
「ひいい……」

算数のドリルに目を通した煤子さんの、五秒後の感想がそれだった。
　このときは瞬時に採点できる煤子さんを「やっぱりお姉さんは違うなあ」くらいにしか思っていなかったが、今にして思えば怪物的な計算速度だと思う。まだまだこの域には至らない。
「……私もつきっきりで勉強を教えるなんて事はできないし、いつか一人で勉強ができるようになってもらわないとね」
「一人でって……私にできるかなぁ」
「できるように、なるの。貴女なら……さやか。貴女にならきっと、いいえ、絶対にできるようになるわ」
　採点だけでドリルは閉じられてしまった。
　煤子さんは私の頭を撫でながら、ゆっくりと赤くなりつつある空を見上げている。
「……そうね、私が勉強が得意になるまでの話でもしてあげましょうか」
「煤子さんの話？」
「ええ。私も昔、勉強は苦手だったのよ」
「え？　うそお」
「本当よ。今のさやかくらい、頭が悪かったかも。色々と事情はあったにせよ……」
「煤子さんも馬鹿だったんですね！」

さすがにげんこつは飛んできた。

†　それは8月10日の出来事だった。

「……」

巴マミは憂鬱そうに食器を洗っている。

近頃なら鼻歌交じりにこなしていた日課だが、今日はその手付きも重い。

「マミ、元気が無いね。大丈夫かい？」

「キュゥべえ……ううん、元気が無いわけじゃあ、ないんだけどね」

「さやかのことかい？」

「……ええ、そう、なのかしら」

マミは今日、さやかが魔法少女として契約したことについて考えていた。

日常から非日常へと踏み出した後輩。その一歩目。

秘密を共有する気心の知れた仲間を待ち望んでいたのは本心だ。

「契約は彼女の意思次第だからね。本人に素質がある以上は、僕は断れないよ」

「……そういうものなのね。あまりそのことには、気にしてないんだけどね」

「そうなのかい」
「うん」
泡を洗い流し、シンクの鈍い光を見つめる。
「不安。なのかな、これ……」
「珍しく、僕にもわからない悩みを抱えているみたいだね」
「……美樹さんは、力を願ったと言っていた……」
「そうだね、さやか自身が言ったことだ」
さやかはあの後、自分の願い事を打ち明けた。
まどかに訊かれたから答えるんじゃないよ、とわざわざ前置きして。
内容はまさに〝力〟そのもの。
「……全てを守れるほどの力。それって、他人のためよね」
「使おうと思えば自分のためにもなるけれど、そうだろうね」
「……不安だわ」
他のための願い。それは美しいものだ。
マミも否定するつもりはない。魔法少女として生きるならば、いっそそんな矜持こそが最も強靭で、最後まで残り得るものだとも考えている。
しかし、それがよりにもよって力とは。

さやかはきっと、強い思いがあってこそ、そんな願いを叶えたのだろう。
だが強い一本の柱をも砕いてしまいかねない存在を、思い出さずにはいられない。

〝甘っちょろいんだよ、あんたは〟
〝あんた、いつか絶対に「折れ」ちまうな〟
〝「ここ」はくれてやる〟
〝だが「こっち」には来るんじゃねえぞ〟

「……美樹さん、信念が折れなければいいのだけれど」
「それは彼女の心次第だね……」

第二章　飛び火の呼び水
気持ち悪いほど穏やかね

目覚めが快適すぎる。

「……」

ぱっちり覚醒。眠気も何もない、完璧な覚醒だった。

それは、とても前日なかなか寝付けなかった私からは想像もできないほどの快調具合で。

起き抜けの頭で自分を〝魔法少女〟だと再認識するには、十分すぎる異変だった。

「うわぁ、こんなところでも強くなってんのかな、私」

ベッドから起き上がって、跳ねた髪を指で解かす。

強くなるってことは、朝にも強くってことなのかな。

それとも魔法少女だからなのかな。

マミさんはどうなんだろう？　個人差はあるのかな？　詳しく聞いてみたいものだ。

「魔法少女なら誰にでもできることなのか、私にしかできないことなのか……わからな

いしね」

契約した時、私の頭の中にソウルジェムという物の扱い方全てがインプットされた。

それらは漠然と、自分の手足を動かすような感覚で扱う術であって、当然のように操ることができる。

それ故に、感覚が他の魔法少女とどう違うのかがわからなかった。

「私には、マミさんが使ってたような銃は出せないし……リボンも出せないからなぁー」

装備でいえばサーベル、そしてマントだけだ。

ファッションではちょいと味気ないような気もするけど、ほかにも色々な事できるみたいだし、ひとまず良しとしておきたいところ。

「手探りだけど、結構楽しいかも」

いつかは壁にぶちあたるんだろうけど、今は楽しんでいよう。精神的にも、きっとそれが良い。

「んでユウカが泣きそうな顔して〝もうやめてよー〟ってさぁー」

「あはは、相変わらずだね」

「ユウカさんって面白い方ですよねぇ」

通学路を三人で歩く。一見変わらない日常だった。

いつものように登校し、いつものように校門前まで駄弁る。
けれど、私だけはいつもと違う存在だった。
今この場に三頭の熊がそれぞれ私たちに襲いかかってきても、私だけは確実に生き残るだろう。
突然の洪水がこの坂の上から流れてきても、私だけが助かるだろう。
だけど私の願いは、私だけが助かるためのものじゃあない。
たとえこの瞬間に何かが飛んで来ようとも、私は二人ともを守ってみせる！
全てを守るための力を！　今こそ！
「てぃひひ」
「うふふふっ」
まぁ、なんも来ないんですけどね！
「……」
と思っていた時期が私にもありました。
「あ……」
「あら、暁美さんですね」
前言撤回。坂の上にもうなんか来てました。

多分、場合によっちゃ落石や濁流や熊よりも怖いものが、通学路の先で待ち構えていた。

眉をの端を少し吊り上げて。

仁王立ちで。

……なんかいつもより怖くない？　気のせい？

『さやか、話があるわ』

気のせいじゃないんですね、はい。

その立ち振る舞いを見ただけでわかっておりましたとも、はい。

『……何の話よ。あんたの仏頂面に仁美が対処に困って慌ててるから、私たちがすれ違う前に終わらせてくれない？』

『難しいわね』

長い話ってことですか。

なんて言ってる間にも、私たちはほむらのすぐ近くまで歩いて来てしまった。

もはや無視して踵を返すことは不自然な距離だ。

「えっと……暁美さん……？」

「一緒に学校へ行きましょう。いいかしら」

「えっ」

なるほど、そう来ますか。
まぁ、クラスメイトだしね。とっても自然だ。
「おう、これからは毎日、一緒に通学だね！」
「！」
大胆に出たほむらだったけど、私のこの返し方は予想してなかったみたい。
結構顔に出るじゃないのよ～。

仁美は無愛想な転校生の積極的な一面に気を良くし、学校につくまでの間は何度もほむらに話しかけていた。
そのたびにすんでのところで話を華麗に逸らすほむらを横目に、まどかは淡々と、いつもより少し早めに歩いている。
ギクシャクはしていない。
けれど、まどかはまだ、ほむらに対して懐疑的な様子を見せている。
まあ、私もそうなんだけどね。
それでもほむらからは、悪っぽいオーラを感じないというか……。
同年代に使う言葉じゃないけど、庇護欲みたいなのを掻き立てられるというか。
時々見せるわざとらしくない隙なんかには、私も油断しちゃったり、なんかして。

まぁでも、これからほむらが話す内容を聞いて、全ての印象が変わっちゃうのかもしれないけど。

ほむらは病院での別れの際に、「敵ではない」と宣言した。
けれど、ますます言えないことが出てきてしまったとも言っていた。
私の頭でも、なかなかその答えは出ない。
今日、ほむらが打ち明けてくれるといいんだけど……。
あまり期待はしないでおきますか。

『素直にそのまま言うわ。美樹さやか、私に協力してほしい』
一時間目の授業の準備をしている忙しさに紛れ込ますように、ほむらのテレパシーは落ち着いたトーンで届いた。
ペンを親指の根元で四回転。
『何を？　聞くだけは聞くけど、見返りは必要よ？　私もなりたてとはいえ対等な魔法少女だしね』
『……これから数週間の間だけでもいい。魔女退治で協力関係を築いて欲しいの』
『ふんふん、そういう協力ね』

内心で身構えていたより、随分と普通な要求だった。
『手に入ったグリーフシードの分け前は、三分の二はあなたにあげる』
『多いね』
『それが見返りよ』
私の魔法少女としての強さを見込んでの頼みだろうか？
他に何か、裏でもあるのだろうか？　逆に怪しいからやめてほしいレートだ……。
契約にこぎつけるまでにマミさんから何度も釘は刺されていたから、魔法少女初心者を狙って、という詐欺紛いなことはないんだろうけど。
……けど答えは決まっている。迷うことでもない。
『……わかった、いいよ』
『成立ね』
『うん。まぁ、ほむらと話せる機会って欲しかったからね』
『……？』
わかっていない様子。けど、大事なことなんだよ。
『ほら、まどかも！』
『へ、へっ？』
『まどかもさ、ちょっとほむらとは距離を置いてるみたいだしさ』

『……』

『私は……彼女を一緒に連れて行くことには、反対だけれど』

互いに、自分のやりたいことを譲ることはない。

やらせないことを強要することもできない。

そうしていくうちに二人がどうにか打ち解けたらいいなと、私は思っている。

『でも、マミさんとも一緒になることもあるってのは忘れないでよ？』

『……彼女が、私を受け入れるとは考えにくいわ』

『そうなの』

『魔法少女の姿で会うのだって、難しいかもしれない……』

マミさんも随分……まぁ、キュゥべえにあんなことがあったんじゃ、仕方ないかもしれないけど。

これは、マミさんの方もちょっとなんとかしないと、話がややこしくなりそうだな。

昼休み辺りになんとか調整してみようか。

私が間に挟まってどうにかできるかな？

『わかった、マミさんに相談してみる』

『……何故そこまで？　私達は秘密裏の協定でも構わないのよ』

『堂々とできないことなんてしたくないもん。とにかくマミさんとも話してみる』

『……そう、わかったわ』
ほむらはマミさんが苦手な様子。
関係が悪化した？　どうなんだろう。気になるな。

授業に区切りがついて、お昼休み。
「ねえ、さやかちゃん……」
「ん？」
まどかがテレパシーを介さず、わざわざ私の服の袖を摘んで話しかけてきた。
教室の目立たない位置にそれとなく移動する。
「どうしたの？　まどか」
「……えっとね、その……」
視線はうろちょろ。ほむらを探しているのは、簡単にわかった。
「あの……ほむらちゃんと、仲良くね……？」
「ぷっ」
仲良くするのはやめてほしい、くらいの事を言われるかと思っていたけど、これはちょっと予想外。思わず少し噴き出してしまった。
「え、え、なんで？」

「い、いやぁ、だってちょっと、なんかそれ、私のお母さんか何かみたいじゃん」
「えー、そうかなぁ……なんだかその言い方はやだよ……」
「あっはっは……まぁ、大丈夫だからさ。安心してなって」
「喧嘩はしないでね？」
「わかってるってば。大丈夫だよ」
小さなまどかの頭をぽんと叩いて、私は教室を後にした。

誰にも頼らないつもりだったけど

問題はほむらにもある。
秘密があるのはわかった。それを教えてくれないのもわかった。
けどなんとなく、害意がないこともわかった。
最大の問題は、そんなほむらに疑いの眼差しでメンチを切って食ってかかるマミさんの方にも、まぁちょっとはあったりするわけで。
なんとかやんわり許せるくらいにまで、皆の仲を取り持ちたいところである。
せっかく魔法少女が集まっているんだから、魔女退治も協力しないと……とは、私の素人考えではないと思いたいものだ。

「あら？」
「どうも、マミさんこんにちはっす」
ガラス張りの向こう側にマミさんを確認すると、ほぼ同時に、マミさんもこちらに気付いた。

見覚えのない生徒が教室の近くに居ると、どうしても目立つんだよね。
「どうしたの？　話は……直接じゃなくても良いのに」
つまりはテレパシーだ。
「あはは。まだ挨拶してないですから、直接のが良いじゃないですか」
「ふふ、そうね。そういうの、忘れちゃいけないね」
やっぱり温厚で、感じの良い人だ。
包容力でいえば、この学校一かもしれない。胸とかそういうのも含めて。
「まぁ、ものは相談なんですけど」
「うん」
「同じ魔法少女同士、協力はするべきだと思うんです」
「そうね、もちろん最初から……」
「それはほむらも一緒に、っていうことなんですけど」
「それだと話は変わってくるわね」
温厚な顔つきのまま、話がまかり通るはずもなかった。
言うときは言う。マミさんの堅いブロックだ。
「というより美樹さん。貴女もあまり暁美さんに近づくべきではないわよ」
「？　何でですか？」

「あの人、まだ鹿目さんには魔法少女にならないようにって、強要しているんですもの」
「うーん……でも、願い事がない限りはむしろ良いんじゃないですか？」
「鹿目さんは自分を変えようと……」
「あはは、まどかは流されやすいですからねぇ……周りとか環境が変わると、自分もなんとかしなきゃって、焦っちゃうんですよ。そういう意味では、私もじっくり考えさせたほうがいいかなとは思ってて……」
　顔を傾げて〝そうなの？〟という顔をしてみせる。
　上級生とは思えない可愛らしさだ。あと一押し。
「まどかには、まぁ……ほむらが何を思っているのであれ、慎重にさせるのが一番かなって」
「……そうかしら」
「あ、そうだ。それに魔法少女が増えすぎると、グリーフシードの確保も大変なんじゃないですか？」
「……言われてみれば」
　よし、いける。なんとかいける気がする！
　私今がんばってるよ！
「……そうね、鹿目さんに勧めるのは時期尚早かもね……わかったわ、その点ではね」

よし！

「けれど。暁美さんと組むには、彼女の行動は怪しすぎるものがある」

「んー……まぁ、秘匿が好きですよね……」

「鹿目さんのことを抜きに考えても、キュゥべえを襲ったのは不可解よ。いつ、私たちに何をするかもわからないような人を……」

そこを聞かれると私も困る。私だってわからないのだ。

なので、適当にでっちあげることにする。

「うーん……キュゥべえを襲ったのはまどかに契約させたくなかったからじゃないですか？」

「……そこまでするのかしら」

「ん、ん。それだけまどかが大切な人なんじゃないですかね」

「……」

まどかに対して少々過保護なところがある……その予感は間違いないかもしれない。

「転校の初日にも、まどかに対して明らかに敵意ってわけでもないような視線を向けていたし……」

――どうして!?さやからしくない！

――どうして貴女は、私が知ってる美樹さやかじゃないの！
――何が貴女をそうさせたの!?

――私のことは、〝煤子（すすこ）〟と呼んで、美樹さやか

「……まどかの事、昔から知ってたのかも」
どうして今、あの人のことを思い出したんだろう。
「昔から知っていた、かぁ……」
ほむらの行動を思い出しているのか、マミさんはしばらく宙の埃を目で追った。
そこに何かを見つけたように表情は思考を取り戻し、自信ありげな笑みを私に向ける。
「共闘、いいかもね」
「え！」
まさかの快諾。思わず驚きの声をあげても仕方ない。
「良いんですか、って聞くと〝ダメ〟って言われた時が怖いから、ありがとうございます！　って言わせてもらいます！」
「ふふ、大丈夫。私もちゃんと考えがあってのことだから」

「考え……」
「少なくとも美樹さんと私は仲間同士だし、暁美さんが変な動きをするようならすぐに対処できるわ」
「確かに……」
最悪な想像、あらゆる不意打ちにも対処できるほど隙を見せなければだけど…。
ほむらがどんな魔法少女かもわからないし……。
まぁでも、マミさんにほむらをいつでもなんとかできる自信があるのなら良かった。
私は、ほむらは何もしないと信じている。
マミさんの自信に甘えちゃおう。
かくして、私とマミさんとほむらの三人で、見滝原魔法少女連合が結成されたのである。
あ、連合じゃ暴走族っぽいかな。見滝原魔法少女チーム……かな？　微妙だ。

表の世界はつつながく回り、裏の世界はべったり張り付いている。
表裏一体、どちらも同じだ。
どちらかがなければ、なんてことはありえない。
自分にとって、今まで馴染みがなくても、表裏があるこの世界こそ真実なのだ。

私は真実を受け入れて愛する。誰だってそうやって進んでいくものじゃない。
「だからまどか。魔女がいなければー、って安易に考えるのは良くないことなわけですよ」
「うーん、そうなのかなぁ……」
「あるものを無いと言うのは、ナンセンス！　受け止めがたいことでも、ちゃんと受けとめる胸がないとねー」
「そ、そんな酷い言い方ないよ、あんまりだよ！」
「あっはっは！」
私とまどかは屋上でお弁当を食べていた。
魔法少女の話をするためには仕方が無い。二人だけの秘密だ。
「きゅぷ、きゅぷっ」
「はいはい、キュウべえにはプチトマトをあげような～」
「トマト……」
「遠慮するでなぁい」
「ちょそんな強引にぎゅぶぶ」
……失礼。
私とまどか、そしてキュウべえ三人だけの秘密の場所だ。

と落ち着こうとしたところで、秘密の屋上の扉が開かれた。

「……」

ほむらだ。もう一人追加である。

「あ……ほむらちゃん」

「おっす、ほむら！　こっち、ちょっと狭いけど来なよ！」

三人と一匹だけの特別な場所。

ほむらの目つきは未だに疑うような凄みがあるけど、これをやわやわと解していくのが私の役目だ。

マミさんとほむらの緩やかな和解。

それにはまず、自称中継役である私自身が、ほむらとの友好を築かなくてはならない！

「ねえ……私はここに居ても大丈夫なの」

「大丈夫なの、って？」

「巴マミのことよ」

視線はこちらのまま動かさないほむらの意識が、私とは別の方向に向いていることを悟った。

ここではない。彼女は隣の棟を横目で見る。

「……」

そこにはマミさんがいた。

柵に片手をやり、ソウルジェムを持つわけでもなく、ただこちらを見ているようだった。

その表情には自信も不安もない、無表情そのもの。

ただ冷静に、事態の行く末を見つめる人間の目だ。

「大丈夫……まあ、マミさんはまだちょっとはほむらの事を警戒してたりするんだけど……」

「駄目じゃない」

「ちゃんと話し合ったから大丈夫！　いや、本当に！　見られるのはそりゃあ、ちょっと気分悪いかもしれないけど、初回サービスってことでどうかひとつ！」

「訳がわからないよ、さやか」

マミさんの疑いの目は仕方が無いものの、ひとまず私たちは、魔法少女の仲間として交流することになった。

交流とは？

そりゃもう、まずはランチからですよ。

「はい、あーん」

「……何よそれ」
「わー、すごい……けどさやかちゃん、なにこれ？」
「白身と黄身を反転させたゆで卵！今朝作ったんだ」
「……」
ほむらの目が冷めてる。何故だ。
「大きな黄身みたいだね……」
「あ！　やり方は教えらんないんだなーこれが！　結構コツいるしねー」
しかし冷めた目で私を見ることも多いけれど、ほむらもここに居ることを悪くは思っていないようだ。
サバサバした物言いをするけど、なんとかコミュニケーションを取ってくれている辺り、ほむらは心底私を鬱陶しく思っているわけではないらしい。
それに……。
「……まどか、口元」
「え？」
「みっともないわね」
「あっ。ありがと……」
まどかの口元についた食べかすを、ほむらが母親のように優しく取り上げる。

そう、まどかだ。

ほむらはまどかに対してもドライな口調で当たっているが、私よりもどこか、いや絶対に柔らかいものがあるのだ。

昔にまどかと知り合いだった説。これはひょっとすればひょっとして、有力なものなのかもしれない。

……これから付き合っていく中で、ほむらの過去も気兼ねなく聞けるようになるかもしれない。

命を賭けて願いを叶えた、魔法少女の過去。

そこへ踏み込むのは慎重でなくてはいけない。

私の癖、軽率な発言には気をつけよう……。

「……」

そしてマミさん、そんな妬むような激しい視線を送るくらいなら、こっちきて一緒に食べたらどうですか。

食事はまどかが緊張気味だったけれど、後から雰囲気もほぐれてきた……気がした。

ほむらの口数は少なかったけれど、時折見せるまどかを気にする風な仕草は母性的だった。

ベンチ下のキュゥべえが近くに来るたびに足蹴にしようと座り方をわざとらしく変えていたけれど、あれはもうよほど嫌いなんだろうな。

まぁ、今日はマミさんには気付かれていないようで印象としては悪くはなかったはずだ。

けど、それを見守る私の心臓に悪いので、次からはやめてほしい……。

「ありがとうさやか。これで暁美ほむらも、大人しくなってくれればいいんだけど」

「いやいや、あれ以上大人しくなられても困るのよー」

まどかとも別れた私は、帰路でキュゥべえと一緒に帰っている。

帰ったら荷物を置いてから、すぐに魔女退治へ乗り出すつもりだ。

マミさんとほむらとも連絡は通してあるので、遅れるわけにはいかない。

まどかはマミさんと一緒に来るそうだ。まぁ確かに、マミさんの部屋に荷物を預けてからの方が、楽ではあるかな。

けれど私までマミさんと一緒に行動してしまったら、ほむらを派閥の外に置いているような構図になってしまう。

となると、ほむらばかりではない、内輪にいる私達でさえも、三対一の〝壁〟を作ってしまうかもしれない。

私もソロ帰宅することは、わりと重要だったりするわけです。

「はーあ。人間関係で悩むなんて、ほんと久しぶりだわ」
夕焼けになりかかった空を見上げる。
精神的にちょっと疲れる。けど、やることがあるのってどこか楽しい。
「ふふ、今日もがんばろっと」
鉄塔に重なりかかった太陽をちらりと見て、私は急ぎ足で自宅を目指した。

鉄塔の上で魔法少女が街を見下ろす。
オレンジの太陽を背に、翳りつつある見滝原。
その街には、かつて彼女と一緒にチームを組んでいた巴マミがいる。
二度とはここへ現れないつもりでいた彼女だったが、最近はどうしても気になることがあったのだ。
「昨晩はずっと探していたが、やっぱり魔女でも使い魔でもねぇ……」
リンゴの芯を吹き捨てる。くるくる回る芯は、鉄塔の真下で見えなくなった。
「てなると、有り得るのは魔法少女だけだろうな」
首元のアンクに口づけ、犬歯を見せ付けるように笑った。
そのままアンクを髪留めに髪を縛り、立ち上がる。

「さぁて。どんなつえー奴がいるのか……お手並み拝見といこうかね」

シスターのヴェールをはためかせ、魔法少女は鉄塔を飛び降りた。

案外、受け入れてもらえるのかも

「……」
　先頭を歩くのはほむら。
「……」
　すぐ後ろにマミさん。
「今日もまた遅くなるって連絡入れないと……」
「あー、だったら早めの方がいいよ。あたしんちも最近それで良く言われちゃうからさー」
「だよね……」
　そのまた後ろには私たちがいる。
　マミさん曰く、何をしでかすかわからないほむらを前に置き、それをマミさんが見張りつつも、私とまどかは後方で構える。これが現状では一番なのだという。
　いや、普通は剣を持ってる私が前にいるべきなんだけどね……ちょっとほむらを警戒しすぎなんじゃないですかね？

まぁでも、一応ほむらの腕にある武器は盾のようだし？
最初にほむらが防いで、後ろから私たちが……っていう考え方ができなくもない……かな？　いや、どう考えても強引な理屈なんだけどね。
そんな屁理屈に納得をしたのかは知らないけど、マミさんが出した布陣の条件を、ほむらはあっさりと飲んだのである。

四人組とはいえ、我々はかよわい中学生の少女達だ。
夜ともなれば、さぞ無防備に映ることだろう。
男達からのナンパは面倒臭いし、警察に補導されたくもない。びっくりするよね、中学の制服着ててもナンパされるんだもん。正気かよって話だわ。
だから普通はそういう物騒な場所は避けるべきだ。
けど魔法少女の役柄として繁華街も立派なパトロール地域。
なるべく人通りの少ない道を選ぶとはいえ、目立つといえば目立つ。
長く続けていくなら、世間体も気にする必要はあるかもしれない。

私たちは歩き出してすぐに魔女の微弱な反応を察知し、標的をより詳細に探すことになった。

まずは街中を歩こうとマミさんや私が提案して、この流れで街中散策とな……るかと思ったのだけど、ほむらはきっぱり、静かに反対した。

「工場地帯へ行くわよ」

そう真正面から毅然と反対する意図が私たちには理解できず、少しの間ぽかんと口を開いたままだった。

「あのね暁美さん……」

「あたりをつけるならどこを探しても同じ。私が先頭を行くのだから、舵取りまで任せてほしいわ」

だがそれは先頭を歩かされるほむらの、全く正しい主張だ。

どうせ探す方向は最初こそ当てずっぽうになってしまうのだ。こう言われては、マミさんも渋々と了承するしかなかった。

もっと仲良くして欲しいのに……まぁでも、ほむらも主導権をマミさんに握らせたくはないんだろうな……。

そう。私はこれを、ほむらの仕返しだと考えていたのだけども。

そんな半分彼女を疑うような私の考えは、すぐに間違いであると気付かされることになる。

「……反応が」
ほむらの提案するルートを歩いてすぐに、マミさんのソウルジェムが目立った明滅を始めたのだ。
「これって、どんどん近くなってるの？」
「みたいね。あたしのも反応してる」
ほむらはソウルジェムを左手に持ってはいるが、その光を見ようともしていない。
最初から魔女の居場所がわかっているかのように、彼女は工場地帯へ歩き続けている。
歩き進むごとに、人の気配は少なくなる。
反対に、ソウルジェムの輝きは強くなる。

人気のない夕時の工場群は、どこかノスタルジックにさせる情景だった。
私はこんな時間にこんな場所にまで来たことはない。
十四歳にもなって初めて見る、親しみきれていなかった新鮮な見滝原の顔だった。
「……近いわね」
「弱そうな魔女だわ。急ぎましょう」
「そんなことまでわかるの？」

「大体ね」
「……」
マミさんの背中を見ればわかる。ちょっと悔しそうな顔をしてるに違いない。
「マミさん。ソウルジェムの光で使い魔か魔女かを判別できるんですか？」
こもった空気を換気しようと訊いてみた。
「そうね……感覚的なことだから言葉じゃ良い難いんだけど、出会ってみれば美樹さんにもわかると思うわよ」
「感覚かー」
なんとも感覚で覚えることの多い世界だ。
マミさんのように親切に教えてくれる先輩がいなければ、この魔法少女という仕事、随分最初に辛い思いをしそうである……。
……まどかは特に危なっかしい。私も釘は刺しておこう……。
「この中よ」
「！」
話している間に、寂しげな工場の前に到着した。
辺りに人はいない。
「さて……まだ、誘い込まれた人はいないようね」

「ちょ、ちょっとほむらちゃん……」

ほむらは先導らしく、堂々ずかずかと暗い工場の中へ踏み込んでゆく。

広い……整備工場だろうか。工具のようなものもあれば、大きな機械のようなものがある。ああ、自動車整備工場か。

そこを通り過ぎ倉庫らしき部屋に踏み込むと、埃臭そうな灰色の壁の上に結界の紋章が大人しく発光していた。

不吉な結界を背に、ほむらは私たちへ向き返る。

「さあ、倒すなら今のうち。けどまだ時間に余裕はある……ここでも、私が先陣を行くべきなのかしら」

制服のポケットに両手を突っ込み、片足に体重をかけ、感情の無い目はマミさんを射止める。

「さやかの言う共闘ならば私としては本望よ……だけど、私だってまだ完全にあなたを信用できないわ。特に巴マミ」

「！」

「正直に告白すると、私は貴女の銃が怖い……後ろに立たれ、絶えず後頭部に視線を受けるのも不本意よ。張り付かれる感触は好きではないわ……」

そこで初めて、ほむらが結界を背にする理由がわかった。

「……ここから共闘する以上、疑いっこ無しで、か」
「ええ。いつまでもこんなことを続けていたくはない……それは貴方達だってそうでしょう？」
「まあね」
私としてはもっと早い段階から仲良く共闘したかったんだけどね。うん。
「一つどうかしら、私は……魔女を探す能力に長けている。そこを買って、私を平等な仲間として扱って欲しいのだけれど……」
この結界の先から、より一歩踏み込んだ共闘を結び直そうということだ。
ほとんどマミさんだけに向けられたほむらの言葉である。
当のマミさん自身はというと、ちらりとキュゥべえを見て少し悩む素振りを見せた。
「駄目？」
それはほむらの毅然とした態度、そしてキメの一言なんだけど、頭を傾けながらの言い方は不覚にもちょっと可愛かった。
少し噴いちゃったのはナイショだ。
「……確かに、ここに来るまでのあなたの歩みには無駄も迷いもなかったわ……」
可愛げのある言い方も、マミさんには伝わっていないらしい。
神妙な顔つきで、差し出された条件を吟味しているようだ。

結局、ほむらの言い方にツボっていたのは私だけで、そう考えると途端に冷静になれた。

「いいわ、飲んであげる……けどこれは、貴女のことを〝魔女退治で使えるから〟という理由で引き入れるわけじゃない。自分の能力のひとつを私たちに見せた、その真摯さを汲み取ってのことだから……決して気を悪くしないで」

マミさんが大人の微笑を向けると、ほむらも口元をわずかに釣り上げた。

「気にしないわ……まだ私にも隠し事はある。その上で付き合ってもらえるなら」

「少しは大目に見ましょう」

二人は握手した。

するとマミさんの微笑みは〝ぱあっ〟と花のように咲いて、身にまとう緊張感すらも解けたように見えた。

「ふふ……いつまでもピリピリするの、私も好きじゃないから」

「へへ」

私が考えているよりも、マミさんはずっとずっと、大人だった。

私は彼女のことを心のどこかで、融通の利かない人だと思い込んでいたんだろう。まずはそれを恥じて、心の中で詫びよう。

やっぱり上級生は違うや。

「さ！　それじゃあ早速、結界の中に入ろう！　まどかは私の後ろに……」
「まどかは私が守るわ。後ろについていなさい」
「えっ？　あ、はいっ」
「……よーし、さやかちゃん先陣切っちゃうぞぉ～」
そんなこんなで、うん。
とにかく良し！

ここの魔女ならどうにでもなるでしょう

私たち魔法少女は、ほぼ横一列になって結界へ飛び込んだ。
結界の中は薄い青色に染まった空間で、いつも見慣れた雑多なものとは違い、ある程度整えられたものであることを窺わせる。
というよりはそれは錯覚で、整っていると感じたのは単に結界の中に通路が無い、広い一つの空間でしかなかったためであった。
「わ、わ、」
「大丈夫よ。私に掴まっていなさい」
「……うんっ。ありがとう、ほむらちゃん……」
結界の中は重力が弱いらしく、身体はゆっくりと降下していく。
着地までにはまだもう少しかかるだろう。
「二人とも、あまり身を任せすぎるのも得策ではないみたいよ」
が、マミさんは空間を縦横無尽に飛んでいた。
プールの中より滑らかで、空中よりもより自在に。その姿はまるで空中を泳いでいる

かのよう。
「この結界の空中は、足に魔力を込めれば簡単に移動ができるみたい」
ふわふわとスカートの裾を踊らせると、マミさんは満足したように私たちと同じ高さまで戻ってきた。
何度もパンツが見えてありがたかった。
さて、私も少し練習してみるか。
「おっ……おおーっ、ほんとだ、動けますねこれ」
私の身体も、空中の見えない壁を蹴るようにして宙を飛び回ることができるようだった。なんだろうか、この感覚……足裏の推進力……未知だ。言う慣ればアイアンマン？
人間の身体能力だと厳しそうだ。
「……」
「……？　さやかちゃん？」
その感覚がどうも癖になり、ついついアクロバティックな動きをしてしまいたくなる。
だん、だん、だんと宙を蹴る連続三角飛びだ。
「ぶ、ぶつかるよ！　危ないよさやかちゃん！」
宙返り。ターン。スピンなんでもできる。理想的な機動だ。まるでゲームみたい！

けど覚えておかないと、戦闘中は大変かもしれない。もっともっと、この動きに慣れておかないと……。

「こーらっ」

「ぐぇー」

しばらく遊んでいたら、マミさんのリボンで強制的にひっぱられるハメになりました。

「何もない……？」

「まどか、私の近くに」

「う、うん」

結界の床に降り立つと、そこは何も無かった。

使い魔の姿もなければ、魔女の姿も無い。

ただ強い魔女反応だけが、ソウルジェムに存在するばかり。

「何もないということは有り得ないわ。魔女はどこかに姿を隠しているはずよ」

「巴マミの言う通り……目で見えるものだけが全てじゃない。音も匂いもソウルジェムの反応も、全てを利用して敵の居場所を探るのよ」

「なるほど……」

全てを利用して居場所を探る……煤子さんも似たようなことを教えてくれてたな。

――〝何故〟と考えることは大切よ

――〝何故〟という問いかけが、全ての謎を解くのだから

何故……魔女も使い魔もいないのか。

普通は結界に入れば、それを察知した魔女が現れて殺しにくるはずだ。

例外もいるかもしれない。けど、無反応なんてことはなかったはず。

何故そうしない？　どうして何もせずに、ここに隠れている？

魔法少女がここに三人もいて、気付かないわけが……。

いや。

「……そうか」

「？」

そう、魔法少女が三人、一般人が一人。

四人もの人間が結界に侵入して、気付かない魔女なんかいるはずない。

さっきまで騒がしく浮かれていたのだ。空間は見たところ、この大部屋一つのみ。これで気づかないなんてことあるわけがない。

魔女は隠れているんだ。魔女は……私達、三人の魔法少女に怯えている！
「魔女が周りの景色に溶け込んで、隠れているかも。みんな辺りを警戒して！」
「！」
姿が見えない魔女だとしたら厄介なことこの上ないが、だとしたら攻撃を仕掛けない理由が無い。
敵は〝姿が見えて〟しかも〝周りに隠れている〟魔女だ。
「居たわ、こっち！」
ほむらの張り詰めた声に誘われて私は真後ろを、マミさんは真横へ振り向く。
ほむらが指で示した先には、揺れ動き続ける風景の中にひとつだけ存在する、翼の生えた奇妙なモニターが見えた。
『……！』
一同の視線に気付き、流れるような動きを止めてしまったのが奴の敗因となるだろう。

H・N・Ｅｌｌｙ（ｋｉｒｓｔｅｎ）
ハコの魔女キルステン

魔女は翼を広げ、画面をこちらに向けてノイズを響かせた。
モニターが奇妙な映像を見せると共に、結界内の様相も掌を返すように一変する。
「まどか、気をつけて。使い魔が来る」
「う、うん！」
風景のメリーゴーランドが加速する。
紛れるモニターの魔女の画面からは無数の何者かが飛び出し、それらは結界の上から緩やかに降りてきた。
「周りを遊覧しながら使い魔を撒き散らすなんてね……！」
「マミさん、魔女を狙いましょう！」
「そうね、使い魔ばかりでは埒もあかないわ。本体を」
私は剣で、マミさんは銃だ。
近づいてくる使い魔をどちらで倒し、魔女を倒すか。
「まどかは私が守る。二人は使い魔と魔女を」
「おっ」
どうしたものか悩んでいたところに、戦力の計算に悩んでいたほむらから直々の提案。
守らなくてはならないまどかと一緒にいてくれるのであれば、心強い。

「任せていいのね？」
「あなた達が使い魔を全て討ち損じて、そいつらがこっちへ押し寄せてきたとしても何ら問題ないわ」
挑戦的な言葉を真顔で言うものだから、マミさんは〝やってやるわよ〟という勢いで、その重要な役割をほむらに任せた。
つまり。
「いくわよ！　美樹さん！」
「はい！」
私とマミさんでの、ペアによる戦いだ。
まどかの表情に明らかな不安が無いことを確認する。じゃあそっちはほむらに任せよう。
よし……じゃあいっちょ、やりますか。
私とマミさんは地面を蹴り、更に一段上の空を蹴り、そしてどんどん結界を昇ってゆく。
使い魔が近づくにつれて私たちは二手に別れ、結界の側面に潜む魔女を探し始めた。
同時に、群がりやってくる使い魔を迎え撃つ。
『きひひひ』

「うわ！　可愛くない！」
　不気味な笑顔を向ける使い魔が目の前に三匹。
　横一列をなぞる様に、剣で一閃。
『きヒィ……』
　特に手応えもなく使い魔は消滅した。柔らかいな。
「はあっ！」
　マミさんの銃弾も狂い無く命中し、私たちから離れた位置にいる使い魔も撃墜されてゆく。防御力はほぼ無し。
　そんな分析をしている最中、下から轟音が聞こえてきた。
「うわっ！」
「!?」
　マスケット銃ではない、もっと粗野な爆音だ。
　音は同時に、私の視界の隅で浮いていた使い魔の胴体をガラスのように砕き千切っていた。
「今のって……そうか、ほむらの」
「わ、わぁ……それ、本物……？」
「少し耳を塞いでいた方がいいかもしれないわよ、まどか」

結界の地上では、ほむらがスナイパーライフルをこちらに向けて、銃口から白煙を垂れていた。
随分と物理的というか、現代的な武器に、私の顔はちょっとだけ引き攣った。
魔法少女ってホント、なんでもありなのかい……。
まあ、攻撃方法に対するツッコミはともかくとして……。
下からは取りこぼしや見逃しをほむらが撃ってくれる。
ということになれば、私たちは大まかに使い魔を蹴散らしながら魔女を探すのみだ。
「ふふ、ずっと逃げてもいられなくしましょうか?」
「マミさん、何か作戦が?」
「見てて?」
マミさんの首もとのリボンがするりと抜ける。
リボンは宙で上向きに振られると、ごく自然に、靡くようにして天へと伸びていった。
「おおー……」
リボンはどこまでも伸びてゆく。
それはしゅるしゅると夜空に上がる花火の光のようでもあった。
そして次の瞬間、それは本当に花火となった。
結界の高くにまで昇ったリボンの柱は、黄色い輝きを放って弾けた。

枝分かれした無数の黄色の帯が咲き乱れ、結界内を縦横無尽に駆け巡る。
『きひ』
『きひひっ？』
空間を埋めるほどのリボンに、ゆるやかな弧を描きながら飛んでいた使い魔の天使たちの動きは封じられていた。
連中の機動力は格段に落ちたに違いない。
「ナイスですマミさん！　これで相手は時間稼ぎもできないはず……！」
「本体を探しましょう！」
空間の壁際を走り、螺旋階段のように駆け上る。
結界の端にいる使い魔をすれ違い際に斬り捨て、じわじわと魔女を追い詰めるのだ。
魔女を倒せば結界は消える。その時に使い魔が残っていたら、使い魔はどうなるか？
ボスを倒して雑魚敵が消えるシステムだったらうれしいけれど、そんな都合の良いシステムである予感は、なんとなくしないのだ。
油断はできない。だから私は使い魔も可能な限り倒すことにした。
「――」
『き』
人形の微笑がこちらに振り向く頃には、既に私のサーベルのガードは、使い魔の首も

とに触れている。
ガードは滑り、剣の根元が人形の細い首に僅かに食い込む。
『ヒャ』
私は使い魔の真横を駆け抜け、次なる標的のもとへ再び駆け出す。
その勢いだけで、人形の首を〝ぱらり〟と削ぎ落とすには十分だった。
『……!』
「おっ、出たなモニター」
結界の端で、ようやく本体の魔女を見つけ出した。
なるほど。天使の使い魔は、奴の画面から飛び出しているらしかった。
敵を構成するものは腕っぽい翼、モニターっぽい箱。
そのくらいだった。他に何かついていることはない。
が、その正面にあるモニターこそ、私には厄介に感じた。
そこからは使い魔が飛び出し、こちらに襲い掛かってくるのだ。
画面から飛び出るのは使い魔だけとは限らない。もっと恐ろしいものを出してくる可能性だってある。
モニターを最大限に警戒して、まずは両腕を斬り落とすか。
「よし。そうしよう」

私は魔女の画面を正面に見据えないよう空中を左右に飛び、魔女に接近する。
幸い魔女は素早くないようで、その背後を取ることは使い魔を相手にするように容易かった。
「はぁ！」
『ぴぎっ！』
袈裟を真っ二つにするような大振りで腕の一本を刎ねると、到底液晶漏れとは思えないほど真っ赤な液体が噴出し、魔女はノイズをあげて呻いた。
もう一度機会をうかがうまでもない、そのままもう片方もイける！
これは油断でも慢心でもなかった。
私にはその自信があったし、いざとなればどんな反撃からも身を守ることはできた。
だから私は、半回転してこちらに砂嵐を向ける魔女のもう一本の腕を標的に、もう一度強くサーベルの柄を握ろうとしたのだ。
『――……！』
その時、魔女は反撃に出た。
砂嵐から一本の刃が、とんでもない速さで私を狙い、まっすぐ飛んできたのである。
「ふっ……！」
気前良く振るうはずだったサーベルのガードで、私に飛び込んでくる刃の軌道を逸ら

す。
金色のハンドガードが紫色の魔力の火花を散らしながら、刃を受け流していく。その一撃は、重かった。しかし、それだけ。
「甘いっての！」
攻撃を受け流した私のサーベルは、そのまま魔女のモニターの半分を切り裂いた。
『ぎ、ギギギ……』
腕、モニター。致命傷を二つも与えた。
が、それでも魔女はまだ、動きを見せる。
ずぶりと嫌な音を立てて刃はモニター内部へと戻ってゆく。
そして再び別の場所から、刃はこちらへ伸びてきた。
「くどいよ」
同じくハンドガードで逸らし、返しの刃を残った腕にくれてやる。
魔女の両翼だか両腕だかは二本共に切断された。
もはやただの旧型テレビ。叩いて直らない分、それよりも脆いのかもしれない。
が、再び飛び出した刃はモニターの中へと引っ込む。
まだ何かを仕掛けるつもりか？
と私は疑ったが、その前にやっと、違和感に気付いた。

「ん？」
刃を突き出したモニターには、穴が開いている。
内側から破壊したような穴が、二つも。
いや、まて、この穴は。さっきの刃は。
……魔女の攻撃によるものじゃあ、ない!?
「あらよっとぉ」
「うっ!?」
モニターが上下に分裂した。
いや、語弊も良いところか。〝上下に切り裂かれた〟。
真っ二つに切られたモニターの中からは、先ほど突き出されたものと同じ刃を携える人影が現れる。
「ニュー・チャレンジャーは向こう側から、ってなぁ！」
私がその詳細な姿を認識する前に、単純なモニター越しの攻撃など目ではない連打が、こちらに襲い掛かる。
「はっ、ほらッ！」
「ぐっ……なにっ」
最初の二発の攻撃を剣で逸らして、その相手が紅い装束のシスターであることに気が

付いた。

「ほー、やるじゃん」

「……ッ！」

次の目にも留まらぬ六発の攻撃を剣とハンドガードでなんとか受けきった時、そこでようやく、敵の使う武器が〝槍〟であることに気付いた。

こいつは魔女じゃない。

目の前にいるこの女は……魔法少女。人間だ！

何故ここに？　いえ、それよりも

魔女が息絶えたせいか、魔力を使った空中機動が機能を失った。
あるのは弱い重力のみ。それが、今の私を苦境に追い込んでいる。
「お？　結構防ぐじゃん」
「くっ……」
槍と剣の空中戦は一方的だった。
メタメタに斬り崩されたモニター魔女の落下と並び、私と紅いシスターの攻防戦が繰り広げられる。
だが位置的な上を取るそいつの武器のリーチは長く、こちらは短い。
単純な長さの優劣で、私は地上へと押し込まれつつあった。
一瞬たりとも気を抜けない……！
唸るように振るわれ続ける刃つきの槍は、私に宙を蹴らせる暇など与えない。
周囲に張り巡らされたマミさんのリボンすら器用に断ち切り、周囲のものを利用させようともしない。

このまま愚直に逃げようと単調な動きを見せれば、その瞬間に餌食になることは明白だった。

かといって、近づいて斬りつけることが叶うかといえば、それも有り得ない。

今の間合いは完全に〝槍〟の間合いだ。

私の剣は近づくことはおろか、完全に捌ききることさえできていなかった。

だから私は、あえて距離を取ることを選んだ。

「ふッ！」

「！」

まっすぐこちらに押し込んできた槍の切っ先を利用する。

相手の動きを読んで、こちらも同時にサーベルの先を突き出すのだ。私は相手のその動きを待っていた。

反撃手段の一切無い相手への攻撃に、自身の心配をする必要は無い。だからこそ油断し、大振りの一撃を繰り出してしまう。

それ自体、危険に直結する悪手などではないだけに、敵も〝しまった〟と思っただろう。

私だって相手がこんなことをしてくるなんて想像できない。

そう、鋭い刃と刃の先端を衝突させるように、カウンターを仕掛けてくるなど。

魔法少女だからこそできる芸当だ。
「やりやがる。いいじゃねえかオイ」
刃の先端を衝突させた私の身体は、大きく敵から距離を取る。
剣と槍の最大リーチの分だけ、私は紅いシスターから逃げることに成功した。
もはや槍も届かなくなった間合いを空けての自由落下は体感時間も早い。
着地後は素早く後転し、私は剣を構え直した。
「見ない顔だね、アンタ」
槍が深々と床に突き刺さり、その柄の上に紅いシスターが着地した。
口元から覗く不吉な八重歯は白く輝いている。
「落下中でも、剣を投げてりゃ届いたじゃん？」
「戦闘中に武器を手放す馬鹿がどこにいるのさ」
「武器って考え方に凝り固まりすぎなんだ……よッ」
シスターは槍の柄を思いっきり蹴り飛ばし、槍が高速で回転しながら私に襲い掛かってくる。
上から襲い掛かる回転武器。上段での防御をしてもよかった。
だが相手は〝マトモ〟じゃない。
「らぁッ！」

「！」

剣での防御はしない。姿勢を低くして〝下段から近づく〟シスターに、私も同じようにして剣を投擲した。

間合いの中央で交錯する槍と剣。

二つは交わらず、お互いの持ち主の敵へと襲い掛かる。

「ほっ」

「ふん」

そして二人同時に、投げられた武器を叩き落とす。

掴み、利用することなどはしない。敵の武器は〝武器〟ではないと知っているからだ。それが魔法少女であるならばなおのこと。

「こいつ……」

「この野郎……」

私の直感が囁いている。

こいつは私に〝似ている〟と。

「……くはっ」

シスターはしばらく私を睨んでいたが、その後ろに面白いものでも見つけたのか、笑った。

「……構えてから結局、一発も撃ててないじゃん。なあ、マミ」
紅いシスターの視線の先には、マスケット銃を構えるマミさんがいた。
顔は強張り、引き金にかけた指も……動いていない。いつからそうして構えていたのか、私にはわからない。
このシスターが……マミさんとどのような関わりがあるのかということも。
「……どうしてここにいるの。答えて……佐倉さん」
「どうして？　そうだなぁ……〝強い奴がいるっぽいから来た〟じゃダメか？」
「！」
「そこで引き金を引けないアンタは〝強くない〟……だから甘っちょろいんだ。さあ、外野は引っ込んでいな」
マミさんは歯噛みし、佐倉と呼ばれたシスターから視線を外す。
敵から目を離すことは、戦う意志を放棄するに等しい。
であると同時に、その様子を見て何ら興味を示さないシスターの女にも、マミさんと戦う意志は無いらしかった。
つまり、今も奴がぴりぴりと向けている闘志は、ただ一人私へのものだった。
「私の名は〝杏子〟だ。あんたは」
「〝さやか〟」

名前だけには名前だけを。

「さやか、ね……面白い……」

シスターはヴェールの裾を左手で払い、その手に一本の槍を握った。

両手で振り回し、こちらに刃先を構える。

「来なよ。構えるまではフェアでいてやる」

「構えたら？　卑怯な手でも使うつもり？」

私は警戒も何もせずに、黙って手の中に新たなサーベルを出現させた。

同時にシスター魔法少女、杏子は飛び掛る。

「〝一方的な戦いが始まる〟ってことだよ！　シロートがァ！」

「！」

勢いに任せたチンピラとやりあったことが私にはある。

体力や筋力に任せて大ぶりしてくる相手は派手だけど、御しやすい。

がしかし、目の前でさながら弱い悪党の如く飛び掛ってくる魔法少女には、それと同じガラガラの〝隙〟が無い！

「らァ！」

「くっ」

相手は槍のリーチの力をよくわかっている。そう、長物は確実に刃が先に届くのだ。
相手がリーチを把握している以上、こちらは絶対に〝受け〟に回るしかない。
壮絶な技巧に、かつて他流試合で手合わせした強い薙刀使いを思い出すけど、いや、こいつはそれ以上だ。
嵐のような槍の軌道に、私の剣は相手の一連の攻撃だけで五回も弾かれた。
それだけでも私の手は痺れたが、その次に来る攻撃こそ最も恐ろしいものだった。
「――――」
「！」
ヴェールの奥の眼差しが途端に冷めたのを感じた。
地に着いたシスターのブーツに嫌な予感を覚える。
私は咄嗟に剣を自分の正眼へ戻し、〝いつもの〟構えへと切り替えた。
それは私の自然体。守りに徹するわけではないが、あらゆる状況に応じる準備がある防御寄りの構え。
中学の剣道でさえ一度も咄嗟に作ろうとはしなかったが、本能的に取ったそれは結果として正解だった。
剣の流れは、言葉で考えるのではない。言葉にすれば遅くて負ける。

培ってきた感覚か、数字で表すのだ。
感覚は同じタイプの相手と戦うことでパターンとして無意識に覚えることができ、無意識に対処できる。
しかし違うパターンは？
私はそれを記号で覚えた。
位置、高さ、方向、振り方、全てが記号になる。全てを記号とすることで、動きへ繋ぐ無意識な言葉の指令を最短のものへと変える。
他に応用できないこの記号の概念は、私だけが持つ暗号だ。
「！」
空中の時には五発だった槍の攻撃の嵐も、地面に脚をつけたときには一気に手数が倍に膨れ上がっていた。
油断をすれば初撃だけでも胴体に風穴が二つは空くほどの加速だった。
けれど早くなったのはこちらも同じ。私は正面から降り注ぐ攻撃の全てを、最適化された剣術で受けきっていた。
敵の攻撃の変化と共に、私の動きも変化させている。もう同じ劣勢には追いやられない。
この成果は私の願いのおかげでもあるかもしれない。けど、それだけではない。

〝あの時〟があったからこそ今の防御が成り立っている。強くそう思うのだ。
そして防御を成功させるたびに増してゆく過去への感謝が……煤子さんへの感謝が、柄を握る手へと込められてゆく。
「まだまだっ！」
「へえ……！」
1・1・2。
一対一の戦場に、一本の道を作る動きだと、煤子さんは言った。
何故一本の道を作るのか。
それはたとえ戦場が広い空間だったとしても、この動きを受けきるには横道逸れる暇などないからであろう。
パターンに入れば、誰だって何もできずに詰んでゆく。
はず。なんだけど。
「っ!?」
しかし私は驚いた。
中学の剣道では勢いに耐えかねて迷わず横へと逃げる人が続出したこの足運びの攻撃を、正面から防ごうとしている事に。
彼女の足運びの妙に。

「こいつ、やっぱり……！」
攻撃の最中でも私は飛びのいて、距離を取った。
相手はそこで、あえて詰めようとしなかった。
杏子は私と同じ表情をしていたのだ。
「テメェ……」
忌々しげに私を睨んでいる。
そう、顔には出していないだろうが、私もそんな心持ちだ。
なぜ魔法少女が私を攻撃するのか？
疑問に思う……けど、今はそれよりも。
どうしてこいつは、煤子さんと同じような、私と同じような動きをしてみせるのか!?

「そこまでよ」
どこまでも冷淡な声と、二丁拳銃の銃口が私達二人の動きを完璧に止めた。
それはほむらの牽制だった。
「……！」
拳銃を向けられた杏子は、恐怖とはまた違った感情を浮かべている。
まるで、幽霊にでも出会ってしまったかのような驚愕を。

人違いではないんでしょうね……

「私はさやかと巴マミ、貴女たちと同盟を結んだ。だからこそ私はここで、抑止のために銃口を向けている」

ほむらの銃口の一つは私に向いている。

手は震えてもいない。撃とうと思えばいつでも撃てる。

それは抑止として成り立つ、ハッタリではない脅威だった。

「……」

だが杏子の表情はどう見ても、舌打ち一つで〝ここはひとまず退散してやる〟と去ってくれるようなものではなかった。

本来なら三人の魔法少女を前にすればそうなるはずだ。けど、彼女はそうしない。

ただ杏子は、ほむらを睨んでいた。

「……おい」

「何かしら」

「……名前、なんつーんだ」

「私は〝ほむら〟よ」
「ほう、ほむら……ねぇ」
杏子は笑い、銃など知るかとでも言いたげに槍を構えた。
それと同時に、甲高い金属音が槍を弾く。
「！」
ほんの一瞬も目を離していなかったはずなのに、杏子が構えた槍は、いつの間にやら発射された銃弾によって吹き飛ばされていた。
「私は冷静な人の味方で、馬鹿の敵よ」
ぼんやりと手元を見る杏子に、ほむらはあくまでも冷静に言ってみせる。
「貴女はどっちなの？　佐倉杏子」
「っは！　正義の味方って言ったら信じてくれんのかい？」
「！」
吐き捨てるような笑いに、冷静さの片鱗は無い。
杏子へ向けた銃のトリガーに、深く指が掛かるのを見た。
「ほむらだっけアンタ!?　いいねえ、面白いじゃんか！」
杏子の頭の髪留めが、小さくゆらゆらと燃えている。
シスターのヴェールが炎に巻かれて消失し、ポニーテールが顕わになった。

炎は何かから燃え移ったとも思えない。
一見すると危ないその現象に、私は目で見える範囲での常識を全て捨て去った際に残った嫌な予感を覚え、身体を動かした。
「ほむら、駄目ェ！」
銃弾が放たれる音はした。
銃口はまっすぐ杏子に向けられていたし、杏子の足を狙ったことは、撃つ前からなんとなくわかっていた。
ほむらの撃つ弾は、おかしな軌道で放たれる。おかしな軌道で放たれ、必ず目的のそこへと当たるのだ。
「――ハ」
普通なら全く予想できないはずだ。
だけど〝撃つだろうな〟とはわかっていても決して避けられない、正確無比で無慈悲なほど速い銃弾の攻撃を、杏子は確かに〝躱した〟。
床に空いた穴を見るに足の甲、膝下、腿の三箇所を狙ったであろう銃弾その全てを、有り得ないほど早い動きで避けてみせたのだ！
それは薬室が炸裂する音と、杏子の動きにより空気が弾けるような音を同時に立てた、一瞬の出来事だった。

「――」

ほむらはその一瞬の〝敗北の結果〟に気付いていない。

彼女は〝躱される〟とは思っていないからだ。

だから私が咄嗟に動いた。

ほむらの肩を押しのけ、剣を前へ。

相手の槍がこちらを貫くよりも、先に、前へ！

「うおおっ……！」

空中戦の動きの何倍も速い地上戦。

その地上戦より何倍も速い槍の一突きが、不完全な防御体勢の私を容赦なく突き飛ばした。

「がぁッ！」

「きゃ……！」

槍の柄にロケットブースターでも仕込んでいるのかと疑いたくなるほど重い一撃。

すんでの所で剣を盾にした私と、その後ろのほむらがまとめて押しやるほどの衝撃。

私達は結界の端まで吹っ飛んだ。

槍に押された。そうに違いない。それなのに、宙をふわりと飛ぶ私たちの身体はいつまでも落下することがない。

ついに〝どごん〟と嫌な音を立てて、結界の壁に叩きつけられた。
「いったぁあ……！」
「うぐ……！」
背中に走る強烈な痛みはなるほど、抑えられてはいるのだろうけど、魔法少女にならないと味わうことがないのだろうなと、ぼんやり思った。
「ははは！　やっぱりな、いいねぇ今の！　良い闘いだった！」
髪飾りを燃やす魔法少女がケタケタと笑いながらこちらへ近づいてくる。
「まさか今のあたしにもまだ〝炎〟が見れるなんてね！思ってもいなかったよ！」
「アンタ……」
「怒ったか？　来いよ！いくらでも相手してやる！　そっちのほむらって奴もな！」
ああ、そういう……。
こいつは、グリーフシードだとか、縄張りだとか、そういうもののために今、戦っているわけではないんだな。
わかった。私はこいつの存在の一端を理解した。
こいつは間違いない。私たちと戦うために、ここにいるのだ。
「美樹さん！　暁美さん！」
「さやかちゃん！」

耳は正常らしい。目もしっかりと、こちらへ近づく杏子を映している。
背中を打ち付けて、少し呼吸が乱れているだけだ。
ほむらも……意識はある。
杏子を睨む元気があるようで、こっちも元気になれそう。
「……ほむら。あいつ、知り合い？　ごほっ」
「ええ……かと思ったけど、銃弾を見てから避けるような超常生物は知らないわ……」
「魔法少女の時点で……今はいいや、なんとかしよう」
大きくへこんだ壁に背をつけ、私たちは小声でぼそりぼそりと、かつ素早く話した。
「さっきは油断したけど、今度は大丈夫。私が時間を稼ぐわ」
「いや、私がやる。ほむらはまどかを逃がして」
「良いのね」
「うん」
「無事でいて」
手短な作戦会議は終わった。
私は咳をひとつ吐いて、起き上がった。マントを払い、身体に纏う。
そして睨む。
数分で私の中の第一印象最悪ランキング堂々たる一位へと上り詰めた、目の前の危険

人物、魔法戦闘狂シスター・杏子を。
「さあ来な……マミじゃあちと弱いが、あんたなら楽しめそうだ」
「……どうしましょっかねえ……」
戦闘再開だ。

髪留めの炎で完全に燃えきったヴェールの切れ端が、炎を灯しながら灰のようにふわりと流れ落ちてゆく。
何故髪留めが燃えるのか？　そういうコスチュームなのか？
わからない。いや、今は考えても仕方の無いことだ。
魔女や魔法少女相手では不可解な事が多すぎる。
姿に意味を探るのは危険だ。
「なんで、私たちと戦うのさ」
この言葉に意味は無い。相手は戦闘狂だ。
「戦いたいから戦うのさ」
ほれみたことか。けど時間稼ぎにはなる。
「人殺しが趣味の魔法少女がいるなんてね」
「殺すかどうかは運次第だよ。本気でやるから、死なないように頑張りな」

ああ、だめだこの子は。

この子にとって、人の生き死になんてどうでもいいんだ。重要なのは本気の殺し合いかどうかなんだ。

本物の戦闘狂だ。

「！　……ありゃ、まただ。目ぇ離してないのに、消えやがる。どうなってんだか……」

杏子の驚きに、私の後ろのほむらが居なくなったことを知る。

といっても、私は後ろを見ない。

別に彼女の能力を知ってるわけじゃない。私に余裕がないだけだ。

正面でふらりと槍を構える杏子から、目を離せないのだ。

私の視界の隅からまどかが消え、マミさんも消え、少しずつ壊れゆく結界の中には私と、杏子だけが残されていた。

杏子の闘志は衰えず、むしろ邪魔者が居なくなったとばかりに、槍を手の中で回すなどして、上機嫌でもあるようだった。

「さーて」

彼女がいくらか手遊びに興じた後、それまでの油断丸出しな動きを裏切るかのように。

「っシ！」

「ぐうー」

槍は素早く突き出された。

私が相手の足捌きを読めずに、剣で軌道を逸らせずにいたならば、間違いなく腹には穴が空いてたはずだ。

十分な間合いを一気に詰めて放たれる槍のリーチには何度でも驚かされるし、これから始まる戦いでも驚かされるに違いない。

なんといっても魔法の槍だ。その有効範囲は倍以上と見積もっても損はあるまい。

――なら、少しでも。

こちらもリーチを稼がなくてはならない。

同時に、相手の繰り出す槍の威力に負けないほどの武器でなくてはならない。

私は願いを叶えた。力の願いを。

それを今、解き放つのみ！

「〝アンデルセン〟！」

「うぉお!?」

大剣アンデルセン。作り方は簡単だ。

二本のサーベルを、掌で包み込むようにして持つだけ。これで一本の大剣となる。
柄を両手で握り締めれば、内側から力が沸いてくる。
人が握れば腕が折れてしまいそうな重量感も、不思議なことに微塵も感じられない。
「〝フェルマータ〟アー！」
「！」
剣に見惚れた相手に、容赦なく大剣を振り下ろす。モーションは最少に、何よりも素早く。
切っ先へと流れ溢れる衝撃波が、剣以上の太さのエネルギーとなって杏子を襲った。
「うっ、ぐぁ……！」
うめき声の割には随分とにやけた口元を見て、やはり恐ろしい相手なのだなと再確認する。
そして私も覚悟を決めた。
「よし……全治一ヶ月くらいにはボコボコにしてやる！」
「ツハ！　上等だ！」
紅い髪に再び、より大きな赤い炎が灯った。
「あらよっと」
杏子が槍で地面を突けば、そこからすぐに動きを変わる。

まるで万能な脚が一本、杏子に備わっているのではないか。そう思わせるほど鮮やかに、槍の一発で杏子は浮いた。

そして次の瞬間に、槍が六つの節に解れ、それらがまるで蛇のように杏子の周囲を取り巻いた。

「こいつでリーチを伸ばしてザックリ……って甘ぇ戦術は、あんたにゃ効きそうもないからな！　種はさっさとバラしてやるよ！」

「ありがたいね！」

内心では〝ああチクショー、面倒な〟と思ってるんだけど、そうも言っちゃあいられない。

「ほら！」

「うわっ！」

素早く回避。鞭のように振るわれた長い槍が、私の足元だった場所を抉り取っていた。

長さと遠心力による威力は、通常の槍の数倍はあろう。魔法少女の頑丈さでも耐えられるのか？　試したくはない。

「へっ、逃げてばっかじゃ始まらないよ！」

しかも大振りの後にできるはずの〝武器の反動〟は、槍をすぐに元の形状に戻すこと

によってキャンセルさせている。
都合よく、鞭のように撓って伸び縮みする槍。厄介だ。
しかし。
「うおおお！」
「ほお、これ見ても来るか！」
距離はある。それでも杏子のもとへと駆け出してゆく。
私の武器が剣であり、伸びない以上は、近づかなくては勝利は無いのだ。
小細工は相手に通用しない。ここは勇気をもって、自分の剣術を信じて切り込むしかない。
「間合いに入れさせっかよ！」
再び槍が分解され、多節棍となり襲い掛かる。
腰辺りを狙った、当てることを重視する横振りだ。跳躍では脚をやられ、中腰では頭が避けられない、絶妙な高さ。
その位置を信じてた！
「！」
私の膝は最大限に折れ曲がり、身体はほぼ寝かせた体勢で、つま先だけで床を滑る。
勢いに任せた、強引なリンボーダンス。

横に凪がれた槍は、私の鼻上三センチ先を掠めて、風だけを残していった。
と同時に私の身体は、手も着かず力任せに起き上がる。

危なかった！
身体の柔軟性があと少しでも悪かったら顔がまるっきり削げ落ちてたし！
けど相手はガラ空きだ！　さっきの攻撃を見て槍の伸縮時間も把握した！　懐に潜って攻めるなら今しかない！
決め手がどうなるかはわからない。相手はいくらでも対応してくるだろう。
けど接近戦、剣のリーチならこっちのものだ。王手をかけ続ける詰め将棋ほど気楽なものはない。
杏子を防御だけに回らせて、ゴリ押ししてやる！
距離にして槍二本分の間合い。
私の大剣は切っ先を地面すれすれに構えられ、杏子の槍は未だ多節棍状態から戻れていない。
「へっ」
が、杏子はその槍を構え続けている。
元の槍へと伸縮する多節棍。

私の背後から迫り来る、〝元の形状へ戻ろうとする〟槍先。
それを、こちらに当てようとしているのだ。
「後ろでしょ、知ってる」
が、やっと持ち上げられた私の大剣の切っ先は、既に後ろに振り被られている。
翻る私の身体。風を受けて膨らむ白いマント。
持ち上げた剣の広い刀身により、背後から小賢しく迫る槍先は弾かれた。
「そう来るんだろ?」
ところが、私の無茶な構え方による僅かなモーションの隙を予想していたか、杏子の蹴りは既に目の前に来ていた。
剣を構えない右サイドから来る蹴りは脇腹か、頭を狙っている。
杏子は最初から槍を捨てるつもりだったのだ。

――ま、私もなんだけどね。

「!?」
大剣を振りかぶったモーションのため、右肩が杏子に向けられている。
私の身体は白いマントで覆い隠され、杏子からは私の腕の動きが完全には把握できな

いだろう。
だから私は、大剣が後ろの槍先を弾いた直後には、既に剣から手を離していた。
確実に。接近した杏子に、確実な拳を見舞うために。
「うぐっ！」
「ぎっ……！」
マントごと殴りつけた私の拳が、杏子の繰り出す脚の脛を迎え撃つ。
鈍い音が脚と拳から響いてきた。
私の指は軋むような音を上げ、杏子の脛からは薄い血が舞った。

あの子の過去も変わっている？

魔法少女の力は強い。
脚と拳の衝突だけでも、お互いの身体は数メートル近く吹き飛んだ。
力が強くとも体は軽いせいだ。上手く魔法少女の力を発揮するには、足場が必要になる。
最初の魔女と闘った時からわかってはいたことだけど、これからの課題になるだろう。
「――てンめぇ～……」
「ふーッ……」
まぁ、それも、ここから生き残れたらの話だが。
いつの間にやら結界は消滅し、外はすっかり闇に落ちていた。
工場の外。辺りは人気もそう多くはないだろうが、少ないとも言いがたい。
ぱっと見た限りではまだ寂れきっている工場でもなかったので、人は居るのだろう。
このまま戦い続けるには、あまりにも目立つ場所だった。
「……さやか、あたしは腹が減った……今は見逃してやろう」

「へ、そりゃどうも、都合が良い話で」
「〝これ〟に誓ってやる！　次からは不意打ちもしねえ、安心して飯を食わせてやるし、眠らせてやる」
言って、杏子は首に下げたアクセサリーを私に向けて突き出した。
十字架に似てるような、似てないような。それに誓うことがどれほどの重みを持つのか、私は知らない。
しかし現状、闘い続けたいとは微塵も思っていなかった私には願ってもない提案だ。
「……良」
「ただし二つ！　聞かせてもらおーか」
〝良いわよ〟って言おうとしたのに遮られた。
向こうの決定は強制だったようです。
「オマエ、煤子さんを知ってるな！」
「……」
剣は新たに出さない。
ただマントだけは身体を覆わせて、いつでも中で反撃の準備を整えられるように隠した。
「……あんたが聞きたい事のまず一つがそれ……だけどそれは、いくつもの意味を含ん

でいる……〝何故煤子さんを知っている〟とかね」
「あの足捌き、煤子さん以外にやられたことはない。やられてすぐに思い出した……オマエ、教わったな？」
ギラギラした目だ。どうしてこいつが。
「こっちのセリフ……何故煤子さんがあんたなんかを？」
「私〝なんか〟を？　くくく、バカ言うなよなぁ、あたしだからこそ……」
「おーい、うるさいぞ……誰かいるのか……」
「！」
男性の声が響いてきた。
付近の住民か、それとも工場の人か。どちらかが私たちの騒ぎを聞きつけてきたのだ。
「チッ……ひとまずはお預けだ。あんた、新米だろ？　魔法はそんなもんじゃないはずだ。次やる時はもっと力をつけてきなよ。そっちの方が都合が良い」
「は？　自分勝手な……大体、あんなのただの殺し合い……」
「殺し合いくらいでなきゃ〝燃えない〟のさ」
ふわりと跳躍し、杏子の身体が工場の壁へ張り付く。
人の話を聞かない奴だな……！

「じゃあな！　煤子さんの弟子ってんなら問題ねえ、次会う時を楽しみにしてやる……で、もう一つは今度、聞かせてもらうが……」

杏子の目が泳ぐ。

「……あのロンゲ、ほむら……あいつ、煤子さんの妹か？」

呟くそうに言い残すと、お騒がせシスターは壁を蹴りながら去っていった。

金属ダクトがひしゃげて壊れ、破片が音を立ててコンクリに落ちる。

最後までうるさい、騒がしい奴だった。

……煤子さんを知っている……あいつは、一体……。

思うところはある。疑問も尽きない。

けど考える前に、私もさっさと工場から逃げ出した。

やってくるのが雷オヤジだったら怖いからね。

制服姿のマミさんの後ろ姿を見つけると、私は大きく手を振りながら彼女達に近づいた。

マミさんの肩を借りたほむらと、心配そうに同じく身体を支えていたまどか。一応、無事といえば無事そうではある。

しかしほむらが負ったダメージは思いの他大きいらしく、魔力での治療も渋っている

のか、片足を引きずり気味に歩いていた。
ほむらの反応は淡白だったけれど、まどかとマミさんの二人は工場に残った私を心配してくれたようで、再会の頭に事の顛末について根掘り葉掘り聞かれたものだ。
私は杏子との激しいバトル模様についてはかなり省き、とりあえず、彼女自身がもう不意打ちはしないという宣言を出した旨を伝えた。
煤子さんについては……長くなるので、あえて省いた。
これから、ちょこちょこと話していく他ないんだろうけど……。

「……佐倉さんとはね」
色々あった今日の魔女退治。
ほむらを支えながら歩く静かな帰路の途中、夜道に落ちて溶けそうな声でマミさんが切り出した。
「私は、以前に……魔法少女の仲間として、佐倉さんと協力してたことがあったのよ」
「あいつと……」
一体どんな経緯になればマミさんと杏子が手を組むのか、私には全く想像できない。
「……人に話すのは、初めてになるわね」
それから、マミさんは静かに語り始めた。

佐倉さんと出会ったのは、一年前……。
私も魔法少女として、やっと力を付け始めた頃だったわ。
その時にはもう、滅多なことでは魔女に苦戦しなくなった。
……今思えばその気の緩みもあったのかもしれないわ。
見滝原の外れ……というか隣町には、大きな教会がったの。
とても大きくて、廃れてしまったのが不思議なくらいの、立派な教会。
私はその日、魔女退治のためのパトロールをしていて、偶然教会の近くを通ったのだけど……。
この教会はどうして寂れたんだろうなーって、軽い気持ちで眺めていたら、丁度その教会から使い魔の魔力を感じたわ。
もちろん私は教会へ向かって行った。
……廃教会ってことは知っていたから、躊躇無くステンドグラスの窓を蹴破ってね。
けど中にいたのは、使い魔ではなく魔女。そして罠だらけの結界。
隙だらけの格好で突入した私は、うねるような魔女の身体に捕まって、何もできないまま身動きが取れなくなったの。

今の私からしてみたら、笑っちゃうようなミスだったわ。いえ、笑えないわね。

とにかくあの頃の私は、手に入れた力に過剰な自信を持って、舞い上がっていたのよ。

魔女に捕まった私は、徐々に身体が締め付けられて、頭に血もめぐらなくなって……もうだめかと諦めた……そんな時だった。

佐倉さんが正面の扉を開け放って、現れたのよ。

髪留めに赤い炎を灯した彼女は……私に一切の傷をつけることもなく、二十秒もかからず魔女の身体を八つ裂きにして、倒してしまった。

私は本当に嬉しかった。自分と同じ魔法少女がいて、私を助けてくれた。

今までずっと一人で戦ってきた私は、そのときになって初めて……孤独を癒してくれる相手を見つけたの。

私は一人じゃない。誰かが私を助けてくれる。

一緒に戦ってくれる、って。

そう考えただけで私は救われた。魔女から助けてもらうよりも、それ以上に救われたと思ってる。

私が協力関係を求めると、佐倉さんは「おう、いいよ」って、それだけ言って笑っていた。

それ以来、私と佐倉さん、力を合わせて魔女を倒す……関係が始まると、思っていた

んだけど……。

確かに佐倉さんは協力してくれたわ。

魔女との戦いでは我先にと飛び込んでいくし、私に拘束魔法の有効的な使い方をアドバイスしてくれたりね。

一瞬でリボンの網を展開して、離れた場所にもマスケット銃を生み出す。

この領域に至るまで、いろいろな特訓をしたり、魔女との実戦を重ねてきたわ。

佐倉さんのおかげで、自分の魔法に磨きがかかった。地に足がついた、ちゃんとした自信がついたの。

ものすごく頼りになる子だなって、ずっと思ってたわ。

けれど私は気付いてしまった。

佐倉さんは、私と一緒に戦いたいわけじゃない。強い相手と戦いたいだけなんだって。

それに気付いたのは、私がリボンの魔法をほぼ自由自在に操れるようになった頃……。

ある日の魔女退治の帰りに、道の先を歩く佐倉さんがぽつりと呟いたのよ。

〝なあマミ、ちょっと全力を出して、私と戦ってみないか〟って。

それまでもそういう組み手が好きな子だったから、私はほんの少し気を引き締めるくらいでそれに臨んだの。

佐倉さんと戦うのかあ、緊張するなあ、って。

……けれど。

いえ、宣言通りだった。

佐倉さんは一切の手加減をせず、本当の本当、魔女と戦うように……いいえ、魔女と戦う以上の本気で、私を〝倒しに〟きたの。

夕時の河川敷は他に人も物もなかった。けれど私は恐ろしかった。

久しぶりの恐怖だった。いつもなら一般人を死なせたくない、周りを巻き込みたくないって戦っていた私が、自分自身の身を案じて、逃げ回るなんてね。

リボンも銃も、何も効かなかった。今まで培ってきたはずの技術は全て佐倉さんの槍に切り裂かれて、消え去ってしまう。

体中にいくつもの深い傷を負ったし、戦っている最中に吐いたり、泣いたり……情けなかった。

そんな私の姿を見て、佐倉さんの興は冷めてしまったのね。

今まで私と一緒にやってきたことなんて全て忘れたように、私からは一切の興味をなくして、見滝原を出て行ってしまったのよ。

それが、私と佐倉さんとの関係……。

「……」

感想。ヤベー奴じゃん。

「マミさんにそんなことが……」

「……」

まどかはビクビクしてるし、ほむらも眉間に皺を作ってる。気持ちはよくわかる。なんて厄介な奴なんだ。

「私、思えば佐倉さんのことを何も知らなかった。彼女が普段どうしているのか、何を考えているのか……聞くタイミングを作れなかったといえばそれまでだけど……ごめんなさい。私は佐倉さんとは知り合いだけど……今でさえ、何も知らないんだ」

儚げな顔をこちらに向けて、マミさんは寂しそうに笑った。

「杏子が異常なだけよ……それを理解できるのは、同じ異常者だけ」

「……そう、なのかもしれないわね」

憮然と歩くほむらが零した言葉は、きっとマミさんへのフォローなのだろう。

マミさんはほんの少しだけ、元気付けられたようだった。

「……じゃ、私こっちだから、またね」
「うん。気をつけてね、さやかちゃん」
「へへ、また明日ね。マミさんも、ほむらも」
「そうね、明日学校でね」
「ええ……」
それぞれが別々の場所に靴先を向けた。
ほむらだけはまどかと一緒で、彼女を家まで送り届けるらしい。
……うん。今かな。
『……あのさ』
「！」
私はほむらにテレパシーを送った。
彼女は驚いたように振り向いている。
『ちょっと、やっぱ今日のことで聞きたいことがあるから……ほむらだけ、後でここに来てくれないかな。まどかを送ってからでいいから』
『……ええ、わかったわ』
黒髪を闇の中にはためかせながら、ほむらはまどかと去っていった。
彼女はまどかを送り届けて、その後戻ってくる。

そう……ほむらとはきっと、よく話しておかないとダメなんだ。

身勝手な事だとわかっているわ

街灯の明かりだけが夜に浮いている。
ここは見滝原の中では小さめな公園で、暗くなればほとんど人も寄り付かない場所だ。
私はひんやりと冷たいベンチに座り、ほむらが来るのを待っていた。
腿を擦り、スカートの丈を伸ばす。
夜になると、やっぱり寒い季節だ。魔法少女になってもそれは変わらないらしい。
そう考えてみると、この時期でもほむらの黒ストは正しい選択のようにも思えた。
……とも思ったけど、やっぱりさすがに暑過ぎるなぁ、あれは。
私はああいう、肌をぴったり覆うやつがどうも苦手で……。
「今日のことで話って、一体何？」
「お」
後ろからの声に振り向けば、そこにはほむらがいた。
その姿を認めると同時に、何かが私の顔に向かって投げ込まれる。
「うおわっ!?　って熱っ!?」

咄嗟に掴んだそれは、缶のあったか〜いミルクティーだった。
「……おおー」
「何も飲んでないし食べてないでしょう。買ってきてあげたわ」
「……えへへ、ありがとう」
意外なことをするもんだ。
本質的にドライで、冷たいタチの方が勝ってる子だと思ってたけど、感情が読めないだけで、結構気も利くらしい。
缶紅茶を腿に挟み、暖かさを堪能する。
ふと何気なく、私はほむらを見た。
「――……」
「ん？」
私の隣に座ろうとするほむらの姿を見上げ、思わず絶句してしまった。
こんなシチュエーション、こんな優しさ、こんな……ほむらの姿が、あの日々とまるでそっくりだったから。
優しげな目元。穏やかな……ああ。
「それで、今日の話って？」
「あ、う、うん。そうだったね」

ベンチをずれて、ほむらの分のスペースを空ける。
並んで座ると、本当に昔を思い出すようだ。
けど今はそれを振り払って、話すべきことを喉の奥でまとめる。
「……前にさ。私、ほむらに変なことを訊いたことがあったよね」
「ああ……ススコっていう人の話かしら」
「よく覚えてるね」
「初めてのことだったから」
そりゃあなかなか、誰かの妹ですか？　とか訊かれることなんてないだろうけどさ。
「……本当にほむらは、煤子さんのことを知らないの？」
「知らないわ。……今日の事と関係があるのかしら。その、ススコという人は」
「うん、かなりね……ある、と思う」
少なくとも私の拳に受けた痛みは、間違いなく煤子さんとのつながりがあるのだ。
「私は昔……もう五年近く前になるんだけど……煤子さんと出会ってからね」
「……」
「煤子さんは私に色々なことを教えてくれた、先生のようなお姉さんだったんだ」
私は表面的なことだけを、ほむらに語った。
事細かに、何を話したのか、何を学んだのかまでは言わない。

だけど、会って何日もしない相手に語るようなことではなかった。
それでも話したかったのは、ほむらがどこか、彼女と似ているせいなのか。
「煤子さんは私にお願いをしたんだ……あの時、煤子さんは私の事を知っていたけど、私は知らないのにね。まるで私のことを、自分の子供のように……自分の分身であるかのように、〝こう生きて欲しい〟って……」
あの時、私は確かな意志を感じ取った。
「それは多分、病気を患っていた煤子さんが私に託した、煤子さんが受け継いで欲しかった生き方なんだと思う」
色々なことを教えてくれた。
生きる上での大切なことを、その大事な大事な輝く部分だけを丁寧に選んで、それらを綺麗に並べた宝石箱を、私にプレゼントしてくれた。
「……煤子さん、ね。……さやかの過去に、そんな人がいたとは思わなかったわ」
ほむらは自分の分のピルクル（！）を飲みながら、どこか合点がいったのか、話の折に触れてはしきりに頷いていた。
「うん、でね？　その煤子さんとほむらがさぁ、すごいそっくりなんだよ」
「……そんなに？」
「うん……多分……」

じっとほむらの靴から顔までを見る。
……んー、こんな感じだったっけ。こんな感じだったような。
もうちょっと煤子さんのが格好良くて、大人っぽかったような……。
手元のピルクルとストローの存在が、私のイマジネーションに巨大な砂嵐を発生させている……。
「私はもちろん煤子さんではないし、妹もいなければ姉だっていないわよ」
「うん……ていうか、居たとしても東京だしねぇ」
「両親がここに来てたっていう話も聞いていないわね」
「他人の空似か……」
「……」
神妙な沈黙が続く。
「……全く根拠もないし、仮定の話でもないけど……他人の空似では、ないかもしれないわ」
「え」
心当たりが？　と聞きそうになったが、心当たりはなさそうだ。
では何故か。
「さやか、貴女はとても……信頼できる。まだ短い間だけど、それがわかったわ」

「な、何をー？　急に……」
　真剣な眼差しに思わずたじろぐ。
「煤子とは何者か……それに心当たりがあるといえば、ある……いえ、なくもないといったところだけど……」
「！」
「早まらないで。それを話すためには……私が持っているいくつかの秘密を話す必要があるの」
「秘密って……」
　それは普段からほむらが私に隠し続けていることと関係があるのだろう。
　頭の中で推理しようと考えをめぐらせていたところに……。
「秘密か、それは僕にとっても気になるね」
「！」
「キュウべえ」
　公園の闇の中からキュウべえが歩いてきた。
　不自然なほどに真っ白な身体は、野良ネコと見間違うこともない。
「……何をしに来たのかしら」
　うげー。今は来て欲しくなかったな。

「僕が魔法少女のもとを訪れちゃあ悪いのかい？　いいじゃないか、今の今まで、君を気遣って離れていたんだから」

ほむらの殺気が目に見えるようだ。

が、キュウベえはそんな怒りも知らん振りで、悠然とこちらのベンチの上に座った。

「いやぁ、それにしても久しぶりに聞いたね、その煤子という名前」

「！」

「え!?」

キュウベえが知っている!?

「前に杏子がよくその名前を出していたよ。まさか、さやかまで会っていたとは思わなかったけどね」

「……杏子は何故あんなに好戦的なのか、あなたは知っているんじゃないの」

「君たちくらいの女の子の感情っていうのは難しいからね、僕では想像の域を離れないよ」

「……」

私達女子中学生のみんなの杏子のような性格だと思わないで欲しい、と言いたかったが、あえて言いません。

「僕としては煤子という人物について、あまり気にはならないんだけど……ほむらの秘

密というのには、少し興味があるね」
「……」
ほむらは今にも武器を手にとって襲い掛かりそうだ。
いや、むしろ私がいなかったらやってるんだろう
「さやかにもまだ言えない事を、あなたに教えるわけがないでしょう」
憮然と白猫を見下ろし、ほむらはベンチから立ち上がった。
「残念だ。ほむらのことはあまりよく知らないから、勉強しようと思ったんだけどな」
「私との関係を築きたいのであれば、まずは杏子が暴走しないように押さえつけておくことね」
「それができたらどれだけ風見野は平穏になるだろうね」
なるほど、キュゥべえも杏子を止めようと努力したことはあるらしい……。
……風見野ね。近いなぁ。よし、近寄らんとこ。
「なんか、ごめんね。よくわからない話で呼び戻しちゃって」
「構わないわ。私こそ……話せないことが多くて、ごめんなさい」
「ううん、ぜーんぜん気にしてない！　まぁ、今日は色々とあったけどさ、明日からも頑張ってこう！」
「ええ……」

彼女は何か言いたげに視線を落とし、口を何音か開閉した。
その、あの、ええと、だから。おそらくはそんなことを。
「……私があなたに秘密を打ち明けるには、もうちょっと時間が必要だと思ったの」
「時間？」
「ええ……時間を頂戴。なるべく早く、答えを出すから」
「話すべきか、べきではないか」
彼女は無言で頭を垂れる。ヒントも出せないと。
私が深く追及することでもないようだ。
「じゃあね、さやか」
「うん。じゃあ、また！」
「……ふふっ」
「！」
「なんでもない、また」
彼女が最後に残したのは、いつかのように可憐な微笑みだった。

† 8月13日

雨が降らない日は続く。
蒼天の下で、煤子さんの後姿を見つけると、私は走り出した。
「煤子さーん！」
「きゃっ」
後ろから抱きつくと、煤子さんはふらりとよろめいた。
「危ないじゃないの」
「へへへ」
「こんなに汗かいて……放っておくと、赤くなるわよ」
「えー？　そうなの？」
「後ろ向きなさい、拭いてあげるから」
「はーい」
近くの水飲み場で濡らした白いタオルで、よく身体を拭いてもらったものだ。
「……」
ひんやりしたタオルが気持ちよかった私は、そのときの煤子さんの、少し曇った表情に気付けなかった。
いや、気付いてはいたけれど、もともとミステリアスな部分を多くもった煤子さんだ。

大して気にも留めていなかったんだ。

背中に当たるタオルが冷たい。

「ねえ、さやか」

「うーん？」

「一度だけその手が届くなら」

「え？」

「一度だけその手が届くなら、って思うことは、多いわよね」

「えー……っと……？」

煤子さんの喋ることは時々、よくわからない。

遠まわしで、抽象的な事が多いのだ。

「もっと力を出せたなら、とか。短距離走で、あとほんの０．１秒速ければ……とか」

「ああ、うん！　あるよ！　この前七秒切れるかなって思ったのに……」

「そう、その気持ちよ……もちろん、今のさやかなら大抵のことは練習でなんとかなると思う」

「うん！　最近ねえ、そんな気がするんだ」

煤子さんに出会ってから、頑張る楽しみを覚えた。

そう自覚したのは、随分早かったのだ。

勉強もやるようになったし……。

「けど、やっぱりあと一歩届かせたいと思う気持ちもある……それも、いつだって、いくらでもあるわ。人間って、欲張りよね」

「うん？　……うん、そうだね」

背中にひんやりした感触が伝わって。

「――全ての力をこの時のために注ぎたい」

「っつ!?」

背中に砂のようなジャリっとする痛みが走った。

「忘れないで」

「いたたた……な、なんですか今の！」

「ふふ、ごめんなさい。強く擦っちゃったかしら」

†　それは8月13日の出来事だった

煤子とさやか、その過去には何が……

「おはよう、巴さん」
「おはよう、暁美さん」
苗字で呼び合うことを〝よそよそしい〟と勝手に決め付けないでいただきたい！
これでも進展したんです！　私は頑張ったのです！
「マミさん、おはようございます」
「おはようございます！」
「うん、おはよう。二人とも」
通学路で偶然出会ったマミさんとの挨拶である。といっても、校門はすぐ目の前。すぐにお別れとなるだろう。
周りの目や耳もあるので、込み入った話はできない。
まぁ、メールで昨日について振り返ってもみたので、急いで話すこともないんだけど。
それでもこうして朝、みんなが同じ場所にいるということに安心感を得ることはできた。

杏子に闇討ちされてたらどうしよう、と昨日の寝る前に思わなかったこともない。一分経たずに熟睡したけどね。

「さやかちゃん、ほむらちゃん。改めて、昨日は本当にありがとう！マミさんもありがとうございました！」

「私としてはまどかを一切に巻き込みたくは無いけど……まどかを正しく納得させるためには、こうして魔女退治につき合わせるのも、ひとつの手なのかもしれないわ」

「あら、暁美さんはまだ反対なのね？」

「これだけは、譲れないから……」

柄にも無くみんなを最後尾から見つめて、約束の時間にやってこなかった仁美のことを想う。

今日の彼女はどうしたんだろうかと。

「んー」

教室にも仁美の姿はない。

先生が来るまであと二分。普段なら絶対に有り得ないことなのに、何があったのだか。

「あ、仁美ちゃん教室にもいない……」

「休みなのかな？　メールくらいくれてもいいのに」

マメな性格の仁美だ。抜けてるような見た目に反して全く隙は無い。
携帯を忘れた、充電が切れているなんてことは有り得ない。
風邪を引いたか、季節を大いに外れたインフルエンザにでもかかったか……。
「……」
まさか魔女なんてことはあるまい。
「あ」
「え?」
前の席に座るほむらが、焦りを前面に出した顔で仁美の席を振り向いた。
「え!?」
なにその反応。
顔がなんか〝あ、仁美……!〟って言ってそうだったけど、今のは何なのよ、ちょっと。
『……しまった』
テレパシーで深刻そうな切り出し方をされ、私の身体が硬直する。
『え……どうしたの?』
『仁美がどうかしたの!?』
『いえ……志筑さんは大丈夫だと思うけど……なんでもないわ、気にしないで』

『ちょッ……いや無理でしょ今のその反応は！　さすがに！　仁美に何か心当たりでもあるの!?』

とテレパシーでまくし立てたところで、ガラス戸が開き先生がやってきた。

「えー、志筑さんは体調不良により、午前中はお休みだそうです」

「ふはぁ、なんだー、良かった……」

先生から告げられたなんとも無いような報告を受けて、思わずため息が漏れる。

「はぁ……」

「良かった……」

それはほむらやまどかも同じようだった。

『……ちょっとほむら！　何なのさ！　さっきの思わせぶりなリアクションは！』

『……杞憂だったからいいじゃない』

『わ、私も……昨日よりドキドキしたかも……』

『もー……』

でもまぁ、仁美が無事で何よりだ。

杏子のこともまだ気を許さないってのに、仁美が大変なことになっただなんて話が飛び込んできたらもう、その瞬間に胃に穴が開いちゃうよ。

お昼には四人でお弁当を食べた。
偏り気味なほむらの弁当の中にアスパラガスやブロッコリーを突っ込んでやったり。
マミさんの卵焼きを分けてもらったり。
ちょっと前のピリピリしすぎた空気が嘘のようだ。
「それでその時、ユウカちゃんたら〝返してよー〟って」
「あらあら、ふふ」
「仁美なんて〝パース〟ってノリノリだったんですよぉー」
「……ふふ」
魔法少女三人とその候補が一人。
けど女子中学生が集まって、普通の話をしないなんて、そんなことは有り得ない。
むしろ魔法少女関連の話が一切出てこないくらい、このお昼は和やかなものだった。
「きゅぷ……」
「お父さんの手料理をこんな奴になんて……そんな必要はないわ」
「ひ、一口だけだから分けてあげようよ……」
まぁ、極々一部では、軋轢もあるようだけど。

ささいな事など気にせず、のほほんと気持ちを落ち着けてから、放課後を迎えたわけ

です。

今まで遅刻欠席なんて一度もしなかった仁美が、私たちに連絡もなしに休んだ。

先生はなんでもないような風に言ってはいたけど、何かあるに違いない。何かあるなら、見舞いにいかねば。

そして恭介だ。病院での恭介は、もう信じられないくらいに落ち込んでいた。

私が行ってどうにかなるものではないだろうけど、まぁ……友達として、慰めてやりたい。

この私が顔を出せば、生きる希望が溢れるように沸いてくるに違いない。そう信じよう。

さあ、いざ二人のもとへ。

「美樹さん」

「お？」

「清掃係でしょ！　今日のゴミ捨て忘れないでね！」

「おおおッ」

そうだった、すっかり忘れていた、今日はゴミ出しの日だ。

うっかりすっぽかして帰るところだったぜ。

「あと保健係の人は話があるからって、保健室に集まるようにって、さっき言ってたよ」

「なんだって！　うわー、忙しいなぁ」
「ふふ、帰ろうと思ってたのに、キツいよねー」
「……ま！　好きでやってるから全然いいんだけどねー！」
予定がごちゃごちゃ。こんな日もある。

「……上条　恭介か」
お菓子の魔女が出現した病院の中。
暁美ほむらは再び、ここへと足を運んでいた。
「魔女との戦い以降、ここに寄るなんてね」
清潔な広い廊下を歩く。
見慣れない制服姿にも、この階によく訪れる女子中学生の姿を思い出してか、看護師は何も聞かずに挨拶した。
毅然とした会釈で返し、目的の病室の前で立ち止まる。
「上条……」
それは〝ここでは〟まだ一度も顔を合わせていないクラスメイト。

そして、もはや奇跡も魔法も望めないであろう、悲劇のままの若き天才バイオリニスト。

さやかは何故、彼の腕を治さなかったのか？

彼女の願いが、治療から強さに変わった理由とは？

上条恭介。彼の存在に、さやかの希望と絶望が垣間見えるかもしれない。

ほむらは扉を軽くノックした。

「どうぞ」

開いて踏み入ると、やってきた人物が意外だったせいか、ベッドの上の上条恭介は閉口した。

ほむらは静かに戸を閉めると、ベッドから一つ分離れた椅子に腰を落として足を組んだ。

「君は、えっと」

「はじめまして、上条君」

「ああ、やっぱり会ったことはないよね。でも同じ学年かな」

「ええ、つい先週に転校してきた……」

「暁美ほむらさん？」

「え、ええ」

言い当てられたことには、僅かに動揺した。
「やっぱりそうか。さやかから話には聞いていたんだ、はじめまして」
「そう、やっぱり聞いてたのね」
「もちろん。美人で、煤子さんに似た人が転校してきたって……あ、ごめんね、煤子さんっていうのは忘れて」
「！」
図らずも早速聞き出せた重要な情報、食いつかないわけにはいかない。
が、今はまだきたばかりだ。タイミングが悪いだろうと踏んで、じっと堪える。
「具合は、」
月並みな言葉を弾みで出してから後悔した。
具合など解りきっているというのに。
「……」
「ごめんなさい、辛いはずなのに」
「ううん、良いんだ。入院生活ももう、慣れたからね」
わかりきった嘘だった。
ほむらは知っているのだ。彼がどれほど、自分の動かない左腕を呪ってきたのか。
そして入院中の寂しさもよくわかる。

魔法少女と出会う前の入院中のあの日々は、遥か昔のような記憶となって埋もれてしまっているが、孤独は辛い。

「さやかから、場所を聞いたのかい？」

「ええ……勝手に来てしまったのだけど」

「気にしてないよ、いつも暇だからね……来てくれてうれしいよ、ありがとう」

微笑む彼の顔を見て、少し胸が高鳴った気がした。

美男子。さやかも仁美も惚れるのは、なんとなくわかる。とはいえ、恋愛に横道逸れる予定は彼女にはない。自分から最低最悪の泥沼を作るのは勘弁だ。

後ろ髪を一本も引かれず、ついに切り出すことにした。

「……ところでさっき、〝煤子さん〟と言ってたけど……」

「ああ、煤子さんね。それは僕もよくわからないんだ」

「どういうこと？」

「僕は会ったことがないからね。さやかが昔出会ったっていう、先生のような上級生の話なんだけど……」

それから彼の口から出る言葉は、昨日さやかが話した事とほぼ同じだった。

「……なるほど。今のさやかは、煤子さんの影響があってのものなのね」

それは、今までの煤子と出会っていないさやかを見てきた彼女だからこそわかる真実。

「さやかは変わったよ……良い意味でね。まぁ、小学生のあの時期だし、変わるものだろうけどさ」

「……さやかは、昔はどんな子だったの？」

「うん、昔か……やんちゃだったなぁ、すごく」

と右頬を掻きながら思い出す素振りを見せていたが、その動きは止まった。

「はは、ごめん、今もやんちゃだね」

「ふふ」

「……昔は男子にも負けないガキ大将って感じだったけど、煤子さんと出会ってからはガラリと変わったっていうか」

「……」

「そうだね……賢い、っていうか」

「ふふ、賢い、ね」

「うん、さやかは賢いよ」

普通に返された言葉にほむらは相槌を打つ。が、心の中では驚いていた。

そう、この世界でのさやかは、賢いのだ。抜けていて、ちょっとバカな美樹さやかで

はない。
　賢く、どこか抜け目無い美樹さやか。それが当たり前なのだと。
「僕は煤子さんという人に会ったことはない……何度か〝会ってみたいな〟と言ったんだけどね」
「そうなの？」
「うん。何せ、夏休みが終わってそれ以降、さやかから学ぶことが多くなったからね……興味も沸くじゃない」
　彼は左腕の憂鬱など忘れたかのように語り始める。
「けれどさやかはもう会えない、と拒むばかりでね。本当らしいから仕方ないんだけどさ……ちょっと残念だった」
「……何故煤子さんとは、もう会えなくなったのかしら」
　ほむらも、さやか自身の口から煤子の話は聞いていたが、別れの話についてはかなりぼかされていた。
　ただ「居なくなった」としか聞いていなかったのだ。
「さあ……〝居なくなった〟、それしか聞いていないよ」
「……居なくなった」
「高学年になって、中学生になって……どんどん聞き難くなるよ。彼女、その話をすると

暗い顔をするからね」

「……」

消えた煤子。さやかは、どうして居なくなったのかを知っている？

その別れとは、普通の別れではなかったのだろうか。

ほむらはその後、不自然さを繕うように上条恭介と何気ない会話などしながら、彼の気を損ねないように退室した。

彼は腕について落ち込んではいたものの、さやかの話には気を良くして応えてくれた。

ほむらはそこが不思議でならなかったが、特に気にすることはなかった。

「幻覚……」

「ええ、気がついたら知らない所で倒れていて……」

もたついた放課後、すぐに仁美の家に向かった私は大目玉をくらった。

風邪でもインフルでもなく、夢遊病のような幻覚。

彼女は気がつけば、知らない路上で倒れていたのだという。

その時に手を軽く捻った以外は怪我もなく、体調も問題はないらしいのだが……。
……魔女に操られていたのかな？
まず真っ先に魔女の口づけが頭に浮かぶ。
奴らは人を操り、自殺なり結界に引き込むなりさせる。
仁美は昨日倒した魔女に操られていたのかもしれない。
「でも、何ともなくて良かったよー」
「御心配を……学校の方にそのまま〝幻覚にかかった〟なんて伝えてしまうと、ややこしくなりそうだったので」
「あっはっは、確かにねー」
今日の授業のノートを仁美に渡して、今日のポイントや明日までの課題を口頭で伝える。
まぁそんなことしなくても仁美は多分大丈夫だろうけど、中にはいじわるな課題を出す先生もいるので、一通りは話した。
「ありがとうございます、さやかさん」
「良いって良いって！」
「次のテストも頑張りましょうね」
「うん、……まぁ人と比べるわけじゃないけど、次からはほむら参戦だからね……テス

ト、どうなることやら……」
「ああ、ほむらさん……もう、クラスのレベルがどんどん高くなってしまいますわ」
「望むところだけどね！」
不毛な点取り合戦はさておき。
「じゃあとりあえず、そろそろ私は帰るよ」
「ええ、ありがとうございました」
「大丈夫だとは思うけど、まぁ気をつけて。ゆっくり寝てなよー？」
「ふふ、わかりました……また」
「うん、また！」
こうして私は仁美の家を出た。
「……はぁ」
そして恭介の事を考えてしまう。
仕方がない。どうしようもない事なんだけど。
仁美の影のある表情が辛かった。

調べ物も頭打ちね

恭介を励ます言葉は、もうないんだよね。
これは別に、嫌な意味で言ってるわけではない。
単純に、彼に言うべき言葉はもう全て出し尽くしてしまったのだ。
あまり同じ事を言い過ぎるのもくどいし、恭介のプライドを傷つけてしまうかもしれない。
今のあいつは脆い。普段は横暴なほど率直に物を言う私としても、触れ難いタイミングなのだ。
しかし顔を出して安心させるくらいは必要だ。
語りかけることができなくても、そばにいてやるくらいのことはしておきたい。
それが幼馴染として、親友としてのつとめだ。

「よう」
「ゲッ！」

ぼーっと歩いていると、修道服の裾という現実離れした要素が目に入ったので、びっくりして正面を向いたらもっとびっくりした。

「不意打ちはナシとは言ったけど、エンカウントしちまったらレディ・ファイトってやつでしょ?」

進行方向で仁王立ちしていたのは、見たくも会いたくもないバトルシスター、杏子であった。

「ちょ、ちょっとちょっと、出来の悪い格ゲーじゃあないんだからさ、もうちょっと個人の都合も考えて……」

「なんだよ、今じゃあ都合悪いのか?」

あ、都合聞いてくれるんだ。ぬるいな。

私はこれから上条恭介という幼馴染の病院へお見舞いに行く旨を話した。

時に感動的に。時に感傷的に。

シスターの情に訴えかけるように。

「くだらねー都合だ! 断る!」

駄目だ全然温くなかった。普通に断られた。

「そんなにダチの見舞いをしたきゃあ、アタシがその市立病院送りにしてやるよ。案外そっちの方が近道かもしんないよ?」

「ふざけんな！」

今、私は人気のない路地裏にやってきている。

そう、杏子に無理やり連れて来られたのだ。

無理やりといっても、片腕を引っ張ってとかそういう原始的な無理やりではない。

杏子が「ここで決闘だ！　いくぜ！」とか白昼堂々と人ごみのなかで変身しようとしたので、私がそれを止めるために仕方なく来る他なかったのだ。

なるほど、不意打ちはなくても準備を整えさせてはくれないということだ。

『おーい、ほむらー……マミさーん……』

二人に助けを請うも、運悪くテレパシーの圏外らしい。

今の私は絶体絶命だった。

「おいおい、何ぼさっとしてるのさ。観念して闘いな！」

「あー……もう……」

既に変身してしまった戦闘狂シスター杏子。そうなっては私も自己防衛のために変身しなくてはならない。

で、魔法少女になってしまえばそれは既に準備完了の合図だ。

嫌だなぁ……。

「で？　そのお友達の病状はどんなもんなのよ」

「はぁ？　……片腕と脚が動かなくなるくらいの重症だけど……」
「ひゃはっ！　じゃあ同じフロアに搬送されるように、頑張ってみるかぁ！」
「！」
とんでもない不謹慎かつ舐めたセリフを吐きながら、杏子は地面を蹴って襲い掛かってきた。
恭介を軽く見られ、バカにされて。それでもまだ感情が揺らがないほど、私はクールではない。
「ツしぃ！」
「おっ!?」
お手本のような二段突きを放つ。
しかし杏子は身を横に翻して、易々と躱してみせる。
「やっと乗り気になったか!?　いいねぇその感じ！　もっと本気を出しなよ！」
頭に被った紅のヴェールが髪留めの小さな炎に燃やされ、灰になって消えてゆく。
……なんだ、あの炎は。
私は一歩退き、剣を二刀流に構えた。
二つを重ねるようにして両手で包み込めば、大剣アンデルセンに変化するが……。
ただ、今この状況でそれは躊躇われた。

「お？　あのでっかいのは出さないの？」
「これでいいの」
アンデルセンを振り下ろして発動する〝フェルマータ〟は、いわばマミさんが使う一撃必殺の技、〝ティロフィナーレ〟と同じような攻撃だ。
一撃は大きいが、発動は重く、機敏とは言いがたい。素早く動き回れるであろう杏子に通用するかといえば疑問だ。
それに、この場所は路地裏。
大して狭いわけではないにせよ、建造物にブチ当たる可能性は高い。
となれば威力も弱まるし、隙も出来るだろう。
二刀流から手数でこちらの勝負に持ち込むことが先決だ。
「ま、そっちがそう来るってんなら構わないけど……ね！」
槍を多節棍に切り替え、切っ先が私へと襲い掛かる。
でも……いける！
二刀流は得意ではない。
剣道をやっていた事とは関係はない。単に私が一刀流に向いていたのだ。
しかし今の状況下――多節棍の節や槍先が周囲から迫る攻撃――においては、圧倒的に二刀流での立ち振る舞いが有利だった。

邪魔な棒を弾く、いなす、槍は二本で受け止め流す、それらの防御の間に足をとめることはないのは心強い。

先日は猛攻とも感じられた杏子の多節槍も、今はかなり楽にさばけている。

「くっ……!?」

「狭い環境で、思いっきり武器を回せないっていうのが響いたかもね！」

左手のサーベルを杏子の腹に突きたてるが、咄嗟に防御として差し出された持ち手の節に防がれてしまった。

とはいえ、収穫はあった。

「……にゃろう」

槍の柄はぱらりと砕けて、そこから連鎖するように槍全体が崩れ消え去った。

どうやら、槍の部位によって強度も違うらしい。

そして、その強度の差を突けば……一撃で槍を破壊することも可能だ。

良いことを知れた。

「へん、どうしたの杏子。昨日みたいな手ごわさを見せてみなよ」

「ぁあ!?」

恭介をバカにされたこともある。

この場で容赦なく襲い掛かり後頭部へ一撃を加えることも可能だったが、あえて私は

挑発する。
負けられない。けどそれ以上に、あっさりとは勝ってやれない。
嫉妬から私の道着を埃まみれにした剣道部の先輩たちのように、私がじっくり稽古をつけてやらなくてはなるまい。
私が剣道部を退部せざるを得なくなった理由、サディスティックさやかちゃん稽古のハードさを思い知らせてやる！
「……ウゼェ」
杏子の怒りに呼応するように、髪留めの火力が一段と強くなった。
「超……ウゼェー！」
新たな槍を出現させた杏子が突進してくる。
その素早さは、先ほどまでのものとは一味も二味も違うように感じた。
気迫は凄まじいが、私は慌てずに二本のサーベルを構える。
……なんとなくだけど、わかったぞ。
杏子の髪留めの炎、あれは無意味な飾りじゃない。
彼女は今やシスターのヴェールを全て燃やし尽くしてしまい、ただの魔法少女の姿となっている。
ヴェールは普通の物質で、だからこそ髪留めの炎で容易く燃えた。あれには宗教的な

意味しかないのだろう。それはこだわりか、理由があるのかは知らないが。

では髪留めが発する炎は？　あれも飾りか？　といえば違う。

あの炎はコスチュームの一部とするには浮いているし、一定の大きさで燃えているわけでもない。

そしてあの炎が燃え盛るとき、それはおそらく……。

「はぁッ！」

「おっと!?」

私の二刀流のリーチに踏み込む直前に横へ飛び、壁を蹴って上から襲い掛かってきた。

とはいえ私の剣は二本。サイドから垂らされる槍の一撃でも、容易く受け止めることはできる。

反応もできるし受けも取れるのだが……。

「ぐっ!?」

「ハハン！　片手で相手とは良い度胸じゃんか、オイ！」

空中からの槍の奇襲攻撃。

相手の体勢も無茶で、接地してる私ならば受けきれるはずなのに、一撃が重い。体が大きくよろめく。

「昨日の勢いだぁ!?　おう、見せてやるとも！　ただし、昨日のアタシよりも遥かに強くなってやるけどな！」

空中の槍、片手の防御。

私の体は、浮いた。

「嘘ぉん……!?」

相手が怒りに身を任せて放った一撃。

火事場のなんたらでは説明できない法外な威力に、私の体は向かい側の壁に勢い良く叩きつけられた。

「……ったた……」

「休ませも小細工もさせないよ！」

「ちっ！」

ダウンした私が起き上がるのを待たずに、杏子の槍は追撃をしかけてくる。

半分砕けた壁に背を預けていた私は咄嗟に地を蹴り、人生で一度もやったことのない壁バックステップで回避する。

杏子の槍はそのまま壁をぶち壊し、刃全てをその中に埋め込んだ。

槍が動かない今こそ、私は空中ではあるが、チャンスだ。

「隙有り！」

「ねーよ！　そんなもん！」

杏子の真上から二刀流で襲い掛かる。

だが杏子は、壁に埋まった槍をあっけなく引き抜き、そのまま防御へと転じた。

「くっ……なんだその対応力……！」

奇襲のつもりが、まんまと不利な体勢での戦いにもつれこんでしまったのだ。

「ハハハ！　串刺しになるまで浮かせてやるよ！」

「うわっ……こ、のぉっ！」

私は上から、杏子は下から突きや斬りを繰り出す。

地面に降りて懐に潜りたいところだが、杏子の素早い槍はそれを許さない。

長いリーチの的確な攻撃から身を守るために、空中で動けない私は〝槍を支えに〟戦っているようなものだった。

できれば地面から攻撃したい。

けれどその前に、杏子の攻撃は防がなければならない。防ぐためにはそれなりの防御を取らなくてはならない……。

人間として生きていれば普通は有り得ない現象だが、今の私は剣と槍のぶつかり合いだけで空中に留まっていた。

こっちに行けば接触できるかしら

なんとか、なんとか降りないと……！

煤子さんの特訓を受けたであろう杏子に対し、上から攻撃を仕掛けたのは大失敗だった。

何度も言われていたのに私はほんとバカか！

跳ぶということは、真っ直ぐ動きますと言うこと。

跳んでいる間は動きませんと言うこと。

あんなに「派手なだけの動きはダメ」と言われていたのに私は……！

一応、魔法少女の能力として、一応空中を蹴る能力はあるみたいだけど、それではあまりにも遅いし、隙も大きい。

展開している間に、それこそ串刺しにされてしまうだろう。

なら、杏子の槍を側面から叩いて、真下でなくても離れた位置に落下するようにすれば？

私は剣の一本を大きく構えた。

「おおっと!?　ダメダメ！　許さないよ！」
「ぐ!?」
しかし私の動きを読んだ杏子は、すかさず離れた位置に鋭い突きを繰り出す。
私はその防御のために、大振りを断念し、防御に回った。
私の体は、またしても浮く。
「オイさやかァ！　昨日聞きそびれたことを今聞かせてもらうよ！」
「はぁ!?」
今はそれどころじゃないってーの！
「ほむらって名乗った女！　あのほむらって奴は、煤子さんの妹なのか!?」
「違うッ……！」
話しかけている隙を突き、昨日と同様に切っ先の衝突による間合い取りを試みる。
が、今度は相手も油断なんぞしてくれないらしく、あっさりかわされ、断念せざるを得なくなった。
「……と思うッ！」
「なんだそりゃ！」
「本人はッ、煤子さんのこと、ちっとも知らないッ、風だったけど！　私には、わからない！」

あと少し……少しでも高く浮くことができれば……！
ほんの少しでも攻防に合間を作れれば……！
「にしたって似すぎってやつだろうが！　アタシはあの人の姿を覚えてるぞ！」
「へえ！　あんたも、慕ってるんだ!?」
「当ったり前だ！　煤子さんはたった一人……！」
今だッ！
杏子の槍の動きに力が込められた。
それはほんの少しの加減の揺らぎ。
動きは正確でも、力が大きければ結果もかなり変わってくる。
私の剣は、そんな杏子の〝違う一発〟に合わせ、それ相応に強い剣戟を加える。
私の体は、通常の攻防の時よりも高く宙に浮かんだ。
「あ」
「〝アンデルセン〟ッ！」
「しまっ――」
二本の剣を重ね、巨大な一本の大剣を成す。
空中で稼いだ僅かな隙は、剣を生み出す時間となった。

「はぁっ！」
「うぐおっ……！」
槍と同等のリーチに変化した武器を振りかざす。
力任せの一撃を受けようとした杏子は、路地に沿って吹き飛ばされていった。
がこん、と鉄管がへこみ、朱色のタイルがぱらりと落ちる。
地面に降りてから、ようやく自分の体の無茶に気付いた。
「ぐぅ……！」
空中での全身を使った気の抜けない攻防は、魔法少女とはいえ私の全身に多大な疲労を溜め込んでいたようだ。
追撃に出ようと踏み出す体が鉛のように重い。
このままでは杏子の下へたどり着く前に事切れてしまいそうだ。
「て～……めぇ～……！」
そうこうしている間に、髪飾りをより強く燃やした杏子が起き上がってくる。
槍の柄を支えにもせず、腕一本で立ち上がるそのスタミナには敬意を表したいところだけど。
……私の体力を回復させるために、時間を稼がなくてはならない。
「杏子……あんたの魔法の能力、見破ったよ」

「！」

しばらく口車に乗ってくれれば、私のふくらはぎは大いに助かるのだが……。

「ほぉ……で？」

「あんたの魔法は……願いとかは知らない……ただ能力だけはわかる」

震えを隠し、素早く無駄のない動きで右腕を上げ、杏子を指差す。

「その燃える髪留め……それが効果を発揮するのか、効果がそこに現れているのかは知らない。けどそれを見て答えは出た！」

「……だから？」

「魔法少女のあんたは、状況に合わせて髪留めの炎が強まる。そして動きの速さ、力が強化さ……」

「だぁぁあからァ！　それが理解ったからって何なんだってぇ――――の！」

「！」

私のまるっとお見通し推理を最後まで聞かずに、全快した杏子が襲い掛かってきた。

髪留めの炎は迸り、火の粉を振りまいてこちらへ接近する。

時間稼ぎは失敗だ。

「ああ、もうッ……！」

体は万全ではないけど、大剣アンデルセンのリーチを信じるしかない。

「やってやる！」

相手に勢いがあるからといって、すぐに防御に徹するわけがない。

こちらも負けじとアンデルセンを突き出し、突撃する。

「おらおらァ！　アタシが強いのがわかりましたーってハイだからどーしたってぇ!?」

「うわっ！」

力任せの一直線な槍の一突きかと思いきや、私の剣に当たる前にグンと後ろへ引き戻され、再び素早く、別の位置から突いてきた。

剣の先端から中心までを鮮やかにかわした槍の先が向くのは、きっと私の心臓だ。

「うおおぉおッ！」

こちらも大剣を引いて、根本でなんとか槍を受け止める。

が、槍は簡単に受け流すことはできなかった。

その逆、平たい大剣の面に深く刺さり、尚もこちらに向かって突き進んでくるのだ。

槍のチャージは、止まらない。

「おらおらおら！　このまま貫いてやるよっ！」

「んな無茶な……！」

槍の先端が大剣を貫き、私の腹に狙いを定めている。

そして恐ろしいことに、杏子は槍を引き抜こうとはせず、地面をがりがりと削るよう

に走り、槍を押し込んでくる。
　ほ、本気だ……この子は本気で、大剣ごと私を貫こうとしてる……！
「くっ……と、ま、れ……！」
　杏子の尋常でないパワーに圧され、踏ん張る靴もむなしく地面を擦り、後退してゆく。
　まずい。壁際まで追い詰められたら本当に……〝貫かれる〟！
「らぁあああぁあツ！」
　絶望的な予想の恐怖から、杏子の髪留めの猛火が暴走列車の機関部にも見えてきた。
　いや、抜け出さないと！
　不要なイメージを振り払い、頭を冷やす。
　どうする!?
　アンデルセンでは戦えない。
　リーチも威力もある、いざという時には〝フェルマータ〟も放てる必殺武器だが……
　今の燃える杏子を相手にしては、単純にスピードやパワーで劣ってしまう。
　リーチと打ち合いの力強さを犠牲にしても……速さに賭けるしかない！
　突撃を続ける杏子の片足が浮いたタイミングを見計らって、大剣アンデルセンを分解する。
「！」

「もっかい、二刀流だ！」
アンデルセンは槍を中心に二つに分かれ、元の二本のサーベルへと変化した。
素早く二本の柄を握りこみ、未だ突進体勢のままの杏子に肉薄する。
「おっとテメ……」
「つらァ！」
「ぐほぉ!?」
相手は私のサーベルでの切り返しが間に合わないであろうことを笑おうとしたのだろうが、それは大きな読み間違いだ。
確かに、アンデルセンを解除してサーベルに戻しても、相手の意表をついているとはいえ、髪留めの炎で能力を強化した杏子に切りかかる隙があるかといえば……ない。
サーベルを構えてからでは、斬るにも突くにも僅かなロスが生じるからだ。
だから……ハンドガードで、殴る！
「もう一発！」
「ぐぁ！」
一発は顔面、二発目は怯んだ隙を狙ったが、逸れて肩を強打できた。相当痛いに違いない。
魔法少女の強烈なパンチは、杏子を大きく吹っ飛ばした。

「ハンドガード……使えるな」
遠距離はアンデルセン。
近距離はサーベル二刀流。
最接近はハンドガード。
この三種類を上手く扱うことが出来れば、杏子相手でも互角に戦えそうだ。
「なかなか強いじゃんか……今のは効いたよ、さやか」
壁にめり込みかけた杏子がタイルを零しながら復帰する。
「ダウンしてる振りして不意打ちしようなんて考える前に、もっかい正面から来なよ」
「！」
手を煽って挑発する。
いわゆる指の〝チョイチョイ〟だ。
……剣道じゃこんな真似できないから、一度やってみたかった。
「……いいぜぇさやか！　乗ってやるよ……私の次の攻撃を凌ぎ切れたら、アンタの勝ちにしてやる！」
「おっ、気前がいいじゃん！　ならそっちにも同じ勝利条件をあげようか!?」
「いらねーよ、んなもん」
「……！」

杏子は槍を右手に預けると、左手にも同じ槍を出現させた。
嫌な予感がした。
「〝これ〟を使って生きてた魔女はいねーんだ……悪いがさやか、〝良くて病院送り〟に変更な」
燃え盛る髪留め。
両手の中で自在に取り回される二本の槍。
「槍の、二刀流……!?」
「んな器用なマネはしねえ、小細工なしのパワーゲームさ」
鮮やかに舞っていた二本の槍が、杏子の手の中で重なり合う。
すると槍は赤いオーラを零しながら溶け、輝く靄は一本の得物に変化した。
それは、武器だ。けど一般的ではない。
私はその武器をあらわす正式な名前を知らなかった。
たとえるならばそれは、カヌーなどで使われるような、カヤックパドルに近い。
2つのオールを組み合わせたような、そんな槍。
両剣。両槍。
アンデルセンを二つ繋げたような無骨で巨大なその武器を、杏子は頭の上で三回転させ、力強くガシリと構えた。

向けられる赤黒い不吉な刃に、不覚ながら、私の脚は一歩退いた。
「さあ！　ガツンと行くよ！」
見たことも聞いたこともない、つまり対処法なんてこれっぽっちもわからない武器を振りかぶって、杏子が突進してくる。
――来る！　いや、落ち着け！
相手にしたことの無い、全く未知な形状の武器だ。
何も知らない武器を持った相手と戦うことが恐ろしいと言っているわけではない。事はそう単純ではない。
扱う相手が杏子だから不味いのだ。
素人相手ならいざ知らず、同じ煤子さんの特訓を受けた彼女が扱う武器ならば、それを扱う技術が達人級であることは疑いようがない。
だから私は、その対応が、同じ達人級でなくてはならない。でないと防ぎきれないのだ。
達人相手に素人では太刀打ちできない。
だから私はすぐに、この武器を扱う杏子と対等に渡り合う技術を習得しなければなら

ない……！

瞬時に分析しろ！　あいつの武器を！　戦い方を！

……リーチは槍よりも短い！　柄は両端の刃に挟まれている！

両手武器！　巨大で重く片手では扱えないが威力は高い！

そして手数はおそらく私の二刀流以上！

おーけーわかった。まず、あの武器の範囲内に近づかないことだ。リーチに入ればおしまいだ。

そして不用意に打ち合わないこと。私のサーベルが破壊されても可笑しくないような……そんな力強さを感じるから。

「おらおらっ！」

「うわっ！」

予想通り二本の刃はパドルのように振るわれ、コンクリの地面を水面のように削り斬った。

「逃げるなよ、そっちだって二刀流だろ？」

「……」

威力が想定を超えている。不用意どころか絶対に打ち合えない。

「おいおいしらけるだろーが！　どんどんいくぞ!?」

武器は重いらしく両手でしか扱えないようだが、それとは関係無しに攻め難い。
たとえ一本の刃を防いだとしても、隙を突くための反対側に、もう一つの刃があるのだ。
「ほら脚なくなんぞ！」
「うわっ！」
相手が攻勢のときはもっとタチが悪い。
二本の刃で水面を漕ぐように、しかし不規則に暴れまわって私を追い詰めようとする。
左右から二刀流のように飛び出してくる刃を相手に、情けないが私は、どうしようもなかった。
「げっ」
かつん、と呆気ない音に、私のサーベルの一本は遥か彼方へ飛ばされていった。
杏子が大振りしたカヤックパドルが、ほんの少しだけサーベルの刃を掠めた、ただそれだけで。
たったのそれだけで、サーベルは弾かれ、見えないところまで吹き飛んでしまった。
そして、私の手が痺れている。
杏子の扱う武器の威力を悟ると共に、〝良くて病院送り〟が嫌な真実味を帯びてき

た。

「くぅうう……！」

「へい、リーチだぞ！」

一本になったサーベルを両手で握り締め、私は路地を駆けた。

一時撤退だ！

「なんてやつ……！　あれじゃ隙なんて無いよ！」

隙はあるかもしれないが、未だにそれを見出せていない。

まさか遠く離れてからフェルマータで狙い撃ちなんて、そんな生ぬるい方法が通じる相手とも思えないし。

だから今は逃げるしかなかった。逃げて、逃げて、対処法を考えるしかないのだ。

と、思っていたけれど。

「……！」

目の前に立ちはだかる〝ＫＥＥＰ　ＯＵＴ〟の落書き。

高い壁、三方向全部壁、つまり行き止まり。

「おっ？　おおっ？　お～良いねぇ神様、祈ってる甲斐があるってもんだよ」

「嘘っ……」

「上手く都合良く戦えるような場所まで出ようと思っていたみたいだが……へへ、こい

つは、どうも……」
そして唯一引き返すことができる路地の先には、両剣を構える杏子の姿が。
「悪いね、大当たりだ」
「……へへ、ほんとだよ……」
覚悟を決め、サーベルを構える。
「ホント、大当たり」
「！」
相手がこちらへ踏み出したのを見て、背中に手を伸ばす。
マントの裏側に隠したもう一本のサーベルを掴み、二本を合わせて頭上へ掲げる。
「こいつ、最初から――！」
路地裏の行き止まりへ走り出した杏子、その勢いは簡単に止まるものではない。
そりゃあもちろん左右にだったら軌道修正も容易かもしれないけど、その左右が封じられているとなれば、あと退避できるのは真後ろだけ。
でも勢いをつけた前傾姿勢から切り替えるのは至難の業だ。
重い武器なんて抱えてたら尚のこと。
「〝アンデルセン〟――」
つまりどういうことかって？

簡単だ。

十分な距離と、左右に逃げない相手がいれば、この技はきっと最強だということなのだ。

それだけだ。

「〝フェル・〟――」

「〝ロッソ・〟――」

解き放て。それで全てが終わる。

全力を、今この時に乗せて――！

「そこまで！」

その瞬間、二人の間をリボンの結界が遮った。

「……」

私の大剣アンデルセンは、振り下ろす前にその柄を固定され、

「おい離せ！　マミ！」

「離さない」

杏子の両剣も、蜘蛛の巣に絡め取られた蛾のように、空中に縛り付けられていた。

現れたのは、マミさんだった。

「二人とも何をしているのよ……特に佐倉さん。あなたはどうしていつもいつも、そうやって戦おうとするの！」
「はっ、強くなることが私の願いだ。強くなるために戦って何が悪い」
「わ、私たちはもっと手を取り合って、魔女と戦うべきなのよっ」
「魔女なんかお手て繋いでやりあう程のもんでもねーだろうが」
「それは、あなたにとっては――」
「さやかちゃん！」
慣れ親しんだ声も、路地の向こうから響いてきた。
まどかだ。
「まどか！　ってことは、えっと、マミさんと一緒に魔女退治見学を……」
「さやかちゃん、無事!?」
「う、うん、まぁね、なんとか」
「よかったぁ……」
本当はフェルマータを叩き込もうとした寸前だったのだけれど、マミさんやまどかから見たら、私が追い詰められているように見えたらしい。
「……チッ、弱いくせに割り込みやがって。つまんねーの」
固く拘束された両剣を引き抜くことはできず、杏子は魔法少女状態を解除し、元のシ

スターの姿へと戻った。
　不機嫌そうな杏子の目つきに戦闘終了を悟った私も変身を解く。
「勝負はお預けだ。また今度、邪魔の無い時に仕切り直しだ」
　どこからか取り出したスペアのヴェールを頭に被り、その姿に似合わない荒っぽい語気で私に宣言する。
「命と周りが無事で済むなら、やぶさかじゃないんだけどね」
「温室育ちが。試合ごっこでやってるわけじゃねーんだよ、こっちはな」
「だ、だめだよ……」
「ぁあ？　誰だよテメーは。いきなり出てきて好き勝手言ってんじゃねーぞ」
「ひっ」
　シスターにあるまじきドスの聞いた脅し声に、耐性ゼロのまどかは一瞬で小動物のように縮こまった。
　完全に怯えきっているぞ、この戦闘狂め。これ以上やるなら私が許さん。
「……そうだな……アタシも冷めた。また次に会う時に、色々と聞かせてもらうぞ」
「……」
　色々と。それは一体、何を聞かれるのか。ろくなことではないのは確かだ。
「お互い相手をダウンさせる毎に情報がもらえる、ま、質問ごっこの予定があるよっつー

話だ」
「質問ごっこ、ね」
洋画じゃないんだから。
「アタシに呼ばれたら予定を空けておけよ、じゃあな」
シスター少女はそのままの格好で手を振り、私達の一団から抜け出していった。
……佐倉、杏子。私以外で煤子さんを知ってる、唯一の子。
私も杏子も、同じ魔法少女だ。
それは果たして、偶然なのだろうか？
煤子さんに良く似た暁美ほむらという美少女転校生にしたってそうだ。
どうにも最近、煤子さんと魔法少女、この二つがやけに絡み合いすぎている気がしてならない。
偶然なのだろうか。私にはそうは思えない。
「ふわぁーん！」
「怖かったー！」
「って、ええ!?」
路地裏から杏子が去ってゆくのを見届けると、途端に二人はへたり込んでしまった。
まどかはともかく、普段は気丈に冷静に振舞っているマミさんまで。

「杏子ちゃん怖いよぉ……なんであんなことするのぉ……」
「もう佐倉さんを正面から見るのは嫌……絶対に嫌……うん、絶対にしない……もう二度と……」
「……」
どうやら私への助太刀は、かなり無理を押してのものだったようだ。
あのマミさんですらこの調子だ……。
「うう、ごめんなさいね、美樹さん……私、どうしても佐倉さんだけは苦手なのよ……」
「いやー得意な奴はいませんよ、あれは……普通って人がいても私、そいつの正気を疑いますもん」
マミさんとまどかに手を貸して、二人を起こす。
……ともかく、病院送りにされなくて良かった。今日の戦いを振り返り、深くそう思うのだった。

「本当に怪我ない？　大丈夫？」
「いや、まぁなんとかね……怪我しそうになったけど」
「次からは絶対に相手にしちゃだめよ、本当に危ないんだから」
時間はすっかり夕時だ。

まどかとマミさんと一緒に並び、帰路を歩いている。
二人は魔女退治に興じていたらしいのだが、途中で使い魔の反応を追っている最中で私を見つけたのだという。
使い魔を追いかけていたら、魔女よりも危険な魔法少女にバッタリ出くわした、というわけだ。災難すぎる。
「魔法少女って、大変なんだね……」
「うん、魔法少女同士の付き合っていうのも、すごく大変なの……まぁ、佐倉さんの場合はかなり特殊な気もするんだけどね」
「やっぱり、縄張り争いとか？」
「ええ、私も何度か経験したことがあるわ……穏便に済ませたいとは思っているんだけどね」
相手がそうしてくれない、か。
「ほむらちゃんが契約するなって言ってくれる理由、ちょっとだけわかった……かも」
「確かに、ね」
もちろんそれもあるだろう。
けどそれ以上に、彼女が魔法少女にさせたくないという言葉に包み隠した部分には、より大きな負の理由が隠されていそうだ。

ほむらの口から早めに聞けると、こっちも情報が多くて助かるんだけど……。

第三章　燃える澁に佇む者
神がいたとしても、私を裁いてはくれない

†　8月12日

「……」

煤子が宛ても無く歩いている最中、目に留まったものは教会だった。

大きな、しかし寂れた教会。

人の姿はなく、建物の前に車らしきものもない。　ほとんど誰も通っていない施設らしかった。

「ああ……ここが」

彼女は歩みを曲げて、教会の扉を開いた。

聖堂の造りは見事なものだった。高い位置のステンドグラスから零れてくる宵の月明かりは神秘的に見える。

しかし、その空間に配置されている像や、象徴などは、既知のそれらとは違うようだった。

十字架でもない、棗でもない。

見知らぬ聖者に見知らぬ聖母。

少しでも聞きかじった程度の予備知識があれば、この施設が既存の教えをもじった新興宗教のものであるとわかるだろう。

「……」

彼女は聖堂の中央に跪き、かつて過去に見た儚き聖女のように手を結び、祈った。

「……」

何に祈るのか。

いいや、祈りではない。

彼女にとって、それはとても言葉にできない懺悔だった。

木の軋む音がして、脇の扉から小さな少女が入ってくる。

「誰……？」

「……」

幼いながらも、目元にははっきりとした面影を見ることが出来る少女。

それは教会の娘、佐倉杏子だった。

今は小学校の高学年であるはずなのに、背は低い。日ごろの栄養不足のせいだろう。
顔色も良くは見えないかった。
この時の彼女は、まともな食事にありつけていないのだ。
「……どうか、なされたんですか？」
「……こうして、いたくて」
結んだ手は解かず、絨毯の上でそのまま拝み続ける。
「！　あ、あの、告解ですか？」
「告解……」
「は、はい、悩み事があれば何でも！」
爛々とした目でこちらに迫る杏子に、煤子は貧しい教会の事情を思い浮かべ、複雑な気持ちになった。
そしてもう一つ思うことは、彼女に深く関わるべきか、否か。
「きっとあなたのお力に、なりますよ！」
「……」
意は決した。

狭い小部屋の中で、黒いヴェールを隔てて二人が座る。
煤子の面持ちは変わらず、杏子の方は緊張で強張っている。
一見どちらの告解か解り難いが、ここでは煤子の告白が行われる。
「さあ、どうぞ、あなたの罪の告白を……」
「……罪」
「はい、あなたが心の靄を払うことを望むなら、あなた自身が自覚する靄を告白しなければならないのです」
「……」
靄。それを負い目と解釈した彼女は俯き、考える。
そして答えは出た。
「神はあなたが自覚し、告白した罪の全てを赦すでしょう……」
「……ごめんなさい、私、告白することができないわ」
「えっ……」
懺悔室の分厚い扉を開け、外に出る。
するとほぼ同時に、向こう側の扉から杏子も出てきた。
「あ、あの、思いつめているなら、ぜひ……」
「……私は罪を自覚し続け、それを上塗りすることで余生を生きると決めたの……そん

な私を、きっと何者も私を赦せないわ」
「……そんな」
今にも泣き出しそうな杏子の頬を撫ぜる。
「……ごめんなさい、でも、そんな私を赦せるとしたら……神ではなく」
「……？」
「貴女という、一人の人間なのかも、しれないわね……」

†　それは8月12日の出来事だった

ゲームセンターの中を一周している間に絡んできた男達を適当にあしらい、暁美ほむらはクレーンのコーナーへ戻ってきた。
汚い店内の空気から逃れるように自動ドアを素早く潜り、自販機の前でため息をつく。
彼女は佐倉杏子を探していたのだった。
「……いない、か」
薄々とわかっていたことではある。

杏子の性格も行動も、全て今までのものと異なっていた。性格だけでも違えば、行動が変化し些細な未来でも変わってしまう。徒労に終わるだろうとは、なんとなく覚悟していたことではあった。

ほむらは店のそばにある自販機で飲み慣れていないコーヒーを買うと、機械のわずかな明かりを使ってプルトップを開ける。

仄かな香りを一呼吸分だけ味わってから、すぐに口を付けた。

やはり苦味は、慣れないものだ。

――けど、今の彼女なら、きっと乗ってくれるはず

休日前の夜。帰路を歩く人々の疲れきった顔を注視しながら、ほむらは魔女の気配を探っていた。

「！」

肌を舐める強い魔力の波動に目線をずらす。

そこには一人のシスターが立っていた。杏子だ。

「色々と変化しても……変わらないこともあるのね、何故かしら」

にやけそうな口元に缶を押し付け、ほむらは足を止めたシスターに向かい合う。

「甘い飲み物は好きか？」
「ええ」
「そうか」
シスターがブーツの底を鳴らしながら、ほむらに歩み寄ってくる。
「アタシはそれなりだな」
ほむらの目の前までやってくると、ポケットの中の小銭を自販機に突っ込んだ。
ボタンを強めに叩き、落ちてきたペットボトルを掲げて見せる。
それはスポーツドリンクだった。
「甘いもん食うなら、こんくらいの甘さが丁度良いんだ」
「……ふふ、そう」
「食うかい」
「ありがとう、いただくわ」
プレッツェルを一本齧り、新しく買ったココアを飲む。
――……襲い掛かってくるものと思っていたけれど、随分と友好的なのね

ほむらから見て、杏子は穏やかそうに見える。
さやかと戦っていた時の荒々しさからは想像もできないほどだ。
「ねえ、杏子」
「アンタ、ほむらって言ったな」
「……ええ」
「煤子さんって知ってるか」
「……」
ココアの缶を持つ手に力が篭ったが、スチール缶がへこむ前に頭は醒めた。
「さやかからも同じ事を聞かれたわ。知っているか、って」
「……じゃあ」
「姉がいるか、と聞かれもしたわね」
「……いねーのか」
さやかといい杏子といい、柄ではないはずなのに。
同じ〝いない〟、〝知らない〟と返せば、落胆の表情を隠そうともしない。
「まぁいいや、気にするな」
「……そうするわ」
「で、こんな時間に一人でゲーセン入って、何してたのさ?」

「……」
はぐらかそうとすれば、目敏く追い詰められるかもしれない。
さやかの妙な勘の鋭さもある。彼女に対しても嘘はつけないだろう。
「貴女を探していたの」
「ほー、アタシをねえ……行きつけを知ってる事については聞かないでおくけど、何の用だ」
「……二週間後に、ワルプルギスの夜がやってくる」
「知ってる」
どう信用させたものかと考えていたが、虚を突かれた形だった。
今までに佐倉杏子がワルプルギスの襲来を予知していたことなどなかったはずなのに。
「……そう」
「あの白いアホ面から聞いてるんでな」
「そうだったの」
キュウベえが既に杏子に話していた？
違和感のある変化だったが、考えても理由はわからない。
ほむらはとりあえずココアを飲み干して仕切り直すことにした。

「知っているなら、話は早いわ」
「ほー」
「ワルプルギス討伐のために、私に協力して」
「逆だろ？」
「え？」
口の中のプレッツェルをドリンクで流し込み、ヴェールの裾を払ってほむらを睨む。
「共闘したいなら、アンタが頼むのが筋ってもんだろう？　アタシのワルプルギス討伐に協力させてくださいってな」
「……」
いつにも増して傲慢さが増している気がしないでもないが、発言の意図の一つは理解できた。
杏子自身が自分の意志で戦おうとしているという事だ。
「杏子は、ワルプルギスの夜と戦うつもりなのね」
「当然！　最強の魔女なんだろ？　アタシが戦わないでどうすんのさ」
袋に残ったプレッツェルの破片を口の中に流し込み、音を立てて咀嚼する。
ちらりと見える八重歯はいつにも増して恐ろしい。

「……なら、協力――」
「やだね」
わざわざ遠回しにされた上に即答の拒否。
これには可能な限りの譲歩を見せようと考えていたほむらも、眉間に皺を寄せた。
「何故かって？　邪魔だからさ。せっかく最強の魔女と戦おうってのに、雑魚にそこらをウロチョロされちゃあ興が削がれるだろ？」
「……」
手の中のスチール缶が「ぺこ」と音を立てた。
「巴マミも、ちったぁ腕は立つようだがね。さやかも同じさ……せっかくの晴れ舞台なんだ、下手な黒子は他所に引っ込んでいてほしいってこと。ああ、できれば見滝原より向こうに行ってくれりゃせいせいするな」
「……あなたは、何故」
「？」
「そんなに、強い相手を求めるの？」
いくつもの時間を遡り、いくつもの彼女に出会ったほむらの大きな疑問だった。
ただ、この杏子は口元をゆがませて、それが当然であるかのように笑った。
「アタシは、何にも負けないほど強くなりたいのさ」

「何にも負けない程……？」
「ああ、アタシと同じ魔法少女にも、最強の魔女にも！　どんな奴にも負けないほど強くなりたいんだ」
　修道服の井出達で、杏子は胸の前で力強い握りこぶしを作って見せる。
「アタシの力は、強い奴と戦えば戦うほど強くなる……ワルプルギスの夜と全力で戦うことになれば、アタシはワルプルギスの夜さえも越えられる！」
「……！」
　打倒ワルプルギスの夜ではなく、ワルプルギスの夜以上の力を求めている。
　彼女は倒すことが目的なのではなく、倒す力を手に入れることが目的なのだ。
「す、酔狂ね……いえ、気を悪くしたならごめんなさい」
「へっ、そんな些細なことは今更気にもしないさ……一般常識で見りゃあちょっとばかし力に溺れてるのは、アタシだってわかる」
「自覚があるのね」
「それでもアタシは力が欲しいんだ……っと」
　向かい側のコンビニのゴミ箱にペットボトルを投げ込むと、それは荒っぽい音を立てながらも、綺麗に入っていった。
「ふー。ゲームでもしようかと思ったけど、やめだ、１５０円も使っちまったしな」

「……そう、話につき合わせて悪かったわ」
「なに、アタシも一度話したかったから、いいさ」
シスターは手を振りながら去ってゆく。
「ああ、そうだ」
去り際に一度だけ立ち止まり、淡白な無表情を半分振り向かせた。
「……そーいうわけだから。風見野はアタシのテリトリーだ、近づくなよ。近付いたら……アンタでも殺してやる」
それだけ言って、杏子は再び闇に向かって歩いてゆく。
後姿を見送るほむらは首を傾げた。
「……風見野」

あなたはそんなものに屈するべきではない

† 8月14日

「やーいオカルトー！」

そこは公園だった。

夏休みともなれば、毎日必ず誰かしらが遊んでいる、どこにでもある普通の公園。

小学生であれば誰でもそこへ足を運んでも不思議ではないし、それは珍しいことではない。

「神様なんていねーよ！　バカじゃねーの！」

「サギだ！　サギ！」

だが歳相応の遊びを求めた彼女が訪れると、彼女を見知った同学年の男子数人は、彼女を排斥するよう囃し立てた。

それは子供の頭が生み出す、ありきたりな文句。

彼女が敬虔な信者でなければ、互いに思い出にも残らないような口喧嘩で終わるはず

だった。

「……詐欺なんかじゃないもん」

彼女は涙を二つ、三つと落とす。

〝神なんていない〟。そんな言葉はありきたりで、月並みなクレームだ。

しかし杏子は、それに対する上手い返し方を、まだ知らなかった。

だから自分の信仰を否定し続ける彼らに対して何も言えず、ただ縮こまるばかりだった。

彼女は今日、ただ一人でブランコを漕ぎに来ただけである。

「こんなのっ！」

「あっ」

縋るように両手で握り続けていたアンクを、体格の良い男子小学生が乱暴に奪い取った。

男子生徒はにやにやと笑いながら、手元の拙い造りのアンクを眺めている。

男子生徒はひとしきりそれを眺めた後、といっても、それがハンドメイドの手作りであることも気付かぬうちに、両手で強く握り締めた。

「こんなもんっ！」

「あっ!?　やめて！　返してよ！」

力を込めた体勢に顔を青くするも、取り巻きの二人の男子小学生が行く手を阻む。
「へへ」
「無理ー、進入禁止ー」
「やめて……！」
「いぇへへ、バチなんて怖くねーぞ！」
手にほんのちょっとだけ力を込めただけで、アンクは真っ二つにへし折れた。
「ああっ……」
「あれ？　なんだこれ」
「中身、ただの木じゃん」
「木だ！　安物だ！　色塗ってあるだけじゃん！」
「サギだサギだー！」
「……う、うう……」
けたけたと笑うクラスメイトの男子。
見せびらかすように目の前に突きつけられる、二つに折れたアンク。
杏子は成す術もなく、ただ顔を赤く染めて、涙を砂の上に落とすばかりだった。
「……」

そこへ、夕陽の陰りに表情を潜めた一人の少女が歩み寄った。
「あ……」
杏子の背後から、背の低い女子中学生が姿を現す。
黒く長い髪を後ろで結った、大人びた風格の女子だった。
杏子は彼女を知っていた。
彼女は夕時になると教会を訪れ、何かを打ち明けるわけでもなく、ただ祈り続けている。
彼女の名前を聞いたことがある。
名前だけは教えてくれたのだ。
〝煤子〟と。
「……寄越しなさい」
「あ、なにすん……」
同じ背ほどもある男子小学生から、煤子は二つに折れたアンクを強引に奪い取った。
それを手の中に握り締めて、目を逸らさずに言う。
「あなた達に、他人の祈りを踏みにじる権利があるとでも？」
「……！」
「そう思っているのだとしたら、随分と傲慢なことね」

男子小学生にとって、中学生は雲の上の存在だ。
けれど彼らは感じた。目の前にいる彼女は、ただの中学生ではない。
自分の父親や祖父が本気で自分を叱る時のような、反発も反抗もできない凄みを湛えていたのだ。
「……！　いこうぜ！」
「あ、ああ」
男子たちは煤子に気圧されて、足早に公園を去っていった。
煤子は走り去る彼らの背をじっと見つめている。
「あ……あの……ごめんなさい……」
男子達が去っていっても、杏子は顔を上げようとしなかった。
泣き通した顔を見られたくなかったというのもあるし、自分の信仰を守ることができなかったという負い目もあったために。
「……謝ることなんて、何もないわ。あなたは自分で正しいと思ったことを貫いているのでしょう」
「でも、私……何もできなくて……」
「それを自ら折る必要なんて、ないわ」
「……でも、私、弱いし……」

「いいえ、あなたは強いわ」
白いハンカチを取り出し、杏子の頬を拭う。
上質な綿の優しい肌触りが心地よかった。
「……あなたは強く、なれるわ。杏子」
「なれないよ……」
それでも目は伏せたまま、眩しい煤子の顔を見上げることができない。
「強くなりたいのでしょう?」
「強く……なりたいよ……」
「……信じれば、必ず叶うわ」
顔を伏せた杏子の目の前に左手をもっていく。
掌を開くと、そこには先ほど折られたアンクがあった。
「……え?」
アンクは形を取り戻していた。
それどころか、材質もまるで別の、赤い金属のような光沢を放つ、どこか高級感ある物へと変質していた。
「自分の意志を貫くためには、とにかく、強くなくてはならないわ」
「……」

もう目が離せない。

アンクから、煤子の瞳から逃げられなかった。

「どうか忘れないで。諦めないで。何が起こっても、何が否定しても……たった一人、最後の一人が自分だけになっても。信じていれば……願いはきっと、叶うのよ」

†　それは8月14日の出来事だった

「……」

朝起きて、枕の横に置いたはずの携帯を枕の下から発見すると、メールが二通届いていた。

一通目、マミさんから。受信は昨日の夜中。

：明日は夕方から魔女退治に出かけようと思うんだけど、どうかな？　よければお返事ください。

二通目、ほむらから。受信はついさっきの十分前。

：今日の夕方　　巴マミと一緒に魔女退治　　必ず来て

「……」

私はほむらから受信したメール画面を見ながら洗面台へ向かった。

顔を洗った後もメール画面の絵文字を見つめ続け、朝食の席でお母さんに叱られるまで、ずっとそれだけを眺めていた。

……まあ、うん。二人が言ってるし、魔女退治、行くっきゃないよね。

恭介への見舞いは夜にしようかなとも思っていたけど、そういう事情なら仕方ない。

予定を変更して、昼間に病院へ行こう。

もちろん魔女退治が嫌なわけがない。私の本望だ。

もっと沢山、魔女との闘いを経験したいと思っている。

昨日の杏子との闘いは、個人として言いたい文句や不満も色々あるけれど、それ以上に沢山の収穫があったことが悔しくてならない。

収穫ってのは何かって、そりゃあもちろん、戦闘経験です。

お菓子だらけの結界の中に迷い込んだときに戦った魔女も、モニターみたいな変な魔女も、それぞれ一般常識の通用しない空間での戦いだったので、そういう場面に慣れる

意味では大切な闘いではあったけど。
実際に面と向いて戦う場面になった場合、異世界だろうが実世界だろうが、基本となる肉体の動きが重要だ。
魔法少女という力の上乗せがあってもそれは変わらない。
杏子との戦いではそれを思い知った。
キュゥべえが以前に言っていた、私の素質がマミさんの三分の一という話は本当なのだろうけど、それでも勝負の命運を分けるのは、別のものなんじゃないかなって思う。

剣道だって、背の高い低い、筋肉量の多い少ないは、あまり関係ないのだし。
……いけない、なんでまた杏子と戦いたいとか考えちゃってるんだ、私。
さっさと恭介の病院に向かおう。
今度は同じ道を通らないように、遠回りをして。

「やあ、さやか」
「おいすー」
だだっ広い病室には、いつも通り恭介がいた。
表情に憂鬱さは消えていないが、多少は和らいだか、気が紛れたか。

机の上の検診表と端が重なるようにして置かれている本がそうさせたのかもしれない。
「どした恭介ー、最近さやかちゃん分が足りなくて参ってるのかー」
「さやか分は昔に摂り過ぎてるからいらないよ」
「なにぃ？　毎日基準値まで摂りなさいよ」
「はは、昨日は暁美さん分を補給したから、いらないよ」
「え？」
あけみさん、と言ったか。今。
「ほむらが来たの？」
「うん、一人でね。さやかなら別に不思議なことでもないんだけど、転校して間もないのに、随分と早く仲良くなれたね」
「ははは、ま、彼女もまたさやかちゃんの友達思いな所に惹かれたのでしょう」
ほむらに恭介の話はしていない。
入院している私の友達がいるとも話していない。
ほむらが自発的に、クラスメイトの欠員の見舞いに行ったとは考え難い。　どういうことだ？
「で、本当に美人だったでしょ」

「ああ、美人だね、歳相応ではないというか……あ、恥ずかしいから本人には言わないでくれよ？」
「むふふー」
「おい、そういうの友達なくすぞ」
「どうしよっかなー」
冗談めかしつつ話す中で、恭介とほむらが何を話していたのかも、自然と浮き上がってきた。
「ごめんね。当人がいないところで、あんまり込み入ったことを話すものじゃなかったよ」
「ううん、やましいことないし、全然へーきよ」
煤子さんについての話が上がるのも当然の事だろう。
他ならぬ私が、恭介に「ほむらは煤子さんに似てる！　めっちゃ似てる！」って言ったわけだし。
「あ、恭介にこれをプレゼント」
「え？　……おー、新しいCD？」
「管楽器中心のね。ノリノリなやつ！　恭介にもそこまで馴染みあるってジャンルではないと思うよ」

「……うん、そうだね、これはあまり。未開拓ってやつかな」
「定番っぽいやつを買ってきたから、それでしっかり耳を鍛えるがいい」
「ふふ、ありがとう」
「良いって良いって」
そんなこんな、恭介と駄弁ったのであった。

いつ見ても綺麗な魔法……

「あ、さやかちゃん！」
「おーっす、まどかぁー」
待ち合わせの高架下には、まどかの姿があった。
約束の二十分前、まだほむらやマミさんの姿は見えない。
「一緒に誘われてるだろうなぁとは思ってたけど、早いねえ」
「えへへ……遅れちゃいけないかなあって」
魔法少女に対してはまだ悩むこともあるんだろう。
杏子の一件もあって乗り気は随分と殺がれている様子ではあるが、まだまだまどかの選択肢から外れてはいないようだ。
「あ、そうだまどか」
「うん？」
「メール、誰から来た？」
「え、っと、マミさんとほむらちゃ……あっ」
「あ、やっぱり思った!?　ほむらのメール」

「う、うんうん！　すごい意外だなって！」
「だよねー！」
その後、約束の時間になるまでの話には事欠かなかった。

「あら、暁美さん」
「おや。奇遇だね」
「！」
二人と一匹は約束の場所へと続く道で偶然出会った。
「一緒に行きましょうか」
「……ええ」
ぎこちなくなりそうだと内心地雷を踏んだつもりでいたほむらだったが、マミの意外な積極性に追従することにした。
肩に乗った白い宇宙人が目障りだが、それ以上に今は、先を歩く巴マミの姿を懐かしく思う。
そして思い出すのは、彼女は先輩であり、先輩であろうとする人物だということだった。

「暁美さんも銃を使うのね？」
「え？　ええ、まあ」
「そういえば使ってたね」
あなたにね。そう言ってやりたかったが、マミがいる手前口には出せなかった。
「でも見た感じでは、暁美さんの使っているものは実銃なのかしら？」
「ええ……」
あまり根掘り葉掘り聞かれると、肩の上の邪魔者にいらぬ情報を渡すことになってしまう。
曖昧に受け答えしたいものだ。
「変な意味じゃないけど、実銃の弾と私の魔法で出した銃の弾って、どっちの方が強力なのかしらね」
「……どっちかしら。弾の性質が違うから、精度や貫通力、色々なところで得手不得手はありそうね」
話題は変な方向へと飛んでいったが、自分の魔法からは路線が逸れたようなので一安心である。
これから目的地へ到着するまでの数分間、しばらく魔法と実銃についての高度な談話が繰り広げられるのであった。

マミさんとほむらは一緒にやってきた。
先頭をマミさんが歩いていたところを見るに、二人きりでもほむらに背中を見せる余裕はあるらしい。
もう二人に距離について気にすることはないかもしれない。
「早速これから、魔女退治に行こうと思うんだけど……」
「何かあるんですか？」
「ええ」
魔女退治の他にやる事？
なんだろう。思い当たらない。
「これからちょっと、魔法の弾と実際の弾を比較する実験をやろうかと思うのよ」
「はあ、実験ですか」
「来る途中で、魔法の弾の実弾の違いについて話していたの。その流れよ」
「ふーん。でもなんか、面白そう」
魔法の実験。色々できそうだ。
実弾ってことはほむらが使ってる武器のことだよね。

科学と魔法が交差しちゃうわけか。
「ほむらちゃんが使っているのは、本物の鉄砲なんだね？」
「……ええ」
モニターの魔女の結界の中でほむらが使っていたものは、魔法による生成物ではない。実弾とも言ってたし、間違いはなさそうだ。
ふむ、なるほど。
「けど、変わったところに興味を持つのね」
「これからの魔女との戦いで役に立つかもしれないでしょ？」
「……確かにそうね」
誰も渋らなかったし、何より面白いなと思ったので、実験はすぐ始まることになった。

「おー」
「これが私の使っているマスケット銃」
「綺麗……」
魔法少女に変身したマミさんが四十センチ程度のリボンを出現させると、それはすぐにマスケット銃に変化した。
白い本体には金色のレリーフが施され、あとはえっと、魔法だからよくわからない。

撃鉄部分はエメラルドのような宝石がついていて、それらが叩き合わされることによって、何が起こるのか、一発が発射される仕組みらしい。

まじまじと観察したことはなかったので、ちょっと新鮮。

「一発しか出ないけれど、威力はあるわ……狙いも付けやすいし、使い魔なら一撃よ」

「銃をモチーフにした魔法で戦う魔法少女は結構いるんだけど、その中でもマミは特に高い技術を持っているよ」

「ふふ、下調べとかしたからね」

「下調べとかして、魔法を作るんですか」

「イメージが大事だからね。私は専門家じゃないから銃に詳しくはないけど、銃を使ってみたかったから、ちょっとだけ調べてみたの」

「へぇー……」

私もイメージすれば、新しい武器とかを手に入れられるんだろうか。けど、今のサーベルが扱いやすい気もして、うーん。

「えっと、ほむらちゃんの鉄砲は……」

「これよ」

魔法少女に変身したほむらは何の音沙汰もなく、一メートル以上の大きなライフルを抱えてみせた。

光とともに現れた様子もない。唐突に出てきた感じだ。
「それはどうやって出したんだい？」
「魔法よ」
「それは解るのだが……」
「あなたが知る必要はないわ」
まともに受け答えするはずがないの、無駄だってわかってるくせに。
「マミさん。音とか、大丈夫なんですか」
「ある程度の音は結界の応用で抑えられるから、気兼ねなくできるわよ」
丁度良く転がっていたドラム缶を横倒しにして、その上に二つの銃が固定される。
リボンでしっかり固定された銃の引き金にもリボンが括られている。
マミさんが同時にトリガーを引く算段である。
銃口の先にはおしるこ缶と、ココア缶が据えられている。サイズも材質も同じだ。
更にその後ろにはコンクリートブロックが何枚か立てられ、威力も測ることができるようになっている。
じゃあ缶いらないじゃんって思うかもしれないけど、それは雰囲気作りだ。特に誰も反対はしなかったから問題なし。
ちなみに缶は二つともほむらが用意したものです。

「なんだかわくわくしますね。どうなるんだろ」
「僕としてもマミの銃と現代の銃の違いを観るのは興味深いよ」
「速さとか威力とかに違いが出るのかな」
「観てのお楽しみだね」
私はキュウベえを頭の上に乗せつつ、開始を待つ。
キュウベえはこんな見た目をしているが、結構理知的な生き物である。魔法少女よりも科学者についてた方が良かったんじゃないかって時々思っちゃうくらい。
「それじゃあ同時にトリガーを引くわよ」
「ええ」
「わー……」
さあ、実験開始だ。
固唾を呑む静寂の中、くい、とリボンが引っ張られた。
マスケットの抜けるように静かな音と、ライフルの弾けるような爆音が同時に響き、橋にぶつかって木霊した。
コンクリートブロックが灰色の煙を引き、結果が表れる。
「……缶は、二つとも木っ端微塵ね」
実弾は缶に大穴を開けて本体を潰し、魔弾はどういう原理か、缶を粉々にしてみせた。

「なるほど、どちらも威力はあるね」
「性質はやはり、違うわね」
マミさんのマスケット銃は缶の後ろのコンクリートブロックに円形の破壊痕を残した。
ほむらの実弾はそれよりももうちょっと荒っぽく、コンクリートの上半分を根こそぎ砕いていった感じだ。
「マミさんの弾は綺麗にコンクリートを壊しましたね」
「そうね、普通ならこうはならないんでしょうけど……」
「実弾とは違うね。衝突の際のエネルギーの加わり方に違いがあるみたいだ」
「でも、どっちもちゃんと後ろのブロックを壊したんだね。音すごかったぁ……」
コンクリートに近づき、両方を間近で観察してみる。
「お？」
すると、マミさんの弾による痕跡は面白いものだった
「ブロック、丸く抉れてる所がちゃんと螺旋状になってる」
「あ、本当だ」
「ちゃんと魔力の弾が回転してる証ね」
面白い痕跡だ。まるで精密な巨大ドリルで抉ったみたい。

ブロックの後ろ側に行くにつれて多少は減衰はしてるようだけど、凄まじい威力だ。

「ふーん……」

螺旋を描く痕跡を指でなぞる。熱くはない。

この傷跡を見るに、回転しながら射出された魔法の弾が、コンクリートに直撃してもまだ、その回転を維持していることがわかる。

コンクリートに衝突して魔弾が潰れ、マッシュルームのように先端を押しつぶされ、径が広がり、ブロックを両断するほど大きな穴になった。

が、弾が潰れて薄く広がっても、威力は大きくは減衰しなかった。これが一番すごい。

魔弾は回転力をほとんど衰えさせることなく、破壊のエネルギーを収束させたままにコンクリートを捻り、抉り抜いた。

破壊のエネルギーは実弾ほど拡散しなかった。コンクリートに無駄な破壊の帯を残すことなく、美しい傷跡だけを残したのだ。

実弾では再現しようのない、まさに神秘の力だろう。

……魔法の力は、周りの環境には左右され難いってことなのかな？

それだけ強いエネルギーであるとも言い換えられる。

だから私のサーベルの切れ味も、ただの刃物と思ってはいけないんだろう。

現存する史上最高の名刀なんかよりも、遥かに切れ味があるに違いない……。

先入観が強くあるせいで、上手くイメージできないけども。
「なるほど、やっぱり実際の銃とは違うんだ……うん……」
口元に手を当てながら、マミさんは何事かを考えているようだ。
結果から何か、得るものでもあったのかもしれない。
「何か気になることでもあったの？」
ほむらはマミさんの様子を見て、素直に訊ねた。
「え？　あ、ああ、そうね……ええ」
マミさんは上の空で考えていたようだが、訊ねられたほむらの言葉の残響に反応した。
「私の魔丸って、回転の力が想像していたよりも強いみたい……ちょっと参考になったわ」
「？　そう」
実験終了。収穫は、あったみたい。

大人数だと違うわね

待たせちゃってごめんなさい、早速行きましょう。という事で、私達の足はようやく魔女の結界を目指す運びとなった。

先頭をマミさんとほむら、後ろには私とまどかがついている。

ほむらがソウルジェムの光を見ながら先導し、他が追従する形だ。

マミさん以上に魔女の捜索が得意なのだからこれは当然の配置なんだけど、マミさんは前を歩いている割に手持ち無沙汰なほむらが危なっかしいのか、少し落ち着きがない様子である。

それでも魔女の気配に集中して歩くほむらに何度も話しかけるわけにもいかなくなったか、マミさんは私達に話を振るようになった。

「魔女の手下が使い魔なんだけど、使い魔は必ずしも完全に魔女の支配下にあるわけではないのよ」

「へえ、そうなんですか！」

「今まで見てきたのはみんな、かなり、えっと……その……チームワークが良かったよう

に、見えたんですけど」
　しかしその話が結構役に立ちそうだ。
「そう、チームワークは抜群にいいの……けど、それぞれがオートマチックに動く人形かといえば、そういうわけじゃないの」
「使い魔もそれぞれ、意思を持っているわ」
　前を向いたままのほむらが引き継いだ。
「状況に応じて攻撃したり、防御したりもするから……完全に魔女の手足の一部、とは思わないほうが良い」
「ええ。逆にそれを利用して、使い魔と魔女で同士討ちなんてこともできるわよ」
「マジっすか」
　やっぱり魔法少女の先輩達は良く知っている。
　連携も完璧ではない、と。ふむふむ
「そうだね。だからこそ使い魔は、大元の魔女無しにでも行動するし、人を襲うんだ」
「えっと……使い魔も、魔女になるんだっけ。キュゥべえ」
「うん、なるよ。元と同じ魔女か、別のものになる場合もあるけどね」
「……」
　まるで食物連鎖だ。

人を食って、使い魔は魔女になる。魔女が落とすグリーフシードを魔法少女が食う。
じゃあ魔法少女は何者が食うのだろうか？
まさか一巡してバクテリアじゃあるまい。
いやぁ、しかし。……考えるのはよそう。やめやめ。

「ここね」
魔法少女が平均してどのくらいの時間をかけて魔女を探すのかは知らないけど、それでも早く見つかった方だと思う。
ほむらはほんのちょっとだけ遠回りはしたけれど、かなりスムーズに目的地にたどり着いた。
寂れて半分以上のシャッターが下りた商店街の路地裏、その最奥部のゴミ溜め。
結界はそこに紛れるように埋もれていた。
「こんなところにもあるんだ……」
不法投棄された旧式の冷蔵庫のうちの一つに浮かんだ結界の文様から、まどかは一歩引いた。
「暁美さん、魔女を見つけるのが上手いわね」
「慣れてるから」

「どのくらい魔法少女として活動しているんだい？」
「早く行きましょう。周囲の人々を巻き込まないうちに」
キュゥべえの言葉を遮るようにして、ほむらは先に結界へと飛び込んでいった。
相変わらずの距離感。
「それもそうね。さ、早く片付けてしまいましょうか？」
「はい。……まどか、入るよ？」
「うん」
「ちゃんと掴まってないと落ちちゃうぞー」
「ほ、本当に怖いんだよ？　さやかちゃん」
「へへ、ごめんごめん。ま、落ち着いて」
私は彼女の柔らかな手を握って、一緒に結界へと飛び込んでいった。

家電売り場のように煌々と明るい場所へ出た。
「念のため、下がってて」
「う、うん」
まどかを私のマントよりも後ろへ隠し、サーベルを握って周囲を見る。
あるもの。冷蔵庫、テレビ、扇風機、エアコン、プリンター、照明器具。

……魔女や使い魔らしき姿は見えない。
目の前にほむらがいるだけ。
「警戒しなくても、近くにはいないわ」
「自分で確認したかったからさ」
まどかにオーケーサインを出すと、彼女は可愛らしく胸を撫で下ろした。
「待たせてごめんなさい。行きましょ」
「ええ。私が先を歩くから、ついてきて」
「あら、私も一緒に並んでも良いかしら？」
「……良いけど、前衛は危険じゃないかしら」
「そうですよー、私が前出ますよ？」
「んー。いつもより奥まった戦い方になるけど……確かにそうね、今回は後ろにいるわ」
なんてことを話している間に。
『――ぶぅうううぅうん』
「！」
どこかコミカルな、オモチャのような羽音が進行方向から聞こえてきた。
直後に姿も顕となり、私達の間に緊張が走る。
「あれは……使い魔だね」

羽根はトンボ、本体はやけにモッサモサした蛾のような異形の生物。
総評、気持ち悪い。
「気をつけて、後ろからも沢山来るわよ。私が処理するけど、みんな撃ち漏らしには備えて」
「了解です」
カトンボならぬガトンボは群れで登場し、狭い通路いっぱいに広がって突撃してくる。
このままではあと数秒のうちに私達に衝突して、鱗粉まみれにされてしまうだろう。
それだけは避けなくてはならない。
片手に持ったサーベルと、更にもう一本を生み出して、二本を両手の中でまとめ上げる。
少々重いけど威力は抜群、大剣アンデルセンの完成だ。
「じゃあまずは結構控えめの……〝フェルマータ〟！」
通路に溢れる青い流れが、使い魔を洗いざらい葬っていく。
それを見て思う。
……やっぱり昨日の杏子との戦い、そのまま続けていれば私が勝ってたんじゃない!?
マミさんが来てくれたから、ちょっと向こう寄りな判定のドローな感じになってたけ

ど……狭い通路を満たして流れるフェルマータを、避けられるはずがないのだ。
向こうもそれには気付いていたはずだ。
いや、でも、私が最後にフェルマータを撃とうとしたあの時……杏子も、何か……？
「美樹さん？　行くわよ？」
「さやかちゃん？」
「んあ？」
いつの間にか、剣を振り下ろした私の前を三人が歩いていた。
ほむらは残念なものを見るような眼で私を流し目で見て、さっさと先を歩いてしまう。
ちょっと考え事をしている間に、通路の使い魔の掃除が終わっていたようだ。
「ちょ、ちょっと待ってよー」
……また杏子との戦いを考えてしまった。
別の事を考えよう、別の事を。
私はこれから、見滝原を……時にはもうちょっと広い範囲を守っていかなきゃいけないんだから。
結界を進んでいくにつれ、広間が目立つようになってきた。

使い魔たちの動きも三次元的になり、対処が難しくなってくる。
ここまで空間いっぱいに使われると、相性が悪い。
フェルマータや適当な射撃では対処できない……かと思いきや、マミさんとほむらの二人は当然のように使い魔達を打ち落としてゆく。
私はといえば、素早く接近して斬るのみ。力を入れてやってるつもりだけど、さすがに飛び道具には敵わない。私が三匹倒す間に、二人は五匹を退治してしまう。
射線をうろちょろするのは迷惑がかかりそうなので激しくは動けないし、前衛ってのは想像以上に、なかなか怖い役柄だ。
「……それにしても凄いなぁ」
自分の周りに使い魔がいなくなったのを見計らって、ちらりとマミさんの戦況を伺う。
「レガーレッ！」
『ぶぅううん!?』
『ブゥウン！　ぶぅううぅうん！』
黄色いリボンが使い魔の死角から伸び、一気に四匹のガトンボを拘束してしまった。
良心の呵責さえなければ、動けない的ほど当てやすいものもないだろう。
「〃……〃……えい！」

マスケットが光弾を撃ち放つ。
一発だけでも威力は高いので、使い魔くらいなら容易くまとめて始末するだろう。
……ん？
けれど、そこから先に起こった現象は、マミさんの戦い方を何度か見ている私には目新しいものだった。
弾を撃ったマスケット銃が、突如にリボンの姿へと戻り、するりとマミさんの手の中から抜け出たのである。
何でだろう、いつもは撃ったら撃ちっぱなしだったのに。
「ふう……さ、次に行きましょう？」
そうこうしている間に、この広間も制圧完了。
過保護にまどかの周りをガードするほむらが最後に周囲を確認し、私達は再び歩を進めた。
使い魔との戦いにも一区切りがついたところで、まどかはおずおずと話しかけた。
「ほむらちゃんって、鉄砲を使ってるけど……それって魔法で作ったものじゃないんでしょ？」
「そうよ」

「じゃあ、えっと……ほむらちゃんの魔法って、何なのかなって……あ、ごめんね、変な事聞いちゃったかな」

気になる気持ちはよくわかる。私だって気になるもの。

ただ、まだ誰にも……私にもマミさんにも教えていない辺り、とても重要な事に違いない。

私への隠し事の本質というべきか……。

使えるようになる魔法は自分の願い事に関係するものだから……。

ほむらがうやむやにして隠す自身の魔法も当然、願い事に関わっている。

「この先から魔女の反応があるわ、気をつけて」

キュゥべえはほむらを知らない。

私もほむらを知らない。

まどかもほむらを知らない。

恭介もほむらを知らない。

杏子もほむらを知らない。

マミさんもほむらを知らない。

誰もほむらのことを知らなかった。

けど、ほむらは私を知っていた。

恭介を知っていた。
まどかを知っていた。
キュゥべえを知っていた。
杏子を知っている風だった。
ほむらは……知っている。
けれど。ほむらは。
煤子さんだけは、知らなかった。

「美樹さん、大丈夫？」
「え？　あ、はい」
魔女が近いらしい。……気を引き締めていかないと。

強いはず、なんだけど

人がギリギリ這っても通り抜けられないくらいの間隔で組まれた鉄格子に囲まれている。

広い空間は入り口以外は全てが鉄格子で封鎖されていて……。

「きゃっ!?　わ、わぁ……勝手に檻が落ちてきた……」

……今しがた入り口も封鎖されてしまったようだ。

まるで牢獄のような部屋だけど、人間にとっては広すぎて、監禁というよりは軟禁に近いかもしれない。

部屋の主はこのだだっ広い空間の奥に、どっしりと座り込んでいた。

「……あまり普段はこういうことって考えないんだけど、気持ち悪い魔女だわ」

「わたしもダメ……」

それを見て、マミさんもまどかもちょっと引いている。

「……」
「ほむらは？」
　が、ほむらの顔色はそうでもない。
「あなたはどうなのよ」
「結構平気、よく集めてたし」
「……この中で一番苦手な自信はあるわ」
「あれ、そう？　意外かも」
　私以外の三人が全て顔を顰めるその先には、巨大なヤゴらしき生き物がいた。
　厳しいトゲトゲのウロコみたいな身体。大きすぎて虫というよりもドラゴンみたいだ。
　といっても、三人にはただの気持ち悪い虫にしか見えないのだろう。
『ビィイイィイイ！』
　魔女が鼓膜によく響く声で鳴き、未発達な小さい翼を広げて威嚇した。

Ｊｏｓｅｐｈｉｎｅ
羽化の魔女ジョゼフィーヌ

「鹿目さん、ここから動かないでね」
「みんな、気をつけて！」
「任せなさーい！」
マミさんの展開する虹色バリアーがまどかを覆ったのを見届けて、ひとまずは安心だ。
「さて……」
そして以前にマミさんに見せてもらった、蝶の翅をもった魔女との戦いを思い出す。
魔女ってものは当然のように飛ぶ。
どう考えてもそれじゃあ飛べないだろ！　っていう翼やデザインなんかでも、簡単にふわりと浮いてみせる。期待を裏切ってみせる。
だからこの魔女も、見た目はヤゴだが飛ぶかもしれない。
ヤゴだし中からトンボが出てくるかもしれない。
飛ぶ可能性は高い。警戒はしておかなくては。
「みんな、あの魔女飛ぶかもしれないよ」
「うわ……」
「そうね、飛ぶ可能性は高いわ。……私の中では四番目に最悪の魔女よ」
「いや……なんていうかそういうリアクションじゃないなぁ、私が求めてたのって」

やはり皆は戦い以上にビジュアル面が気になる様子だ。
「飛んで近づいてくる前に、さっさと全部撃ち落してしまいましょう」
「賛成ね。飛び道具で良かったわ」
「……じゃあ前いってきまーす……張り切りすぎて私を撃たないでくださいね」
「ふふ、頑張るわ」
「善処するわ」
「頼むよほんとー」
いつも以上の高火力射撃の予感を背中に受け、私は巨大ヤゴへ走り出した。
さ、戦いの始まりだ。
『ビィイイッ！』
「！」
接近を試みようと前のめりになったとき、ヤゴの小さな翼が広がった。
その裏側から無数の黒い影が舞い上がり、こちらに向かってくる。
一目でわかる。道中で何匹も潰した、ガトンボの小さい奴だ。
『ビィイッ！』
「ふんっ」
真っ先に正面から飛び掛ってきた蛾をハンドガードで押し退け、魔女へ突撃する。

立ち止まったら負けだ。使い魔の群れに怯んだら劣勢になる。
大量に出現させられて、量で押される前に、なんとか一撃を当てるんだ。
そう、出来れば翼に当てなくちゃいけない。削ぐならまずは敵の機動力から。
「美樹さん、行って！」
「こっちは平気。正面に集中して」
背後から私を追い抜く弾丸たちが、わき見の範囲に広がる使い魔を的確に撃ち落としてゆく。
頼もしい応援だ。ここまでお膳立てされてちゃかっこ悪いとこ見せられないね。
「よっ、ほっ」
切っ先を一匹目に刺し込み、捻って刃の腹で二匹目を斬り、ハンドガードで三匹目を叩き潰す。
数は多い。けれど横撃を気にしないのであれば、全然いける。
「さあ、使い魔飛ばしてるだけじゃ止まらないよ！」
二刀流のサーベルで、使い魔の濁流の中を強引に突き進む。
そしてついに、というかすぐに、魔女の目の前までたどり着いた。
「おおおおッ！」
『ビィィイッ！』

最後の突撃だ。二本のサーベルを魔女に向かって投擲する。
二枚の翅らしき背中へ向けて投げられたサーベルを、使い魔達は私以上に優先してブロックしてきた。
身を挺しての防御だ。……なるほど、生半可な遠距離攻撃は通用しないってわけ。
翅は私を襲う以上に大事なことらしい。つまりは奴の弱点だ。
ならばこっちの目的も明確になったようなもの。
「！　さやかちゃん前！」
「大丈夫！」
無手、そして目の前に複数の使い魔。
使い魔の群れは一瞬だけ守りに重きを置いたが、私への攻撃の手を全くやめたわけではなかった。
「ほうら！」
『！』
空中で体を翻し、相手にマントを向ける。
使い魔達は白いマントへ突っ込み、白いベールを続々と食い破り、貫いてしまった。
『……！』
そこに私はいない。

私は浮き上がったマントの下に、今度こそ本当に、何も隔てずに魔女の目の前にいる。
「翅、もらったぁ！」
『！』
相手がこちらに反応するよりも早く、前足を駆け上る。
「せやッ！」
魔女の小さな翅のひとつに渾身の蹴りをお見舞いする。
が、私の足の甲に痛みが走った。
「……った！」
魔女の巨体が、ほんの少しだけ浮き上がる。
逆に私の体は、反動で押し戻された。
『ビッ……ビィィイイ！』
「まじっすか！」
「効いてない……！　美樹さん離れて！」
一撃に賭けた私のキックも、魔女の翅を折るには至らなかったようだ。
なぎ払われる刺々しい前足を避けて、マミさんとほむらの列に並ぶ。
「いけると思ったのになぁ！」
「まったく、逆に安心するけれど……魔女に肉弾戦なんて、無謀もいいところよ」

「なんで安心すんのよ」
「……さあ。とにかく気をつけて。あなた、あれとは相性悪いわよ」
アサルトライフルでガトンボの群れを蹴散らすほむらが私を戒める。
二人とも、迫り来る使い魔の掃除に手間を食っているのか、魔女に攻撃を加える暇がない。
「しょうがない……近づくのがダメってんなら、私も遠くから魔女を狙いますか……〝アンデルセン〟！」
遠距離かつ手数で使い魔を潰す二人のおかげで、私は心置きなく大剣を作ることができた。
そしてお見舞いする一撃は、サーベルが主力である私の最大火力。遠距離からの攻撃〝フェルマータ〟だ。
「さやかちゃんのあれが当たれば……！」
「そうだね。さやかの願いが生み出したと言っても良いほどの威力がある、直撃すれば、あの魔女はあっという間に消滅するだろう、けど……」
「え？」
「あの光線は、さやかの使う武器とは真逆をいく性質の技だ。何発も撃てるものではないし、外したときの隙は……」

剣に力を注ぎ込む。
「〝フェル〟……」
生成した大剣を素早く真上に掲げ、重さのままに、ゆっくり後ろへ下げる。
その動作だけで、体中の〝魔力〟と呼ぶらしいシロモノが吹き上がる感覚を得た。
「〝マータ〟！」
自身の体を基点にして半円の弧を描く大振りが、巨大な青白い力の流れを作って、目の前に放射される。
私の髪を前方へ靡かせる力の波濤が魔女へ襲い掛かる。
だが。
『！　ビィッ！』
「！」
「ああっ!?」
魔女は今更になって、飛んだ。
というよりも、跳んだ。真横へ跳んで、私の〝フェルマータ〟を避けてしまった。
「……！」
考え無しに放った大技への後悔と疲労感が、大剣を握る両腕を更に重くする。
「美樹さん!?」

大剣が手から離れ、床に落ちる。

今になって気付いたけど……これは……〝フェルマータ〟を使った後の疲労感が……結構ヤバい！

大技は大技だったってわけか。……いや、よくよく考えれば代償無しにこんな技を何発も放てるはずがないのだ。

私の力では、一日に三発程度が限界か？　道中の使い魔を相手に使うものではなかった……。

昨日の杏子との戦いでの肉体の消耗もあるだろうが、自分の力量を見誤ってしまったのは紛れもない事実。

反省……そして、ショックだ。

自分の魔法は、こんなものかと。

「さやかっ！」

「！」

ほむらの声に頭を冷やす。

そうだ。二人は未だ、使い魔の処理に追われている。

私がなんとかしなくては。
「仕方ない……！　もう一度近づいて、今度はアンデルセンで、そのまま……！」
床の大剣を拾おうと手をかけるが、ひどく重い。いつものような全能感がない。
「……！　無茶はしないで」
「……」
アンデルセンの重さと自分の体力を比べてみれば、すぐに解った。
これを抱え、正面の使い魔を切り伏せながら魔女を叩く？
そんな芸当は無理である。
私はそんなに身軽ではない。
「落ち着け……駄目だ、落ち着け私……」
「さやかちゃん!?」
親友の声が背中を擦る。
いつもの底抜けた〝大丈夫！〟が反射で出てこない。
代わりに浮かんでくるのは、契約する直前にキュゥべえから言われた、素質の話。
マミさんと比べれば、私は三分の一しか力がない……。
……違う、今はそんなことを考える時じゃない。
素質どうこうを考えてどうなるというのか。そんなの最初からわかってるはずだ。

私は私にできることをするだけだ。それが私の願いだろう。
私は、自分の手の届く範囲を広げるために力を願ったのではないか。
何も全世界の人々を私の願いひとつで救えるとは思っちゃいない。
この手の及ぶ限りに、守る力を欲したのだ。
だから考えるんだ、美樹さやか。
自分で作った大剣も握れない私が、あの魔女を叩き落すための手段を。

……――。

サーベル、刃とハンドガード。マント。
走る、斬る、跳ぶ、斬る。撃ち落とされる。
走る、斬る、斬る。未知数。
走る、斬る、走り抜ける。未知数。
魔女の翅のガードは堅い。私の蹴りは通用しない。
使い魔の出現は連続的で収まらない。魔女に一撃を与えるのが限界だ。
……今の私がサーベルを持ったところで、あの魔女に傷をつけることができるのか？

「……私じゃ、あの魔女には……」
敵わないのではないか。
「ああ……もう」
銃声を聞くだけで、私は何もできなかった。
足が動かない。打つ手無し。声を上げることもできない。
無力感と挫折が同時に私の心を襲う。
「美樹さん」
「！」
優しい声で呼ばれた私の名前に、正気が戻ってきた。
「駄目そう？」
マミさん。……ああ、ごめんなさい。私ったら、もう……。
「……すみません。私には、あの魔女を倒す力がありません」
「うん、無茶はいけないわ。一人では限界があるものね」
私の本音を、マミさんは微笑みで受け止めてくれた。
……マミさんは本当に、優しい人だ。
「ごめんなさい。近づいてきた使い魔を倒すくらいしか、今の私にはできません」
「気にすることはないわ、相性が悪いだけよ」

自分の無力さを吐露すると、何故か楽になった気がした。
……私は万能ではない。
力を願ったからといっても、最強になったわけじゃあないんだ。
……そう言い聞かせるべきだ。
深く、胸に刻むことにした。

それがあればお菓子の魔女にだって勝てそうね

「……私は、近寄ってきた使い魔を斬る！」
できることを宣言し、私はその言葉通りに心を切り替えた。
今は自分にできることをやろう。
ほむらの言う通り、この魔女と私との相性が悪いのは間違いない。
魔女が生み出す無数のガトンボを相手にするのは、サーベルでは無理だ。かといってそれをくぐり抜けて堅牢な魔女にダメージを通すのもかなりしんどい。
「私が……」
「私が魔女の相手をするわ」
代わりを務めるのはマミさん。だ、そうだがほむらの顔は難色を示している。
「……あなたの技では準備時間が長すぎる、私ならすぐに使い魔ごと魔女を倒せるわ」
なんですと。
「ええ、あなたの魔法は底知れないものを感じる……使い魔ごと、すぐに魔女を倒せるかもね」

「なら」
「けど、ここは私に任せて」
休みなくマスケットを打ち続けるマミさんが微笑んでみせた。
「試してみたい技があるの。成功するかわからないから、今まで使わなかったけど……お願い」
新しい技の試運転。ほむらは少し悩んでいるようだったが。
「わかったわ」
「ありがとう」
快諾した。
うん、色々試すのは良いことだと思う。
……その間、私はサポートに徹しなきゃね。

戦闘中、マミさんが手を休めた。
大砲でもなんでもない、普通のマスケット銃を一挺だけ魔女に構えている。
彼女の手が休まったことで何が起こるのかといえば、使い魔の撃ち漏らしだ。
無尽蔵に襲い掛かる使い魔は、ほむら一人だけでなんとかなるものではない。
「さやか！　時間稼ぎを！」

「おっけー！　任せて！」

一本のサーベルを両手で握り、間合いに入った使い魔を斬ってゆく。

幸いにして脚はよく動く。腕は疲弊しているが、これなら広い範囲にも隙なく対応できる。

「時間はかけさせないわ……少し集中するだけ」

「はい！」

マスケット銃で何をするのか、それは私にも興味がある。

そのために、私はマミさんを守らなくては。

――……私の魔法には力が備わっている、必要なのはそれに技術を乗せること

――私にはちゃんと力がある、技術もある……佐倉さんだけじゃない、美樹さんだけじゃない

――力を込めて撃つだけが、私の魔法の終着点ではないはず

――……私と佐倉さんの今の距離感が、私の限界ではないわ

私は激しく立ち回る最中、マミさんの眼が鋭くなったのを見た。

そこにいつもの柔らかな余裕はない。

凶暴な獣に照準を合わせる狩人のような、一発に集中する眼だった。

――……自分が放つ弾をイメージする

――私の生み出す魔力の、最も乱暴な形……弾けて回るエネルギーの魔力

――私の銃をイメージする

――弾を包んで押さえ込み、フリントの衝突で開放する、システムの具現

――けど忘れてはいけない。私が生み出す銃も弾も全てが私の魔法

――……暁美さんの使うような実物ではない

――これはただのマスケット銃ではないし、鉛の弾丸でもない

――私の魔力から生まれた同じもの……それなら！

――撃った後に役目をなくす銃自体を、魔力の弾の回転に乗せる事も――可能！

「〝ティロ・スピラーレ〟！」

「――」

間合いに入った使い魔をひとまずは片付けた時、丁度マミさんが発砲する瞬間を見ることができた。

光る銃口、あふれ出す光弾。

「解けて！」

「！」

光の弾が放たれると共に、それを包んでいたマスケット銃自体が元のリボンに還元される。

いや、それだけじゃない。リボンに還元されたマスケット銃は、その端を光の弾丸に繋げており、弾の射出と同時にくるくると螺旋状にほどけていく。

弾に引っ張られるリボンの銃はまるで、解けてゆく毛糸のようだ。

銃をリボンに解ききった弾丸は、真っ直ぐ魔女へと飛び込んでゆき――

「――広がれ！」

『!?』

魔女に当たる直前で、周囲に無数のリボンを放射した。

使い魔を貫きながら、奴らの動きを止めながら伸びるリボン。

それはまるで、蛾を捕らえる蜘蛛の巣のようだった。

『ビィッ……！』

「あら、ちょっと痛かったかしら？」

リボンの炸裂弾。咄嗟に浮かんだ言葉はそれだった。

モニターの魔女の結界で見た、〝リボンの花火〟とは違う。
光の弾から展開された無数のリボンは、弾に収束した魔力と回転力を開放し、銃を構成していたリボンを分割して撃ち出したものだ。
「うん。やっぱり、普通に操るリボンよりも威力が段違いね……！」
放射状に伸びるリボンに貫かれた使い魔は消滅し、魔女の堅い外殻にさえヒビを入れていた。
そして魔女に触れるリボンは巻きつき、そのまま巨体を拘束する枷となっている。
「なにこれ……！」
「なんてことだ……すごいよマミ！　まだまだ強くなれるなんて！」
「ふふ、上手くいったわ」
その新技は大味な大砲で魔女を消し去るわけでもなく、一発で魔女の弱点をスナイプするものでもなかったが、目に見えてボリュームを失った群れる使い魔の塊に、紛れもない〝必殺技〟であるのは間違いない。
なんていうか……使い勝手の良さが凄いのだ。
「でもまだよ。この技のいいところは、コツさえ掴めば何発でも撃てるってことなんだから」
スカートを広げ、中からマスケット銃が四挺落ちた。

「……まさか」
「ふふ、まさかよ」
銃口は無慈悲にも、拘束され動けない魔女に向けられる。
……南無。
「まだ慣れていないけど……こうして一発一発に、ただ集中さえすれば、」
マスケット銃の弾丸が新たに撃ち出され、動きの鈍った魔女へと突き進む。
が、翅の裏側から生み出された使い魔は弾丸を防ぐためにその身を投げ出した。
「発動を失敗することもなさそうね」
使い魔の壁に命中する寸前で、弾丸は再び炸裂する。
弾から伸びる無数のリボンが魔女へ放射され、帯は使い魔を貫き、引き裂いてゆく。
使い魔の献身的な防御をもってしても防ぎきれなかったリボンは魔女の外殻に突き刺さり、更なるダメージを与えた。
と、そこまで私が観察していると、目を休める暇もなく、三発目の弾が魔女へ向かっている。
バン、と輝き弾け、幾条もの帯を突き出す弾丸。
放射状に展開したリボンは結界の壁や床に突き刺さり、ひとつの堅い檻としても機能していた。

それが一発一発と打ち込まれるごとに、相手にとっての窮屈さを増してゆく。
「ちょっと慣れてきたかも」
四発目のティロ・スピラーレが炸裂する頃には、使い魔が盾を買って出る飛行スペースはなく、リボンの放射線は全て魔女に突き刺さった。
「まさか……あなたがこんな技を使えるなんて……」
「ふふっ。最近は美樹さんや佐倉さんにのまれちゃった所があったけど、どう？　私のことも戦力として見直してくれた？」
「……いいえ、やっぱりさすがよ、巴さんは……」
「こ、これでも普通の一発と同じ魔力っていうのが信じられないっすねぇ……」
本当にいつも使ってるマスケット銃一発でこれなのか……。
燃費が良すぎるというか……。
「弾の回転エネルギーを利用したリボンの展開。マミが得意とするリボンの操作ではなく、勢いを乗せた爆発と表現した方が正しいね」
「リボンの爆発……」
「まどかのイメージで言うなら、クラッカーに近いかもしれないね」
「……なんか、おしゃれだね？」
「いやいや、危ない技だと思うよ……威力は火薬なんてメじゃないだろうね」

そりゃそうだ。
少なくとも私のキックより何倍も強いのだから。

『ビィ……ビィィ……』
黄色い蜘蛛の巣に囚われた魔女は、全身を貫かれて相当に弱っている。
翅にもリボンが貫通し、飛ぶことも使い魔を出すこともままならない様子だ。
「それじゃ、終わりにしましょうか？」
「ええ」
「やっちゃってください！」
余裕ありげにニコリと笑って、マミさんは大きな大砲を出現させた。
相手が動かないためか、それとも機嫌がいいためか、いつになく優雅で、美麗なポージングだった。
そして最後の一発が轟く。
「〝ティロ・フィナーレ〟！」
魔女の結末については語るまでもない。

「はい、おわり」

ティーカップ片手に、マミさんはこちらに微笑んだ。
背中で崩れてゆく結界の演出が、相変わらず格好良くて惚れ惚れする。
「うぐぁー、経験不足だなあ……」
それと比べて私といったら、もう。
今回はダメダメだ……魔女との戦いではほとんどほむらとマミさんだけのものだった。
反省点が多いな……それに、課題も沢山見つかった。
考えなしのフェル・マータなんかはもう馬鹿の極みだ。なんであそこで撃った？いや、そもそも最近あのビームに依存しすぎてたか……。
「さやかちゃん」
「うーん……あ、まどか。なに……？」
「上達と進歩を焦っちゃだめだよ？」
「……うん、うん、そうだよなあ、うん」
「いつも言ってるじゃない。ね？」
「はは、参った参った」
「てぃひひ」
いつかまどかに言ったことのある言葉を、そのままに返されてしまうとは。

ああもう、本当……魔法少女になってから舞い上がりすぎているのかもしれない。
こりゃあまた、竹刀で素振りをする毎日に戻ってみる必要もありそうだなぁ。

「お疲れ様」
「ええ、暁美さんもお疲れ様……はい、グリーフシードよ」
「私の取り分はいいわ、まだしばらくは……」
「堅いこと言わないで、ほら、受け取って?」
マミさんから差し出されたグリーフシードに、ほむらは近所の人から食べ物をお裾分けされる主婦みたいになっている。
「……私はもともと、取り分を少なくして協力している立場だから……」
「もう、今更そんなことは関係ないわよ、私は暁美さんを信用してるもの」
ほむらの手にグリーフシードが、半ば強引に握らされた。
厚意を手渡されたほむらはマミさんとキュゥべえを忙しく見比べながらあたふたしている。
……そんな表情も、なんか、良いなと思った。

魔女を倒し終えたその後は、マミさんの家でちょっとしたおやつタイムだ。

色々な形の手作りクッキーと、やっぱりいつ飲んでも美味しい紅茶が振舞われた。
「んーー！」
まどかの顔を見ればその質の高さもわかっていただけよう。
「ふふ、美味しい？」
「カリッとサクサクで美味しいです～……」
「ありがとう。私、クッキーだけは沢山作ってるから、得意なのよ」
「ほへぇー」
と、関心しつつ色の違う三枚を同時食い。
プチシリーズも真っ青なさやかちゃんの食欲を前にしては、クッキーなんぞ晩飯前よ。
「ほい、キュゥべえにも」
「わーい」
「……ちょっとさやか」
「ダメよ美樹さん」
「え？」
「キュゥべえは沢山食べるから、一日に三枚までって決まってるの。太っちゃうでしょ？」

キュゥべえの食事、マミさんが管理してるんだ……。
「ひどいよマミ。僕はいくら食べても太りはしないのに」
「だーめ」
「巴さんの言う通りにしなさい、往生際が悪いわよ」
「君はここぞとばかりに辛辣だね」
しかしキュゥべえが太る、かぁ。
気になるな。
「どれどれ」
「きゅ」
キュゥべえの体をひょい、と持ち上げてみる。
膝の上に乗せ、耳から伸びているよくわからない腕のようなものを触る。
「あまり引っ張らないでくれよ」
「うん、耳も気になるけどね、私はどっちかと言えばこっちの方が」
「痛っ」
キュゥべえの背中に描かれた赤い模様に爪を立ててみる。
「あれ？　開かない。ここ前に開いてたよね？」
「あ、開かないって！」

「ちょっと美樹さん！　いじめないの！」
「あはは……」
「いっつもグリーフシード食べてるから、中はどうなってるのかなーって！　ちょっと見せてよ！」
「千切れる千切れる！　割れる！」
「え、割れるとどうなるの!?」
「誰か彼女を止めて!?」
「その必要はないわ」
「あのさやかちゃんは私じゃ止められないです……」
もうちょっとで開くかなと思ったところで、マミさんに後頭部をチョップされて断念となった。
ほむらはずっと紅茶を飲みながら騒動を見ていたが、どことなく楽しそうな様子だった。

少しは心配にもなるわよ

† 8月15日

夕陽を背にした煤子の影が、真っ直ぐ杏子へ伸びている。
影の中の杏子は竹刀よりも遥かに長い棒を握り、煤子に立ち向かっているように見えた。
対して煤子の手の中に納まっているものは、ほんの三十センチ程度の枝切れに過ぎない。
「はぁ……はぁ……！」
「火と活力の象徴……棒はどこにでもある一般的な生活の道具、あるいは素材。けれどそれは武器にもなるわ……ねえ杏子。棒の強さって何だと思う？」
「棒の、強さ……？」
「棒が武器たり得る理由よ」
杏子は手元の棒を見た。とはいえ、情報量など少ない得物だ。答えはそういくつもない。

「……長い」
「そう、長さよ」
煤子は右手に持った小枝を掲げる。
掲げられた小枝の影はグンと伸びて、地面の上に一本の木を作った。
「長い……それだけがシンプルな一本の物体に、武器としての力を与えたの」
「……けど！」
「けど？」
「……まだ、全然……一回も、あなたに当てることができていないです」
少女の言うとおりだった。
まだ始まって十分の〝実践〟の開始だったが、杏子の１ｍの棒は未だ、煤子の小枝に払われてばかりなのだ。
「棒はどこにでもある道具。そして貴女は、それを持って強くなる。もちろん何も持たずに強くあるべきとは思うけれど……それを手にすることで、貴女は誰にも邪魔されなくなるわ」
「でも……これは、ただの棒です」
「ええ。目を凝らせばどこにでもある棒、長い物……それには刃はついてないし、鉄製でもない。けれど使いこなすことが出来れば、長い刃物や鉄製の警棒よりも、遥かに頼れ

る道具になるわ」

そう言って、煤子は手に持った小枝を足元に放り捨てて、傍らに控えさせておいた木の棒へと取り替える。

杏子が持つそれと同じ太さではあるが、２ｍ程の長い棒だった。

「まず棒というものは、長い」

「っ！」

棒の端を握り、それを自然体で掲げ、振り下ろしただけだった。

が、それだけの動作で既に煤子の棒先は、杏子が構えていた棒をコツンと叩いた。

「相手よりも先に届く。それだけで長さは利点になるわ」

「……」

「そして相手より長ければ、相手の攻撃は届かない」

「！」

棒をこちらに向けた煤子が、ゆっくりと歩み寄ってくる。

ぼんやりしている間にも、相手の先端は杏子の腹を優しく小突いた。

杏子の持つ短めの棒は、どう足掻いても煤子には届かず、空を切るばかりである。

しかし振り回しているうちに、偶然ではあるが煤子の棒を叩いて、地面へと叩き落した。

「あ……」
「これが弱点よ。長いから振りは遅いし、横は当てられやすい。かわされやすい」
「……だから私のは、何度も」
「相手が避けられないような棒の使い方を教えてあげるわね」
「……！　はい」

†　それは8月15日の出来事だった

：じゃあそろそろ出るから、いつもの所でね
：うん！　また後で！

というようなメールをいくつか交わして、携帯を仕舞い込む。
昨日の魔女との戦いのこともあって、そんな私を気遣ってか、まどかは朝から体調を気遣ってくれたのだ。
……まどかに心配されるほど、参って見えたか。昨日の私は。
それともまどかの人を見る目が良いのか。

うーん、やっぱりまどかは私の嫁だな……。

「あら、鹿目ちゃん？」

「うん。あ、やっぱり塩取って」

「はい」

朝ごはんの蒸かし芋に一つまみの塩をかけて、半分齧る。

朝の忙しい時間にバターを付ける動作がもどかしくなったのだ。

本当はバターの方がいいんだけどね。滑るからね。

「最近部活の道具持っていかないじゃない、どうするの？」

「部活は……やらないことにしたの。どうにも合わないわ」

「確かに揉めたりしたけど、勉強の方だって大丈夫なんだからまた戻っても……」

「女子中学生は忙しいのー」

両親にはやめた理由をはっきりとは伝えていない。先生の方からも伝わっていないらしい。ま、そんなもんだろう。

最後の一口を塩味無しで詰め込んで、鞄を肩に掛ける。

「ほいじゃ、いってきまーす！」

「うん。いってらっしゃーい、車に気をつけてね～」

今の私は、部活よりも大切なものを見つけたのだ。

マミさんは昨日、自分の魔法をあそこまで応用し尽くしてみせた。
リボンを変形させて銃にして、変形解除してリボンに戻す。
砲身自体を第二の弾にしてしまうという、無駄のない攻撃だった。
黄色い蜘蛛の巣は弾けて広がる毎に、相手の行動範囲を奪い、ダメージを与えてゆく。
……美しかった。
マミさんの魔力に対する計り知れない理解と経験が、あそこまでの圧倒的な攻撃技を生み出したんだ。
けれど私の魔法といえば、なんだ？
剣を握って、根性と見切りで掻い潜って一撃を浴びせる。
そのシンプルな戦術はどこまでも極められるだろう。けどそれは、あくまでも現実的な動きとしての技量でしかない。
魔法少女としての私の力は、まだまだ眠っているはず。
まさかアンデルセンを生み出して、そっからビームをドバーだけじゃないでしょう。
……ないでしょう？　多分。きっと。
……ビームだけだったらどうしよう
あのエネルギーの放出技は、あくまでも大剣で扱える基本的なものであってほしい

……。

もっと応用が利く、魔女に対抗できる技を手に入れたいところだ。

魔女を一人で倒せないだなんて、そんなんじゃ未熟すぎる。

そんなんじゃ……杏子と戦っても負けちゃう。

「いや……だから、杏子のこと考えてもどうしようもないって」

いつもの待ち合わせ場所が見えてきた。

「おはようございます、さやかさん」

「おはよー」

「おっはよう」

手をひらひらと振って挨拶する。

もう既に三人とも、待ち合わせ場所に到着済みのようだった。

三人ってのは要するに。

「おはよう、さやか」

「おいす～、おはよーほむら！」

ほむらも一緒だ。

仁美やまどかとは立ち位置に距離もあるが、数日のうちに私達の空気感にも馴染めて

いるように見える。
　まどかも仁美も話しやすい性格だ。きっと残りの僅かな距離感も埋めていけるに違いない。
「んじゃあ、行きましょっか」
「そうね。急ぐほどではないけど」
「ふふ、ゆっくり歩いて行きましょうね」
　こうして大人数で歩くのも良いものだ。
　お互いに気心も知れてきたし、まどかの顔色も悪くない。ほむらに慣れてくれて本当に良かったよ。
　……ふーむ。まどかは今朝はサラダトースト……いや、ハムサンドトーストを食べたようだ。
　トマトは家庭栽培だっけ。まどかパパはホントすごいなぁ。
　仁美の朝食はちょっと解らないけど、問題なく済ませたことを疑う余地はない。
　多分和食だろう。
　ほむらは……あ。
　こいつ結構不健康な朝食とってるなぁ。綺麗な髪なのに勿体無い。
　……と、ここまで色々思ったことはあるけど、一つでも喋ったら大変なことになる。

まどかの〝なんでわかるの？〟欲しさに私生活にずかずか足を突き出すのもマナー違反だろう。解っていても言うのはナシだ。

本当は詮索するように見るのもいけないことなんだけど、見えちゃってわかっちゃっちゃうものは仕方ない。

「さやか」

「ん？」

前でまどかと仁美が話す姿を眺めながら、ほむらが静かに訊いてきた。

「魔女退治は、辛いかしら」

「ん、んー、心配してくれてるの？」

「……あなた個人だけの問題じゃない、だから皆のために心配しているのよ」

「あっはは、なるほどなぁ」

素直に私が心配って言ってくれたっていいじゃないのよさ。

本心なんだか、恥ずかしがってるんだか。それとも別の理由？

「魔女退治は……そうだね、壁に当たっちゃったかなとは思ってるよ」

剣という武器の弱点。近づけなければ意味が無い。

相手が魔女でも槍でも同じこと。リスキーな武器で、私は戦っている。

「けどまだまだ出だしだもんね、挫折するのは早いと思うよ」

「……私達は遠距離からカバーできる。一人でやろうなんて、あまり思いつめるのは」
「頼らざるを得ないときにはもちろん頼んじゃうよ。迷惑はかけられないしね」
けれど、私は強くならなくてはいけない。
どんな魔女を相手にしても、一人で戦えるくらい強くなくては、街の平和を守るなんて不可能だ。
そのためには今のままじゃ不十分。
剣術だけに頼ったスタイルではない、もっと魔法の力を利用した、融合させたスタイルが必要なんだ。
マミさんだってあそこまでの制御をやってみせた。
私もできないことはないはずだ。
「……ねえ、ほむら」
「？」
「もしよかったら今日の放課後、一緒に魔女退治というか……練習に付き合ってくれない？」
「練習？」
「うん。マミさんも一緒に……色々なアドバイスがほしいんだ」
「……」

首を傾げ、ほむらは少し悩んだようだった。
「……やらなくてはいけないことも、あるんだけど……」
「忙しい？」
「夜までなら、付き合えるわ」
「ありがとう！」
「ちょ、ちょっと」
手を掴んでシェイクする。
なんだ、ほむら。やっぱり良い奴だよ。

授業中に考えることは、摩擦力を無視して平面を転がる球の速さではない。
私の魔法そのものについてだ。
私の魔法少女としての姿は、軽装だ。
背中に白いマントを羽織っている以外には特に装備もない。
装備として生み出せるのはサーベルだ。
これはマミさんでいうところの銃や、杏子でいうところの槍にあたる魔法武器。
……マミさんの場合は基本がリボンで、銃はそこからの二次生成になるんだろうか？
まぁいいや、きっと似たようなものだろう。

サーベルは何本も生み出せる。自分の周囲ならどこにでも、パッと生み出すことが出来るのが強みだ。

杏子を目の前に戦闘している最中でも、ほんの少し手に力を込めれば瞬時にサーベルを生み出し握り込むこともできる。

サーベルは二本を手の中で重ねて握りこむことによって、巨大な大剣に変化する。

その大剣がアンデルセンだ。

サーベルよりも頑丈で、リーチは長いしその分の威力もある。

ただ魔力が枯渇してくると重さを感じるから、さすがにサーベルほどの取り回しやすさはないし、個人的に慣れた刀剣とは形も違うから、四六時中振り回していたいものではないな……。

アンデルセンの強みがあるとしたら、それはやっぱり幅の広さを生かした面での防御や……魔力を込めてビームとして放出する大技、〝フェルマータ〟だろう。

一度放てばエネルギーの波が駆け抜け、目の前の相手を一掃してくれる便利な技だ。

……けどこの技の燃費は非常に悪い。

威力も見た目に反して、杏子に直撃しても一撃必殺とはいかない中途半端さだ。

魔女へのトドメや、大勢の使い魔を掃除する際くらいにしか使えないだろう。

私の手持ちのカードは、これらだ。

……手持ちのカードでやりくりするしかない、って言葉はよく言われるけど。
私の手持ちっていうのは、本当にこれだけなんだろうか？
実際のところ、もっと他に使える魔法があるんじゃなかろうか。
そしてあるとしたら、どんな魔法なら私の戦い方に適しているのか……。
考えなくてはいけない。

私の場合は、言うまでもないものだったけど

「それでユウカちゃんたら、またやっちゃってー」
「あらあら、ふふっ」
「上からバケツでなんてねー、もうあの時は大爆笑っすっよ～」
昼休みの屋上は私達のプライベートエリアとなったようだ。
魔法少女の秘密を共有する人たちが一斉に集い、お昼の弁当を食べながら日常会話を交わす。
放課後に特訓する旨をマミさんにも伝えなくてはいけないけれど、なかなか切り出すタイミングが掴めない。
私は別に、海苔弁の合間合間に魔女を挟んで食べちゃうこともできるけれど、マミさんの場合もそうとは限らない。
数少ないとわかりきっている他人の日常の一コマを切り取るには、少し躊躇があった。
「あっ、ほむらちゃん」

悩む間に扉は開いた。ほむらが入ってきたのだ。
「こんにちは、巴さん」
「こんにちは。暁美さんもこっちきて一緒に食べましょ？」
「ええ、ところで」
おや？
「放課後にさやかが、魔法の練習をしたいという話があるのだけど」
おっふ。
ほむらは弁当の包みも開けずに、着席前にその話題を出した。
……まぁ、確かに普通は開口一番にでも言うべきことなんだけどね。先に言われちゃったね。
「あら、そうだったの？」
「え、ええ……私の魔法、マミさんやほむらに見て欲しいかなーって……」
「まだ話していなかったのね」
「あら、そういうことなら遠慮なく言って？　いくらでも手伝うわよ」
「本当ですか!?　ありがとうございます！」
「大切な後輩からの頼みだもの、ふふ」
「あはは……」

いやーありがたい。優しいなぁマミさん。
「魔法の練習か。確かにさやかには必要になってくるかもしれないね」
白猫がまどかの膝から降りて、私の肩へと飛び移った。
身軽なものだ。重さもほとんど感じない。
「昨日のマミの成長ぶりには驚いたけれど、さやかの場合はまだ充分に伸び代があると僕は予想しているよ」
「やっぱりそうなの？」
「私はいっぱいいっぱいみたいな言い方ね、キュウべえ」
「気を悪くしないでくれないか、マミ。事実、君の魔法はもう極めるところまで極めたと言えるじゃないか」
「ふふっ、冗談よ。褒め言葉として受け取っているわ」
技術の頭打ち。しかしそう言われて、マミさんは全然嫌そうじゃない。
「さやかちゃんは、まだまだ魔法少女として強くなれるの？　キュウべえ」
「そうだね。可能性は大いに……いいや、成長への道筋は確実に存在すると言ってもいいだろう」
「そこまで断言しちゃうんだ」
「もちろん根拠はあるよ」

へえ。キュゥべえは今のところ間違ったことは言わないから、かなり望みアリって感じかな。

「君達魔法少女はそれぞれ、固有の魔法を持っているものだ。マミならリボンがそうだね」

「願い事に関係するものってことかな。あれ？　でもマミさんは銃じゃないの？　私はサーベルが出たけど」

「ああ、それに関しては〝固有武器〟とでも呼んでおこうか。魔法少女が出す武器は、あくまでも後天的なものだと考えていい。さやかのサーベルも、イメージや先入観で生まれたものかもしれないけど、どうだろうね？　ほむらの場合は……」

「……」

ほむらめっちゃ睨んでる。ものすごいキュゥべえ睨んでる。

「……まあいいや。とにかく君達はそれぞれが、最低限魔女と戦うための武器をもっているんだ。それが固有武器。固有魔法とは、また少し違うものだね」

「マミさんの鉄砲は違うの？」

「あれはリボンから作り出しているものだから、多分違うわね。基本的には私の魔法はリボンなのよ」

「ほぇえー……」

ほーん……私のサーベルはどっちだ？

固有魔法か、固有武器か……。

「固有魔法の特徴は、簡単に使用可能な点にある。マミも最初は魔法の扱いが苦手だったけど、リボンだけは上手く操れたしね」

「ええ、そうね。銃なんて全然だったけど、リボンだけは……何もかも懐かしいわ……」

懐かしみむ遠い目というよりは、過ぎ去った日々を静かに見送るような、そんな目である。

マミさんの魔法少女としての過去の活躍については、あまり聞くべきではないのだろう……。

「慣れてきた魔法少女や才能のある魔法少女は、固有魔法の他にも独自の固有武器を作り出すようになる。固有武器を更に複雑化させた形態がそうだ。これはマミの大砲や、さやかが作り出す大剣などがあたるかな」

「アンデルセンかぁ」

「マミさんのティロ・フィナーレもなんだね」

「あれもまとめて固有武器の一種になるだろうね。威力は違えど、理屈は同じだ。それと、さやかのサーベルとアンデルセンを見たところ、あれらは固有武器に該当するものに見えるね」

ほほう？　私のサーベルは固有武器だったか。
マミさんは魔女との戦いでかなりのマスケット、固有武器を使っているということになるけど……私はマミさんでいうところのリボンにあたるものが無いなぁ。
「固有武器を生み出すのは簡単だよ。そう難しいことではないんだ……現にマミは、固有武器を主体に戦っているからね」
「ふふ、何でも作れちゃうわよ」
「魔法って感じがして、ステキですね」
「ありがとう」
「……杏子の、あの両剣も強化武器なんだね」
「……ああ、ブンタツね……」
マミさんは苦い顔をしている。まどかもちょっと怯え気味だ。
「杏子の？　あれって？」
ああ、ほむらは知らないんだ？
「……杏子とやりあった時に、色々とお見舞いされたのさ……」
コンクリの地面すら漕いでしまうように切り裂く双頭の槍。
私がサーベル二本から生み出すアンデルセンよりも、遥かに強い武器のように感じた。

「生み出される武器の威力や魔力の消費、強さから使いやすさはまちまちだね。これは比較のしようがないから優劣を感じる必要はないよ」
「剣二本ＶＳ槍二本で悩まなくて良いってことね」
「うん、固有武器やそれから成る強化された武器については、ひとまず置いておく形でいいと思うよ」
「ひとまず置いておくって……そしたら私、マントしか無いんスけど……」
　固有武器はわかった。じゃあ、固有魔法は？
「重要なのは形のある魔法ではなく、もうひとつの形の無い魔法だ」
「……？　形の無い魔法？」
「魔法少女としてのさやかが強くなるには、そこを伸ばすしかないと思っているよ」
「形の無い、魔法……ねえ」
　それは一体……？
　大いなる謎は予鈴のチャイムと共に闇へ解け、放課後へと続いてゆくのであった……。

　待ち遠しい放課後ほど長く果てしない時間はないけれど、自分の魔法について考えているだけでも時間は矢のように過ぎていった。

あっという間に放課後になったので、私はいつもより二割増しの付き合いの悪さで教室を出て、待ち合わせの場所へと急いだ。

とにかく、今の私は強くなりたかった。

キュウベえの話を聞いて、マミさんからアドバイスをもらって、奥ゆかしく見守ってくれるほむらからさりげない助言なんぞもいただいたりして、とにかく自分を高めたかったのだ。

「放課後のチャイムと同時に飛び出すものだから、何事かと思ったよ」

風力発電の大きな羽の影がちょっとだけ恐ろしい、待ち合わせの土手へとやってきた。

首根っこを掴んで連れてきたのはキュウベえだ。

「ごめんね。魔女退治とは関係ないんだけど、今日はたっぷり勉強したい気分なんだ」

「勉強熱心なのはいいけど、お手柔らかに頼むよ。それだけが心配なんだ」

「へへ、ごめんごめん」

なぁに、手荒な真似はしませんよ。

白い毛並みを撫でながら少し待っていると、小走りの音が近づいてきた。

まどかだろうか、と思って振り向いてみると、意外にもその人物はほむらだった。

「はぁ、走って帰るなんて、よほど続きが気になっていたのね」
「へへ、いやぁ、自分の可能性が広がる話ってのは、聞いてて楽しいもんね」
「……確かに、そうかもしれないけど」
　ほむらはキュゥべえを挟まないように私の隣に座った。
「ほむらの固有魔法って、何なの？」
「……さあ、何かしらね」
「む、そのくらい教えてくれても良いんじゃない」
「……」
　ちょっとだけ困ったような顔をしたが、すぐにいつもの仏頂面に戻った。
「左手につけている盾、あれが固有魔法にあたるのかしらね」
「ああ、あれが……なるほど」
「珍しい形の魔法だね、興味は尽きないよ」
「……なるほど、キュゥべえがいると喋りたくないんだね」
「察してくれてありがとう」
「それは酷いな、僕はみんなに教えているというのに」
「あはは、確かにそうかも」
　険悪なんだかそうじゃないんだか。

マミさんがやってくるまで、しばらくはそんな不思議な空気が続いたのでした。

人目を気にしない高架下で、三人が集まった。

マミさん、ほむら、そして私だ。まどかは私用もあってか、来れないとのこと。

まどかも魔法少女関係者とはいえ、常に私達と行動を共にする必要はないのだ。

一緒にいる分だけ魔女や使い魔の流れ弾を受けるリスクが増す。

もちろんお荷物の一言で切り捨てていいはずはない。一緒に居ることは、魔法少女に憧れるまどかにとっても、私達魔法少女にとっても意味がある。

けれど、それを解っていてもなお、まどか本人には一般人としての負い目があるらしい。

こういうことで焦らなければ良いんだけど……あの子の性格上、チクチクと自分を責めてそうだ。

「集まったね、それじゃあ話の続きをしようか」

「！」

おっと、いけない。

今はキュゥべえ先生の講義に集中しなくては。

「えっと、〝固有武器〟とは違った魔法があって、私はそれを鍛錬できるって話だよね

？」
「鍛錬というとひどく地道な印象だけど、そうだね。けれどまずは、さやかの固有魔法の特性を見つけないといけないよ」
「特性？」
「魔法少女には必ず、魔法の傾向というものがあるんだ。明確な形は無くて、これは君達魔法少女それぞれが持っている、魔法の性質だ」
「初耳ね」
「魔法少女個人のものだからね、言ってどうなるものではないんだ。言って伝わるかも怪しいし、僕から教えられることもそう多くはない」
「特性魔法って、例えばどんなの？」
「私にもあるのかしら」
「マミを例にあげるとしよう。マミの魔法特性、その性質は〝収束〟と言えるだろう」
「……収束？」
　随分と漠然とした単語が出てきたなぁ。
「マミの魔法は全体的に、エネルギーをひとつの形に形成することを得意としている」
「……それはリボンが銃を作ることにも関わるのかしら」
「大いに関わってくるね。魔法による新たな物体の創造、銃としてのエネルギーの圧縮、

回転の圧縮……今のマミは、収束という性質を体現した魔法少女であると言えるだろう」

と、おそらく褒められているであろうマミさん御当人は、照れればいいんだか話の小難しさに首を傾げればいいんだか、悩んでいる様子。

「様々な魔法少女を見てきた僕の経験上、魔法には色々パターンがあるんだ。収束、解放、修復、破壊、魅了、改竄……それぞれ得意とするものは違ってくるし、戦い方も当然変わる」

「……」

「物騒な響きだけど、破壊っていう魔法特性は魔女との戦いが楽になりそうだね」

「うん、かなり影響してくるだろうね」

「私の特性って何なのかな？　これっていわゆる、ゲームでよくある属性とか、タイプとか、そういうヤツだよね。キュゥべえにはわかるでしょ？」

「わからないよ？」

「えっ」

うっそでしょ。

「魔法特性、これは魔法少女の魔力の性質、その傾向だ。実はこの魔法特性というものは、君達が魔法少女となる契約を交わしたときの願い事が反映されたものなんだ」

あーそういう……。

「魔法特性は、僕が選択し、振り分けるようにして君達に与えているものではなく……あくまで君達の選択によって得られた、奇跡の片鱗なんだ」

願い事が自分の魔法に反映される。ふむ。

「え、っと、じゃあ私の〝収束〟っていう特性魔法も」

「マミの願い事が影響した結果、身についたものだね」

「じゃあ私の魔法特性は？　私の願い事、強くなることなんだけど」

私の魔力の性質と言われても、パッと頭の中には浮かんでこない。

力が強い？　剣を出せる……？　うーん、違う、魔力の性質とか、そういうことを考えるとそんなことではなさそうだ。

「それはまだ僕にもわからない……さやかの魔法特性については、まだまだ見出せてない部分が多い」

「観察不足といったところかしら」

「……か、観察かぁ……まぁでも、確かに」

まだまだ私は経験の浅いヒヨっ子だ。

力の出し方、自分の得意なこと。何もかも知らない魔法少女ド素人なのだ。

己を知れば百戦危うからず。強くなるためにはまず、自分の力を見極めなければなる

まい……。

「……なるほどね、まだビジョンがハッキリとはしてないけど、私にも得意な魔法があるってことか」

ちょっと希望が湧いてきたかも。

川のせせらぎだけが聞こえる。

橋の下は暗く、肌寒い。

閉じた目には何も映らない。

ただ脳裏には、魔法少女となった自分の姿を思い描く。

〝全てを守れるほど強くなりたい〟。

全てを守る、私の姿……。

「つまりはイメージ修行よ」

「砂利の上で胡坐かいて実践しちゃってるけど……さやか、効果は出るのかしら」

「キュゥべえの話を聞くに、必ず効果があるはずよ」

「……巴さん、根拠無しに言ってるでしょう」

「こういうのは思い込みを含めて、本人のイメージが大切なのよ！」

「……あなた、実際はどうなの、やらせておいて良いの」
「本人がやる気十分に望んだんだ、僕に止める権利はないよ」
「……不安だわ」

この手の届く範囲の限り、全てのものを守りたい。
暴力も理不尽も、なんでも跳ね返せる力こそ、私は欲しかった。
私の身の回り、私の目の届く限りでもいい。
自分にできる限りの全力をもって、正義の味方というものになりたい。

摩天楼の上でマントをはためかせる、マーベルなヒーロー。
屈強な鎧に身を包んだ、陰から見守る謎のナイト。
小さな村のために命をかける、サムライたち。
私が憧れた全てのヒーロー達に、私はなりたい。

漠然としすぎているかもしれない。
だとしても、それこそ私が望んだ強い者の姿なのだ。

「さやか」
「はっ!?」
キュゥべえの声に目を開く。
目の前に、夕陽に照らされた川の水面が、きらきらとルビーのように輝いていた。
「あれ？　私……」
「瞑想してるんじゃなかったの?」
「やけに長いなって思っていたら、寝てるなんてね」
目を閉じて考えている間に眠ってしまったらしい。
いやぁ、うららかな日和だから仕方ない。
「真面目にやりなさい」
「ごめんなさい」
「それで、どうだった？　自分の魔法のイメージは掴めたかしら」
「……すいません、あんまし有意義なものは思い浮かばなかったかもしれないっす」
「あら……」
「やっぱり、形の無いものを考えるのって難しいなぁ……」

「焦らずに魔女との戦いの中で探していくのが良いと思うよ」
まどかに言われた言葉と似たようなことを、キュゥべえにも言われてしまうとは。
……やはりどうも、焦って突っ走りすぎたのかもしれない。
……それをわかっていて尚、焦燥には駆られてしまう。
自分の形を捉えきれていないだなんて、そりゃあ焦るよ。

結局この日は、暗くなるまで魔女散策をして、その後に解散となった。
魔法について何も掴めなかったし、魔女は見つからなかったし、放課後はダレ気味だった。
キュゥべえから魔法少女についての興味深い話を聞けたのはいいけど、私の都合でマミさんやほむらを振り回しすぎた。
明日学校に行ったら、また改めて頭を下げておこう。
そしてこれからは魔女退治に同伴しながら、自分の魔法少女としての形を掴むよう、努めなくてはいけない。
キュゥべえの言うとおり、焦らず戦いの中から見出すのが吉であろう。
ガトンボヤゴの魔女の時みたいに、足手まといになるパターンがあってはいけない。
「早く成長しないと……」

毛布の中でまどろむ。
力不足の歯がゆい思いに懐かしく枕を掴みながら、意識が沈んでゆく。
強くならなきゃ……。

……杏子……。

いいえ、貴女も解る時がくる

†8月17日

夕陽に照らされながらの棒術訓練は、日が落ちて、体が冷える頃になるまで続けられた。

教会から少しだけ離れた場所にある空き地だ。

ここは全く人気がないため存分に動き回れるし、棒を振り回せる。周りの目を気にする必要もない。

棒が打ち鳴らされ、廃屋の壁から乾いた音が跳ね返る。

その音を聞くたびに、杏子は世界に自身と煤子だけしか存在しないような、不思議な錯覚を強くしていた。

「覚えが良いわね」

「ありがとうございます」

扱う棒は１５０ｃｍ以上もある、今現在の杏子の身の丈を越える代物だ。

最初の頃こそたびたび問え振り回されていたが、煤子の言葉を一つ二つと動きの中へ

取り込んでいくうちに、取り回しは見違えるほど上達した。
「そう、槍は距離を作る武器。退避も攻めもおろそかにはしないで……」
「えいっ！　……槍？　ですか？」
「……槍、のようなものよ」
「そうですかぁ……」
杏子は槍という言葉に最初はピンと来ていなかったようだが、しばらく棒の先端を眺めると、何かを納得でもしたのか、小さく微笑んだ。

「煤子さん、今日は本当にありがとうございました」
「ええ、良く頑張ったわ」
夜の闇が、火照った体を冷やす。
短い帰り道を二人は歩いていた。人通りの少ない道だが、そろそろ帰宅のためにやってくる人影も見え始める頃だろう。
「なんだか、体を動かすことは前からなんですけど……こういうのも、楽しいですね」
「こういうの、って？」
「あの、武道っていうか……棒術っていうか……私は戦うことって、野蛮だなって思っていたんですけど」

「新鮮かしら」
「はい！」
八重歯を見せて快活に笑うその姿は、記憶にあるどの杏子よりも輝いているかのよう。
「……ふふ、そう。意外だわ、貴女にそう思ってもらえるなんて」
「嘘じゃないですよ」
「疑ってはいないわ」
話は長くは続かない。
二人はすぐに教会の前へ着いた。二人が別れるときは、いつもここと決まっている。
〝それじゃあね〟と、煤子が口を開こうとしたその時だった。
「あのっ、煤子さん」
「なに？」
「あの。良かったら……一緒に晩御飯、食べていきませんか？」
「……え？」
「だめ、でしょうか……あの、あまり、大したものは出せないかもしれないですけど……」
「……」
控えめな口調で誘う杏子に対して、煤子はそれ以上に口ごもる。

返答にはしばらく思考の時間を要した。
「……いえ、私は……嬉しいけれど、御免なさい。すぐに、帰らなければいけないの」
「そうですか、すみません」
「気にしないで、杏子」
括った後ろ髪を強く翻し、煤子は教会の前を離れていった。
杏子はその後ろ姿を、見えなくなるまでひっそりと見つめていた。

† それは8月17日の出来事だった

……〝この〟さやかは何かが違う。
彼女が今以上に強くなったら、きっと、すごい魔法少女になる……お菓子の魔女の結界で見かけた時から、私はそう期待し続けていた。
自分の魔法を見つけ、更に強くなる。そうなれば、きっとさやかはマミ以上になれるかもしれない。
……そんな期待を秘めつつ、この三日を過ごしていたけれど。

さやかがイメージトレーニングを始めて、もう三日が経っている。
その間、さやかは魔女との戦いでは苦戦を強いられていた。
戦いを経る度に強くなることも、蕾が開きかけることもなく、さやかはさやかのままだった。
迫る魔女との肉弾戦では己の未来を探る時間なんて無かっただろうし、私達も彼女の劣勢を見て見ぬ振りをして手出しをしないということは、できなかった。
……さやかは決して弱くはない。
けれど、元々の素質の差は、あまりにも大きすぎたのかもしれない。
私やマミと比べても、魔女との戦いにおいてはやや見劣りする姿が、この三日でのさやかの印象だった……。
……こんな時、一体どうして、彼女に声をかければいいのだろう。
……長年生きてきたのに、私には……ちっともわからない。

†8月18日

「……」

天の最も上にまで届きそうな、白い入道雲を見つめていると、彼女の心はひどくざわめいた。

蒼海をゆっくりと航行する雲から目を離し、膝の上の腕時計に目くれる。

針は約束の一時間前を指している。が、それは時計が寝ぼけているわけでもなければ、煤子の気が早いわけでもなかった。

煤子はその時間を退屈には思っていなかった。ただそれだけのことである。

「……」

つい最近とも言って良い、慌しく走り回っていた日々を想えば、ベンチの上で呆けることのなんと間の抜けたことだろう。

複数人の動きを監視し、内面を窺い、カレンダーを見ては下準備に追われ、時計を見ては仮眠を取り、耳に悪いほど大きく設定した分刻みのアラーム音に飛び起きるような、張り詰めた日々を過ごしてきたのだが。

そんな生活をどれくらい続けただろう。

煤子自身にさえ、自分の過ごした時間は、もはや正確には覚えてはいない。もしも最後に出会った白猫が言っていた言葉が正しいとも限らない。

ただ、自分を背丈より遥かに博識にさせ、それらを裏付ける経験を備えている事実。それだけが、重く積もってゆく、目に見えて唯一正確な量りだった。

「……」

そんな煤子自身でも驚くべきことだったのだが、今こうしてベンチの上でぼんやりと一時間も無為に待つ己を、大きな罪だと自責することはなかった。

逆に〝暢気なものね〟と、うっすらと自分に微笑みたくなるような、穏やかさすらあった。

「煤子さーん！」

「あ……」

予定よりも何十分か早く、坂道から元気な少女の姿が見え始めた。

手を振って、無邪気に汗を振りまきながらこちらへとやってくる。

煤子は落ち着いた声色が届く距離にまで少女が近寄ってくるのを、麦藁帽子に微笑みを隠しつつ、暫し待った。

†　それは8月18日の出来事だった

第四章　矛盾の解答例

二人が来たのね

「はぁ」

ここ最近の魔女との戦いは、順調とは言えない。

そりゃ、結界の中での動きや戦いには体と頭が慣れてきたとは思う。

マミさんやほむらとの連携も上手くいってる、とも思う。

だけどそれはあくまで三人でのチームプレイが順調に動き出した、っていうことでしかなくて。

ただそれだけで、私が強くなったわけではなかった。

自分の魔法だなんて、そんなよくわからないものをイメージしながら戦うってのは結構な苦痛で、思うように動けず立ち止まったり、攻撃の手が狂ったりすることは度々あった。

特訓が実践でのリズムを狂わせている。あんまり良い傾向とはいえない。

「……メール」

：私、力になれないかもしれないけど、悩み事があったら、いつでも言ってね？

まどかから送信されたメール画面を閉じ、再び毛布の上にごろりと転がる。

メールの文面を何分か眺め続けて悩んでいたが、今は急いで返事を出す気にもなれなかった。

まどかが頼りないわけじゃないけど、人に訊いても答えを見いだせそうもない悩みだし。

「はぁ～……」

かれこれ三日になる。

こんな風に、柄にも無くうじうじと悩み続けているのであった。

そして、悩んだ私は、再びあの坂の上にやってきた。

見滝原を一望できる、ちょっと高めの静かな場所。煤子さんと一緒に過ごした、あの場所だ。

……縋ってるな、とは自分でも思う。

情けないよね。あの人だって、今の私を見たらきっとそう言うだろうな。

でも、良いじゃないか。こんな時くらい。

ベンチを独占している缶コーヒーの隣に座り、鬱憤を混ぜた息を一口吐き出す。

「……ふう」

涼しい風が吹いている。春の心地よい風だ。

何ヶ月かすれば、再び茹だるような暑さの季節がやってくるだろう。

そうすれば、このベンチの上から望める景色だって、あの時と同じように変わるはずだ。

そこに、煤子さんは居ないけれど。

「なっさけねぇ面してんなぁ、オイ」

隣に置かれたスチール缶が、ブーツの厚底に潰され、メダルのように薄くなってしまった。

ベンチに仁王立ちした少女は、傲岸な表情で私を見下ろしている。

「……杏子」

「よう」

そこには杏子がいた。不思議と、嫌悪感は無かった。

「今まで何人も魔法少女を見てきて、知り合いにもなってきたけどさ」

「ん」

「大概、あんたみたいな顔をし始めた奴は、二週間かそこらで音信不通になっちまうね」
「……まじっすか」
そいつはまずいことを聞いてしまった。
両手で頬を洗うように擦り、パチンと叩く。
「……っし、これでどうかな」
「知らないよ、そんなこと」
「はは、そりゃそうだね」
呆れたようなシスターの表情を、それよりはちょっと嘲るように真似てみた。
「顔だけ直しても仕方ないしねぇー……」
ベンチから立ち上がり、ガードレールの傍で街を眺望する。
……良い町並み。最近は大きな建物の開発も少なくなったって話だけど、まだまだ栄えた街だ。
「ねえ杏子……私に会いに来たってことは、戦おうってこと？」
「当たり前でしょ。わざわざ探したんだから」
この広い見滝原で、このちっぽけな、人気の無い場所を探すとは……本当に、杏子の戦いにかける執念っていうのは凄まじいな。
……いいや、凄いなぁとか、感心しているばかりではいけない。

今の私は、彼女のように貪欲に強さを求めるべきなのだ。
強い相手を求める。困難や、敵や、障害や……そういった壁と成りえるものを自分から探し、ぶつかってゆく。
もっともっと、杏子のようになるべきなのかもしれない。
……そう、今まではちょっと避けていた考えだけれど。
私は心の奥の方じゃ、杏子に会いたかったのかもしれない。
杏子に会って、杏子と戦いたかった。
ある意味、彼女の戦闘狂のような性格を認めることになるけれど……いいや、もう構わない。
戦闘狂でもなんでもいい。私はなんでもいいから、強くなりたい。
「……杏子」
「あン？」
「闘おう」
「……へっ、やる気、あるみたいじゃん？」
「うん」
拳を握る。
前回は、どんどん速く強くなっていく杏子に、その武器に圧されてしまった。

その状況を打破できたのは、地形の優位。……もっと広い場所だったら、善戦もできなかっただろう。

今回は今までよりもっと広い、開放的な場所だ。

苦戦を強いられると思う。だけど……闘いたい。

杏子と戦えば、私の中に秘められた力がわかるかもしれないから。

「手加減はしねーからな！」

「望むところ！」

青と赤の輝きが、互いの服を包んでゆく。

魔法少女時特有の身の軽さで、頭の中で燻っていた悩みが凍てついてゆく。

不明瞭な悩みも、見えてこない展望も、ひとまず氷の中に閉じ込める。

全ての感情が切り替わるように、右手に握ったサーベルが真横に閃く。

逆側から振られた杏子の槍と衝突し、魔法の火花が派手に咲いた。

「へえ――最初から油断はしない、良～イ反応だ……いや、というよりは同じで先手を打ちに来たか」

「変身したら戦闘開始だしね」

お互いに飛び退き、距離を置く。

私は坂の上に、杏子はガードレールの上に着地した。
黒いヴェールの中の悪魔の笑みが、唇をぺろりと湿らせる。
「……賭けをしない？　さやか」
「シスターがそんなことしていいわけ？」
「神は寛容だ、問題ないさ」
こいつ、どこの神様信仰してるんだか……。
「……賭けって？」
「簡単さ。互いに問いを出して、一回ダウンするごとにそれに答える」
「ああ……〝質問ごっこ〟ね」
サーベルを両手で握り直す。
つまり、やられればやられるほど、赤裸々な告白をしていかなきゃいけないわけだ。
別に杏子の赤裸々な秘密なんて、知りたくも無いけれど……。
けれど、本気でぶつかってやる。
「――」
七巻きの示。
0、0、省略の1の右足がコンクリートを擦り、最上段の刃が杏子の額に閃く。
「っと！」

「っ」
とはいえ流石は戦闘狂だ。
私の予兆が無いとまで言われた剣を避けてみせるとは。
「へへっ、いいね……そういう〝ダウンだけじゃ済まさねえ〟って一撃」
黒いヴェールを裾を払って直し、今度は杏子の方がこちらへと急接近。
構えは、槍の中心を持つような、一見すると長さを活かせない矛盾した形。
まさかこっちのサーベルのリーチで相手を？　そんなはずはない。
「だがなァッ！」
「ぐっ」
小細工でも決めてくるかと思いきや予想外、そのまま短い槍を振り払い、力任せな攻撃を仕掛けてきた。
しっかりと握られた槍の大振りは私のサーベルを押しのけ、体勢をも崩す。
「まだまだそんなもんじゃ、アタシの闘志は燃えないぜ!?」
懐にまで入られ、槍のラッシュが続く。
杏子のヴェールは未だ、ほんの端っこすら燃えていない。
後ろ1。四跳ねの二閃。
後ろ1、1。六甲の閂。

攻めの杏子に対して、どういうわけか、私の体は思うように動かず、圧されるがままだった。

いや……強く……なってる……!?

槍がバラバラになって、変幻自在に襲い掛かってくるわけでもない。

苦戦を強いられた双頭剣で猛攻をかけてくるわけでもない。

ただ一本の槍の攻撃と言うだけ、地形の何某すら関係なく私は圧倒されていた。

悔しいことに何もできない。

逆に追い詰められる壁でもあれば策でも閃くのだろうけど、あるのは広いアスファルトの地面のみ。

新たなサーベルも出せなければ、ハンドガードで殴るなんて器用な真似をする暇もなかった。

「――スカッと行くよ」

「――」

手元の槍が、それこそ魔法のように手の中で滑り、一気にリーチを長くする。

槍本来の凶暴な攻撃範囲を取り戻したその間合いには、無様にも至近戦に感覚が麻痺した私の胴が、バックステップに全てをゆだね、晒されていた――。

槍が私の体内を含め、扇状の軌跡を描き、振られた。

「――あ」
槍が体内を通過し、血の尾を引いて去っていった。
肺から空気が漏れる。
胃と小腸を同時に全摘出する程の手術でなければ、こうも大きな切り口は刻まれないだろう。
私の臍の丁度数センチ上に、真横に深い傷が走っていた。
「おう、クリティカルだ、決まったな」
視界に赤色が消え失せる。
緑と青の二重にぶれる輪郭線が、迫り来る杏子の姿を映していた。
「あ、……ちくしょ」
「ほれダウンだ、寝とけ」
よろめく私の膝を、ブーツの裏面が狙っている――
……ここで倒れる訳にはいかない――
ダウンだけは――
「っ……」
「おっ？　まだサーベルを振り回す余裕があったか」
剣をどう動かしたか。私自身にも……わからない。

ひとまず、杏子らしい影は距離を置いてくれた。
そして一時的に血の気を失った頭が、意識を取り戻してゆく。

危ない、危うく落ちるところだった。
おそるおそる、鈍い感覚の残る自分の腹を見る。
布を纏わない自分の胴には、半分近く切れ込みが入っていた。
血は流れていないし、痛みもない。
腹の上に金属の紐を当てたような感覚があるのみだ。
槍が振り抜かれた際に飛沫いたものが、出血の全てだったのだろう。それでも短時間、私の脳の活動を狭めたのだから恐ろしい。
「目に生気が戻ったな……まあ、胴体は相変わらずの瀕死ってとこだけど」
「……」
サーベルは構えるが、身体へのダメージは大きい。
果たしてこのまま激しく動いていいのか、否か……。
……魔法には、癒しの能力もあったはずだ。
それを使えばなんとか、この傷も治せるか……？
「ほら、さっさとダウンした方がいいんじゃない!?」

「！」

休憩なんてさせるわけもない。

杏子は弱った私に対して容赦なく飛び掛った。

槍対剣の結果というものは、古来より決まりきっている。

一対一では五分だろうという意見も散見されるが、それでも達人級が相手であれば、槍使いは勝るのだ。

「つがァ!?」

槍先が肩の骨をわずかに砕き、突き刺さる。

体は宙に浮き、茂み中に放り出された。

「……くっ……」

肩から僅かに出血している。

腹は……もう出血は無い。けど完璧に治ったわけでも無いから不安はある。

それよりも問題なのは、私の体が一度ダウンしてしまったということだ。

「さーて、お楽しみの質問タイムだ」

「……」

倒れてしまった以上は仕方ない。答えてやら無いわけにもいかないだろう。

隠すことも大してないけれど……ちょっと不安だ。

「質問だ。〝お前は何を願った〟」

……いきなり、人間の核心を突いてくるなぁ。

容赦が無いというか……いいや、そのくらい裏表が無いほうが、私には良い。

答えてやろう。私は胸を張って答えられるものを望んだのだから。

「私は、……〝全てを守れるほど強くなりたい〟……そう願った」

「……ほお」

肩に手を当て、よろめきながら立ち上がる。

わずかに滲ませた癒しの魔力は、肩の傷口に染み渡り、ダメージを修復してゆく。

「あんたにも、同じことを聞いてやる、杏子」

「ほお……そりゃ楽しみだ」

肩の傷は完全な不覚だ。けれどそれも治った。腹も問題は無い。

リベンジといこう。

腕を上げたようね

「はぁ！」
「っと！」
サーベルをもう一本増やし、二刀流で攻め込む。
相手はしっかりと槍を握っているため、猛攻をかけても大した圧力にはならないだろう。
それでも手数だけでも勝ち、杏子優勢の流れを押し返さなくては。
……が。
「どうしたどうした、随分遅いじゃーねえの!?」
「きゃ」
鎖骨に槍が食い込み、上半身が強く圧迫される。
そのまま宙へと投げ出され、心地の良いような、悪いような浮遊感を一瞬味わったかと思えば、背骨から幹へと叩きつけられた。
……尻餅だけは着くまいと、思っていたのに。

「〝いつ、煤子さんと出会った〟」
「……四年前、夏休み」
「……ほお」
鎖骨が切れてる。けど喉を裂かれなかったのは幸いだ。
魔力で治すことができれば、まだ……。
「……!?」
無意識のうちに見た自分の体の中に違和感を覚えた。
私の腹にあるソウルジェムの、既に三分の一ほどが黒く濁っていたのだ。
ソウルジェムは魔法少女の要……濁り切ったらどうなるか、考えたことがある。
最も楽観的なものだと、〝魔力が切れて変身が解ける・魔法が使えなくなる〟。
次点で〝魔力が切れて、そういう魔法少女は死ぬ〟。
最も恐ろしい可能性は……〝……〟。
……関係ない、どうせ死ぬのと同じだ。
戦闘不能というより、再起不能になるわけだ……こりゃ、参ったね。
治癒や戦闘のために魔力を使ったのが少々響いているのかもしれない。
……杏子、強すぎる……うーん、どうしたもんかな。
体を起こし、右のサーベルを杖に、左のサーベルを杏子へと向ける。

杏子は体をゆらゆらと揺らしながら、ヴェールの中に薄笑いを浮かべて、そこに立っていた。
「聞かれて無いけど答えてやるよ。アタシもあんたと同じ時期に煤子さんと出会ったんだ」
「……夏か」
「私はあの夕焼けの日々を、今でも鮮やかに思い出せる」
「私だって……あの高い夏空の毎日を、忘れたことはない」
右のサーベルも杏子へと向ける。
「……へへ、だから、なんだろうね」
「？」
「こういう闘いが……強くなった自分の実践が、とてつもなく楽しいんだ」
自分の命がかかった勝負だけど、それでもどこか楽しい。
打開策はどこにあるのか。どうすれば杏子に肩膝つかせてやれるのか。
今の私には、強くならなければならないという、魔法少女としての使命以上の楽しみがある。
「はぁあああッ！」
「無駄だってのに！」

二刀流を正面に構え、雄たけびと共に突進を仕掛ける。
愚直な特攻だと杏子はあざ笑うだろうか？だとしたら少々失望ものだ。
私は正気を失わない。いつだって頭だけは休ませていない。
杏子、あんたはどうなのさ。まだその余裕に頭を痺れさせてはいないか。
「――〝アンデルセン〟」
「！」
突き出す二刀流が混ざり合わさり、大剣を成す。
大剣となったアンデルセンは槍よりもわずかに長い。
少なくとも、サーベルよりは長いと高を括り、柄の端を握らなかった杏子には届くのだ。
「〝ハープーン〟！」
「うげぇッ」
要するにただの突きだけど、刃は見事に杏子の肋骨に食い込んだ。
だが普通の突きでは、魔法少女の丈夫な肉体を貫通することは叶わないらしい。
深く刺さる前に、杏子の身体は吹き飛んでしまった。
それでも転がっていった紅衣のシスターの飛距離には、幾分爽快な気分を味わえたものだ。

「〝あんたは人を殺したことがある〟？」
「……くは、残念だが……まだ無いんだね、コレが」
腹から漏れる血を左手で乱暴にこそぎ取り、自身の左瞼に血化粧を飾る。
赤に縁取られた鋭い目は、今さっきの言葉が信じられないほどの殺意に満ちているように見えた。
「どうも弱っちい奴相手だと、途中で興ざめしちまうんだよな……けど」
「あ？」
「アンタと本気でやりあえるなら、なんとか殺すところまでいけそうだ！」
「へえ……なら、来い！」
杏子の握る槍が二本に分かたれる。
左右の手に一本ずつ、柄のギリギリ端を握る、リーチを意識した構えだ。
その分だけこちらは得物を弾きやすいという利点もある。気負いせずに攻めていこう。
相手の槍と同じくらいの長さの大剣を持っているのだ。力任せに槍をぶっとばしてやる。
槍が大剣の先を小突く。
突いては火花、そして後退。回り込んでは突き。その繰り返しだ。

相手からしてみればヒットアンドアウェイの撹乱作戦だが、私からしてみれば一撃必殺のスズメバチが好機を狙いながらが周囲を旋回しているかのような威圧感を受ける。

「――」

無言で回り込みや突撃を仕掛ける杏子の無言には本物の殺気が籠もっている。

それでも負けてはいられない。

「ぜいやぁ！」

「っ！」

敵の動きを捕捉し、踏み込んでアンデルセンを突き上げる。

さすがに片手の槍ではアンデルセンをどうこうすることはできないようだ。

「……ッツツ」

私の刃は腕に掠ったらしい。杏子の回避もあと一歩のところで間に合わなかったか。

「へえ、動きが良くなったな。その目だよ」

「はっ、えらそーに……」

「その目をしている時が、さやか、アンタは一番強い」

「……」

アンデルセンの滑らかな刀身をちらりと覗く。

銀の鏡面に映し出された、おぼろげな私の表情は……。

「〝ブン〟――」
「しまっ――!?」
本当に一瞬の油断だったはずだ。正面に捉えていたはずの杏子が視界から消えている。
いや……大剣の後ろ、アンデルセンが生み出す死角に回り込まれている！
「――〝タツ〟！」
「ぐッ」
アンデルセンの気高い銀が割れ、赤い飛沫と一緒にあらぬ方向へと弾け飛んでいった。
「……！」
痛い。焼けるように熱い。……けど、腕を刎ねられてこれか。魔法少女だからか？我慢できないほどではない。
「良いね、ようやくちょっと燃えてきたとこだ」
「……！」
二本の槍は融合し、強化武器としての姿を見せていた。
黒い双頭のオール剣。名前は、ブンタツというのか。それは初めて知った。
「来いよさやか、こいつを使ってダウンで済むかは知らねーけどな」

さて……どうしよう。

左手はどっかに飛んで行った。

アンデルセンの先３０ｃｍは斜めに綺麗に断ち切られ、刺せなくは無いが鈍い剣先になってしまった。

自慢のリーチが大幅に削られたのはかなり痛い。

……いや、左手首から先が無くなった事の方が重大か。

しくった。相手の姿が見えないからって、迂闊に手を離すんじゃなかったわ。失態だ。そこの遊びを狙われたんだ。

「いいよ、やってやる……こっちも左手の借りがあるんだ、逃げ帰るわけにはいかない」

「その意気だ」

ブンタツ。その動きは予測困難で、切断力については試すことすら尻込みするほど鋭い。

これで闘うのは二度目だけど、前もさっきも、容易く武器を吹っ飛ばされてしまった。

ほぼ無抵抗とはいえ、アンデルセンを斬られてしまっては打ち合いを始める気にはなれない。

「そらそらッ！」

「うっ」

手も右手だけ。片手で握るアンデルセンは、ちょっと重い。
振る暇はないし、振ったとして杏子へと届くだろうか……。
なら……。
虚無さえ掴めない、拳すら握れない左手を振りかぶる。
その意図に気付きようもない杏子は、ちょっとだけ驚いたような顔を見せていた。
「やっ！」
「ぐぅ!?」
振った左手首から血液が迸る。
赤い飛沫が杏子の顔を叩き、瞳は耐え切れずに閉じた。
古典的な目潰し。悪役のような攻撃だ。けどこれが私の持てる、今の武器。
「っ」
「く……！」
隙を見せた杏子の肩口へ向けて振られたアンデルセンの鈍い切っ先が、杏子のブンタツにより遮られる。
攻撃のタイミングを悟られないよう、声を出さずに振ったつもりだったけど……。
「あぶね……」
「くっ、防がれたか」

と、私は心底悔しそうな声を出しながらも。
「うぶッ」
左足は勢いよく杏子の腹を蹴り上げる。
「よしッ！」
きた！　このまま畳み掛ける！
くの字に折れ曲がった杏子の姿に勝機を見た。
あの杏子が。あの、全く隙を見せなかった杏子が、明らかな不意を見せている。
これ以上の好機は訪れないだろう。
「ふんっ」
「ぐ」
今だ復活の兆しを見せない杏子の手を蹴り飛ばす。
ブンタツはその手から離れて、私のアンデルセンを引っ掛けて路傍へと転がっていった。
これでお互いに武器は無し。
拳と拳の戦いか、または私からの一方的なリンチがあるのみだ。
ブンタツを手放した杏子に負けるつもりはない！
「チクショウ！　テメェやりやがったな！」

「不意打ちされて悔しい!?　ざまーみろ!」
槍無し杏子、恐るるに足らず。
勇敢にも格闘戦を挑んできた杏子の胸辺りにさらなる蹴りをお見舞いする。
「ッ……!」
肺の空気を絞り出した声が漏れ、それと同時に私は更に懐へ潜り込む。
距離を置いてはいけない。ひたすらにインファイトを続けて、槍を使わせる前にボコボコにしてやるのだ。
「前もそうだったけど、徒手は苦手みたいね!」
一方的な拳のラッシュが、杏子の体に浴びせられている。
しかしさすがは魔法少女の肉体。普通なら全身打撲で真っ青になっていてもおかしくないほどは殴ったのに、それでも杏子に目立った外傷は無い。
「……!」
反撃しようと何度か腕を突き出したり、脚を振り回したり、杏子も頑張ってはいるが、どうも徒手格闘は苦手分野らしい。
その一発一発を私は難なく弾き飛ばし、着実に杏子の体へとダメージを与え続けていた。
杏子の体が弱り、動きが鈍った時こそが頃合だ。

脚を蹴っ飛ばしてダウンさせてやろう。
後は相手のダメージを見下して、自分の有利なように運び続けるだけ。
多少痛めつけるだけで斬りかえしてくるだろうと考えていただけに、良いボーナスタイムをもらえた。
「このッ、あんまし調子に乗るんじゃねえぞ……！」
「おっと」
生傷だらけの杏子も、ここまできてついにその黒いヴェールを髪留めの炎に燃やし始めた。
ようやく本気を出してくるつもりになったか。
けど無駄だよ。
今の最接近した状態からだったら、相手に槍を出現させる暇を与えることはない。
少しでもそんな素振りを見せれば、逆に私のつま先が杏子の腹に食い込むだけだ。
となれば簡単に、アバラの一本や二本は折れるだろう。
「〝ロッソ・カルーパ〟！」
「は、だから無――」
頭の中のイメージをなぞるため、足を杏子の腹部に叩き込む……その前に、私の視界を爆炎が覆い尽くした。

それが貴女の限界ではない

「な――」

勢いづいてどうしようもない体とは裏腹に、頭は至って冷静に働いた。

まず私は今、炎に噛み付かれている。

比喩ではない。真っ赤な炎の、龍らしきものを象るそれに、脚ごと胴を噛みつかれたのだ。

炎ならば体が突き抜けるかと思いきや、炎には質量らしき実体があるようで、灼熱の牙が身体の中にわずかに食い込んでいるのがわかる。

『ボォオオッ』

「や、このっ……!?」

炎の龍なんて、そんなシャレにならないものがどこから沸いて出てきたのか。

龍の尻尾を辿っていけば、答えは明白だった。

「喰らいつけ」

炎の龍は、杏子の髪飾りから伸びていた。

そして喰らい付いた龍は、軽々と私の体を高くまで持ち上げて……。

「つぐぁッ！」

鋭い弧を描きながらコンクリの地面へと飛び込み、私を叩きつけて爆散した。

「……チッ、せっかく燃えてきた炎が消えちまったよ……だがこいつを使わせるとはね。アンタ、やっぱりすげーよ」

「……」

焦げついた身体が動かない。

身体は無事か？　怪我の状態は？

とにかく、動け。立ち上がって構えろ、私。

「さて、聞かせてもらおうか……〝まだやるか〟？」

杏子がすぐそこまでやってきても、私は身体を起こせなかった。

できるのは、ただ顔を奴に向けることくらい。

……杏子の髪留めの炎が消えている。

先ほど現れた炎の龍は、髪留めの炎が膨れ上がり、変形したものだった。

炎は意志を持つかのように動き、私をぶっ飛ばしてみせた。

腕も脚も必要としない、魔法少女ならではの強力な技だ。

その発動に必要なのは、髪留めの炎だろう。

今まで使い渋っていたところをみると、一度発動させてしまえば炎が消えてしまうと

いうリスクがあったようだ。
　となれば、今の杏子の戦闘能力はかなり下がっているはず……。
「〝まだやるか〟って聞いてるんだよ」
「ぐっ」
　腹を蹴られて地面を転がる。
　ああ……杏子以上に戦う能力を削がれたのは、私の方らしい。
「さやか、あんたの全力はだいたい解った……これ以上やっても、無駄だってこともね」
「……」
　何だと。
「これも、聞かれてないけど答えてやるよ。……アタシの願いは〝何にも負けないほど強くなりたい〟だった」
「……正反対か」
「ハッ、どうだかね。ただ、アタシの願いの方が上だったってのは確かなわけだ。魔法少女としての素質とやらもね」
「……私の願いが、下だと」
「ああ、そうとも。この戦いでわかったでしょ？」
　冷えて動かなかった身体に血液が巡り始める。

「アタシはな、本当に強い奴と戦いたいんだ。そのためのボルテージを、雑魚の冷やかしで下げたくはないわけ」

雑魚だと。

「つまり、〝ワルプルギスの夜〟と戦うのはアタシ一人で十分　――その間、雑魚のアンタらには鬱陶しいから引っ込んでてもらおうって話さ」

「……」

口の中で奥歯が欠けた。もう限界だ。

「その〝ワルプルギスの夜〟ってのが何なのかは知らない」

「ぁあ？」

「それがどんなやつで、どれだけ強いのか、弱いのかも」

「なんだ、知らなかったのかよ」

「だけどそれにしたって、随分と私を見下してくれるじゃないの」

右手一本で体を支え、上体を起こす。

左腕からの流血はゆっくりと続いているが、頭に上る血流を弱めることは出来ていない。

「ああ、見下してるとも。勝負は決まったようなもんだ」

「……」

「強さを願ってもその程度じゃ、これから場数を踏んだところでたかが知れてるさ。早い話が、向いてねーんだよ」
「何……」
「あんたは弱い。まだマミや、ほむらの方が強い部類に入るだろうね」
今……左拳が無いことが残念だ。
もしも左拳があれば……右と、左とで揃っていたならば。
地を這ったまま両の拳を下へ叩きつけることも、両手で頭を掻き毟ることもできただろう。膝を抱えて泣くこともできた。
だけど今は左拳がない。残念だ。もう私の手は、右しかない。
「もし相手もその気なら、次はほむらと戦いたいもんだけど……？」
片腕だけじゃあ、この爆発しそうな気持ちを、全力で発散できそうにない。
足りない。何もかも。
「ふざけるなよ、杏子」
「……なんだ……？」
左腕が焼けるように熱い。
血と魔力が交じり合い、傷口から煙が噴き溢れてくる。
「!?　炎が、また燃え始めやがった……!?」

「まだ決着はついてない」

左手に火傷のような痛みが走り、そこに〝手がある〟という感覚が戻ってくる。

けど私の手が戻っているわけではない。手首から先は存在していないはずだ。

幻肢の感覚があるそこには、青い煙が立ち上るのみ。

けれど、幻ではない。なんとなくだけど、私にはわかる。

「……何が起きてやがる。なんだ、どうしてまだ、アンクが燃えるんだ……!?」

「……まだ終わりじゃない。まだ、立ち塞がった私を、潜り抜けさせはしない」

傷口の煙が手を形取り、拳を作る。

〝やれる〟。予知に近い確信を握り締めた。

「全てを守るなら、まだまだ強くならなきゃいけない」

ああ、そうだ。

これこそが、私が持つ固有魔法！

「こんなところで……力の限界を感じちゃ、いられないのよッ！」

「!?」

銀色の左拳が杏子の右顎に食い込む。

鈍く、それでいて弾けるような音と共に、彼女の身体はぶっ飛んでいった。

「……」

杏子を殴り飛ばした左腕を眺める。
魔法少女の格好は形容しがたいものが多いと思っていたけど、これは言葉に表しやすい方だろう。
銀で出来た篭手。そのまま、それだ。
「……へへ」
まるで騎士のようだ。
騎士。人々を守る正義の騎士。
うん、それこそまさに、私にピッタリって感じだ。
何かが足りない。弱い。そう思ってはいたけれど。
こうなってようやく、私の願いは完成されたってわけだ。
「……なるほどね、大した隠し玉だよ」
支柱のポールを二本もへし折るほどにひしゃげたガードレールから、杏子がゆらりと起き上がる。
彼女の髪留めは、今まで見たこともないほど大きく燃え上がっていた。
私でもまだ把握しきれていない強さ、それがあの炎というわけだ。
「それが全力っていうんなら……！」
「待ってよ、杏子」

「ぁあ？」

私は杏子を手で制し、そのままの手で挑発した。

「〝まだやるか〟？」

「……上ッ等！」

ガードレールを蹴り飛ばし、紅い姿が飛び掛った。

ここからが私の、本当の勝負。

全てを守るための力。その全力を示す時だ。

今の平穏や幸せを奪うことなんて

†

「美樹。あんたの彼氏、事故ったんだって?」

部活中、顧問が会議に呼ばれたのを見計らって気安く声をかけてきたのは、私の先輩にあたる人たちだった。

卒業を間近に控えた三年生。惰性で竹刀を振り続けてきただけの、どこにでもいる普通の人。

誰だってどこかで惰性で生きている。間延びした薄い生を心地よく思っている。私はそれを否定しなし、軽蔑することもしない。

だけどそんな彼女達にとって、せかせかと生きる私の存在はどうにも目障りだったらしく。

部活中も事あるごとに突っかかってくるのが難点だった。

「バイオリンやってるんでしょ?」

「大変だよね」

この手の人たちは柳に風と受け流すのが常道だ。

きっと社会に出ても、やり方は変わらないんだろう。

私の性分のせいか、鬱屈としたものは腹に溜まるけれど、我慢できないほどではない。

ああはい、そうですね、へえそうなんですか、はあわかりました。そんな感じで大丈夫なのだ。

それが上手いやり方だ。相手の下手くそな挑発に乗ってはいけない。私のセンスが試されている。そう思えばいい。

「美樹、彼氏に何かしてあげなよ」

「男子って手が使えないとヤバいんでしょ？　ほら、コレとかさ」

「アハハハッ」

私は二年間頑張ってきた。

真面目にコツコツと、真剣に。

レギュラーの座はそうやって手に入れたものだ。

けど、なんだ。

剣道？　レギュラー？

……そんなものはどうだっていい。

ああ。私にしてはよくやった方だ。
大事なものは部活動の経歴でも、戦績でも、レギュラーの座でも先輩との関係でも社会に出るまでの我慢強さ磨きでもない。
「先輩」
「は？　なに？」
「稽古しましょうよ。一対他全員でいいっすよ」
その日、私は何もかもを張り倒して、部活を辞めたんだ。

†

「来なよ」
銀の籠手を握り締め、金属音を軋ませる。
相手は槍一本。ただし髪留めは燃えている。
あの状態の杏子は、槍ひとつだとしても油断ならない。
法外な力から発揮される攻撃は、時としてこちらの合理的な防御を突き崩すことさえあるのだ。

「調子乗ってんじゃねぇよ！」

けどそれはもう、杏子だけのものではない。

法外な力なら、たった今私も手に入れたのだから。

「〝セルバンテス〟！」

「！」

流星の速さで突き出された槍を、同じように突き出した銀の篭手が受け止める。

と、いう表現は正確ではない。

「なん……!?」

受け止めているのは銀の掌ではなく、その一寸ほど先にある、薄水色の半透明なバリアーだ。

槍の先端は薄氷のバリアーに受け止められ、赤っぽい火花を吐き出しながらも、全く先へは進まない。

髪を燃やした杏子でさえも突き崩せない防御壁を展開する能力。

これこそが銀の篭手〝セルバンテス〟。

私の願いが生み出した、最も純粋な形の魔法だ。

「ツハ……手が痺れるなんざ久々だぜ、オイ！」

突きの勢いを完全相殺された杏子は、隙の無い動きで三歩退く。

間合いを開け終わった頃には既に、槍は両方の手に握られていた。
「随分硬いみてーだが、それなら一丁、力比べをしてみるしかないね」
「……ブンタツか！」
今日二度目の登場となる、双頭剣ブンタツ。
経験上、私の全ての武器や物質を斬り裂いてきた武器に、私は思わず息を呑んだ。
「シンプル、イズ、マーベラス。そっちが最強の盾を出したってんなら、いいぜ！　最強の矛でどついてやろうじゃねえの！」
杏子の武器と私の盾、どっちが強いのか。
互いに譲ることのない力が今、衝突するのだ。
「良いじゃん……来い！」
私の右手は、サーベルを握っている。
剣を自分の後ろに構えさせ、左の篭手を杏子へ向ける。
そして銀白の掌が向く先で、ついに両剣を握る杏子が動き出した。
髪留めの炎は暴走する蒸気汽車のように迸り、炎のポニーテールとなっている。
両腕で握る大重量の武器が軽々と振られ、剣の一端が私を捉えた。もう回避は間に合わない。
今まで全ての物体を切り裂いてきた杏子のブンタツ。

対するは、まだ一度しか使っていない、銀の篭手セルバンテス。
でも不思議だ。未知の勝負。
それも大一番であるというのに。
これなら、負ける気がしないわ。だなんて。そう思ってしまうのだ。
「ハァッ！」
ブンタツの刃が肉薄し、同時に青白い半透明の壁が現れる。
赤黒い刃と薄水色の盾が、紫の火花を散らし始めた。
硬度の高い金属に、錆びた鈍いドリルを全力で押し込むような音。
何から生まれたのかわからない紫色の火花が杏子の方面にだけ降り注ぎ、散っては消える。
青白いバリア越しに見える、煌々と明るい火花の濁流の中で、杏子の殺気立った目が、私を睨んでいた。
「おおおおおッ！」
「ぁあぁぁあぁッ！」
バリアは空中に固定されるべきものだ。数多のＳＦチックな漫画を読んできた私はそう考える。
だが私の目の前に展開されている薄氷のようなそれは、ガタガタと激しく振動してい

るように見えた。
その姿の心細さといったらないが、弱気になっては魔法に影響するかもしれない。
私は自分の力が絶対的な壁であることを信じて、左腕をかざし続ける。
そして信じてみればどうだ。杏子が握っている両剣だって、ガタガタと振動しているではないか。
こっちの盾が消耗しているとするなら、相手の矛だって同じことなのだ。
これは根競べだ。
「越えさせてたまるかぁ～……！」
「貫けぇ……！」
陥没し、削れゆく足下のアスファルト。
確実に消耗し、一瞬の光として散ってゆく魔力のかけら達。
お互いの武器や、バリアは、その能力が限界であることを表しているのか、段々と亀裂が入り始めている。
そして運命の、決壊の時がやってきた。
「！」
「ぐっ……!?」
ブンタツが、私の展開するバリアを貫いた。

ガラスが割れるよりも随分と派手さのない音で砕けた障壁の向こうは、青の加算のない鮮やかな赤い炎を引き連れて、勢いそのままに私へと向かってくる。

――バリアが砕けた。

ブンタツを構えた杏子が迫る。

――まだ、負けてないッ！

まだだ。まだ私のバリアが壊れただけにすぎないのだ。

まだ勝負が決まったわけじゃない。

両腕がある。両脚がある。ダウンもしていない。

私は渾身の力で、右手のサーベルを突き出した。

そして、呆気なく砕ける音がした。

「……」

「……」

私のサーベルは、刀身の半分ほどまでがブンタツの刃によって切り裂かれ、すぐに消滅した。

そして私に迫っていた杏子の体が、〝トン〟と、軽い音を立てて私の体と重なり合う。
思っていたよりも随分と華奢な杏子と抱き合うような形で、私はしばらく目を開いたまま動けずにいた。
「へっ、こんな終わり方をするなんてな」
「……呆気ない」
「ありきたりすぎるだろ、こんなのはよ」
「……ホント」
杏子が私から離れる。
私の腹部に向けて突き出していた手も、握ったを重力のまま、下へ離した。
ブンタツがアスファルトに落ちる。
ブンタツの……私のサーベルとの打ち合いによって全力を使い果たしたブンタツの、柄だけが。
私のバリア同様、杏子のブンタツも限界がきたのだ。
「矛盾ってやつの答えのひとつだ。最強の矛と盾、ぶつけたらどうなるか……」
「両方とも砕けて壊れる、ってことね」
「そういうことだ」
戦闘狂シスターは、それでも満足げにニカリと微笑んだ。

私のバリアーは砕け散り、杏子のブンタツも砕け散った。
引き分け。そういうことか。
「ははははっ！」
「あっはっはっは！」
私たちは清々しく、そこで笑いあった。
時間を忘れた風に。全てを出し切った風に。
お互いにそんな風を装っていたのだ。
エンディングを飾るに相応しい友情めいた笑い声は、たった4秒間だけのものだった。

――引き分け？
――冗談もいい加減にしろ

「〝セルバンテス〟ッ!!」
「〝ロッソ・カルーパ〟ァ!!」
私は残っていた左の篭手で、杏子は僅かに髪留めで燻っていた炎から龍を出して、お互いにぶつけ合った。

拳は杏子の顎を綺麗にぶん殴った。
炎の龍は私の胸へと勢いよく衝突した。
「ぐぇ……」
拳にぶっ飛ばされる戦闘狂シスター。
「かはっ……」
爆風にぶっ飛ばされる私。
私たちは仲良くアスファルトの上で気絶していたのだろう。後のことは覚えてない。
だから事の結末は、そんな感じだった。
お互いが、最後まで残っていた力を振り絞り、殴りあったのだ。
茜に染まりつつある青空を仰ぎ、先ほど笑いあうよりも遥かに清々しい気分を堪能した私は、悔いなく意識を手放した。

†　8月19日

「あれは……」
にぎやかな通りを避けて歩いていた、夕時の頃であった。

煤子の目は、表通りの家族連れへと向けられる。
「今度こそ失敗しないもん！　クッキー！」
「ははは、またべちゃべちゃにしないだろうなぁ」
「大丈夫だもん！」
「楽しみにしてるぞ、はっは」
成長著しい時期にあるとはいえ、彼女であることはすぐにわかった。
纏う雰囲気や、癖のある髪。あどけなさはあるが、瓜二つ。間違いない。それは幼い頃の巴マミだった。
「……」
一瞬、表通りへ出ようかとも思った。
だが彼女の両隣には、父と母がいる。
幸せな、完成されたひとつの家族がそこにある。
「……」
煤子は麦藁帽子を深く被り直すことにした。
そして、あと、時間もそろそろ近づいてきた。
なので、教会へ行くことにした。

「水滸伝？」
「はい、参考になるかなって……」
聖堂では、杏子がいくつかの本を広げて読んでいた。
特にその中でも煤子の目に付いたのは、何巻にも続く水滸伝の山である。
「ふふ、勉強熱心は良い事ね」
どこかずれているけれど。とは言わなかった。
「読書、好きなの？」
「はい！　昔から好きなんです」
「そう」
昔から。その言葉に後を口ごもる。
「煤子さん？」
「ん？」
「今、とても、暗い顔をしてましたよ？」
「うん、そうね……全てを知ったつもりで、いたのでしょうね」
「？」
「……杏子、学校の勉強もおろそかにしてはいけないわよ」
「……はい……」

杏子は、煤子の優しげに微笑んだ瞳の奥に、確かな悲しみを感じ取った。

†　それは8月19日の出来事だった

全てを自分で諦めていたなんて

「……」

苦しさに呻き、薄目を開けた。

見慣れない白い天井。　視界の隅で揺れるインテリア。

……病院でも、私の部屋でないことも確かだった。

「さやか」

「……？」

声に顔を向ける。

そこには、煤子さんがいた。

彼女は椅子に座り、私を心配そうに見つめている。

「丸二日も寝ていたのよ？」

「……二日……？」

なにを言ってるの？　二日って？

「杏子は一日だったけど」

「！」

杏子。

そうだ、私は十四歳。今は五年前のあの日々じゃない。

「杏子！」

「杏子はもう居ないわ、さやか」

「……ほむら」

彼女は煤子さんではない。ほむらだ。

「……」

見回す。白い部屋だ。

壁らしき場所には、沢山の額縁が飾られている。このセンス……。

「ほむらの部屋？」

「ええ、二人ともひどい怪我だったから、連れてきて寝かせたの」

二人とも。私と杏子だ。……同士討ち？

「ねえほむら、どっちが勝った？　私と杏子、最後まで立ってたのは……」

そこまで言って、失敗したと気付く。ほむらが私のことをジロリと睨んでいたからだ。そんなこと気にしてどうする？　とでも言いたげである。一理ある。

「凄まじい魔力の反応があったから、辺鄙な場所まで来てみたら……もう、柄にもなく血

の気が引いたわよ」
「あ、あはは、ほむらが助けてくれたんだよね……ありがとう」
「大変だったのよ、ソウルジェムもギリギリで……あ」
「ん」
左手を握り締める。
その感覚を覚え、毛布の中のそれを取り出してみれば、銀の篭手ではない生身の腕があった。
「くっついてる……これも治してくれたの？」
「……ええ、治癒するのにいくつかグリーフシードを使ってね」
「はは、面目ない……世話になりっぱなしだね、私」
杏子との白熱した戦いが、未だに頭の中に残っている。
命を賭けた戦いの中で私の力は覚醒し、新たな魔法〝セルバンテス〟を手に入れることができた。
半透明のバリアーを出す白銀の篭手。
守りの願いのために生まれた、私だけが持つ固有魔法。
「……良い戦いだったよ」
「……」

思わず震える左手を握り締めて振り返る。
ほむらはそんな私を冷めた目で見ていた。　そんな顔するなよう。
「えっと、杏子もここで寝てたんだよね？」
「ええ、彼女も重症だったから……あなたほどではないけど」
「何か言ってた？」
「……さあ。目覚めた直後は、ちょっと子供っぽかったけど」
子供っぽかった？　なんのこっちゃ。
「礼も言わず、すたこらと出ていったわよ」
ほむらが向かったのはキッチンだろうか。部屋の奥の方からお湯を注ぐ音が聞こえる。
何か淹れてくれてるのかな。
そう思っている直後、二つのマグカップを持ってほむらがやってきた。
「ＭＩＬＯ、飲む？」
「あ、ありがとう、嬉しいな」
意外なものを出してくるね。少し驚いたよ。
湯気がほわほわと立つカップ。何年か嗅いでいなかった香りが鼻腔をくすぐる。
なんだか懐かしくて、落ち着くな。

「……ほぅ……和みますなぁ」
「……」
心地よい沈黙。
ふと、壁に浮かぶ額縁を見上げる。
最新のインテリア・イメージフレームとやらだろう。　前にいいなと思って値段を調べたら、なかなか目を剥く金額だったのを覚えている。
さすがにうちで買うつもりはないけど、こうして見てみると、欲しくなってくるな。
お小遣いで足りるだろうか、なんて。
「……」
いや……違う。
よくよく見れば……額縁にあるあの絵は。まさか。
「気付いた？」
「浮かんでるあの絵って」
「ええ、その通り。あれは魔女のイメージ画像よ」
それは歯車で出来た、スチームパンクじみた独楽のようにも見える。
ほむらしいイメージフレームだなぁと薄ぼんやり思って眺めていたが、歯車の反対側にぶら下がる女性の姿を見て、暢気な気分吹き飛んだ。

「……これ、大きい？」
「良くわかるわね。全長百メートルはあるかしら」
「……百メートルだと」
百メートルの魔女がいる、魔女の結界。
そして見た感じではこの魔女……。
「浮いてる？」
「ええ。三百メートル以上は浮けるみたいね」
「……」
口を覆いたくなる気持ち、わかってほしい。
どんな規模の場所で戦えというのだろうか。
それこそ見滝原で戦ったほうが開放的に……。
「……」
「……顔色、悪いわね」
「ほむら、この魔女もういない？」
「今はまだ、いないわね」
「……どこに」
「見滝原に」

「……」

――私は、本当に強い奴と戦いたいんだ

――〝ワルプルギスの夜〟と戦うのは私一人で十分

「ワルプルギスの夜」

「！　知ってたの」

「強い奴だ、一人で戦いたい、杏子がそう言ってたんだ」

「……やっぱり、そう」

そうか。杏子はこれと戦いたかったのか……。

でも、結局これは何なわけ？

「教えてほむら。こいつ、何なのさ」

「……」

自分のマグカップを飲み干したほむらは、口元のココアを拭って話を始める。

「見滝原に、この魔女がやってきて……街を壊滅させるわ」

「未来形？　いつ来るの？」

「丁度一週間後よ」

「……」

ベッドに寝転がり、天井を仰ぐ。

真っ白な天井に、頭の中の日めくりカレンダーが七枚、横並びに配置される。

一枚一枚の上に浮かび上がる様々な予定のイメージ映像を消去。

かわりに最後の一枚に、魔女の肖像を配置。

……よし。あと一週間か。

「どうしようか考えているのね」

「うん」

「……ねえ、さやか」

「ん」

ほむらの目を見る。怜悧で、しかし何かに燃えるような目。

「一緒に考えましょう」

「うん、そうだね。それがいい」

ほむらは隠し事が多い。

けど、私はきっと彼女のこんな部分を垣間見ているからこそ、信頼しているのだと思う。

「……これが、ワルプルギスの夜対策の全てよ」
「……」
数多の図を用いて聞かされたのは、綿密な戦略だった。
予想出現位置、初撃、その後の動き、追撃。
弾道計算から爆風……何がどうなれば、中学生にこんな知識が刷りこまれるのだろうかと思えるものばかり。
いや、それどころか……ていうか、そもそも。
「この、ロケットランチャーってのは……」
「もう用意してあるわ」
「鉄塔の爆破……」
「根元付近のカラスの巣に設置済みよ」
「トマホーク……」
「川への設置は完了したわ」
こわい。
「こ、このレンズ効果爆弾群ってのは……？」
「……それについてはちょっと、時間がなかったわ。今からでも、間に合いそうにはないかもしれない」

「そうなんだ、良かった」
「良くはないわよ」
いやぁ、そんな物騒すぎるものはさすがに勘弁して欲しいわ。
「あのさ。杏子もそうだけど、ほむらもどうしてこの魔女のことを知ってるの？」
「……結構、有名だもの。魔法少女の間では伝説として語られているわ」
「伝説の魔女ねぇ……ワルプルギスの夜、かぁ」
魔女が集まるヴァルプルギスということは、どこかであったお祭りのことだったかな。
魔女迫害の時代。異端審問のため、女達を誘導尋問したり拷問じみた手法で魔女を自白させたり。女としては見ててうんざりするような凄惨な記録は多く残っている。
魔女が集まる妖しい集会……か。
魔法少女としては、聞いただけでも恐ろしいネーミングだ。
「杏子はキュゥべぇから聞いたと言っていたわね」
「それでどうしてやってくる時期までわかるの？」
「……そうね」
ほむらは私の目を見た。
……何かを、探っている？　確かめている？

「そろそろ話してもいいのかしら、この事」
「……」
この事。重い口調から発せられたそれは、きっと〝あれ〟だ。
今日まで私や、マミさんに対して続けていた隠し事。
「ねえさやか。全てを話したいと思うんだけど……気をしっかり持って、聞いてくれる？」
「うん、聞くよ。話してくれてありがとう」
「……ううん。いいえ、違うわ。聞いてくれてありがとう、さやか」

†　8月20日

「ねえ、さやか」
「ん？　なあに？」
青空の下で、乾いた木が打ち合わされている。
飲み込みが早いさやかの動きは、一端の剣術として十分に見ることのできるものとなっていた。
正面に対する煤子の動きも、さやかに追いつかれまいと速くなる。

時折麦藁帽子を抑える仕草には、さやかの確かな成長が見て取れるのだった。
「さやかは何故、毎日ここへ来るの？」
「へ？　なんで？」
「友達と遊ぶことだって……家族と一緒に過ごすことだって、出来るでしょうに」
「えー、なにそれ」
「夏休みでしょう。自分の好きなこと、何でもできるのよ」
「ここに来る理由なんて、そんなの決まってるよぉ」
頬の汗を吹き飛ばし、さやかは笑った。
「煤子さんと一緒にいるのが、楽しいからだよっ！」
煤子の軽い木刀が、アスファルトの坂を転がっていった。
「……なんで？」
さやかは不思議そうに見上げている。
「楽しいって、私と一緒にいるのに？」
「？　なんで？」
何故。
再び、そう言いたげな顔で聞き返される。
「……」

今までは子供だからと何気なく接してきたが、それが逆に、生来より途切れることのなかった緊張をほぐした。
自分が気兼ねせず、相手もそれを感じ取り、お互いが自然体になれている。
気遣いも気苦しさもない、打ち解けているという心境。
さやかからしてみれば、自分との関係は既にそこまで進んでいるのだ。疑問なんて持ち得ない。つまり。
――もう、友達なのだ
「……ああ、そういうことなのね」
涙が頬を滑り、静かに途切れて落ちた。
「煤子さん……？」
「……ごめんなさい、ちょっと、ね」
煤子の涙は止まらなかった。
「大丈夫……？」
「ええ、ごめんなさい……ほんと、私っていつでもそうなの。鈍臭くてね……」
薄ピンクのハンカチで両目を覆う。
小さなさやかは、麦藁帽子の下から心配そうに覗き込んでいた。
泣く姿を隠すように、煤子は背中を向ける。

「……あなたと、仲良くできる……できたのなら」
「煤子さん……」
「もっと早く、気付けていたら良かったのにね？」
「……」
その後、煤子は涙の訳を語ることはなかった。

†　それは８月２０日の出来事だった

甘えさせないで

私に差し伸べられた、少女の手。
彼女はとても優しく、力強くて……その姿は私に勇気をくれた。
こんな私でも大丈夫だと。
かっこ良くなれるからと、励ましてくれた。
掛け替えのない、友達の手……。
私を引き上げてくれたその手を忘れたことなんて、一度もない。

だから私は、彼女を助け出したい。
何度同じ時間を繰り返しても良い。
何年でも、何十年でも、何百年だって戦い続ける。
何を犠牲にしても構わない。
彼女を救い、また、共に歩いてゆける未来が見つかるなら。

全てはまどかのために。
私の最高の友達のために。

「そのために、ワルプルギスの夜を倒す。それが私の目的」
ほむらは静かな口調で語り終え、冷めきったカップを置いた。
歳に似合わない超然とした雰囲気。そのわりに病弱そうな細身の体。……今まで噛み合っていなかったほとんどのピースが、答え通りにピタリと嵌る。
そして……なるほどね。魔法少女が魔女になる。魔女の強さは魔法少女の強さ。
今までの話を聞けば、ほむらの行動は正しかったのだとわかる。
「まどかに契約をさせない、か。これは絶対だね」
「……ええ、絶対に」
ほむらの話を聞き終えた。
内容は長かったけれど、まとめると簡単だ。
ほむらはまどかを救うために、未来からやってきた。
彼女は何度も過去へ戻り、何度もワルプルギスの夜と戦ってきた。そして同じ数だけ負けてきた。
その中でほむらは、ソウルジェムの重大な秘密に気付いたんだ。

ソウルジェムの穢れが限界を超えたとき、私達魔法少女は、魔女になるという秘密を。

「……ショックよね」

いや、そもそも秘密だったのかもわからない。

キュゥべえに聞けば教えてくれたかな？　感情のない宇宙人だって話だけど、だとすると行動理念はあくまでも約款みたいなもので……。

「そうよね、そう……みんな受け入れられなかったもの。あの巴さんでさえ……」

……なんて考えも、今は無粋か。

私の目の前には、不安に小さく震える女の子がいる。

精神年齢はずっと上で、けれど……とても健気で、友達想いで、一途な女の子が。

……理屈をこねくり回している時じゃない。それは私にもわかる。

「よく、頑張ったね」

「え？」

よくよく見れば。

ほむらの体の細さも、顔つきも、実際のところは、彼女の性格に合っていない。

彼女は一ヶ月前までは、弱気で病弱な少女だった。

けれど、累計で何年にも及ぶ戦いを繰り返すうちに、その精神は身体を置き去りにしてしまったのだ。

鋭い目、固く結ばれた口元。
緊張を緩めない表情は、ミステリアスやクールの演出だけではない。
それはまどかを救うために刻まれ続けた、戦士の傷なのだ。
「まどかのために……大変だったよね」
「……」
「一人は辛かったよね」
「……やめて」
私がそっと彼女の頭を撫でていると、それは震えた声によって拒まれた。
潤みかけた鋭い目が、弱々しく私を睨んでいる。
「私はまだ、戦いをやめたくないの」
「……うん」
「ここで甘えたくない……甘えたら私、ダメになる」
「そっか」
年相応に縋りたいだろう。努力した分だけ使われたいだろう。
けどほむらは、その精神が実を結ばないことに気付いている。自分の性質をわかった上で、甘えないのだ。凄まじい自律心である。
なら、私にできるのは寄り添うこと。

「私も一緒に戦うよ、ほむら」
「本当？」
「もちろん。最初からそのつもりだったしね」
自分のソウルジェムを掌の中で転がし、遊ぶ。
一点の曇りもない群青は、深い海を思わせるように、静かに揺らめいていた。
これが私の魂そのもの。ポイっと捨てて魔法少女やーめたなんて事は、許されないわけだ。
「なるほどねぇ。ソウルジェムが限界まで濁ったら魔女になる……予想はしてたけど、やっぱその通りかぁ」
「ショックじゃないの」
「ううん。最初は〝死ぬのかな〟くらいに思ってたけど、あんま変わらないしね。実を言うと薄々勘付いてたし」
「……そう」
ソウルジェム。魂。その穢れなのだから、最大まで溜まって無事で済むはずはない。
ヒーローの対極に位置するヴィランが、その起源をヒーローと同じにするという設定はよくある話だ。そんな連想をする人は、案外多いんじゃないかと思う。

けど、ぽっくり死ぬのも、魔女になるのも、私から見ればあんまり変わらない、些細な違いだ。

魔女が一体増えたところで大勢に影響はしないだろう。それよりは使い魔を放置する方が深刻なんじゃないかと思う。

ひょっとするとこの法則、杏子も気付いてるかもしれないな。

マミさんは……どうだろう。知ってるのかな？　いや、説明はしてなかったし、知らないか。下手に言わない方が良いかもしれない。

「とにかく！　ワルプルギスの夜を倒す！　まどかを魔女にしない！　……この二つをクリアしちゃえば良いってことね？」

「言うのは簡単だけど……」

「大丈夫！　今までほむらが出会ってきた私はどうだか知らないけど、このさやかちゃんには、必殺の武器があるのだ！」

そう。ほむらから聞かされた、同じ時間を繰り返す話。

かいつまむ程度の内容でしかないけれど、その中での私はいずれも、この私とは違うらしいのだ。

過去での私は迷走したり、魔女になったり、情けない死に方したりと、色々やらかしたらしい。　聞いてて悲しくなってきたのは内緒だ。

だけど、今ここにいる私自身や杏子は、それまでほむらが見てきたものとは大きく違うという。

願い事も違うし、戦闘能力も大幅に〝改善された〟（原文ママ）とのことだ。

ＳＦじみた話だけど、もしもこの世界の時間の流れが束になり、平行世界になっているとするなら……今回のほむらはきっと、随分な遠い並行世界へと来てしまったのかもしれない。

もしそうでないとすれば……。

私の中にある仮説。

いや、きっとほむらも考えているであろう仮説。

……四年前に私と杏子の前に現れた、煤子さん。

彼女こそ、この時間の流れの大きな鍵を握っていたに違いない。

お手並み拝見といきましょうか

私達は人通りの少ない、廃屋の連なる路地裏へとやってきた。
解体されないまま放棄された家が乱立する、その一角。
私とほむらは、風化寸前の室外機の隣に貼られた魔女の結界に向き合っていた。
「ドンピシャだね。さっすがほむら」
「今までのも、場所は全部わかっていたから」
「なるほど……未来に生きてんなぁーほむら」
「バカなこと言ってないで、行きましょう」
ほむらはさっさと結界の中へ飛び込んでしまった。
全く、つれないやつだよ。
……今回、快気祝い前に魔女の結界へと突入したのには訳がある。
まず、私が新たに習得した魔法を確認するため。
これは、対ワルプルギス作戦の中に組み込めるかどうかをほむらが判断するための確認作業だ。

私も銀の篭手、セルバンテスを使ったバリアーがどういう性質なのか、完全には把握していないし、私自身の勉強も兼ねている。

あと……。

……私のために使い込まれて品薄状態のグリーフシードを、集めるためでもあるのです。ええ。

結界の中は、マーブル模様で埋め尽くされていた。

色は構造物によって様々で、床は黒や赤の暗いマーブル。

障害物となる半球状のものや柱などは、青や紫、オレンジといった、もうちょっと薄い色が多いか。

色分けされているとはいえ、その景色は色調からして最悪で、遠くを見ようとしても遠近感は得られず、吐き気がこみ上げてくるばかり。魔女の結界の中でも特にドギツイやつ部類のやつだ。

「でやぁ！」

『ぷぎゅ』

そして厄介なのが、この小さな人型の使い魔たちだ。

目も眩むマーブルの影から現れては、極彩色の身体でタックルを試みてくる。

規則もへったくれもない使い魔の襲撃に、道中の会話もできず、私はちょっぴり苛立っていた。サーベルを振るう手にも力が入る。

「邪魔よ」

と、そんな私の心を代弁するかのように、腰だめのアサルトライフルがフルオートで唸り声をあげる。

惜しみなく吐き出される金属の弾は構造物ごと使い魔を蜂の巣にし、後ろに隠された隠し通路すらこじ開けてしまった。

「……ひぃー、すごいや」

「私の盾の中には大量の武器が格納されているわ。もちろん、対ワルプルギスの夜の物もね」

「ちなみにどこから」

「それは聞かない約束ね」

「……そうしときますかね」

出し惜しみせずに使い棄てる、同じデザインの純正品チックな武器達……。

まとまった量をどこから仕入れたのか……いや、聞くまい、言うまい……ロゴや番号を調べたら一瞬で出てきそうな気もするけどさ。

「そろそろ魔女のいる大広間よ」

「おお、ついに」
「その前にもうちょっとだけ使い魔が現れるから、それを相手に……」
「新しい魔法を試すわけね？」
私はまだ新魔法セルバンテスを発動させていない。
右手のサーベル一本だけで、苦もなく結界内を進めているためだ。
ほむらの言う通り、今のうちに披露しておかなくてはぶっつけで魔女ということになってしまうだろう。
それはちょっと、私自身も不安なテストになってしまう。

『ぴき』
『ぴきー』
噂をすれば、汚いマーブル模様の小人が湧いて出た。
背丈は中肉中背ちょっぴり猫背。能面だけど色は過激な二体だ。
「じゃ、見ててよほむら」
「銃は構えておくわね」
「平気平気。もっと楽にしててていいのに」
左肩をぐるぐる回し、前へ出る。

「……セルバンテス！」

左手が輝き、銀の篭手に包まれる。

一回り大きくなった腕は、まるでロボットのようだ。

「……それがさやかの固有魔法ね」

「うん、私の願いが生み出したのがこれ……」

『ぴー！』

話の流れなど理解できない使い魔が、私へと走り寄ってくる。

ほんと無粋な連中だ。けど、話が早く進んでありがたいかもしれないね。

「さやか！」

「へーきだって、ば！」

左手を前へ突き出す。

使い魔は次の瞬間にも、その汚らしい体での突撃に成功するであろう。

『ぢッ!?』

しかし身を丸めた使い魔の身体は、私の寸前で大きく弾かれた。

電線がショートしたような大きい音と共に〝見えざる壁〟は僅かな青で発光し、火花も散らしてみせた。

『ぴ……!?』

『ぢぢぢ……！』
「……これは」
使い魔は何が起こったのかと硬直していたが、再び考えなしに走り始める。
今度は二体同時だった。

――バチン、バチン

結果は同じだ。バリアーにも負担らしい負担はかかっていない。
使い魔の体は突進と同時に大きく弾かれ、むしろバリアの反動によって、使い魔へわずかなダメージも入っているようだった。
「これだけなら、普通の防御という感じはするけど……」
「これ、魔力の消費が少ないし、すごく丈夫っぽいんだ」
「……なるほどね」
思案を始めたほむら。
私も、ちょっと考え事をしてみよう。これは私のためのテストでもあるのだ。
……バリアは攻撃を受けると同時に、跳ねるように振動する。杏子の攻撃を受けた時も、それは観察できた。

この振動が反動として、相手をふっとばしているんだ。
杏子のブンタツによる刺突では、終始バリアーはガクガクと震えていたけれど、本来はこの振動によって相手方が弾かれるべきなのだろう。
そもそも杏子の攻撃力が高かったとも言える。
「このままだと、単なるバリアに過ぎないけど……んー……」
突き出した左手。
やることもなく休んでいる、サーベルを握った右手。
二つの腕を見比べて、ハッとした。
「……もしかして」
おそるおそる、自分のシールドの裏面にサーベルの刃を近づける。
そんな都合の良い事があるのだろうか。
相手方には強いバリアー。自分にとってはなんともない、ただの空間。
左手で守り、右手で攻撃の手は休まらないなど、そんな……。
「……まさか」
「……まさかね」
サーベルの先端が、バリアに触れた。

――バチン

「……」

「……あっれー」

弾かれた。

……ぬーん、おかしいな。

普通ここは期待通りに、サーベルが私のバリアをすり抜けて攻防一体の無敵っぷりをアピールするところじゃなかったのか。

「これは……普通の防御壁として活用するのが良いみたいね」

「ぐぅぬぬぬ……いや、他にももっと、役立つはず！」

「耐久試験でもしてみる？」

「ちょ、ちょっとさすがに後ろからそれ構えるのはやめて」

バリアは一向に消える気配がない。

これなら何時間でも展開していられそうだ。

「……左腕で殴ってみたらどうなるかな」

「やってみれば？　籠手なら頑丈だと思うけど」

「そうする……っせい！」

左腕を一旦引き、拳として使い魔の顔を突く。
『ぷぎっ!?』
「お!?」
そこで新発見。
どうやらこの左腕で殴る瞬間にも、殴った場所に小さなバリアが生まれるらしい。
普通のパンチとは比べ物にならないほどの勢いで使い魔は吹き飛び、結界の障害物に激突した。
「うっお……こっちだけで攻防一体になるんだね」
「へえ」
バリアの反動が力になるためか、私の拳や体への負担はない。
使い魔相手なら、この使い方のが効率は良さそうだ。
「せっ」
姿勢を低く、左拳のアッパーを仕掛ける。
使い魔の体は高く浮き上がり、無防備な姿を晒した。
「大！　天！　空！」
『ぷぎぎぎぎ』
浮き上がった使い魔の背後へと飛び、右手のサーベルを縦横無尽に走らせる。

アニメやゲームでよくあるような、八つ裂きだ。
「はぁっ！」
着地する頃には、既に使い魔は跡形もなくなっていた。
「……何遊んでるの」
「えへへ、やってみたかったんだー、これ」
「……気持ちはわからないでもないけど」
ほむらにも共感できるところがあるらしい。
なるほど、昔に何かをやらかしたようだ。いつか詳しく聞いてやりたいな。
ふーむ……篭手で下から殴れば、簡単に相手を浮かせることができる。これはなかなか良い発見かな。
バリアの反動がエネルギーになるため、これも当然私の腕力を必要とはしない。
狙った方向へと敵を弾くことができるのは、なかなか便利な能力だなと思った。
「数日でここまで変わるなんて……杏子との戦いで、随分と成長したみたいね」
「へへ、まあね」
分厚い鉄の扉を開き、下水道のような通路を進む。
弱いオレンジ色の防爆灯が等間隔に、しかし寂しげに道を示している。
魔女の部屋までもう少しだ。

「今回戦う魔女は、以前に戦った虫の魔女と同じような相手よ」
「あー……つまり、私の苦手分野かぁ」
「今ではどうかしら？」
「ん。自信はあるよ」
以前は大量の使い魔を相手に攻めきれなかったけど、今なら心強いバリアがある。
たとえ物量で圧して来ようとも、私の守りを壊すことはできないだろう。
さやかちゃんぶっ飛びパンチもあるしね。
「何それ」
「左手（これ）で殴る」
「好きに戦うといいわ、見させてもらおうから」
なんだよー、もうちょっと乗ってくれてもいいのに。
「じゃあ、入るよ？」
「その前に、さやか」
「ん？」
「ヒントは要る？」
「謎解き要素有り！　こりゃ楽しみになってきたね！」
垣間見えた親切心を振り切り、錆びた扉を開け放った。

自分にも作用する……なるほど、そういう使い方も……

「よっ」
扉を開け、広い暗闇の空間へと飛び出す。
数メートルの湿っぽい浮遊感。しばらくして、私は金網へと着地した。
「……下水っぽい雰囲気」
ここが魔女の結界の最深部。
その広さは、暗さも相まって計り知れない。落下時の印象からして高さもある。
足元に広がっている金網の足場以外には、内装らしいものが一切ない空間だ。
「……ッ、ッ、ッ、――」
指笛を鳴らし、舌を使ってクリック音を放ち、とにかく様々な音を辺りへ振りまいてみた。
高音が広い室内に反響する。
天井はある。高さは数十メートルはあるだろう。
足元の金網、その下は不明だ。奈落の底かもしれない。

横の広さは不明だ。ひょっとしたら、どこまでも広がっているかもしれない。
けどとりあえず、天井があることはわかって良かった。
そこに潜んでいた存在もね。
「さあ、掛かってこい！」
『……ブシュゥウ』
均一な結界内で唯一、はっきりと濁った音を響かせた天井へとサーベルを向ける。
注視して初めて姿を認めることができた魔女は、天井に張り付く大きなカニの姿だった。

Ａｇｎｉｅｓｚｋａ
奉仕の魔女アグニェシュカ

『ブシュッ、ブシュッ……』
天井に鉤脚を突き立てて歩く音が聞こえてくる。
魔女が私の頭上へ移動しているのだ。
「！」
空を切る音に、咄嗟に飛び退く。

私が立っていた場所から、粘っこい水がは弾ける音がした。
「……なるほど、そういう攻撃か」
『ブシュ、ブシュ』
びたん。びたん。
魔女は天井を移動しながら、私がいる場所へとヘドロらしきものを落としている。
空間内が薄暗いために、水の正体はわからないが……直撃だけは避けなくてはならないものだろう。
ただのドロ水ではないことだけは確かだ。
位置調整するように追いかけながら、遥か上から攻撃してくる魔女。
本気の跳躍でなら、この空間の天井まで跳べないこともない。
しかし跳ぶという行為はそのものが、隙を伴うリスクだ。
相手が何をしてくるかもわからないし、勢い余って、あの泥だらけの体に激突したら……。タダで済むかはわからない。
「でも、今の私には盾がある！」
『ブシュッ……』
真上からのヘドロ爆撃に、左腕をかざす。
ボン、と弾ける音と共に、汚泥の玉は青い障壁に阻まれ、弾けて消えた。

『……？』

攻撃は直撃したはずだ。カニはそう困惑しているのだろう。

『ブシュシュシュ……』

私がまだ無傷であることに気付くと、再び口の中から泥を絞り始める。

もろもろと溢れてくるヘドロが、真下の私目掛け、滝のように降り注ぐが……。

「へっ」

接触する度に弾けて振動するバリアーは、粘着質の液体であろうとも構わず外へ散らしてしまう。

ヘドロは私に掠ることもなく、遠く離れた金網の下へ落とされていった。

「……ん」

今も尚、開きっ放しの蛇口のように泥を落とし続けるカニの魔女。

けどおかしい。吐き出す量が、あまりに尋常じゃない。

この量の泥、まるで……自分の身体まで、全て吐ききってしまうような……。

『――ブシャッ！』

「！」

足元の金網が、巨大なハサミに引き裂かれた。

「下……う、わっ!?」

足元の金網から姿を見せたのは、カニだ。
天井に居た魔女と同じ、カニの魔女。
魔女が複数いる。そんなはずはない。
いや……自分を泥状に落として、足元の金網で再生したのか！
「あっぶな！」
『ブシュ』
ハサミの二裁ち目で足場を無くされる前に、飛びつくようにその場から離れる。
金網の上を転がりながらも、なんとか奈落への落下を防ぐことはできた。
『ブシュ……』
網に空いた大穴から、ヘドロ色の巨大蟹が姿を現した。
濁った色も溶けかけた姿も汚らしいが、口元でぶくぶくと音を立てる気泡が一番不快だ。
「顔を潰す」
だから狙いはそこ。
篭手の左腕とサーベルの右腕を両方前に出し、魔女へゆっくり歩み寄る。
私には最強の盾がある。いくら相手に近付いても、その鋭利なハサミでやられることは有り得ない。

隙を見せた瞬間に、サーベルで一突き。それでゲームセットだ。上手くいけばね。

『ブクブクゥ……』

「――」

――なんてことは相手も解っているはず

――じゃあ何故こいつはその場から動かないのか

「さやか！」

ほむらの声に反応するより先に、私はバリアーを展開した。

魔女の攻撃がコマ送りのようにスローになる。

死ぬ直前の冴える頭でないことを祈りたいが、目の前の光景はちょっと切羽詰っていた。

『――ブワッ』

魔女の口に溜まっていた泡が大きく弾け、広い範囲に飛び散ろうとしている。

目の前から来る泥飛沫だけならまだなんとかなるだろう。

が、飛び散り、上から降りかかってくる泥までは防ぎきれない。

後ろへ下がるだとか、上からのをマントで防ぐだとか、目の前の飛沫をバリアして急

いで上からのもバリアだとか、そんなことは出来っこない。
それはコンマ秒ほどの出来事でしかないのだから。
この、ちょいと体を動かすだけしかできないような時間の中で、私が足掻けることは何か。
――あ
あった。
考えている暇はない。出来ると信じよう。
「うお、りゃぁっ！」
私は右足で、正面に展開したバリアを蹴り付けた。
相手の泡爆弾が炸裂したのと、バリアに蹴りが入ったのは、全くの同時だ。
ああ、こんな無茶苦茶な蹴り方、小学一年の男子に混じってやったサッカー以来かもしれない。
ただ力強く脚を前方に振り払うだけのキック。
「ぐっ!?」
つま先だか足の甲だかがバリアに衝突すると共に、私の体を強烈な衝撃が襲った。それがバリアの〝反動〟であることは、すぐにわかった。

「うわ、っぐぁ！」
金網の上を二、三回バウンドし、ようやく止まる。
目算八メートル。私がバリアと接触することで弾かれた距離だ。
『ブシュシュ……』
だけどそのおかげで、泡の散弾攻撃を避けることには成功した。
その場でバリアを広げているだけでは、魔女の泥を少なからず浴びていたことだろう。
「……」
魔女の攻撃は多彩だ。
泥を垂らすことも、塊にして投げることも、弾けさせて散らすこともできる。
魔女の全身が泥なのだから、接近武器を持つ私にとっては確かに、苦手な相手と言えるだろう。
けどもう大丈夫。
今の私は、私が思いつく限りでは最高の戦術を閃いた。
『ブシュゥウウッ！』
「よぉーし！　そろそろ本気でいっちゃうぞっ！」
魔女が口元で泡を溜め込み始める。

同時に、私は姿勢を低く、その場でジャンプした。
銀の左手を、足元へと向けて。
「せいっ」
自分で展開したバリアーを自分で踏みつける。
「――うわっ」
同時に高層ビルを一気に昇るエレベーターのような強い重力が全身にかかる。
「っわ、これ、予想以上っ……！」
そんな感覚に意識を手放していたわけではない。
ほんの少しだけ驚いて、注意がそれていただけなのだ。
それでも私の体は確かに、結界の天井近くにまで打ち上げられていた。
「飛んだ……！」
私は理解した。私自身が生み出した願いの形を。
全てを守れるほど強くなりたい。
守るためのこの手を、より遠くまで伸ばしたい。
そのワガママな願いは、より克明に魔法の中へ取り込まれていたのである。
理屈っぽい頭ではなかなかそれを自覚できていなかっただけで。
「これなら――勝てる！」

虚空に左手をかざし、バリアーを蹴り付ける。
バリアーの反動が推進力を生み、体は目にも留まらぬ速さで空中を駆けてゆく。

――すごい

縦横無尽に魔女の周囲を飛び回る。

――翼でも生えたみたい

しばらくの間めまぐるしく跳び回り、ついに無防備な魔女の背後へやってきた。
カニはもう、私の姿を見失っている。
「……さやかちゃん流――ぶっ飛びパンチ！」
至近距離からのバリアパンチ。
バリアが持つ反動の衝撃は強く、泥で塗り固められた魔女の体積のほとんどを爆発させてしまった。
泥飛沫は全てバリアに阻まれ、こちら側へは跳んでこない。
『――ブシュゥ……』

そして魔女の体の中心部分に、小さな紅いビー玉のような本体を発見した。
異質な物体だ。あからさまに弱点だって見た目してる。
「六甲の門」
静かなサーベルの横一線がビー玉を断つ。
するとヘドロの魔女はその場で崩れ、金網の下にすり抜けて見えなくなった。
試合終了。私の勝ちだ。
「……お見事。本当に、お見事よ」
「……へっへ」
入り口からの控えめな拍手に祝福されながら、結界は形を失ってゆく。
落ちてきたグリーフシードを掴み取り、ほむらへと投げ渡す。
突然の送球に二、三度お手玉しながらも、彼女はしっかりとキャッチした。
「……バリア。それを利用した空中での高速移動。ワルプルギスの夜と戦うには十分に使える魔法ね」
「相性良いってこと？」
「剣が届く、それだけで心強いわ」
確かに、上空何百メートルの相手に攻撃を当てるには、この能力はうってつけだ。

フェルマータを連続発射するわけにもいくまい。弱いわけじゃないけど、あれは燃費が悪いからね。

「……できれば、杏子とも協力関係を結びたいのだけど」

「んー」

「けど……それよりも先に、巴さんとも対ワルプルギスの話をしなければならないわね」

「マミさんなら絶対に協力してくれると思うよ。ほむらの話は信じてくれるとも思う」

「……さあ、そう上手くいくかしら」

「大丈夫だって、私もいるしさ」

苦い表情の詳しい訳は知らないけど、マミさんならワルプルギスの夜とも共闘関係を継続してくれるはずだ。

さて。

杏子と大暴れしてから何日も戻らなかったことなどについては、両親からの激しいお咎めを受けました。

仕方ないです。ごめんなさい。

けどさやかちゃんは今日から一週間、悪い子になります。

まぁ仕方のないことだ。対ワルプルギスの夜作戦会議、その準備、きっと色々あるだ

ろうからね。
ひょっとしたら、私の人生の中で一番忙しい一週間になるかもしれない。
力及ばずで、後悔はしたくないから。
「……」
ベッドの上でソウルジェムを眺める。
澄んだ青の輝きに、改めて自分のあり方を夢想するのだ。
小さい頃から願い続けてきた強い自分。
全てを守ることができる自分。
大海の青の深みの中に、私の願いは込められている。
この海を、迫り来る敵にぶちまける時が近付いている。
心躍るといったら、ほむらに対しての配慮がないかもしれない。
けどやっぱり、心躍ってしまうんだ。
だって、なかなかいないと思うよ？
この世界には、大切な何かを守りたくても守れない、そんな人はいくらでもいるのだから。
守る力を手に出来た幸運に感謝をしながら、私は目を閉じた。
明日はまどかやマミさんと話ができたら、いいなぁ。

信じる者は救われるのか

劣化して色あせた絨毯の上に、一人のシスターが傅いている。
祈りの先は奇妙なオブジェ。それは多少の知識がある者が見れば、何らかの宗教のシンボルであろうことは察せられる。
しかしその象徴は決して勢力の強いものではなかった。
今や僅かな信徒しかおらず、聖地であろうこの教会も有志が見回るのみ。
それでも、杏子は常に祈ることだけは欠かしていない。
「……」
彼女は家族を失ってからもずっと、ほとんどの教義を忠実に守り続けている。
壊れた椅子と偶像だけが立ち並ぶ廃教会。静謐に祈りを捧げる少女の姿は、完成された美しい絵画のようにも見えた。
「攻撃しないでくれ」
そんな世界に一匹の異物が紛れ込む。
インキュベーター。またの名をキュゥべえ。彼も自身が歓迎されないことをわかっ

ているのか、侵入に際しては真っ先に断りを入れる必要があった。
「……ああ、今はそんな気分じゃない」
「それは良かったよ。珍しいこともあるものだね。普段ならこう言って出てきてもすぐに潰してくるのに」
「何の用？　こんな場所にさ。祈りにでもきたのかい？」
「いいや、そういうわけじゃないよ」
「生憎、今は黒グリーフシードは持ってない。来るなら二日後にしな」
「いいや、もうちょっとちゃんとした用があるんだ」
「回りくどいな、ぶった切るぞ」
　杏子は右手に槍を生み出し、絨毯に座るキュゥべえの首元に構えた。
「それは困るな」
「さっさと言え」
「そうさせてもらうよ。……ワルプルギスの夜のより正確な出現位置が予測できた」
「へえ」
　杏子は意外そうな顔をして、槍を下げた。
　キュゥべえの言葉はそれなりに彼女の興味を引くものだったようだ。
「僕が言った最初の予測にほとんど間違いはないだろうね」

「ほとんど、ってどんくらいだ」
「それはなんとも言い難いところだね」
「ふん。まぁ、別にいいけどね」
ワルプルギスの夜。それは杏子にとって無視できない存在だ。
長年魔法少女たちの間で語り継がれてきた伝説の魔女。
それとの対決は、ここしばらくの間は最大の関心事である。
「もう良いよ、さっさと失せな」
「そうさせてもらうよ」
聞きたいことが聞ければあとは用もない。
キュゥべえも機嫌を悪くした杏子に体を潰されたくはなかったので、さっさと退散することにした。
が、インキュベーターとしてのきまぐれか、彼の足が止まる。
「杏子。これは君にとっておせっかいかもしれないんだけど。どうせ祈るなら、その大きなシンボルは修繕しておく必要があるんじゃないかな？」
「二度は言わない。これで最後だ。失せな、妖怪」
「ああ、今度こそね」
キュゥべえの気配が消え、教会に再び沈黙が訪れる。

杏子は祈りの姿勢のまま顔を上げ、シンボルを見上げた。
十字架のようにも見えるそれは、かつての火事による損傷がそのままに残されているせいか、全体が煤けていた。
一部は砕け、左右対称ですらなくなっている。
彼女は何年もの間、この薄汚れたシンボルに向かって祈りを捧げているのだった。
「……煤子さん」

†　8月25日

「一体、どうしたの」
煤子が夕暮れ前の教会を訪れると、そこにはいつものように杏子が待っていた。
しかし彼女の姿はいつもと少しだけ違う。膝や顔に傷を作り、服もあちこちが汚れている、なんとも酷いありさまだったのだ。
もしや誰かに。
煤子はそう考えて苛立ちを覚えたが、対する杏子がニカリと笑ったのを見て、その考えはすぐに引っ込んだ。

「勝ちました！」

何に、とは聞かない。

言葉足らずだが意味はわかる。

彼女はここ最近、ずっと同じ小学校の男子にいじめられていたのだ。

やられたから、やり返した。教師であれば無責任に叱りつけるのだろうが、煤子は違う。

杏子の少しだけ固くなった手のひらを擦ってやり、小さな頭を優しく撫でる。

「……偉いわ」

「へへ……」

「頑張ったのね」

「はい！」

今はそれで良い。

やられたらやり返す。自分が潰れてしまう前に、自衛しなければならないこともあるのだ。

機会を逃してしまえば、鬱屈とした自分が何年も心に付き纏うことを、煤子はよく知っていた。

ならば一度や二度の暴力が一体何だというのか。

今は自分の矜持を守り抜いた彼女を讃えてやるのが一番だ。
「貴女が努力したからよ」
「えへへ……ううん。それだけじゃなくて、煤子さんのおかげ……」
「……そうかしら」
「はい！」
煤子はもう一度杏子の頭を撫でてやり、その後に傷の手当をした。
簡単な消毒と薬局で揃うものによる、魔法も使わない簡単な処置だ。名誉の負傷を早々にかき消すこともないだろう。

その日は杏子も疲れ果てていたので、主に座学のみが行われた。
杏子は決して学校の成績が悪い方ではなかったが、現状は学校での立ち位置もあってか、集中できていない面があった。これから学年が上がっていくごとに差がつけば、彼女はこの道を諦めてしまうかもしれない。それはあまりにも惜しいことだった。
煤子はさやかに対するそれと同じように、杏子に物事を教え込んだ。
それは学校で習う義務教育的なことだけではない。
全ての根幹を成す基礎的な考え方であり、それらはいわば〝思想〟にも近いものだった。

とはいえ煤子は合理主義である。内容は至って堅いものであり、宗教的な匂いはこれっぽっちもない。

その教えは意外なことに、杏子にとっては馴染みやすいものであった。

「煤子さんの教えてくれることって、なんだかお父さんの話に似てる気がします」

「……そうなの？」

「はい。なんか……ためになる感じがして」

「……そうね。貴女のためになるような話をしてるとは、思っているわ」

「お父さんもそういう風に考えて、教義を作ったんだと思います。……ただ、お父さんはあの、そんなに……こういう、暴力とかって、好きじゃないですけど。……この怪我を見たら、なんて言うのかな……」

ばつが悪そうにしているが、後悔している様子ではなさそうだ。

煤子はほんの少しだけ彼女の教義について関心が湧いたが、すぐにその考えはやめた。

「何を信じて生きるかは、杏子……それは、貴女自身が決めていきなさい」

「……私が？　でも、教義……」

「教義でも、私でも、あなたのお父様でも、自分自身の願いでも良い。信じるものは世の中にあるわ。貴女は……貴女が最も信じられるものを、自分で選択していきなさい」

――たとえ、信じたかったものの一つに裏切られたとしても。
――貴女の中にある折れない一つの何かが、貴女を支えてくれるはず。

†　それは8月25日の出来事だった

そこで私が望んでしまったから

†　――月――日

暁美ほむらは小さな足音に筆記の手を止めた。
肉球が床を叩くその音は、歓迎しない来客の証だった。
「暁美ほむら。君が時間遡行者であることはわかっている」
インキュベーター。彼が目ざとく暁美ほむらの能力を見破るようになってから、そこそこの時間が経っている。
「そして〝無駄な足掻きはやめたらどうかな〟とでも言うのでしょう。百回以上は聞いた言葉だわ」
「……やはりね」
「さっさと出て行って頂戴、インキュベーター。あなたの言葉にはもう、煩わしさしかないの」
インキュベーターは暁美ほむらにとっての天敵だ。それは今でも変わらない。
しかし、強い殺意も今となってはほとんどがルーチンワークに組み込まれ、嫌悪感と

は結びつけ難くなっていた。
「出口はあっちよ。さようなら」
「そういうわけにはいかない。僕は交渉に来たんだよ、ほむら」
「……」
交渉。それは聞きなれない言葉だった。
つい興味本位で顔を上げてしまう。とはいえ、そこに佇む白猫を模した宇宙人に、変わった所などはないようだが。
「この交渉を成功させなければ、僕の個は本幹領域に同期できなくなってしまった」
話す言葉はこれまでにないほど異質だ。
「……どういうことかしら」
「聞いてくれるのかい？　ありがとう。これから話すことは、君にとってデメリットを減らすものとなるだろう。だから、よく聞いてほしい」
「……」
悪魔の提案。気乗りはしないが、閉塞的な現状に新しい風が吹くならば聞くだけの価値はあるか。
ほむらは肯定的に沈黙した。
「君の願いは時間遡行だね？　それは僕も気付いている。けど暁美ほむら。その魔法

が、鹿目まどかという一人の少女の因果を高めていることには、気付いているかな？」
「随分と前に聞いたわ」
「それを聞いてもなお、幾度となく遡行を続けているわけだ。まぁ、それはいいよ」
引っかかる物言いだったが、キュゥべえは後ろ足で耳を掻くだけに留めた。
「率直に問題を言おう。暁美ほむら、これ以上の時間遡行はやめてもらいたい」
「断るわ」
「これは知性集合体からの要請でもある。僕というインキュベーター個人よりも高度な場所からの頼みだと考えてくれれば良い」
受け入れ難い要請。そして初耳の単語。
インキュベーター個人よりも高度な場所からの頼み。
「穏やかでは、ないみたいね」
「全くその通りだよ。さて経緯を説明しようか」
インキュベーターは積み重なるファイルの上に腰を下ろした。
「君の宇宙結束によって、平行世界の特定値は上昇し続けていた。これは何十回程度の結束であれば問題ないレベルの偶然として片付けることができるのだが……さすがに数千を越えるのはやりすぎだね。鹿目まどかの因果量、そして魔力係数は臨界を迎えつつある」

暁美ほむら。彼女は既に、何千回もの時間遡行を繰り返していた。
ワルプルギスの夜を破壊するためにありとあらゆるものを用いて戦ってきた彼女だったが、未だに確定的な勝機は掴めていない。
諦めはしないが、現状は頭打ちに近かった。
「仮に知性集合体を、そうだね。スペースと呼ぶけれど。スペースはついに、鹿目まどかという個体に対して第二種の警戒令を発動した。けれど僕たちが鹿目まどかの因果異常を観測し認識できるのは、君たちの日付で言うところの十六日のその日からだ」
数千繰り返されてきた時間と、まとめられ続けた因果。
それはほむらが時間遡行を発動した始点より唐突に発現する。
予兆なく生まれる莫大なエネルギーは、上位者を騒然とさせるに足るものだった。
「こんな辺境の星に、しかも一ヶ月以内に対応者を派遣する方法はない。対処できるのは、駐在しているインキュベーターの僕だけだ。しかも、干渉は現地生物への要請という遠まわしな形限定。端的に、僕たちはとても困っているんだ」
「要請とは」
「君にこれ以上の時間遡行をやめてもらいたいのと……暁美ほむら、君に宇宙結束の解除をしてもらいたい」
交渉らしくはなってきた。しかし。

「……やめたくはないし、解除の仕方なんていうのも知らない」

彼女の目的はまどかの救済だ。それをやめるわけにはいかない。

知らないことを実行することもできない。交渉は成立していなかった。

「そうか。では最初に、理由を説明しなくてはならないね。……まず、これ以上の時間遡行はNGだ。契約上強制はできないのだが、やめてもらわなくては全宇宙の生命が死滅するかもしれない」

「……」

「君なら僕が嘘をつかないことは理解しているんじゃないかな？　本当のことだよ。鹿目まどかの因果量・魔力量は、もう容量限界に達しつつある。臨界を迎えようとしているんだ」

それは暁美ほむらにも心当たりがある。

ここ数百回近くの時間遡行において、魔女と化した鹿目まどかは途方も無い力を発揮するようになっていた。

地球上の光が消え、太陽の輝きが著しく減ずる。理由はわからないが、それを調べようにも世界はほむら自身でさえ数分も耐えられない環境へと変わってしまう。魔女化が確定した時点で時間遡行を行うのが最近の最善手だった。

「因果の臨界によって、鹿目まどかはその姿を保てなくなり、宇宙ごと歪ませてその存在

を消滅させるだろう。ブラックホールなようなものをイメージすれば、君たちにとってはわかりやすいのだろうか。もちろん、そんなに生易しいものではないけれど」

「……嘘、ではないのね」

「こんな嘘を今更つくと思うかい？　暁美ほむら、君の時間遡行は無限ではないことを知っておいてほしい。これから先の遡行は、０．０１％以上の確率で宇宙の死が待っていると思ってくれ」

　小数点以下の確率による不幸。しかし代償は宇宙の死だ。それは決してありえない可能性ではなかった。

「けど本題、要請の本懐はこっちにある。暁美ほむら、君による宇宙結束の解除作業をやってもらいたいという件だね」

「……それは何なの」

「簡単に言えば宇宙の治療行為だよ。君が鹿目まどかを軸に束ねた、一ヶ月間の宇宙たちを平行状に解き、元の状態に修復してほしい」

「……そうすれば、まどかの因果が消える？」

「完全消滅はしないけどね。おそらく、君が初めて出会った頃のまどかに戻るはずだ。魔法少女としての才能が消えることはないよ」

　それすら消えれば何よりだったのだが、そう上手くいかないらしい。

「宇宙結束の解除が行われれば、一点に集中した因果も無害な形で拡散する。宇宙は救われるわけだ。君にとってもデメリットはないはずだよ。その状態に戻せば、君は再び時間遡行を行うことができるのだからね」

「……甘言ね。どうせ何か裏があるのでしょう」

「僕たちにとっては、宇宙が無事であることは最優先事項だ。まどかの感情エネルギーなどはあくまでも二の次、生産品に過ぎないからね」

いつも以上に明け透けに語るあたり、インキュベーターも懐を開いているのかもしれない。

「また時間を巻き戻し続けて、同じことになるかもしれないわよ」

「その間に君が事故死してくれることを願うばかりだよ、暁美ほむら」

「ふ、ついに包み隠さずに言ってくれたわね」

「こんなトラブルは何度も起こってほしくないからね」

やれやれとでも言いたげに、キュゥべえは首を振る。

「要請を受け入れてくれるならば、君の遡行魔法に因果の修繕能力を付与しよう」

「そんなこともできるのね」

「魔力による発動形式は君独自の言語で構成されているために直接の干渉はできないが、君が僕らの協力を受け入れるならば話は別だ。魔法少女契約の上書き、というイ

メージが近いかな」
「遡行魔法と同時に、まどかの因果が修復されるのね」
「そういうことになる。一ヶ月間を未来から過去へと、因果の糸を解していくようにね」
　現状、キュゥべえからの提案は魅力的に思えた。
　ほむらは珍しく乗り気だったが、浮かれてはいない。
「その際のリスクはないのかしら」
「ある」
「……」
　断言だった。
「力を付与するのは僕らだけど、修復するのは君自身の魔法だ。誤作動が起こらない保障は、残念だが全くできない。全ては君の気の持ちようというわけだ」
「途中で私が死ぬことも、ありえるということかしら」
「時間遡行の失敗。何が起こるかは、僕にもわからないよ」
　魔法という力を与える割りに、その扱いについては無知な部分が多い。それがインキュベーターの歪なところであった。
「けれどそれまでの遡行距離に応じた因果の結束が解消されることは間違いないんだ。

少しでも良い。君がまどかに集中した因果を解してくれるならば、宇宙の破滅は回避できる。そしてあわよくば、途中で君が死ぬかもしれない。これ以上ないイレギュラーが消滅してくれるなら、正直に言ってありがたいよ」

「……」

「気を悪くしたかな。でも、このままではまどかを中心にした破滅が待っている、それは間違いないんだ。けどこの要請に応じれば、デメリットは軽減されるだろう。君の取り分が多くなるかどうかは、君が自身の魔法を御すことが出来るかどうかにかかっている」

平等とは言い難い交渉だ。

しかし、断る余地も無いだけの理由も理解できる。

このまま無策に邂行を続け、破滅を呼び込むくらいならば。

そう思ったほむらは、素直に頷く他なかった。

「……」

「河原。ここで良いんだね？」

「ええ、広くて人が少ない。見滝原の中では、時間の流れとは無縁な場所でもあるわ。何かが起こるにしても、安全な場所がいい」

「なるほど、不測の事態に備えてのここでもあるわけだ」
　ほむらとキュゥべえは河原にやってきた。
　周りには誰もいない。遠くて車の走る音が聞こえるくらいだ。
「……それにここは、かつて私がまどかと一緒に研鑽を重ねた場所でもある。ここで魔法を使うのが、一番リラックスできる。そんな気がしたの」
「なるほどね」
　感情のないキュゥべえは知った風な声色で相槌を打った。
　今更、ほむらもそれに目くじらをたてることはない。
「さて、暁美ほむら。これは新たな契約だ。これより君には、宇宙結束の解除を行ってもらう。それに際し、一度の時間遡行に限定した、結束宇宙を修繕する能力を付与する」
「ええ」
「……どういった形で君に魔法が発現するかは、僕にもわからない。それでも受け入れるかい？」
「今のままでは必ずまどかが死ぬのであれば、是非もない」
「良いだろう」
　ほむらの手にしたソウルジェムが、強く輝きを放つ。
「――受け取るが良い。スペースが君へ貸与する、救世の運命だ」

――……

「……」

「これで能力付与は完了した。どうかな、様子は」

ほむらは暫しソウルジェムを握って、流入した感覚を咀嚼しているやうだった。

「……新たな能力の使い方を、理解した」

「それは良かった。作業に入れるかい？」

「ええ、問題なくいける。これなら、この能力があれば」

「よし」

新たな力。他者の因果に介入する能力。

それは大きな可能性を秘めているに違いない。

「……さて。これで君ともお別れになるわけだ」

「ええ、そうね。私にとってはしばらくだけど」

「それはわからない。修復中に君が次元の狭間にでも消えてくれれば、僕にとっては一番ありがたい結果だ」

「意地でも、また邂逅してみせるわ」

ほむらはキュゥべえを睨みつけた。
「やれやれ。まあ、後のことは良いさ。好きにすることだね」
「……でも、言わせてもらうわ」
「何かな」
「さようなら、インキュベーター」
「ああ、さようなら、暁美ほむら」

それから、ほむらはすぐに旅立った。

……――――……

「さて、世界の修正が始まる」
残されたキュゥべえは河原にて、一人世界の改変を待っている。
因果の修復はこれまでの束ねられた世界を矯正するものだ。当然、今のキュゥべえも修正されるだろう。
「どうせなら僕のこの意識も一緒に、遡行してもらいたかったな。……この考え方を〝寂しい〟とでもいうのだろうか？」

自己の消失。それに際した考え方が感情なのか、それを模倣したものなのかはインキュベーターには判別がつかない。

「まあ、どうでも良い事だ」

こうして、世界はリセットされた。

……数多の世界線が、トンネルのように輪を成している。

これがいくつもの世界。私が渡ってきた世界の因果。

これが全て、まどかの因果になっていただなんて。……私は知らないうちに、これほどの……。

……左手の時計は、過ぎ去った景色を糸状に解して、内部へと巻き込んでいる。これがきっと〝解す〟ということなのだろう。

時計の中に、今までまどかが溜め込んでいた因果が収束されているのがわかる……。

これがまどかの抱えていた魔力……今考えてみると、空恐ろしいものだわ。

……出口を目指そう。

一ヶ月前のあの日へ戻る。そして、また一から、今度こそ本当に、まどかを守ってみ

せる。
　強大な素質を持たないまどかであれば、インキュベーターの動きも激しくはならないはず。そうすれば動きやすさは格段に変わる。
　これはチャンスよ。ワルプルギスの夜を倒すための、またとないチャンス。
　……待っていてまどか。今、もう一度会いに行くからね。

２０１１／１５／６８

　……ああ、でも。
　今、時計が集めている因果……この魔力さえあれば。
　この特殊な時間遡行の魔法……他者の因果さえ操るこの力さえあれば。
　より綿密に、確実に、ワルプルギスの夜と戦うための準備ができる……そんな時間にまで、戻れそうな気もするけど……。

２０１０／３３３／３３３

　――!?

と、時計が!?

嘘、どんどん周囲の時間を飲み込んでいく!?

「能力が……ぼ、暴走している……!」

２００８／３３３４３３／３２２１３３

とてつもない速さで遡行を始めている……!

だめよ、一ヶ月前! それ以上は戻らない!

止まって! お願い、私はそんなこと祈っていないの!

これ以上、戻ったら――

２００６／０８／０３

――パキッ

時計が内側から破裂した音を聞いて、私は自身の過ちを悟った。

一ヶ月前以上の、明らかにオーバーしすぎた時間遡行。それによって、時計に付与さ

れた因果回収能力が限界を迎えたのだ。
巻き込んでいた因果、その魔力は爆発し、私の最大の武器を破壊してしまった。

――終わった。私は直感した。

今さっきまで通っていた、散歩道のような時間の狭間が、急に恐ろしげな空間に変貌したような気持ちさえした。
時計のない私に、時間を歩く資格はない。
狭間でさまよう資格すらも持ってはいない。
結果として、時計の破壊と同時に、私の体はすぐ近くにあった時空壁へと吸い寄せられてしまった。

どこかもわからない世界へと投げ出されたことを自覚すると共に、激しい眩暈を覚える。
そして理解した。失敗したと。

過去へときてしまった。

そして、時計が壊れた。
絶望的な未来が待ち構えている世界へやってきてしまったのだ。

「……ぐぁっ！」
現実感のある砂利の上に叩きつけられるが、それは些細なことだった。
自分の魔法を完璧に失ってしまったことに比べれば、本当に些細だ。
「ああ……私はなんてことを……！」
破壊した時計からこぼれた因果の砂は、砂利の上に散っている。
目に付くそれらの力を利用しても、未来へと遡行することは叶わないだろう。時空の中で失った力は、あまりにも大きかった。
……インキュベーターも思惑通りに事が進んでしまったというわけだ。
因果は解消され、私はどこかもわからない、しかも過去の世界線へと飛ばされる。
魔法は使えず、あとは魔女に殺されるのみ。

私は。
……私は！

†　それはいつの出来事でもない
†　誰も知らない出来事だった

第五章　狼煙を上げろ
とても怖いし、不安だけど

「じゃあ、もう学校に来るんだね？」
「ああ。松葉杖ついてでも、ちゃんと学生をやってみせるさ」
両腕に杖を抱えた恭介が病室内を歩いている。
リハビリの時間は設けられているが、それだけでは全然足りないということだろう。とはいえ、看護師さんに無断でやるというのもどうかとは思うんだけど。
今の彼は、それだけやる気に満ちているということだ。
「左手は絶望的といってもさ。逆に考えてみれば、別に利き手じゃないんだぜ。まあ、確かに楽器は難しいかもしれないよ。でも、他の事ならいくらでも出来るはずだよね」
彼は良い顔をするようになった。
無茶をしているわけでもない。強がりではない。
病室の隅に積まれている学校用の道具が、恭介の前向きな気持ちを表していた。長い時間をかけて、彼なりの道筋を立てたのだろう。

ようやく立ち直ってくれた。遅いよバカと背中を叩いてやりたいけど、まぁ、そこらへんの激励は身体が完全に治ってからにしてやりましょうかね。

「学校の勉強も、ちゃんとやらないといけないね。サボりすぎだよ、恭介」

「ああ。さすがにこれから取り返していかないと大変だよ……」

「へへ、さやかちゃんが懇切丁寧に教えてしんぜようか」

「いやいや、そこまで困ってるわけじゃないさ……けど受験の時は、少し頼むかも」

「うむ、どんどん頼りたまえ」

テーブルの上には、見慣れない管楽器関係の本がいくつか置かれている。

もしかすると恭介は、あの本の中から新たな道を見つけたのかもしれない。

未来からやってきたほむら。だからこそほむらは、恭介を知っていた。

転校してきてすぐに彼の病院を訪れたのには、そんな裏があったってわけだ。

繰り返す時間の中で、私が深く関わっていた人物。それが恭介だ。なるほど、病室を知っていてもおかしくはない。

未来から来た。

それだけで、随分と色々な疑問が解決した気がするよ。

もちろん本人は全てを語ったわけじゃない。

長い間繰り返してきたのだ。その全てを事細かに言えるはずもないだろう。言いたくないことだってあったはずだ。

私の中でまだ腑に落ちない点もいくらか残ってはいるが、そこはミステリアスなほむらの謎ということで、保留のままにしておこうと思っている。

「あれ？　もう良いの？」

病室を出て待合室まで戻ると、まどかが幾分拍子抜けした顔で迎えてくれた。

「うん、すっげー元気そうだったよ。そろそろ復学するんだってさ」

「本当？　良かったねぇ」

今日は日曜日ということで、まどかと一緒にお出かけしている最中だ。

恭介の見舞いに付き合ってもらい、これからマミさんと合流する所である。

既にほむらから決闘の話は通っているらしく、数日ぶりの再会では涙目でお叱りを受けて参ったものだ。

杏子との決闘で大怪我をしたこともしっかり伝わっているらしい。

「さやかちゃんも怪我には気をつけないとダメだからね」

「あ、あはは……けどあれは、杏子の容赦がなさすぎたってだけだし……本気で殺す気でこられちゃさぁ」

「さやかちゃん」

「ごめんなさい」
　まどかでこれだと、マミさんはどういう反応で迎えてくれるのだろうか。
　私、ちょっぴり怖いです。
「ねえ、さやかちゃん」
「ん、なに？」
「杏子ちゃんのこと、そんなに嫌いじゃないんでしょ」
「……」
　なーんでわかっちゃうかな、まどかには。
「最近のさやかちゃん、すっごく気分良さそうだもん」
「へへ、顔に出てた？」
「さやかちゃん、人の顔色を読むのは上手だけど、自分の顔色を隠すのは得意じゃないもんね」
「む、むむ……」
　言われてから、携帯のブラックモニターにむっつり真顔を映してみる。
　わ、わからん。そんなに出るのかな？
「杏子ちゃんと喧嘩して大変なことになったって、ほむらちゃんは言ってたけど……そんなにひどい喧嘩じゃなかったんだね」

「ははは、まぁ、ひどいっちゃひどいんだけどねー……」
後腐れが一切無いっていう意味では、そうだけどね。

私が杏子とバカしてた間、マミさんはまどかを連れて魔女退治を続けていたらしい。
ほむらも居ないのに、一対一でのレクチャーとは。
魔法の新技を身につけてから得た自信は、かなり大きいようだ。
私もその気持ちはよくわかる。
強くなったんだから油断してるってわけではないんだけどね。ま、浮かれちゃってますね、ってところかな。

橋の下では、マミさんが黄色いバランスボールのようなものに腰かけて待っていた。
なにそれ？　って聞きたいけど最初に言うべきはそれじゃない。大事なのはファーストコンタクトだ。
「こんちわっす」
まずはいつも通りの挨拶。可能な限り愛想良くして空気を和らげる作戦だ。
「美樹さん」
あっ、これダメなパターンだ。

マミさんはボールから立ち上がると私たちに手を振って、しかしすぐに頬を膨らませ、むくれた。
「また無茶をしてっ。佐倉さんと戦ったんですって？」
「面目次第も反省もございません」
「えー」
「開き直らないのっ」
「いやいや、でもマミさん。杏子との戦いで、私も成長したっていうか」
「良い訳無用っ！　勝手に危険なことをして、万が一があったらどうするの！」
「はい……」
「そうだよ、すごく心配したんだからね？」
バランスボールが帯状に解け、一条の長いリボンとなって地面に落ちる。
「あ……それ」
「ああ、これはちょっとね。自分の魔法、やっぱり色々と試しているのよ」
「はぁ……」
「……けど、これはこれ。自分の力を試してみたい気持ちはわかるわ。でも、死んでしまうような無茶はいけないわ。私たちは友達で、仲間なんだもの」
正論すぎる……。

「すみません……」
「わかればいーんです」
優しいお説教を終えると、話の流れは手作りお菓子や、手作り紅茶の方面へと変わっていった。
数日振りの世間話にほっこりし、またマミさんとも、ほむらから送られてきたメールについての話で盛り上がりもした。
とにかくほむらがやってくるまでは、そんなとりとめもない、しかし掛け替えのない日常を過ごしていたわけだ。
「それでですね、ユウカちゃんたら自分から……」
「あらまあ、そうなの？」
「もうみんな大爆笑ですよー。だって顔真っ赤にして、本当にふやけるまで舐めるもんだから……」
「遅れてごめんなさい」
鉄橋に声が反射し、響いた。
土手の上を見上げれば、そこにはほむらの姿が認められた。
「こら、遅いぞー」
「色々と準備のために動いていたのよ。でもごめんなさい」

準備とは例のワルプルギスの夜関係であろう。
きっと、現代兵器か何かの準備に違いない。法律、何個くらい抵触してるのかしらね。
「ううん、気にしてないわ」
「やっほー、ほむらちゃん」
「……や、やっほ」
四人が揃い、ほむらの用意した折りたたみのキャンプ用チェアに腰を下ろした。
焚き火を囲うわけではなく、あくまで長話をするためのものだ。
「メールで、話があると聞いたけど……」
「私も聞いてていいのかな……？」
「ええ。決心がついたから、みんなに聞いてもらうつもり。もちろん、まどか……貴女にも聞いてほしいことよ」
それは、今までひたすら隠してきた真実を曝け出す決心だ。
一気に関係が崩れるかもしれない。そんな突飛な、しかし紛れも無い事実を打ち明けるのだ。
今の、それを傍で見守る立場になってようやく解ったことだけど、話し始めるほむらの恐れや不安は、並のものではないだろう。
「これから、みんなとはより一層、深い付き合いになってゆかなければならないから……

その上で聞いて欲しいの」

ほむらは言葉のひとつひとつを選んで、ゆっくりと話し始めた。
まずはワルプルギスの夜についての事から、それを倒すための準備を整えていること、それは至上の目的であるということ。
そして、自分の過去の話へ推移していった。
もちろん、その中では魔法少女の仕様についても触れなければならない。
その時のほむらは、より一層身体を強張らせていたように見える。
マミさんは黙って、時々小さく頷きながら聞いていた。
ほむらの話す様子をじっと、見守るように眺め、時々も言葉は挟まない。
まどかは両手を膝の上で結び、小さな震えを閉じ込めながら、ほむらの告白に耳を傾けていた。
彼女には珍しいことだけど、その間、一度も地面を見なかった。

「私はずっと繰り返し続けてきた……」
未来からやってきたほむらの告白は、きっと二人に受け入れられている。
短い数日間の付き合いだけれど、それでもほむらが今になって酔狂な御伽噺をすると

は、誰も思っていないだろう。
「……」
いつの間にかほむらの後ろに現れた白猫も、それを疑ってはいないはずだ。
逆にキュゥべえの存在は、話を裏付ける良い役目になってくれるかもしれない。
川の流れだけを背景音に、話は続き、そして終わった。
終始誰も声を荒げず、思いのほかスムーズに。だからこそそれに戸惑うように、ほむらは告白を終え、大きく息をついた。
「お疲れ」
「……ええ」
「……鹿目さんにそんな力が隠されていたなんて、驚きだわ」
マミさんは落ち着き払っていた。
ほむらはマミさんの反応を最も不安に思っていたようだったけど、予想に反して穏やかに見える。それはきっと表面的なものでもない。
「魔法少女が魔女に。それが本当なら、鹿目さんの契約を阻止する今までの行動には、納得できるわね」
「信じて欲しい」
「どうなの？　キュゥべえ」

目を見開いたほむらの後ろで、キュゥべえが尻尾を振る。
「いやはや、驚いたよ。僕は仮説程度にしか考えていなかったけど、まさか本当に暁美ほむら。君が時間遡行者だったとはね」
「いつから」
「最初から聞いていたよ」
「……」
鋭い目が忌々しげに白猫を睨む。
この時、なるほど。キュゥべえを忌む理由になんとなく共感できた。
「ほむらちゃん……ずっと、私なんかのために頑張ってきたんだね」
「……自分を卑下しないで、まどか」
「……ごめん、そうだね。そういうのも、いけないんだよね。大丈夫……うん。わかったよ、ほむらちゃん」
「まどか？」
「安心して。私、大丈夫だから。もう、絶対に契約しないから」
「……」
普段は弱気なまどかも、今は決意を込めた目で、ほむらにそう言ってみせた。
ほむらはただ頷いた。

「ねえキュウベえ、どうしてそんなことを隠してたの？　ソウルジェムが、グリーフシードになるだなんて」
　先ほどまでは穏やかだったけど、今のマミさんは少し悲しそうだった。
　長年キュウベえと一緒にいたものだから、今の話によるギャップは大きかったのだろう。
「聞かれなかったから言わなかっただけだよ」
「聞かれなきゃ言わないなんて、聞きようがないじゃないの。それって詐欺よ」
「あっはは、確かに」
「……」
「すみません」
　皆がキュウベえを囲んでの、剣呑な雰囲気にあった。
　気まずい。実に気まずい。
　まぁ、ほむらの話を聞いたらそれも無理はないんだろうな。
「……ねえ、キュウベえの目的って、その、本当に、私達を魔女にすることなの？」
「希望と絶望の相転移。それによるエネルギーの回収が目的だよ。だけど、僕らは別に人間を憎んだりしているわけじゃない。それは誤解しないでほしいな」
「あくまで魔法少女の精神〝ケア〟は怠らないってことでしょ？」

「もちろんだよ」
とは言うけどね。
「悪い方向にも、良い方向にも動かせるわけだ。その時の状況や収支。必要に応じて、魔法少女への接し方も変えるってことね」
キュゥべえが私の方へ顔を向けた。
意識せざるを得なくなった、という反応だ。
顔をずっと向ける、目を逸らせない。それがどういう意味を持ち、人にどう映るのか。心を持たないキュゥべえにはわからないだろう。
「まぁでも、私はキュゥべえの言葉に心動かされることはないだろうし、魔法の力をくれたことには感謝してるから、良いんだけどね」
「さやか、僕が言うのも何だけど」
「ん？」
「君は変わっているね」
「ほんと、何だね」
私とのやりとりで、河原のこの場の空気が少しだけ暖かくなった気がした。
「……お茶菓子はつまみ食いするし、飲み物の器はよくひっくり返すし。キュゥべえは本当に嫌な子ね」

「嫌な子って」
「駆除すべき害獣よ、嫌なんてものじゃない」
「害獣って」
「え？　キュゥべえって獣なんでしょ？」
「どうせなら宇宙知性体とでも呼んでもらいたいな」
白猫を指すには、ちょっとばかし仰々しい呼び方すぎやしないかな。
テクノロジーは遥かに上の存在なんだろうけどさ。
「はあ、全くもう……でも、今までキュゥべえのおかげで私が魔法少女を続けてこれたっていうのも、変わらない事実だわ」
「……巴さん。あなた」
「だから、キュゥべえ。あなたはもう当分の間、おやつ抜きよ」
「そんなー」
ざまあ！　マミさんのお菓子を食べられないなんて、可哀想に。
せいぜいしばらくの間、美味しそうに食べる私たちの姿を見てハンカチを噛んでいるがいいさ。
「おっほん」
……さて。話を転換する咳払いをひとつ。

「あー、そういえばほむらの話だと、キュゥべえは嘘をつかないんだよね？」
「僕らはそういう生き物ではないからね」
「なら安心だね……じゃあワルプルギス対策のために、さてと」
「え？」
ひょい、と白猫を持ち上げる。
顔を両手でしっかりとホールドし、私の目の前に。
「んっふっふ……逃がさぬぞよー……」
「……」
「さやかちゃん、怖い」
というわけで。
キュゥべえへの尋問タイム、始まります。

停滞するよりはずっとマシよ

「ねえキュウべえ」
「何かな」
「ワルプルギスの夜って、魔女なの？」
「ワルプルギスの夜は魔女だよ。その強大な力で数多の文明を、または都市を葬り去って来た」
なるほど、嘘は言ってないみたいだね。
けど、嘘は言ってない。ただそれだけだ。キュウべえはただの白猫モドキじゃないんだ。もっと長生きしてる宇宙人なら、もっと詳しいことを知ってて当然でしょ。私が聞きたいのはそっちの方だ。
「じゃあ、ワルプルギスの夜が倒されたことってある？」
「これからやって来る魔女だよ？」
「んーん、矛盾した質問じゃないでしょ。グリーフシードになったワルプルギスの夜が、また孵化して魔女に戻らないとも限らないわけだしさ。ねえ、倒されたことはあるの

？」
「僕は全ての魔女の情報を完全に把握しているわけじゃないんだけど」
「おー答えになってないなぁ？　ＹｅｓかＮｏかで答えてくれるかな」
「さやか、頭が痛いよ、離してくれないかな」
「答えなさい」
「いたた」
　キュゥべえが目を閉じてパタパタと暴れている。非力だ。可愛らしくもある。けどそれは表面だけ。
　しばらくそんな演技を続けて、キュゥべえは無感情に目を開いた。
「Ｙｅｓだよ、さやか」
　その答えに、マミさんとほむらも驚いている。
「ふーん。じゃあ、かつては倒されたことがあるわけか」
「さやか」
「何？」
「おそらく君が聞きたいであろうことを、先に言わせてもらうよ」
「はい、待ってました」
　観念したらしい白猫を解放し、みんなが囲む土の上に放してやる。

白猫は後ろ足で顔を整え、やれやれとため息をついた。
「ワルプルギスの夜、というのは通り名だけど、まぁグリーフシードは同一のものだ。その名を借りて喋らせてもらうよ」
さて、ここからだ。
ここから攻略の手口が見つかるかどうか……。
「そもそもワルプルギスの夜というのは、最初はどこにでもいるような普遍的な魔女でしかなかった。どこにでもいるごく普通の魔法少女が絶望し魔女となった姿、それがワルプルギスの夜の始まりだ」
……元は人間。普通の魔女だった。ふんふん。
「しかし魔女としての性質は、少々風変わりなものではあったね。ワルプルギスの夜は、結界内に使い魔や魔女を呼び込む習性があったんだ。結界内に他の魔女の使い魔や魔女を招き入れては、各地をゆっくり移動して回る、そんな性質の魔女だった」
結界に……他の魔女を呼び込む？
「理由は定かではないが、魔女達も招かれるがままに彼女の結界の中から動こうとはしない。ああ、断りを入れておくが、ワルプルギスの夜は決して強い魔女ではなかったよ。他の魔女を強制的に従えるようなものではなかった筈だ。けど魔女達はワルプルギスの夜の結界へと引き込まれ、次々にその数を増やしていった」

他の魔女にとって居心地が良かったのか、それとも……。

いや、今は聞く時か。

「飽和した結界内の魔力は、長い年月をかけて結界の主であるワルプルギスの夜へと引き込まれてゆく。……その合間に、結界内に踏み入った魔法少女達は大勢いた。だけど当然とも言えるが、数十にまで増えた魔女達のたまり場に飛び込んだ魔法少女は、ことごとくが瞬殺されてしまってね。そうして絶望していった魔法少女達のソウルジェムもまた、ワルプルギスの夜の〝来賓〟となった」

……大量に魔女が集まった結界。恐ろしいな。

「もう既に、ワルプルギスの夜の伝説は世界に伝わっていたよ。強すぎる魔女、倒せない魔女……だからその頃の魔法少女達はこぞって、ワルプルギスの夜討伐のために力を競い、力を合わせた。そして、数十人単位の魔法少女集団が結成され、打倒ワルプルギスの夜のための本格的な第一戦が始まった」

んー……。

「数十の魔女対数十の魔法少女。さて、結果はどうなったと思う？　さやか」

「魔女の圧勝」

「ご名答だ、魔女は魔法少女を完封した。何故だかわかるね？」

「倒れていった魔法少女達が、魔女に変わるから」

「そういうことだ。いくら相手を倒しても、同じだけ味方が魔女になったのでは、戦力差は拮抗し得ない」

最悪すぎる。遠くから見てるだけでも絶望しそうな光景なんだろうな。

「討伐隊すら無意味だった。それがワルプルギスの夜の力だったということでもあるし……もうひとつ、その頃には既に、ワルプルギスの夜それ自体も、強力すぎたのさ」

「どういうこと？」

「確かに、味方の魔法少女が戦いの最中に絶望し魔女になっていった。それも魔法少女の敗因としてあるだろう」

「けどその絶望の理由は、きっとワルプルギスの夜本体の比類なき強さにもあったんじゃないかと、僕は考えている」

戦ったことのあるほむらは、相手の強大さを知っているのだろう。

彼女の喉がゴクリと鳴った。

「結界の主たるワルプルギスの夜は、その身に受けるダメージを結界内にひしめく魔女達のエネルギーによって、すぐさま修復してしまうんだ。結界内に貯蔵された魔女がいる限り、強大な本体を真の意味で倒すことはできない」

「……ボスが残機持ちとかクソゲーじゃない？」

「似たようなニュアンスの悪態は、過去に何度も言われていたね」

ただでさえ強いワルプルギスの夜。そいつが何度も復活する。

……マジかぁ。

「結界内の膨大な魔女、強大なワルプルギスの夜。彼女が魔法少女を一人ずつ葬り、絶望させ、魔女の集団の勝利へと導いた。だけど、ワルプルギスの夜は倒されたことがある。それもまた事実だ」

「倒せるけど、一瞬だけ」

「そう。倒され、グリーフシードになるはずのその体は魔女達のエネルギーを吸収し、すぐさま孵化し直してしまう。いつからか強くなりすぎた彼女は結界内に隠れることをやめ、現実世界で暴れまわる真の災厄としてこの世に君臨した」

空気がお通夜だ。

「超強力な魔力、絶望吸収装置……それがワルプルギスの夜。彼女本体と、そのグリーフシードの正体だったわけだ」

白猫は尻尾を二回振り、話が終えたことを伝えた。

私はまだ、キュウベえに何かを言いたかったんだけど、それを聞かずに、キュウベえはそそくさと立ち去ってしまった。

その姿を止める者はいなかった。

マミさんも、ほむらも、まどかも、ただ重苦しい顔のままに絶句していた。

ダメージを受けても、即回復してしまう魔女。
強大かつ不死身。
ゲームで言うなら、体力ゲージを何個も持っている魔女。
倒しても倒しても、自前の倉庫に貯めた命を取り出して、復活し、なお襲い掛かる。
「……何百年もの間、蓄積され続けた魔女……恐ろしいわ……」
「まさか、何度も戦ってきたワルプルギスの夜がそんな相手だったなんて」
「どのくらいの魔女がいるんだろう……百、とか……？」
「魔女の数なんて、想像もつかないわね。もっとかもしれないし……」
つまり百体以上の魔女を倒さなければ、ワルプルギスの夜は倒せないということ。
しかも単なる魔女ではなく、強力に成長した「ワルプルギスの夜」という、巨大な魔女を相手にその分の傷を与えなければならない。
現実感のないスケールに皆は呆けているが、実際の相手を目の当たりにして戦ってきたほむらの顔は青ざめている。
「……魔女の集合体」
沢山の魔女と戦ってきたであろうほむらでも、改まった強者の認識には絶望を禁じえないようだった。
けど、ここで彼女が折れるようなことは、きっと無い。

「……作戦を考え直さなきゃ」

ほら、すぐ目に生気が戻った。

滾るような炎を宿す瞳。

普段は冷めた目しか見せないほむらだけど、心の基本はきっと、こうなんだ。

まどかを守るために何度も何度も戦ってきた彼女が、そんな不屈な努力家が、ただの冷徹な女の子のはずがない。

果てしない目標であっても、具体的な高さが見えれば、逆に闘志が湧き上がってくるものだ。

勉強でも、きっと仕事でもそう。……だと思う。

素直にカミングアウトしたキュゥべえにどんな意図があったのか知らないが、ほむらは意気消沈することなく、むしろより一層にやる気を増したらしい。

静けさに包まれた魔法少女の輪に声をかけ、前向きな一言を言ってみせたのだ。

「ワルプルギスの夜を百回以上倒す方法を考えるわ」

前向きすぎて、みんなの顔が引きつっていたけどね。

けど私はそういう爆弾発言、割と好きよ。

「でもさぁほむら。ワルプルギスの夜を今まで倒せなかったって言ってたよね」

「ダメージが一切通ってなかったと思っていたのよ。それは勘違いだったのね」

「……すぐに修復する、倒しても結界に満たされた絶望の力で、すぐに蘇る。なるほどね」

「今まではより強い火力を一点集中に、と考えていたのだけど……それでは無駄があるみたい。やり方を変える必要があるわね」

すぐに復活する。

一撃でワルプルギスの夜を粉砕できる威力があったとしても、結界内の魔女の力がグリーフシードになった魔女を蘇生させてしまうので、それでは一撃が無駄になってしまう。

それが全力を込めた攻撃であるなら、もっと悲惨だ。

満身創痍のところに、復活したてホヤホヤのワルプルギスの夜が現れるのだから。

力を振り絞ってワルプルギスの夜を倒すのは得策ではない。ワルプルギスの夜は、トータルで大ダメージを与えなくてはならないのだ。

それこそ、魔女百人切りの勢いが必要かも。

「長期戦になるのかな」

「……そうね、何度も何度も傷を負わせ、〝疲労〟させる必要があるわ」

疲労させる、か。

……そのためにはきっと、それを上回る疲労が私たちにのしかかってくるんだろう。

ぞっとしない話だ。

私の最期の友達

白く細いほむらの手を握る。
彼女は緊張に、僅かに手を汗ばませている。
隠しておきたいものだったそれを、彼女が見せたいというのだ。
なら、こちらも真摯に見なくてはならないだろう。
「……――」
ほむらの魔力が研ぎ澄まされる。
瞬間、シャッターが降りるような音がした。
「わお」
その瞬間に世界はいくつかの色を失い、輪郭はぼやけ、何より特徴的なことに、静止した。
見せてあげる。とだけ言われて握った手が教えてくれた。
私は、聞いていたものの実感の沸かなかったほむらの魔法の全てを見たのである。
「時間停止」
「停止が長時間になるほど、使用する魔力は多くなるわ。小刻みの停止でないと、普段の

使用では使い物にならない」

ほむらが地面の小石を蹴飛ばした。

小石は蹴られ、宙に浮いている。

「私が触れたものは動かせる。停止解除後に、私が加えた運動エネルギーが反映されるわ」

再びシャッターの音が聞こえ、世界に鮮やかな色が戻る。

蹴っ飛ばして宙に浮いた小石は、当然のように弧を描いて砂利の上へと転がっていった。

「わ、石が突然……」

「なるほどね。便利な能力だわ」

時間を停止し、その間は自分だけが行動可能。

都合が良いというか、便利というか。それでも倒せないワルプルギスの夜が恐ろしいというか。

「私は時間を停止させて、盾の中に格納した銃器で攻撃することができる。けど、それじゃあワルプルギスの夜は倒せない。今までのやり方では、だけど」

「なるほどね。他の魔法少女が今みたいに、触れていれば」

「そう。停止した時間の中を自由に動くことができる」

移動も攻撃も可能だ。
となれば、ほとんど近接攻撃しか持たない私でも、難なく立ち向かうことができるようになる。
ワルプルギスの夜に最接近するというリスクそのものを大幅に軽減してくれる、心強い能力だね。
「マミさんのティロ・フィナーレも、私のフェルマータも簡単に当てられるね」
「ワルプルギスの夜を一回分倒すくらいなら、きっと可能よ。ただ……」
「その後？」
「……ええ」
まどかにもわかっているのだろう。
停止時間中にはどんな攻撃でも当てられるが、逆を言えばどんな攻撃も一瞬で当たってしまう。同時攻撃になるというのは……今回戦うワルプルギスの夜の復活する性質からしてみると、あまり良い手ではない。
「……ワルプルギスの結界に貯蔵されている魔女の力を全て消すためには」
「ワルプルギスの夜を何度も倒さなきゃいけない。そういうことでしょう？　……それでは暁美さんの魔力が保たないわ」
うん。厳しい正攻法だ。

ショップ利用なしで四天王を十周だか二十周するようなものだろう。ただの魔女だって、何百も倒すことはできない。　私たちの魔力には限りがある。

「巴さんの言う通り、ワルプルギスの夜に直接攻撃するのは厳しい。だから……」

「ワルプルギスの夜本体ではなく、エネルギー源である結界内の魔女を全て倒してしまえば良い」

「……正解」

「ええっ、そんなこと……できるの？」

私は頷いた。多分間違っていないはず。

「何度も強い一体の魔女を相手にするのはしんどい。でも、一度に複数の魔女を一気に倒すのは、そう難しくはないんだよね」

魔女の数がいくら多かろうとも、ワルプルギスの夜ほどの耐久力や強さはないだろう。

そして、それが一同に会している。結界内の魔女を打尽にできれば、ワルプルギスの夜の心臓を潰すことに直結するだろう。

例えば、結界の内部で核爆弾をドカーンとやったりね。

それはワルプルギスの夜本体を何度も叩くよりも、遥かに現実的な戦い方だ。

「ほむらのその資料を見た感じでは、ワルプルギスの夜の背中には結界があるんだよね」

「ええ。ワルプルギスの夜は結界に篭る必要はない。過去、必要性を失ったこともあって入ることもない。けど、自身の結界を持っていないわけではない」
「多くの魔女を溜め込む結界だからこそ、肌身離さず持っているわけね……」
「ワルプルギスの夜を一度倒して、無防備になった結界へ、すぐさま突入する！　ほむらの時間停止を使ってね」
そうすればワルプルギスの夜が復活する前に、中へと入れるはずだ。
後はマミさんなり、私なりが大暴れすればいい。
フェルマータもティロ・フィナーレも、一度に多くの魔女を倒してしまうだろう。
ほむらの持つ武器だって、そこでなら大いに役立つはずだ。

『じゃあ、いっきまーす』
『はーい』
河原の向こう側で、まどかが大きく手を振っている。その姿が遠くに見える。
みんなの声が届かないために、テレパシーを利用するような場所に、私はやってきた。
なぜかって？　さやかちゃんの真の力を見せるためですよ。

距離は目算で百数十メートル。
そこにはまどかと、マミさんと、ほむらが待っている。　今から彼女達の元まで向かわなくてはならない。
マッハでね。
「変、身っ」
ソウルジェムを展開し、ブルーの衣装を見に纏う。
感覚的に出せるようになった左の篭手も装着し、右手には二本のサーベルを掴む。
「で、とりあえずアンデルセンを作りまして～」
右手に大剣アンデルセンを作り出す。巨大な剣はそれなりの重さを感じさせないが、しかし確かな重量感がある。
これを持って走れといわれたら、魔法少女の体でも辛いだろう。
「……けど」
今の私には、それ以上の事だってできるのだ。
『よ～……い』
始まりを告げるまどかのテレパシーが、ここまで届く。
『どん！』
開始だ。

「〝セルバンテス〟！」
軽く跳躍、からの連続で足元にバリアを出し、連続で踏みつける。移動先は真横。
ダンダンダンダン、ざっ。
「っしゃ成功ッ！」
「わひゃあ！」
「!?」
「え!?」
到着の勢いは百パーセントを地面に預け、殺させてもらった。
大きく抉れた河渕の砂利が、ダッシュの速さによるエネルギーの大きさを表している。
「……動きが全く、見えなかったわ」
「さやかちゃんが、一瞬でこっちまで跳んできたように見えたけど……」
「うん、これが私の新しい移動方法だよ」
「……バリアね」
「いかにもっ」
左腕の篭手、セルバンテスで出現させたバリアーは、弾く能力を持っている。
そのバリアを丁度良く足元へ出し続けることによって、強い推進力を生み出す足場を

作り出し、空中でも異常な速さで駆けることが可能になったのだ。
方向転換も自由自在。きっと空へ跳ぶこともできるだろう。
一瞬のうちに、ワルプルギスの背後へ回り込むことだって、できるかもしれない。慣れるにはもう少し実践を積んでおきたいところだけどね。
「それがあれば、ワルプルギスの夜との接近戦もいけそうね」
「……うん」
「？　……何か、考え事？」
「ああ、うん。まぁね。いや、私でも大丈夫なんだろうけど……でもね」
それでも私に決定力はない。
私のアンデルセンによる一撃は、確かに強い。燃費を気にしなければフェルマータを撃つことはできるだろう。
けど、火力そのものを見れば、マミさんのティロ・フィナーレに勝る火力を出すことはできないのだ。　そちらの課題はまだまだ残っている。
「私が攻撃するよりも……多分、攻撃だけなら。杏子に任せたほうが、絶対に良い気がするんだよなぁ」
杏子のブンタツによる剣戟は、私のシールドを破ってみせた。
魔力の限り破れるはずのないシールドが壊れたのだ。何にも負けない力は伊達じゃ

あない。

　そりゃあ、私の守る力に誇りはある。それでも、あの時の勝負は間違いなく、杏子の勝ちだと認めざるを得ない。

　ブンタツの切れ味は本物だ。

「杏子の使うブンタツっていう両剣があれば、ワルプルギスの夜は倒せるはず」

「……彼女、協力的ではないわよ」

「ええ、強さにしか興味の無い子よ。会うのも少し……怖いわ」

「それに杏子は言ってたわ。共闘はしたくないとね」

「えー」

　そりゃあ困る。そんなダイレクトに断られてもなぁ。

「んー」

　杏子を説得するのは難しいか？

　彼女について知っていることは少ない。未知数かな。

　共闘するメリットを言えば教えてくれるだろうか。

　……そういえば、私を邪魔な黒子扱いしてたな。

　はなから友好的じゃないのはわかってたけど、あそこまで露骨だと、さすがに望み薄だろうか。

「んー……でもな。杏子がいれば、絶対に勝てると思うんだけどな」
「すごい自信だね、さやかちゃん……なんとなく、気持ちはわかるけど」
「確信に近いよ。あいつが協力してくれれば、絶対に負けるわけないもん」
全てを守る私と、何にも負けない杏子。
あいつは私だ。私はあいつだ。
戦おうとする強い執念さえなければ、あいつは私と同じような考えを持っているはずなのに。
……杏子の戦いを邪魔しないことでしか、あいつと関わることはできないのだろうか。

全てを守れるほど強くなりたい。
何にも負けないほど強くなりたい。
一生に一度の願いを、死ぬまで戦いに身を投じる理由を、掛け替えのない祈りを、ただ強さに投じた二人の魔法少女。
美樹さやか。
佐倉杏子。

戦うための願い……普通なら、そんな願いは選ばない。
彼女達は同じ師を持っている。
私は時間遡行者だ。彼女達の、通常の運命を知る者だ。
だからこそ違いがわかる。違った理由もわかる。
煤子。この人物こそが全ての原因に違いない。
彼女の指導がさやかを変え、杏子を変えた。二人に戦う力を望ませた。
……煤子。
私はきっと、憶測でしかないけれど、あなたを知っている。
けど、それでも問わずにはいられない。あなたは何者なのか？　と。
どうしてこうも二人は違ってしまったのか、と。

私は全てを見通していたわけではない。
わかるでしょう。私は予知能力者ではないの。
私に出来たことは、教えること。ただそれだけだった。

私はさやかと、杏子を信じた。

そして二人に託した。
これで上手くいくかどうかなんて、途中からどうでも良くなるくらい、二人を信頼したの。

それが偶然、こうなった。
いえ、何千分の一の確率を持ち出すなら、必然とも言えるのかしら。

ねえ暁美ほむら。あなただって、そうだったじゃない。
忘れたわけじゃないでしょう？
ひと時の私みたいに、忘れたわけではないのでしょう。
だったらわかるはずよ。

出会いは人を、大きく変えるのよ。
出会って、友達になって、自分が大きく変わる。
それは決して、偶然なんかじゃない。

†　8月30日

「……」

焦燥も、絶望もない。

そんな、負の感情とはかけ離れた日々を過ごしてきた。

だがその生活にも、限界はやってくる。

油を注さずに回り続ける歯車など存在しないのだ。

「……」

手を広げ、手を握る。

既に感覚は鈍い。力も入らなくなっている。ソウルジェムの劣化もいよいよだ。

この手はじきに動かなくなるだろう。それは煤子をして初めての経験となる。

それでも彼女に恐怖はない。

来る死病に冒されようと、その身が意に沿わぬ絶望を振り撒こうとも、全てを受け入れる気持ちでいた。

ただ安らかな心が、ベンチの上の自分の中にあった。

「ありがと」
曇り空に呟いた。
そして足音が昇ってくる。
「煤子さぁーん！」
大声だけが先に到着する。
「ふふ。本当に、ありがとね」
その時は、目前に迫っていた。

「……夏が終わるわね」
「……」
曇天が続いている。
九月と共に、雨が降るかもしれない。
雨が降れば火照ったアスファルトは冷やされ、夏の思い出のいくつかを洗い流してしまうだろう。
二日も外に出られなければ、肌は鋭い日差しを忘れることもある。
それでも。
「さやか、もう、お別れよ」

「……っ」

それでもどうか、忘れないでいてほしい。

蒼天の下を駆けた暑い日のことを。

自分なりによく選んだ、何気ない顔をした言霊達を。

何より。この自分自身を。

刹那の時を過ごした友達を。

「煤子さん……なんで？　やっぱり、もうダメなのっ？」

「ええ、もう時間切れみたい」

「やだよ、どうして？　まだ元気だよぉ……煤子さん、大丈夫だよぉ……」

涙で顔を汚した彼女を見ても、煤子は後ろ髪を引かれなかった。

名残惜しさなど何もない。

自分を想ってくれる人がいる。

そんな彼女の中に、自分のかけらが息づいている。ならばこれでいいのだと、心の底から思えたのだ。

絶望なんて程遠い場所に、自分はいるのだろう。

たとえば、此処が。この坂道こそが、そうかもしれない。

「さやか、これでお別れだけど……私から教えられることは全て、教えたつもりだから」

「……あうっ……うぐぅ……」
「泣かないの。すっごい強くなるんでしょ。なら涙の数より、何倍も強くならなきゃだめじゃない」
今生の別れとなる。自分はこれから、死ぬのだ。
そんな些細なことよりも今は、さやかの涙に憂う気持ちだけが強かった。
「……ほんと。いつだって世話が焼けるんだものね、さやか」

夏は終わる。

†　それは8月30日の出来事だった

万全、のはず

『イェエエエエアアアア！』

Ｇｅｍｉ・Ｐｏｌｌｕｘ
ルチャの魔女・ジェミーポルクス

それは真紅と群青のマーブル模様に覆われた巨人だ。
ウルトラマンばりの巨体から、鈍重ながらも抜群の破壊力を疑う余地のない蹴りが繰り出される。
「とっ、とと……」
巨大な結界の中に無数に聳えるポールには、既にマミさんのリボンが仕込まれている。
ポール同士は、昔の写真によく見られた電線のようにリボンが連結されており、私達はリボンを足場に移動することが可能だった。
大振りの魔女の攻撃も、足場を確保した私達には到底、当たるはずもない。

魔女の巨躯を旋回しながら、着々と弱点であろう頭部へと上り詰めてゆく。
「さやか、裏へ回って」
「ほいさー」
ほむらのアサルトライフルが軽快に轟く。でかい的だ。全弾命中は間違いないだろう。
「〝セルバンテス〟……！」
しかしアサルトライフルとはいえども、巨大な魔女には大したダメージは期待できない。
巨人には雑多な弓矢とか、銃弾は効かないもんなんです。
じゃあ何なら効くのか。それはお約束だ。
無骨な石を頭部へ目掛け、全力投球すればいい。
「はっ、せいっ、よっと」
左手を下へかざしながら、脚は忙しなく動く。
自分で生み出すバリアーを足場に、私の体は高速で空を切り裂いてゆく。
一瞬のうちに魔女の死角へと回りこみ、最後に頭頂部へ跳ね上がる。
ほむらとマミさんの攻撃に気を取られた魔女の、隙だらけの後頭部。巨人の弱点は今、目の前に晒されていた。

「〝アンデルセン〟！」
大剣生成。そしてバリアによる発射。
『イァアァアッ!?』
大剣が魔女の後頭部に突き刺さる。
魔女と人間の弱点が同じとは限らない。
けど人間が「こりゃだめだ」となるくらいのダメージなら、大抵の魔女なら陥落するものだ。
「打ち込まれたらさすがに……キツいでしょッ！」
左の篭手で拳を握り、魔女に刺した大剣の柄を、更に全力で殴りつける。
篭手が生み出す反発のバリアーは大剣を強く押しのけ、刃は魔女の体内へ向かって深くまで突き刺さった。
『ォオ……！』
大剣の刀身全てが埋まりきると、さすがの巨人も膝から崩れ落ちて、静かになった。
辺りのポールを巻き込みながら床へ沈んでいく姿は、ウルトラマンというよりは、爆発する前の怪獣のようでもあった。
「早い回り込み、便利ね」

「ええ……足場を必要としないっていうのは、結界での戦いでは汎用性が高いわね」

大きな魔女を相手にしても、バリアは自由な足場となって機能する。

相手の位置の高さは問題にはならなそうだ。

ワルプルギスの夜という強力な魔女を相手にして、自由自在に飛び回ることはできないにせよ、不可能ではないと解っただけ良い戦果だ。

さあ、次にいってみよー。

『クァァァァァァッ！』

Ｃｌｏｕａｒｄ

鳥の魔女・クルワール

今日は魔女との連戦だ。

三人もいれば負けることはないし、効率よく倒してグリーフシードを回収できるってこともある。

けどそれ以上に、決戦へ向けての連携を整えるという方が大きかった。

『クァアァアッ！』
「空を飛ぶ魔女ね……厄介だわ」
巨人の次は翼の生えた、正真正銘空にいる魔女だ。
赤黒い空の下で白磁の巨翼をはためかせる、トーテムポールのような姿である。
「あの魔女は上から石柱を落として攻撃してくるわ。衝撃に気をつけて」
「ええ！」
「……みんなが撃ってる時に巻き込まれたくないから、私は待機してるね」
私も飛んでいくことはできる。けど、その間はみんなの射線を邪魔することになる。
今回の私はしばらく待機だ。
「おっ」
空跳ぶ石のトーテムポールから、その中ほどにある岩が〝はらり〟と外れ、落ちてくる。
なるほど、あの魔女は自分の体の一部を落としてくるらしい。
「……？　思っていたより緩慢な動きなのね」
「油断しないで。落としてきたら絶対に回避と防御を優先して」
魔女から離れた石柱は、ずいぶんゆっくりと落ちてくるように見える。
おかしい。そう思うと同時に、ほむらが言う危険を理解した。

「マミさん！　こっちに退避して！」
「ええ！　あれは不味いわね！」
私達三人は、黒い砂漠を駆けだした。
不安定な地面に足をとられそうになるが、それでも一歩一歩に力を込めて、持てる精一杯で踏み抜く。
そして、遠目からは小さく見えた巨大な岩が、ようやく今になって砂丘へ激突した。
石柱の破片が砂を捲りあげ、粉塵と共に礫を弾き飛ばす。
「あっぶなっ！」
二人を後ろへ隠すように礫に立ちはだかり、バリアを展開する。
バリアは無数の石や土煙を全て弾き返し、視界を覆うはずだったであろう靄すらもかき消した。
「あんなに大きいなら最初に言ってよ！」
「〝今日は大きな魔女と戦う〟って言ったじゃない」
「最初だけかと思ってた！」
魔女は再び上空を旋回し、鳥のような鳴き声を結界の中に響かせ始めた。
赤黒い空の中で、灰色の体はよく目立つ。

「あの魔女に全員が攻撃を当てられないようじゃ、ワルプルギスの夜とはまともに戦えないわ」
「……また私が飛んでいく？　バリアを足場にして。でも……」
「貴女だけが出来ても、不十分なのよ」
まあ、そういうことだよね。
「……なるほどね、私かあ」
どこか覚悟を決めたような息を吐いて、マミさんが納得する。
「ワルプルギスの夜は、自分の周りに何体もの使い魔を生み出せる……という話しはしたわね。使い魔のほとんどは宙に浮きながら攻撃してくるわ。当然、あの魔女の高さからもね」
以前にこの魔女と戦ったことがあるほむらは、当然ながら強気だ。
私はなんだかんだで先ほどの攻撃には驚いたけど、一回でも攻撃を見れば相手の傾向も掴める。
空へと跳んでいける以上、あの鳥魔女に負ける気はしない。
マミさんは射撃能力を持っているとはいえ、遥か上空にいる相手だ。
あれに対処できるかどうかは、本番で重要になってくる。
「もう、先輩を見くびらないで欲しいわね」

「行くのね。一人で？」
「二人とも、そこで見てなさい」
「頑張ってください！」
「ええ。たまには先輩らしいところ、出してかないとね」
マミさんは大人っぽくウインクし、前に出た。
相変わらず、頼もしい後ろ姿だ。
「やあっ」
マスケット銃を両手に、マミさんは空高く跳躍した。
……とはいえ、目算で１０ｍ前後。
魔女まではその何倍も距離がある。一度の跳躍では届きようもない。
が、マミさんの場合には、手の届く距離に近付く必要は無い。
「近くなった分、確実にね」
二挺のマスケット銃が同時に放たれ、そのまま真っ直ぐ光線を射出した。
「……あれは」
「リボンだ、なるほど」
マスケットの銃口から放たれたのは、一条ずつのリボン。
それが石柱の魔女に突き刺さり、固定される。

貫き砕かないまでも、魔女の内部にまで達するリボンは決して抜けることはない。
ほーう、マミさんは、リボンをそのまま射出することもできるのか。
「これさえ繋がっちゃえば、後は簡単ね」
『クェエエエエ！』
リボンを植えつけられた魔女も黙ってはいない。
突き刺さった身体の石柱を自身から切り離し、そのままマミさんの方へと落としてきた。
「残念、そのための二挺なの」
確かに一本のリボンは石柱に刺さっている。それを自分から切り離すのは当然だ。
けどマミさんはリボンを二発撃った。その一本一本は、トーテムポールの魔女の別々の部分に刺さっている。身体をひとつ切り離しても、完全に振り切ることはできない。
「上を取らせてもらうわね」
『！』
素早くリボンを引き戻し、身体を魔女に最接近させたマミさんは、そのままの勢いで魔女の更に上空へと躍り出る。
魔女の落石攻撃は、下の相手にしか効果を成さない。これで決まりだ。

「〝ティロ・スピラーレ〟！」
　魔女の胴体へマスケットの弾が打ち込まれる。
　そして中心部へ到達したリボンの弾は……炸裂する。
『クァッ……クァアアア!?』
「残念だったわね。……おやすみなさい」
　拡散するリボンによって内部から撃ち砕かれた魔女は、そう長く悲鳴を上げることなく、声無きつぶてとなって砂漠の上に降り注いだ。
　赤黒い夜空から落ちる白い石の破片は、いつか曇天に見た、ちょっと見えづらい流星群のようだった。
「ふう、ただいま」
「おかえりっす、マミさん」
「問題はなかったみたいね」
「ええ。前だと下から根気よく撃つだけだったかもしれないけど……今ならリボンも撃てるからね。空中の移動ができるようになったわ」
　炸裂する弾と、リボンによる移動。
　マミさんの魔法には色々なバリエーションが加わっているが、それは全て、マミさんが魔法少女として培ってきた経験があるからこそ体現できた技術なのだろう。

ワルプルギスの夜との対決までには、更なる技を使えるようになっているかもしれない。いや、多分なっているんだろう。

……私もうかうかしてられないな。

みんなと魔女退治しながら連携を高めてきたこの数日間、私は密かに杏子の影を探していた。

魔女あるところに杏子あり、という自作の言葉を頼りにアンテナを伸ばしていたものの、不思議と杏子は居ない。

件の路地裏を、ひしゃげたガードレールの坂道を、暇そうに歩いて見せても、杏子は現れない。

私は杏子に会いたかった。なぜかって、やっぱり杏子がいないと、ダメな気がするからだ。

ダメというのは、私とマミさんとほむらで戦って、勝てないのではないかという不安だ。

連携は着々と高次元なものへと仕上がっているし、どんな魔女がやってきても負けない自信はある。

しかし相手が相手である。不安は消え去らない。

これで自信満々で挑めたら、それはすぐに死ぬ人だ。

「……」

夏の日によく訪れたこの坂道のベンチで、誰が来るでもないのに、私は待っている。

隣には空の缶コーヒーだけが楚々と座り、前の道は誰も通らない。

小高いこの場所から見下ろされる見滝原の景色は、当然見滝原の全てが眺望できるわけではないが、それなりに私の活動範囲を視界に収めることができた。

……目の前にあるこの町が壊滅するなんて、到底思えない。

だってあんな大きい町なのに、それが全壊するなど。

けどほむらの話は本当だし、キュゥべえの話も本当だ。

ワルプルギスの夜は必ずやってくる。

「……絶対にさせない」

私はこの町を守りたい。

だってこの景色は、私が強くなりたいと願いながら眺めた、思い出の景色なのだから。

私は手が届く全てをものを守りたい。今の私は、この町全てに手が届く。

そして、ワルプルギスの夜の前日がやってきた。

いつもとは違うけど、手応えはある

：フォーリンモール２Ｆ　の非常階段から従業員階段へ移れる　？♀？
そこから、屋上へ来て　？

「……よし」
ほむらから、最終調整のお誘いメールが来た。
今日は街の高低差の把握、ワルプルギスの夜と街の対比をよく確認しておく最終準備の日だ。
実際に見る景色と、俯瞰地図だけで見る町並みとでは色々と違ってくるからね。
……しかし相変わらず、にぎやかなメールしてるな、ほむら。これも真顔で打ち込んでいるのだろうか……。
「……」
部屋を出る際、片隅に置かれた袋に目が行った。
その袋には道着などの装備一式が詰め込まれ、いつでも部活に復帰できる準備が整っている。

けど、明日にはこの部屋は無いかもしれない。
全てがめちゃくちゃに壊された中の瓦礫やゴミのひとつとして、あの道着袋も風雨に晒されるかもしれない。
「……」
けど、全部をそのままにすることにした。
この部屋が、家が壊されるかもしれないけど。
それでも、私だけが自分の大切なものを持ち出すなんて、そんなことはできない。
自分の大切なものを守るために、私は町を守ってみせる。

歩きながらの考えは捗るもの。
最近の私たち見滝原魔法少女団の活動範囲は、かなり広い。
できる限り多くの魔女を倒すために、活動範囲を広げているのだ。
魔女との戦いで戦術を磨くのは当然。実戦で消費されるであろう魔力を回復するために必要なグリーフシードも確保できる。
その上ほむらの豊富な経験から、対ワルプルギスに近い魔女を優先的に選び、戦っている。
空を飛んでいる魔女や、ひたすら巨大な魔女など。ワルプルギスの夜に近い環境や相

手との戦いで、勘を磨き続けていた。
そう。活動範囲は以前よりも広がっているのだ。
なのに……何故杏子と出会わない？
あいつも、まさかワルプルギスの夜を相手にグリーフシードをためない、なんてことはあるまいに。
まずワルプルギスの夜と一対一で戦える環境を作るためにも、魔女を間引く意味で見滝原を拠点にグリーフシードを集めてもいいはずなのに。

そうこう考えている間に、フォーリンモールの大きな影の下にやってきた。
見滝原の中心に位置するフォーリンモールは、辺りのビルと比べても際立って高い建造物だ。
屋上に行ったことはないけど、その二階下までなら遊びで入ったことがある。
窓から見下ろす広大な街の景色はなんとも、子供心に感動したものだ。今でも子供だけどさ。
関係者以外進入禁止の扉を開け、歩き慣れない寂しげな非常階段を上がる。
その時に丁度、まどかからのメールが来た。

：がんばって！

卑屈さの見えない短い文章からは、まどかの悩みも見られない。
彼女が願い事云々で悩んでいないということ、なのかも。
だとしたらそれは、私達に全てを託しているということでもある。
うん。頑張るよ、まどかの分もね。
重い扉を開くと、眩しすぎる日差しが私を出迎えてくれた。

「待ちくたびれたわ、と言いたいところだけど」
「全然準備の途中だよね、それ」
「ええ」
約束の数十分前に来た私が見た光景は、汗を流しながらキリキリと働くほむらの姿であった。
学校の真新しい冬用ジャージを着て、なにやら大きな箱型機械に跨りながら、調整をしている最中のようだった。
「本当はもっと早く済ませるつもりだったけど……」
「ああ、ここの屋上にも、なんだっけ。ミサイルだっけ」

「ええ。原始的なやつだけど……中型で、威力もあるわ」
手馴れた様子で箱をいじりながら、淡々と答える。
よく見れば、箱には子供3、4人が跨がれそうな立派なミサイルが備わっていた。
よくもまぁ屋上にこんなものを運べたものだ。
当然のように準備できてしまう辺り、さすがほむらというわけか。
けど同時に、そんな事に慣れてしまうほむらの姿に、茶化すことのできない大きな意志を感じた。
「……ねえ、まあ、話には聞いていたけどさ」
「ん？」
「ほむらは今までずっと、こういう事をしてきたの？　今までの過去でも」
「……最初のうちは、こんな感じね。今回は滅多に使わない場所にも設置してるから、設定が慣れなくて。面倒で手間取ってる訳だけど」
工具かどうかもわからない謎の金属棒を床に置き、ほむらはいつもより遠い目で空を眺めた。
「私は魔法だけじゃ戦えないから。宿敵を倒すために、強くならなきゃって」
「そっか」
「……昔の話よ。今はこっちを済ませる方が重要だわ」

「だね、手伝うよ」
　ほむらのためにも、私ができることはやらなくちゃ。
「ありがとう。じゃあその辺りに落ちてるオイルの空き箱……」
「これ？　私も詳しくないけど……」
「その辺りに座ってて」
「あ、はい、うっす」
　しかし、あまりに専門的な分野は手伝うことも許されないのでした。
　餅は餅屋ってわけですな。

　マミさんは時間通りにやってきて、その頃には既にほむらも普段通りの制服姿に戻っていた。
　素早くジャージを脱ぎ捨てていた所を見るに、あまり人には見られたくない姿だったらしい。
　涼しそうな顔でミサイルポットの脚部に手を置き、マミさんにもミサイルの説明をしている。
「順序としては、部品工場地帯が前線になるわ。そこに仕掛けてあるミサイルから使っていく予定ね」

「そう……けど、ワルプルギスの夜が攻撃の手を激しくしないうちに、遠くのミサイルから当てていくべきなんじゃないかしら……？」

「一理ある、けど……ワルプルギスの攻撃で、発射装置自体が壊されたら終わりだから。そういう意味では、近い所から使っていくのが確実だと思っているの」

「それもそっか。これまで戦ってきた暁美さんが言うなら、そうすべきね」

もちろん、飛んでいるミサイルが撃墜される恐れもある。

でも至近距離から狙うのだって、同じくらいのリスクはあるはずだ。ほむらの経験を信じよう。

「ミサイルを小出しで当てて、ワルプルギスの夜を前に進めない。押し返しながら、魔法少女で叩いていく」

「そう。今までは火力としての運用だったけど、今回は兵器によるダメージを狙うよりも、ワルプルギスを押し戻す使い方に変えようと思うわ」

「それがいいわね」

ワルプルギスは台風のように、上空を移動して避難所となる市民体育館を襲うのだという。

明日の長期戦は必至。何回か、ミサイルを直撃させて押し戻す必要があるだろう。

町の大半を守りながら戦うには、これしかない。

「ルートは避難所に向かって直線的、これは……人がいるって解ってるんだろうね」
「そうね。過去、ルートが逸れたことはなかったわ」
「そしてミサイルや私たちの攻撃によって、ワルプルギスの位置はある程度コントロールはできる」
理想はワルプルギスをジグザグに翻弄することだ。
斜め左右からミサイルなりを当てて、吹き飛ばす。そうすれば広い範囲に設置したミサイルをうまく活用できるので、単純な長期戦には向いている。
でもそれはあくまでワルプルギスの夜を倒すため〝だけ〟の理想。
広範囲に振り回せば、それだけ街の被害は広まってしまう。
そう考えた場合、別の理想的な対処は、直線的にくるワルプルギスを可能な限り同じ直線で打ち返す方法だ。
街を守るには、それしかないだろう。色々な兵器の設置も、楽だしね。　複雑な計算も必要としないし。
「もちろん、出現位置は統計に過ぎないから。異なるポイントから来た場合は、まず位置を〝ずらす〟ことから考えるわ」
「準備が整っているルートに押し込むってことね」
「戦っている間にずれた軌道も、逐次直す必要があるわね」

「ええ」
相手を手玉に取るような言い方だけど、その通り。ほむらが言うには実現もできるらしい。
工場地帯に仕込まれた兵器は、街中よりも数が多いし充実しているから、ワルプルギスの位置を修正しやすいのだそうだ。
私たちの主な戦闘区域もそこになるだろう。
街に深く入られるほど不利になる。
気を張りっぱなしの勝負になりそうだ。
「この景色も、大きく変わっちゃうのね」
「……」
マミさんの目は、見滝原のずっと向こうを見ているようだった。
ずっと向こう。ワルプルギスの夜がやってくる彼方である。
向こう側からこっち側が壊されてゆく。考えたくはないが、現実的にかなりの被害を被ることは避けられないだろう。
「二人は、ずっとこの街で育ってきたの？」
「ええ、そうよ」
「私も、物心ついた時からかな」

「そう……」
辛気臭い目をしないでよ。
「別に、災難ってだけだよ」
「！」
「やってくる敵がわかってるなら、全部跳ね返しちゃえばいいだけの話だもんね！」
そう。私達にならきっとできるよ。
それが正義の味方ってやつの、理想のエンディングなんだ。

「……こんなところか」
杏子は床にグリーフシードをばら撒いた。
その数は両の手にも大いに余るほど。非力な魔法少女にとっては垂涎の光景だろう。
「随分、沢山のグリーフシードを集めたね」
「てめぇか」
白猫はすぐそばに潜んでいたらしい。
煩わしそうにしている杏子には構わず、グリーフシードの側へとやってきた。

「それは全部、自分の縄張りだけで集めたんだろう？　いつになくすごい成果じゃないか」
「ああ、ここ一帯は絶滅したんじゃない」
「使い魔もね」
「当然さ、誰にも邪魔されたくないんでね」
「周到な準備だね。僕も当日は杏子に近づかないようにすべきかな？」
「そうしときな。なます切りにされたくなかったらね」
と言いつつも、杏子は頻繁にキュゥべえを潰している。
積極的にではないのでキュゥべえも諦めているが、もう少し頻度が高ければ杏子の周りから消えるのも時間の問題になる程度には、きまぐれな殺意は厄介だった。
キュゥべえはやれやれと言いたげに首を振り、今度はしっかりと杏子の目を見据えた。
「決戦はやはり、おそらく明日になるだろう。健闘を祈るよ」
「へえ、針路は間違いないんだな？」
「これも推定だから間違ってるかもしれないけどね。僕は予言者じゃないから」
「……」
殺意が膨れる。

キュゥべえは赤黒いオーラから流れるように、教会の出口へと向かっていった。
「とにかく頑張るといい。ここまで場を整えたんだ。〝今の風見野はワルプルギスの夜と戦う場合、これ以上ない環境と言えるだろう〟」
「……」
「じゃ、鬱陶しいだろうから。僕は立ち去るよ」
「そうしとけ」
教会からキュゥべえが立ち去り、いなくなる。
「……」
彼は一度だけ教会へ振り返り、尻尾を揺らした。
「そう。〝もしも風見野で戦うのであれば〟最高の環境で間違いないよ、杏子」

……来る

早朝前から、街は慌ただしくなったのだと思う。
窓は揺れてガタガタ騒ぐ。植木は割れる。自転車は倒れる。ビニール袋は空を飛ぶ。

いつもと違う空模様であることは明白で、気象庁からの事前発表もなかったので予兆も何もない恐怖が、眠りからさめたばかりの町中に広まっていた。
総じて、住民たちの目覚めは早い。テレビをつけなくても最寄りのスピーカーが「避難しましょう」と叫んでいるので、危機感を煽られての避難率は高いはずだ。
うちの家族も、多分。熟睡している頃合いだとしても、起きたはずだ。
私は事前に他の子のうちに泊まることを伝えてあるから、両親に心配をかける事は無いだろう。

：今あっちの避難所にいるんだ。すっごい広くて快適だよー

「……よし」

嘘をついた。
けど、この嘘が誰かを安心させるのなら、私にとってはそれが正義だ。人さえ守れれば悪い子だろうが不良少女だろうがどうだっていい。
無駄に時間をかけて打った文面を家族宛てに送信し、私の携帯は本日の業務を終えた。
「うん。じゃあ、行きましょうか」
「はい」
そんな私の一連の姿は、マミさんに見守られていたらしい。
……ちょっと恥ずかしいな。
「二人とも早く、置いてくわよ」
ほむらの後を追い、所定の位置を目指す。
見滝原に、ワルプルギスの夜がやってくる。

避難警報は人気のない工場地帯でおっとりした声を上げ続けている。
私たちはそれぞれ予定通りのポイントへ到着し、ギリギリにテレパシーが届く間隔を開けて、曇天を見上げていた。
『……胸騒ぎが、どんどん強くなっていくわ』

マミさんの声は強張っている。
『たしかに。魔王でも降りてきそうな空だなぁ』
遠くで渦巻く黒い雲は、目に見える速さでこちらへ向かっている。
その雲がワルプルギスの夜なのか、その余波にすぎないのか、それはまだわからない。
ただ、自然災害級の強大な力がこちらへ悪意を向けている事だけは、強く実感できた。
『予定通りの動きで、ワルプルギスの夜を攻撃するわ。周りに現れる魔女や使い魔には注意して』
『了解』
『おっけー。兵器のタイミングはほむらに任せるよ』
『ええ。けど私から指示があったら』
『私たちが手動で発動させるのもアリ、ということね』
『慣れてないけど、教わった通りにはやってみるよ。……覚えてればね』
『ええ、十分。贅沢すぎるくらい、万全よ』
やれやれ。結構付け焼き刃なんだけどな。
……それでもほむらはずっと、今よりもっと不安定な状況で戦ってきたわけだ。
「しゃーない、勝たせてやりますか」

誰にも聞こえないように軽口を叩き、私は首を鳴らした。

霧が立ち込める。

どこからともなく、足音がやってくる。

川の向こう、すぐそこからだ。

「……」

小さな使い魔が足元を通り過ぎ、去って行った。

それを皮切りに、次々に使い魔らしき生物が姿を現してくる。

巨大な象が。犬が。ライオンが。白馬が。

見たこともない柄の万国旗を引きながら、祭りの開幕を祝うかのように、練り歩いてくる。

伸びる万国旗の終端に目線は移った。

『アハハハハ！　アハハハ、アハハハハ！』

姿の霞みようから、それはかなり遠くにいるはずの魔女だ。

なのに、その姿は巨大に見える。

デカい。それだけで、凄まじい威圧感。
ついにワルプルギスの夜が現れたのだ。
「聞いてたまんま、ってだけに……ちょっとビビったよ、ちくしょう」
思わず手が震える。それでも足は震えさせない。
話通りの巨大な姿。
今日はこいつを何十回、何百回分も倒さなくちゃいけないわけなんだけど。
「お昼ご飯に間に合いますかねぇ……!?」
変身する。
さあて……一世一代の戦いの始まりだ。
「行くよ、デカ魔女」
ワルプルギスが姿を現したら、まずどう動くのか。打ち合わせは既に終えてある。
まず、私とマミさんで攻撃する。
序盤からワルプルギスの夜への総攻撃だ。
街の中心部から離れている今だからこそ、容赦なく思いっきり叩くチャンスなのだ。
「街は絶対に守ってやる……〝セルバンテス〟!」
左腕が銀の輝きに包まれる。
装着されたガントレットに重さは感じられない。力が増した全能感だけが、皮膚の上

に一枚、力強く張り付いている感覚だ。
これさえあれば、私はなんだってできる。そんな気さえする。
『接近、開始するよ！』
『了解、無茶はしないで』
『私も行くわ！』
河へと走り、軽く跳躍する。
水面へ放り投げた体は、落ちればすぐに沈んでしまうだろう。
けど今の私にはセルバンテスがある。
「はぁ！」
左腕の籠手がバリアを出現させ、着地可能な足場となる。
「やあッ！」
バリアは反発するバネとなって、私の体を空へと押しやった。
まだまだワルプルギスの夜は高いし、遠い。もっと高く、もっと近づいてやろう。
『アハハハハ！　アハハハハハハ！』

Walpurgisnacht

舞台装置の魔女・ワルプルギスの夜
　足を踏み出すごとに、バリアを展開。
　バリアの足場は反発する力によって私を押し出し、さながらリニアのように、身体は空を打ち抜いてゆく。
「ヒヒィン」
「パォオオ」
　いつの間にやら動物をかたどった使い魔たちは空に浮かび、統率性もなく無造作に走り回っていた。
　使い魔たちはワルプルギスの夜へ近づくにつれ、その数を増してゆく。
　けどワルプルギスの巨体を覆い隠せるほどの数がいるわけでもない。
　私は使い魔を合間合間を器用にすり抜けながら、着実にワルプルギスの夜へ接近する。
『よおし……正面っ！』
「キャハハハハ！」
　ワルプルギスの夜、前方１００ｍ。
『目標目の前！　交戦開始！』
　空中で二本のサーベルを生み出し、纏めてつかんで大剣アンデルセンに。

左腕のセルバンテスと、右腕のアンデルセン。
「……ほんと、ゴジラ相手にしてるようなもんだね！」
視界いっぱいに広がるこいつを相手に、右手の剣が通用するかはわからない。
いいや、絶対に通用する。ただ、この戦いでは、それが目に見えないだけだ。
弱気になるな、姿に気圧されるな。剣を握ったら戦闘開始だ。
全てを賭しても勝てるかどうかの戦いだって、勝つ気で臨んで、そこではじめて全力が出せる。
「ぼっこぼこにしてやる！」
素早く足場を展開し、百メートルの距離を一気に縮める。
正面からの強風の壁が、私を拒むように吹いているが、まだまだその程度では、私の電光石火を止められはしない。
『アハハハ！』
「ヘラヘラうっさい！」
目の前に、ワルプルギスの巨大な頭部。
それ目がけ、私はアンデルセンを振り上げた。
この仰々しい大剣も、ついにその丈に合った出番が来たというわけだ。
「っせいやァ！」

『ハ――』

ワルプルギスの夜の顔面を、ななめにぶった切る。

さすがに切り落とすほどの刃渡りはないが、深く傷つけることには成功した。

もうちょっと硬い手ごたえがあるかと思いきや、そうでもない。硬さは普通の魔女と同じくらいだ。

『アハハハハ！　アハハ！』

「～……！」

しかし、決定的な違いがある。

傷が、瞬時に修復されてしまったということだ。

ワルプルギスの夜に与えたダメージは、瞬時に回復する。結界内に貯蔵しているエネルギーがそうさせるのだ。

トータルで見れば、私が与えた傷はしっかりとワルプルギスの寿命を縮めている……はずだ。

『アハハハハハ！　キャハハハハハ！』

「うぐぉっ……！」

強風に煽られた歯科医院の看板が、私の頭上ギリギリのところを掠めて飛んで行った。

……ダメージは与えている。けど、相手の動きは鈍らない。
……怯まない、弱らない相手と戦うっていうのは、かなり難しいな。
「でも、退くことはできない！」
背中には町がある。安全運転で乗り切れる道ではないのだ。
相手が無敵の魔女だとしても、無理を押して戦い続けてやる。
「〝ハイド・スティンガー〟」
『キャハ？』
連日の特訓によって生み出した移動技。
一定の位置、一定の角度で配置したバリアを高速で踏み抜き、相手の背後へと一瞬で迂回する。
あとは、このアンデルセンが猛威を振るうだけだ。
「〝五芒の斬〟！」
星形を描く大振りが、魔女の背中を素早く切り刻む。
体から切り離された組織が。煙となって風に消え、しかし瞬時に元に戻る。
普通の魔女なら二、三回は死んでいてもおかしくない、オーバーな攻撃だ。
この魔女に普通の戦いは通用しない。大味な技で、削り続けるんだ。
『キャハハハ！』

「！」

魔女の周囲の空間が暗くなり、かげろうのようにゆがんだ。

振り上げた大剣の軌道を強引に逸らし、後ろへ戻す。

左手のバリアを素早く展開し、踏み抜いて一気に距離を取った。

『ヒィィィイン！』

「うわ」

メリーゴーランドのポールが突き刺さった白い馬が宙を駆け、私の目の前を踏みつけながら過ぎ去っていった。

たった今、ワルプルギスが召喚した使い魔だろう。

……重力を無視しながら宙を走る使い魔。これは少し、厄介だ。

『ヒヒィィイイ』

「〝ティロ・スピラーレ〟！」

厄介だと眺めていた使い魔が、黄色いリボンの花火に巻き込まれ串刺しになった。

陶器のような身体を放射状のリボンが貫き、砕かれ風にまかれて、跡形もなく消えてゆく。

『マミさん！　助かります！』

『ふふ、将を射るにはまずは馬からね、任せて』

ここからは離れた場所にある鉄塔から、援護射撃が始まったようだ。
巻き上がる砂埃越しにでも、黄色いフラッシュは辛うじて見て取れた。
頼り甲斐のある先輩の遠距離射撃は、私のそばを掠めてゆこうとも、どこか安心できる軌道で、全ては魔女へと命中する。
着弾する弾が広がり、ワルプルギスのスカートを貫いて肌をも刺す。
『ハイペースにはしないわ。ゆっくり慣らしていきましょう?』
『はい。まずはワルプルギスの夜との戦闘感覚を掴みたいですからね』
『本気を出し始めたあいつは、考えられないほど鋭敏な動きで攻撃を仕掛けてくる。大したダメージを与えていない、今だけが〝練習〟の時間よ』
『ほいさ!』
マジギレしたワルプルギスの猛威を一番に食らうのは、間違いなくこの私だろう。
だから私は本気で練習しないといけない。距離感、手ごたえ、感覚として養えるものは、可能な限り全て体験しなくてはならない。
でないとこの長期戦における大部分であろう、本気のワルプルギスの夜との戦闘で身体が持たないから。
「おりゃ!」
迫りくる金属片を左こぶしで殴り、ワルプルギスの夜へと吹き飛ばす。

勢いよく飛んだ破片は顔に命中したが、それがちぎった消しゴムのカスであるかのように、あっけなくハラリと落ちて行ってしまった。

「まあ、私にぶつかってくる物を利用できるだけましか……うおっ」

背後から飛んできた古びた車のスカートを、持ち前の柔軟な体で根性で避ける。

……辺りが段々と、気を抜けない風速になってきた。

貴女の力を信じてる！

長いトタン板が、サーベルの峰を走る。
ほとばしる火花を残してトタンは去って行ったが、そのかわりにと、次はモルタルの巨大な壁面が飛んできた。
迫る廃材の壁を踏みしめ、いざワルプルギスの懐へと跳躍する。
「くっそ、もう限界!?」
強風が吹き荒れている。ワルプルギスの攻めの手が強くなってきたのだ。
飛んでくる物の中には軽乗用車など、当たればシャレにならないものも混ざっている。
戦いに慣れるというフェーズに、そろそろ終わりがやってきたのだろう。
それでもまだ、私は退きたくなかった。
あと一発だけでいいから、懐へ潜り込んでぶちかましてやりたい。
そう思いつつも、体は廃材と廃品の嵐に翻弄され、なかなか近づけないでいるのだった。

『美樹さん、気を付けて！』
『そろそろ危険よ！』
二人のテレパシーが強く警戒を促す。
確かにそろそろまずいかもしれない。こんな出だしで再起不能となれば、私たちの勝利は絶望的だ。
「でも、ここで……！」
踏ん張れないようじゃ、さらなる暴風に再び突っ込むなんて無理に決まっている。
「！」
乗用車が腕を振りかざすようにドアを開け放ったまま、こちらへ飛んでくる。
「妥協しちゃいけない……！」
サーベルでドアの根元を切り離し、車をやり過ごして、前へと加速。
しかし今まで視界にも入っていなかった金属コンテナが突如として目の前に現れ、巨躯を乱回転させながら向かってくる。
これにぶつかれば、そのまま吹っ飛ばされるのは間違いない。
「相手が何をしてこようと、攻めてやる！」
コンテナが暗い中身をこちらへ向けた一瞬をつき、バリアを蹴って内側へ飛び込む。

魔法少女の強力なキックはコンテナの奥底に叩きつけられ、金属の箱はワルプルギスの夜めがけて吹き飛んだ。

『ヒャ――』

大きな顔面をコンテナが直撃し、箱はひしゃげ、魔女の体がわずかに後退した。

『……やったわね』

『すごい……あの中で、攻撃をいなすなんて』

「っへへ、どーんなもんよ……！　って、うわ!?」

その時、風ではない何か強烈な力によって、私の体が大きく跳ね上がる。

不意打ちの衝撃で、大剣アンデルセンは手を離れて宙に舞った。

「うぶっ……!?」

『さやか！』

ワルプルギスの周囲を囲むように、衛星軌道のように、私の体は見えざる力に操られていた。

それは風などというわかりやすいものではないが、振る舞いは竜巻そのもの。

そう……押し出す風ではなく、逆の。何もない真空空間に引き寄せられるような、手を掻いても抵抗力を掴めないような力なのだ。

身体が無重力に揉まれ、思うような体勢を作れない。

もし今、死角から何かが飛んで来れば……防げない！
『掴まって！』
リボンが鋭く伸びる音がした。だけど、私の視界には灰色の嵐しか映っていない。
私の近くに伸びているのだとしても、掴まりようがなかった。平衡感覚もない。
『さやか！　手を伸ばして、両腕を広げて！』
『そ、んなこといったって！』
『いいから！』
『解った！　とりあえず広げる！』
鉄骨にでも当たれば即死だなと思いながら、私は体をいっぱいに広げた。
雨粒だか砂だか、とにかく冷たい粒が全身にぶつかり、痛い。
それでも腕を広げ、風の中に体を晒す。
すると〝がん〟と、腕に強烈な衝撃が走り、自分の体勢がそちらへと引っ張られた。
一瞬〝何かにぶつかったか〟と思ったけど、そうではなかった。
「もう、無茶して……」
「ほむら！」
ほむらの手が、私の腕をしっかりとつかんでいた。

彼女の位置はもっと後方のはずだったが、私を助けるためだけに最前線へやってきたのだ。
「一旦距離を置いて、ワルプルギスの特殊な重力場から抜け出すわ」
「ごめん、手間かけさせちゃったね」
「ほんとよ」
時間が停止して、宙を舞う瓦礫がぴたりと止まる。
動体視力を振り切っていた障害物の流星も、平凡な日常に見られる各々の正体を明した。
それらを足場に、私とほむらは手をつないで退却した。
……最後に為すすべも無かったのはちょっと悔しいが、一発かませてスッキリはした。
「ふう」
攻撃の無い停止した時間の中で、堂々と着地する。
工業地帯では比較的大きめな螺子工場の屋上だ。

『キャハハハ……』
「わお」

遠くから眺めて見て初めてわかる、魔女の強大さ。
車も屋根も、全てがおもちゃのように宙に浮かび、ワルプルギスを軸にゆっくりと回っている。
いや、ゆっくりと見えるのはその軌道があまりに大きすぎるためで、実際に接近してみると、とんでもなく速いんだけど。
『美樹さん！』
『あ、マミさん、無事です！　ほむらに助けてもらいました』
『ああ、良かった……一時はどうなるものかと……立て直せる？』
『すぐにでも。ほむら、どうする？』
『まだワルプルギスは本気じゃない。奴が怒るギリギリまでは、押し戻しながらダメージを与え続けるわ』
『了解！』
『でも、これからは美樹さん、辛くなるわね』
『大丈夫っすよ』
サーベルを握り、篭手を構える。
遠くに見据えられるワルプルギスは難敵であれ、今日まで奴を仮想敵とした特訓を続けてきた。

正しい努力は自分を裏切らない。なら、それなりの結果も出るはず。

『さっきはちょっとパニクっただけです、今度はいけます！』

私はバリアーを踏み、再び空へと跳躍した。

ワルプルギスの夜に接近して、謎の浮遊感に襲われて気づいたことがある。

多分だけど、あの魔女は自分の周囲の重力を弱くしているのだ。

重力を弱め……無重力にほど近いのかもしれない。かつ、それを振り回すことができる。

さながら、太陽と地球といったところか。

その能力がワルプルギスの夜の技なのか、それとも無意識に発生している〝余波〟なのかは、わからない。

方向感覚の掴めないフィールドはちょっとした脅威ではあるけど、私の作るバリアの反動をかき消すほど強力ではないはずだ。

相手の力場に進入しても、バリアを蹴っての移動はできる。障害物を足場にするのは控えて、自分の力を信じてやってみよう。

「いくぞワルプルギス……二本目だ！」

迫るブリキの屋根を引き裂いて、バリアを踏み抜き高度を上げる。

「……とはいえ、シャレにならなくなってきたな」
　ワルプルギスの夜よりも少しだけ上から望む嵐の中には、細長い棒がいくつも見えた。
　針金でも鉄パイプでもない。あれは建築用の鉄骨である。まともに食らえば、魔法少女でも耐えられるかはわからない。
「それでも……当たらなきゃ同じっしょ！」
　ということにして、覚悟を決める。
　引き返せないし、相手のデカさだ。被弾は死と覚悟しよう。
　それでも気になる鉄骨に突撃していると、黄色いリボンが私の左右に広がった。
『邪魔な障害物は消すわ！　その間に突っ込んで！』
『ありがとう！　マミさん！』
　リボンの花火が建材や車を貫き、一時的にではあるが空間に固定される。
　私はその花火を避けるようにして宙を舞い、バリアを展開しては強く踏んで、忍者のように近づいてゆく。
『アハハハハハ！』
「うおおおおおお！」
　二本のサーベルをアンデルセンにまとめあげ、最後の一蹴りの勢いに身体を託し、ワ

ルプルギスの首元へ。

「げっ」

一瞬で間合いを詰めた私に、それでもここは通さぬと、寸前で横向きの鉄骨が立ち塞がった。

直進すれば鉄の塊に激突するだろう。勢いは削がれ、ワルプルギスの流れに巻き込まれてしまう。

いや、いけるに決まってる、たかが鉄くらい――

ここで剣を振るわけにはいかない。ワルプルギスとの距離が近すぎるのだ。そのモーションは致命的な隙となる。

かといってもう、バリアを出すことはできない。両手は柄を強く握り、振るう構えに移行している。

剣は振るしかない。この鉄骨を裂くために？

いいや、あくまで一撃は、ワルプルギスにくれてやるものだ。

こんな無機質で、どうでもいい、割り込んできただけの野次馬にくれてやるものではない。

――剣に、魔力を注ぐんだ。フェルマータの時のように。

魔法の斬撃を放射するための機構に、私の魔力が充填される。
力は大剣の内に収束し、エネルギーの塊となる。

――溜めて放つのは、私の得意分野じゃない
――私の特性魔法は防御系統のはずなんだ

だから、このフェルマータの一撃は大雑把で、シンプルなものであるはず。
シンプルなものほど、やり方次第で応用が利くはずだ。
下段の構え。剣先を下方正面へ突き出す。
一瞬の狭間で、剣が鉄骨の下へとわずかに潜り込んだ瞬間、腕に力を込める。
より正確に、より力強く。剣を上段へと持ち上げる。
「ふッ！」
青白く輝く大剣は白い火花を散らしながら、鉄骨を焼くように切り裂いた。
そこに物理的な勢いなどはない。はち切れんばかりに充填された私の魔力がやって

みせた破壊。

「さあ、最後の邪魔者も消えた……」

ワルプルギスの夜が生み出す特殊な重力を突破するだけの勢いを保ちつつ、私の剣は頭上に掲げられた。

ジャックポットだ。

「……〝フェル・マータ〟！」

魔力のビームがワルプルギスの無重力場を打ち消し、引き裂く。

両断されてもなお浮遊力に囚われていた鉄骨も、フェルマータの青白いエネルギー波に押され、ワルプルギスへと押し込まれてゆく。

『キャ――』

モーション過多の強大な一撃は、ワルプルギスの夜の胸元に直撃した。

当たりの瓦礫も力の激流に飲み込まれ、荒っぽい弾丸となってワルプルギスの巨体へと立ち向かってゆく。

「おおお……！」

剣を前方へ向け、まだ尚も力を注ぎ続ける。

砂時計以上に目に見える速さで、私のソウルジェムは黒ずんでいってるに違いない。

それだけ、フェルマータは燃費の悪い技だ。

ただし当たれば、リターンは大きい。
力を解き放てば解き放つほど、威力となって相手を襲うからだ。
「ぐぅ……！」
ドドドド、と、濁流のようなエネルギーが射出され続けているが、それも限界だ。
これ以上は私の身が危ない。
『ほむらぁ！　今だ！』
だからこの先は、ほむらに任せる。
私はもう十分に、ワルプルギスに〝穴〟をあけた。
フェルマータの流れも残っている。今がチャンスだ。
『無事を祈るわ！　発射！』
嵐の中でも、その遠方からでもわかる。戦争が始まったかのような、連続的射出音。
「精神集中……！　ミスったら死ぬ！　大丈夫できる！　あたしならできる……！」
フェルマータの濁流が依然としてワルプルギスの胸に大穴を開け、マミさんのリボンの弾は、その巨躯を空中に磔にする。
そして今、私の背後からは。
数多のミサイルが白煙を吹きながら、こちらへ飛んできていた。

一発当たれば誘爆する

「ふっ……！」

大剣アンデルセンから手を離し、上体を大きくのけぞらせる。

私の目には、想像通りのミサイルの群れが、その無機質な先端をこちらに向けて疾走していた。

魔法少女の体なら、一発くらいは大丈夫……かもしれない。

けどこの数は死ぬ、絶対に死ぬ。

それに極限状態における人間の加速した脳内時間という魅力的な力にも、限度はある。

ミサイルが遅いはずはない。私の思考よりも確実に速く、危険な弾頭はこちらへ迫っていた。

……私は体がやわらかい、ツイスターも得意、余計な話バク宙だってできる。

信じろ私。空中で物を避ける練習は、今まで魔女の結界で沢山やってきたじゃないか。

ほむらと、マミさんと。私たちは魔女の結界で、空中戦での連携を磨いてきた。

バリアを蹴って空を飛び、空中で剣を振り、姿勢を、位置をコントロールする。

人間だった頃では考えもしなかった動き方を学び、実践してきた。

今の私なら、空を飛ぶ魔女にだって、白兵戦を仕掛けて勝つ自信はある。

――だからいける！

魔力を使った空中での移動の応用。

四肢に微量の魔力を含ませれば、水中にいるときのように、体をわずかに動かすことができる。

――大きく反った体をねじると、腰の裏を一発のミサイルが通り過ぎた。

それを待たずに、今度は頭部めがけてもう一発がやってくる。

――首も大きく傾けて、紙一重で避ける。

腿を狙った一発を、脚をあげてやりすごし、遅れて胴体の真ん中めがけてやってきたミサイルは、今度は背を丸めることで、腹から向こうへと通す。

――これで大体のミサイルを避けたはずだ。残り三発！

「……！」

しかし最後の三発のミサイルは、胴、胸、脚に目がけて飛んできた。

わずかな思考時間に考え付いた回避姿勢は、無し。

人体ではどうしようもなく避けることのできない位置に、よりにもよって最後のミサイルたちは、あったのだ。

「しッ……死んでたまるかァ！」

密集する三本のミサイル。

それぞれを避けることはできない。ならばどうするか？

三本でなければいいのだ。

もちろんそれは賭けになる。

「うあぁああ！」

両手を広げ、ミサイルの先端を狙って強く腕を抱え、閉じる。

抱きかかえられるようにされた二本のミサイルは、強制的にもう残りの一本に接触する。

三本の矢。不器用ながらも、ミサイルは一つにまとめられた。

無茶な体勢ではある。けど、ひとつを避けるだけなら容易いはずだ。

「いっ……けぇッ！」

空中ジャーマンスープレックス。相手はミサイル。

体を大きくのけぞらせ、噴煙と炎を吐き出す弾頭を、そのまま魔女の傷口へと放り込んだ。

ミサイルの回避。そしてミサイルの投擲。精神が圧縮されていた私には、それらにどのくらいの時間がかかったのかは、わからない。
ただ、これを他者が見ていたとしたら、神業にでも見えていたのだろう。それだけのことはしてのけたはずだ。
「〝セルバンテス〟ッ！」
そして私は最後の仕上げとばかりに、ワルプルギスの胸元を左腕で殴りつける。
展開されるバリアは、ワルプルギスの夜の傷口を覆い尽くした。
私が回避したミサイルを取り込み、蓋をする形でね。
『そんなに溜め込むのが好きなら……残さず腹に収めてみせろ！』
『――――！』
内側からの強大な爆発。
ワルプルギスの夜に亀裂が走る。
マミさんのティロ・スピラーレが本体を空中に繋ぎ止め。
私のフェル・マータがワルプルギスに穴を穿ち。
ほむらの放ったミサイルがそこへ突入した。
内側からの爆発によって、ワルプルギスの全身は干ばつが起きた大地のようにひび割

れた。

無数の割れ目から漏れる赤い光は、これからコンマ数秒後に起こる破裂を予感させるには十分なものだった。

「うおおおお……！」

ワルプルギスが炸裂した。

バリアの端から漏れてくる熱風に、現代兵器の底知れない威力を思い知る。

こんなものを生身の人間に使うなんて、正気の沙汰じゃあない。けど今はそれがとてつもなく頼もしい。

『ギァァアアァ――』

爆炎越しに、魔女の本体が砕け散る様が見えている。

魔女は文字通り、木っ端みじんになっているのだ。完璧に砕け散るまで、奴の再生は間に合わない。

完全に破壊した後にも余波は残り、それは数秒の間、ワルプルギスの夜の存在をここから消滅させ続けるだろう。

ワルプルギスはしばらくの間、完全なグリーフシードの状態に戻るのだ。

そしてその時こそが、結界突入のチャンス。

バリアを突き出す左手とは対極に、右手を差し伸べていた。

その右手に、ひんやりとしたなめらかな感触が触れる。
「時間停止」
ほむら。そして、マミさんだ。
「さやか、冷や汗をかいたわ」
「私もだよ、まるで生きた心地がしない……」
「けど頑張ったわ。ありがとう、美樹さん」
「いえいえ、はは」
ま、どんなに褒められたって、あんなのはできればもう、二度とやりたくないけどね……。

魔女はどこ？

時が止まっている。
爆散したワルプルギスを目の前に、私たち三人は手を繋いで空中の鉄骨に立っていた。
暴風と爆風の狭間で静止する世界の凄味といったら、この地球上では滅多に味わえるものではないだろう。
「もうこんなに消耗してる……」
私のソウルジェムにグリーフシードが宛がわれ、魔力が復活してゆく。
今はボス戦突入前のセーブポイントみたいなものだ。まずは、これまで失った魔力を取り戻さないといけない。
「グリーフシード、備蓄してたのもそう長くは持ちませんね」
「ええ、正直予想以上ね。私も結構、黒ずんでたわ」
「……でも、このくらいで本体を倒せたのは、良い戦果よ」
ほむらの口元が珍しく微笑んでいた。
釣られて私たちも、思わずニヤリと笑ってしまう。

作戦通りに事が運んだ。
現実的に達成できるか未知数だった難関が、順調にクリアされたのだ。
ワルプルギスの夜の完全撃破までは、まだまだ遠い。
それでも確実に勝利に近づけていることを、私たちは確信している。

「随分と荒れてきたな」
「ワルプルギスの夜が近い証拠だね」
一方、佐倉杏子は風見野にいた。
彼女は荒れた空模様を見上げながら、じっと敵が来るのを佇んで待っている。
「予定時刻までは、そろそろってところか」
「もうちょっとかかるんじゃないかな」
傍らにはキュゥべえがいる。だからというわけではないが、杏子は不機嫌だった。
「……さっきから嫌な感覚だけは、ビリビリと伝わる。だけど近づいてンならでっかくなるでしょ。けど、ならねーんだ」
「君たちのそういう第六感に近い感覚は、僕にはよくわからないな」

「だろうね。アンタの脳みそなんて小さそうだもんな」

「……」

不穏な気配はする。近くにいる。しかし、どうにも煮え切らない。

「……すぐ近くにいる。けど来ねえ、この感覚はなんだ……？」

杏子は鋭かった。そう、確かにワルプルギスはもう、すぐ近くにいる。

すぐそこに巨大な建物がなければ、彼女はきっと濃い曇天の中にワルプルギスの夜を見つけるだろう。

けど今の杏子には見つけられない。

ここが迎撃ポイントだと、キュウベえに聞かされているからだ。

「まだまだ時間がかかるかもしれないね」

インキュベーターは嘘は言わない。

真実を語るとも限らないのだが。

「……」

避難所では鹿目一家が既に避難を完了しており、どうにか小さな区画で腰を落ち着け

ることには成功していた。
「今日おとまり？」
「そう、お泊りだぞー」
「おとまり！　おとまり！」
　もちろんそこにはまどかの姿もある。彼女は家族からは少し離れた場所で、傍らの白猫に耳を傾けている。
「既に彼女たちは戦いを始めたようだよ」
『……そうなんだ』
「見届けなくてもいいのかい？」
『うん』
　戦いの様子はまどかからは見れない。話は全てキュゥべえからの伝聞のみ。
　あらかじめその言葉の全てを鵜呑みにしないようにとは口を酸っぱく言われていたので、何を言われようとも信念を曲げないことだけが、まどかにできる戦いであった。
『私が行っても、契約はできないし……さやかちゃんが大丈夫って言ったから。だから私、信じてる』
「さやか達に勝ち目があると思っているのかい？」
『みんな強いもん、大丈夫』

自分は契約してはいけない魔法少女である。それはほむらの話を聞いて、はっきりと理解できた。

キュゥべえ曰く因果の量は確かに高いものではあるが、ほむらが言うほどのものかどうかはわからないという。しかしだからといって試しに契約をしてみるわけにもいかないのだが。

『……さやかちゃんはいつだって……最後には、勝って戻ってくるから。そうやって何度も、私を助けてくれたから』

――ごめんね、さやかちゃん。本当は私、こういう時にこそ力になるべきなのにね

――けど、これが正しい選択だってさやかちゃんが言うなら。私も自分の選択を、見失わないよ

自分にできることは、普通の少女として過ごすこと。

できれば魔法少女として戦っている彼女たちの近くで、事情を知る理解者の一人として支える存在になりたい。

あるとすれば、ささやかなそれこそがまどかの願いだった。

「わーお……近くで見ると凄いな……」
爆破されたワルプルギスの跡を潜ると、薄く虹色に発光する幾何学模様が現れた。
普段見る魔女の結界への入口をそのまま大きくしたようなものである。こんなに大きな門なんて、今まで見たことがない。
「……ワルプルギスの夜がそのまま背負ってる結界」
「この中に、無数の魔女がいるわけね」
リボンで編みこまれた細い通路は、辺りの瓦礫を支えにまっすぐ結界へ伸びている。
このまま歩き続ければ、ワルプルギスの夜の本体とも言える魔女たちと戦えるわけだ。
「これから、内部の魔女を全力で殲滅する」
ほむらの声はわずかに震えている。
彼女は私の人差し指を握り、目は結界のｌｋｍ向こうの目標を睨み、その決意を固めていた。
ここから先は、ほむらも知らない魔女の異空間。
誰も前情報を持っておらず、ただただ危険であるという魔女だらけの世界だ。
「緊張しないで。魔女の巣へ飛び込むのは、いつものことでしょ?」

マミさんがほむらの肩を叩き、先輩らしく前を歩く。
「ここからは負け続けた戦いではない。勝てる勝負が始まるのよ」
「……ありがとう」
巴さん。その小声は、私だけが聞き取った。
ほむらは毅然とした態度を立て直し、私とマミさんの手を取って、結界の目の前に立つ。
「行きましょう。成果を見せる時よ」
「ええ」
三人一斉に、ワルプルギスの内部へと踏み込んだ。
さあ、本番だ。

「時間停止……継続」
手を繋いだ私達は、高い場所に出た。
高い場所というのは、つまり地面が結構下の方にある場所ということだ。
「あれは……草原！　敵影は……無し！」
「着地の準備をして！　周りにリボンでひっかけられそうなものがない！」

「二人とも、絶対に手を離さないで！」

草原。一面の大草原。

サバンナとは違う。砂地の一切ない、樹木もない、一面が全て緑で覆われた草原だ。

周囲には魔女の結界ではありがちだった意味不明な構造物も、草原に一本や二本はあるべき背の低い木も存在していない。

私たちが仲良く手をつなぎ降下する２０ｍほどの高さから見通すことができる景色は、その一面すべてが大草原で構成されていた。

「建物はない、魔女もいない……!?」

ここは確かに、ワルプルギスの夜の結界のはずだ。広いのはわかる。

けどキュウベえの話では確かに、大量の魔女がいるって……。

「っ」

「ふっ」

考え事をしている間に、私達は草原に着地した。思っていた以上の衝撃はない。

「草の丈は膝下……移動の阻害には成り得ない。それだけならありがたいことではあるけど」

しばらく辺りを見回した。

手をつなぎ、時を止めたまま周囲を見やる。探しているのは、当然、結界内にいると

いう魔女の姿だ。

しかしいくら周りを注視してみても、広がるのは草原と澄み切った青空のみ。

突入する前は恐ろしい魔王の城であったり、廃墟立ち並ぶ荒野のような結界を想像していただけに、やけに不気味だ。

観察するうちに、お互いに握る手のひらも汗ばんできた。

「……いない」

「わよね？」

「今は、多分……そうっすね」

「どこかに隠れている……？」

「それはないわ。隠れる場所なんてどこにも……」

打開策は無し、か。

「時間停止を解除しよう。相手方の動きがないと、対処のしようがないし」

このまま手をつなぎ、ほむらの魔力を消耗させ続けるのは得策ではない。

時間停止したまま突入したのだ。お出迎えがないのはそのためかもしれない。

「わかったわ、解除する……けど、準備はいいのね」

「大丈夫よ、いつでも……戦う準備は、できてるわ」

私も無言で頷いた。

「……いくわよ……解除」
　風のなかった世界に、静かな風が吹き抜けた。

ｍｉｌｅｔ
燭台の魔女・ミレイ

Ｍａｇｄａ
憤怒の魔女・マグダ

Ｊｅｓｓｉｃａ
ガス燈の魔女・ジェシカ

Ｍａｒｉｎ
藁山の魔女・マーリン

ｌｕｃｙ

篝台の魔女・ルーシー

karen
鉄檻の魔女・カレン

Micaela
鏝の魔女・ミカエラ

Monica
灰掻きの魔女・モニカ

Silke
悲鳴の魔女・ジルケ

nicola
鞴の魔女・ニコラ

Ｔｅｒｅｓａ
菜種油の魔女・テレサ

ＡＲＥＮＡ
蝋燭の魔女・アリーナ

Ｃｉｎｄｙ
鉄牛の魔女・シンディ

ｔｉｎｎａ
坩堝の魔女・ティナ

「!?」

そいつらは、何もなかった空間に突然現れた。

草原に風が吹くことが当然であるかのように、目の前に〝いた〟のである。

『ウォオオオオオオオオオオオオッ！』

「――」

そして、魔女は私たちがここにいることが当然であるかのように、それぞれがそれぞれの凶器と成り得るもので襲いかかっている。

「ッ……！」

「〝セルバンテス〟！」

真っ先に振り下ろされた溶岩の拳をバリアで受け止め、ほむらの前に躍り出る。

ほむらの手を強く握りしめ、叫ぶ。

「マミさんを！」

「はっ！」

「お願い！　早く！」

灼熱の拳。灼熱の銛。灼熱の鞭。全ての燃え盛る凶器は、マミさんのほんの手前でようやく停止した。

ジリジリと焼きつくような熱気もそこに留まり、マミさんの肌を焼くこともない。

ほむらの時間停止が効いたのだ。

「……びっくりしたわ」

「ひぃ～……」

マミさんが生み出した一条のリボンは、辛うじてほむらの腕に巻きついていた。

ほむらの停止があと少しでも遅ければ、マミさんは今頃……いや、やめておこう。
間に合って良かった。
「……ごめんなさい、背筋が凍ってしまって」
「うん、さすがにね……予想してなかったわけじゃないけど」
見上げ、見回せば、青空だった景色を覆い隠す十数体の魔女。
それぞれ使い魔を伴ってはいないものの、身体のどこかしらに滾らせている炎が、単純な魔女としての危険度を示していた。
「こいつら、一瞬だったよね」
「……ええ、音もなく取り囲むように現れた」
「気配もなかったし、前兆も……厄介ね」
「ふむふむ……この魔女たち、みんな炎にまつわる攻撃をしてるみたいだね……統一性がある」
この魔女の群れを倒すのは難しくはないだろう。一度時間が止まってしまえば、こちらのものだ。
けどこいつらを倒したとして、それで終わりだろうか？
……あり得ない。絶対にまだ何かあるはずだ。

私達なら不可能だとは思わない

「魔力を無駄にはできないわ……そろそろ解除しなくちゃいけない」
「こんなに思いつめる状況になるはずじゃなかったけど……どうにかしなきゃね」
ほむらの時間停止は有限だ。マミさんも周囲に湧いた魔女を見回し、焦りを募らせている。
が、結論は出ている。
「倒そう」
私はサーベルを出し、呼吸を整えた。
敵は私達を取り囲み、あまりにも多い。けど、それを承知の上でここまで来たのだ。
「二人とも、できる？」
「あら、不安？」
「時間を止めたままの状態で負けるなんて思ってはいないけど……停止を解除した状態で、勝てるのかしら……って思ったのよ」
「……ほむらの時間停止も、有限だしね。魔力は無駄遣いできないよ。解除して戦う方が良さそうだ」

ほむらの手を握ったまま、片手でアンデルセンを生成する。
マミさんもマスケット銃を手に持って、一回転させて魔女へと向けた。
「何度も何度も時を止めていたら、いざという時の対処ができない……苦しいかもしれないけど、殲滅しましょう」
「任せなって、最強さやかちゃんだよ？」
「ふふっ、私だって負けないわよ。新技を、こういう状況で使ってみたかったくらいだもの」
「ええー？　私だって、負けませんよ？」
伊達に力を願って魔法少女になってないもんね。
少数対多数。望むところじゃないのよ。
「……合図とともに、手を離す。そうしたら、戦いが始まると思っていて」
「オッケー」
「了解」
手に汗握る戦いが始まる。
目の前に広がる巨大な銛は、世界が動き出すと同時に間もなく私を貫く予定だ。
その予約に割り込み、私の剣は敵を斬らねばなるまい。
無茶だらけの戦いが行われるわけだが、修羅場を潜らずにワルプルギスの夜を倒せる

はずはない。ここを乗り越えなくちゃいけないんだ。

「……解除！」

時が動いた。魔女の咆哮が耳を劈く。

「〝長七の乱〟」

が、既に私は動き出している。二本のアンデルセンを、その重みのまま、ぶん回すように振り払っていた。

『ギッ……』

『ギャァ』

『ウロロロロロ……』

魔女が突きだす銛と、その隣の魔女の柱と、何かの脚と、何かの腕と、何体かの胴を斬り落とす。

「〝ティロ・レデントーレ〟」

私の反対側では、マミさんのリボン花火があちこちで大輪のリボンを咲かせていた。

一瞬で空間を刺し尽くすリボンの刃から逃れる術は、残念ながら好戦的な魔女にはなかったようだ。

「後処理は任せて」

そしてダメ押しとばかりに、辺りにダウンした魔女たちが炎上する。
鼻腔を突くガソリンの臭気に、ほむらの攻撃なのだろう。
立ち上がろうとする気力があった魔女達は、静かにその余命を燃やして消滅した。
「……やったかしら？」
辺りは一面焼け野原。
視界には何の姿もいないように感じられる。

『オォオオオオオオオオオオ！』

「！　いや、まだ来る！」
「気を付けて！」
周囲から気配が多数！　油断はしないぞ！

ｃｒｉｓｔｅｌ
驢馬の魔女・クリステル

Ａｎｓｅｌｍａ
珊瑚の魔女・アンゼルマ

Ｓｏｐｈｉａ
投網の魔女・ゾフィーア

ＴＨＥＯＤＯＲＡ
冒険の魔女・テオドーラ

Ｙａｓｍｉｎｅ
鉤の魔女・ヤスミーネ

Ｒｏｓａｌｉｅ
胡椒の魔女・ロザーリエ

Ｐａｕｌｉｎｅ
濁流の魔女・パウリーネ

Ｍｕｒｉｅｌ
蛋白石の魔女・ミュリエル

Ｌｉｅｓｂｅｔ
烏賊の魔女・リースベト

Ｃａｔｈｒｅｉｎ
曲刀の魔女・カトライン

Ｉｎｇｒｉｄ
傘の魔女・イングリト

ｄｉａｎａ
伏目の魔女・ディアーナ

またも同じ状況だ。

今度は寒色中心で彩られた魔女が、私たちを取り囲むように現れた。

「色的に……水ッ！　水タイプというか、そんなんだ！　水や冷気に気をつけて！」

警戒を促しつつ、私はその中でもっとも大きな魔女の腹に向けて左手のアンデルセンを放り投げた。

ゆっくり二回転した大剣が岩のような腹に突き刺さり、そこへ飛び込んでゆく。

「〝セルバンテス〟！　思いっきり撃ち込んでやれ！」

『ゴォッ!?』

釘に対する鉄槌。あらゆるものに反発するバリアーが大剣を押しやり、頑丈さでは無二であろう魔女を粉々に砕いてみせた。

『シェッ！』

『シャァッ！』

一体だけに構う余裕はない。

私が一体を片付ける間に、二体の魔女はすぐそこまで迫っていた。

大きなイカリを腕に備えた魔女と、アンデルセンの二倍はある曲刀を握った魔女だ。

「接近タイプかっ」

重量不明の、分厚いイカリが私の頭上に振り下ろされる。

「はぁっ！」
『!?』
しかし私のセルバンテスが生み出すバリアーを崩すには至らない。
何トンもの重量があったイカリの一撃は弾き返され、魔女の体勢を大きく崩した。
あの程度は跳ね返せる。良いことを知れた。
「〝六甲の門〟」
露わになった腹を真横に切断し、二体目。
もう一体の曲刀の方は……。
『ごぼッ』
側面からの赤い爆風によって、轟沈した。
ナイスアシスト、ほむら！
『数が多いと、目まぐるしいけど……！』
『なぜかそんなに辛くないっすね！』
マミさんも私も、強がりではなく事実だった。
私たちを取り囲もうにも、その数には限りがある。
小さな人間を複数の魔女が一度に襲うには、かなり厳しいものがあるのだ。
対して私たちの攻撃はコンパクトながらも高威力。魔女が手を下す前に、私たちが適

当に放つ強烈な一撃は魔女を蹴散らしてしまう。
ほむらの火器が、マミさんのリボンが、私の剣が。急所を貫き、動きを止め、脅威をそぎ落とす。
無敵と言っても驕りではない連携がここに確立されていた。
『ブシュッ！』
しかし無敵なんて都合のいい状態が、ゲームじゃあるまいし、長々と続くはずもない。
「！　まずい――」
予想はしていたけど、認識できなかった位置からの攻撃に今さら気づいてしまった。
半透明なカエルのような魔女。膨らんだ頬。震える体。水だ！
「防御に回る！　私の後ろへ！」
「えっ――」
ほむらを庇うように立ち、アンデルセンはひとまず地面に突き刺して、左手を正面へ構えて腰を落とす。
そして、人を四人は巻き込めそうな太い水柱が、私たちに襲いかかってきた。
『ゴッ』
洪水が噴き出し、私を襲う。
一面に広がるバリアーは休む間もなく震え続け、激しい飛沫を散らしながら水流を割

り、受け流してゆく。
『く……耐えられる勢いだけど、耐えている間はここから動けない！』
『外側に弾かれた水流が邪魔で、私たちも駄目ね』
『！　他の魔女が来る』
『動けないけど、お願いします！』
水のカーテンに包まれる中、無茶な注文だろうと思う。
けど二人ならやってくれても不思議じゃあない。
『仕方ないわね、全力で消し飛ばすわ……！』
『そうね、出し惜しみはできない』
魔女の影が、水流越しに近づいてくる。
水にまつわる魔女たちだ。水流などはものともせずに、こちらを攻撃することができるのだろう。
『〝ティロ・フィナーレ〟！』
『食らいなさい、特製花火よ』
横薙ぎのビームと、炸裂する爆弾。
通常では考えられないほどの頑丈さを誇る魔女の外殻が砕け、余剰エネルギーは更に奥の魔女さえも貫通する。

周囲から敵が掃けた今が好機！

――左手にバリアを生み出すセルバンテスの展開を続け
――右手にアンデルセンを生み出し――バリアが消える一瞬の間に――

大剣の溝に魔力が籠る。青白い輝きが迸る。

「叩き斬る！」

フェルマータの青い輝きが、水の激流と同じ太さのエネルギーになって放射された。強い気を放つオーラは水を弾き、濁流など容易く押しのけて、魔女の口内へと到達した。

『ゴボッ！』

カエルの魔女は内側から大きく膨らみ、爆発して消滅した。

「ッ……！」

フェルマータを撃った直後の疲労感が、体の重さを倍増しにして襲いかかる。

が、ここで休憩する暇はない。まだまだ魔女は、周囲に複数残っているのだ。

「く、やっぱりトドメの一撃用の技を途中でっていうのは……結構キツいわね……！」

「魔女殲滅用の爆弾……確実に一体以上を殲滅できる特別火力だけど……数には限りが

ある」

マミさんもほむらも、懸命に戦っている。

――けど、息をつく暇はない！

――出し惜しみはできない！

二人のためにも、私はもっと表に立たなくては。

「〝四条の織〟！」

斬り上げからの腰溜め、そして横一閃。

防ごうとした魔女の腕を弾きあげ、横切りは綺麗に決まった。よし、更に一体！

『口をあけてるやつは私の爆破に任せて！』

『了解！　空中に出る奴は私がリボンで撃ち落とすわ！』

時限式爆弾が、ロバの大口へと投げ込まれる。

マスケットの弾丸は、何とも形容しがたい物質的な魔女の外面を貫いてゆく。

私にできるのは、今尚襲いくる接近戦を得意としそうな奴の除去だ。

「――」

腹を斬られ脱力する目の前の漁師魔女は間もなく倒れるだろう。

爆弾を投げ込まれた驢馬の魔女はこちらに触れる前に即死する。
マスケット銃で撃たれているオパール色の魔女は虫の息だ。
十一体が斃される。残るは一体。
『ウァアアアァ……！』
目から涙を流す、細く長身な人型の魔女。
「ぜやぁっ！」
横に振り抜いたアンデルセンを、再び反対へと振り投げる。
刀身の中ほどに重心を持ったアンデルセンは、いびつな回転軌道を描きながら魔女へ飛び込んでゆく。
『ガアッ！』
驢馬の魔女が内側から爆発すると同時に、大剣は魔女の胴体を切断し、戦いは決着した。
「はぁ、はぁ……」
「ふう……」
「はい、グリーフシード」
ほむら手渡される真新しいグリーフシードを受け取って、ソウルジェムに押し当て

る。

ソウルジェムの穢れは瞬く間に払拭されたけど、グリーフシードの方はもう使い物にならないだろう。いつも以上の損耗だ。

予想されていた消耗戦とはいえ、なかなか厳しいものがある。

息をつく暇なんてありゃしない。

「はあ、はあ……何体倒したかしら……」

「三十体……？」

マミさんもほむらもグロッキーだ。けど数はそんなもんじゃない。

「まだ二十六体……」

「うそ、そんなものだったかしら……」

三人で二十六体。普段からしてみれば化け物じみたペースではある。

けど、それはそれで、それなりの無茶をしているからだ。

私たちは差し引きで言えば、マイナスになる戦いに身を投じているだろう。

身体は治る、魔力も戻る……けど……精神的にきっついなぁ……。

俯き、鎖骨に止まった汗を拭う。

大きな涼しい影が、私の視界の限りを覆った。

――影？　なぜ、影ができる。

途端に汗は引いた。空を見上げると、そこには。

Ｂｒｙｎｈｉｌｄ
王騎の魔女・ブリュンヒルデ

Ａｌｅｘａｎｄｒａ
重戦車の魔女・アレクサンドラ

Ｓｉｅｇｌｉｎｄｅ
反旗の魔女・ジークリンデ

Ｖａｌｅｎｔｉｎａ
黄銅の魔女・ヴァレンティーネ

Ａｄｅｌｈｅｉｄ
斬鬼の魔女・アーデルハイド

Ｌｕｉｓｃｈｅｎ
舞踏の魔女・ルイースヒェン

Ｌｅｏｐｏｌｄｉｎｅ
孤高の魔女・レオポルディーネ

Ｗｉｌｈｅｌｍｉｎａ
一騎の魔女・ヴィルヘルミーナ

敵がいた。

このままではいけない！

炎の魔女たちを倒した。
水の魔女たちにも辛勝した。
なぜ、私は無防備に一息ついてしまった。これだけで終わるわけないってのに。
「みんな伏せて！　ほむら、お願い！」
ほむらは私と、マミさんの手を握った。
そして二人は足を挫くようにして、地面へ倒れ込む。
頭上からは魔女の影。
八体の魔女が巨大な……おそらくは剣であろう得物をこちらに向けて、真っ直ぐ降りてくる。
その巨大な刃で私を突き刺そうと。
「耐えて、〝セルバンテス〟！」
二人を庇い、左手を空へ掲げる。
『オオオォオオオ！』

『ヤアアァアアアッ！』
『セェェエエエエイッ！』
まずは巨大な三本の大剣が、私のバリアに突き立てられる。
爆発のような火花が同時に弾け散り、陰る魔女の姿を一瞬だけ強く照らした。
その姿はまるで、騎士のようだった。
気高く、屈強な、大きな剣を携えた騎士。
そんな騎士があと五体、さらにこちらへと刃先を向けて落ちてくる。

――耐えろ！　まだ耐えろ！　私の盾！

バリアは既に限界だ。
そして新たに突き降ろされた五本の剣により、守りは容易く砕かれた。
『……ふーッ』
危機一髪だった。ほむらが大きな息を吐くほどに。
私とマミさんとほむらは手を繋ぎ合い、どうにか無事に時間を停止させることができたのだ。

私のバリアも微力ながら功を奏したらしい。
少しでも魔女の剣を受け止めていなければ、今頃はマミさんの肩が落ちていたかもしれない。
『暁美さん……ちょっと、息を落ち着ける時間を頂戴』
『異論はないわ……』
肩の上２０ｃｍにある大剣を見ないようにしながら、マミさんは深く息をつく。
ほむらも手だけは握りつつも、大きく肩で呼吸している。私だってそうだ。死ぬかと思ったよ。
『だはぁー……』
……まだ魔女はいる。今度は八体だ。
数自体は減ったけど、それぞれ大きな体で、人型で、みな騎士のような、武士のような姿をしている。
今の一撃でわかった。どれもすごく強い魔女に違いない。
これまではどんな魔女の攻撃でも、私のバリアーが破られることはなかったのに……
先ほどは簡単に撃ち抜かれてしまった。
同時攻撃とはいえ、杏子のブンタツによる突進と同じかそれ以上の威力。
……個々の能力も高いと見て間違いはない。

けど、時間を止めてしまえば問題はない。
時間停止分の魔力は消耗するだろうけど、この魔女たちは確実に、停止時間内で倒してしまった方が消耗も少ないはずだ。

『……ワ、タシハ、シバラレヌ』
「……!?」
「！」
声がした。金属板を引っ掻いたような不愉快な、けれど意味のある言葉。
魔女の声だ。
『暁美さん、停止を解除したの!?』
『いや違う！　こいつだけが動いてます！』
ギギギと油の足りない機械人形のような動きで歩き始めたのは、蒼い炎に燃える黒衣を纏った魔女。
逆手の短剣を握りしめ、そいつは確かに……動いていた。
『慌てないで！　焦っちゃ駄目だ！』
焦りに手を離しそうになるマミさんを、鋭い声で呼び止める。
ここで私たちの時間を止めてしまうわけにはいかない。

『嘘……私の魔法は、時間を……』

『イザ、ジンジョウニ！』

青い炎に燃える身体が、緩慢な動きでナイフを振り上げる。

左手を突き出せば防げるであろう一撃が来る。

が、魔法少女同士が仲良くお手々を繋いだまま反撃に移れるとは思えない。不確定要素も多い。

「……こいつには停止が効かない！　もしかしたら他の魔法も！　みんな、距離をとって！」

魔女に囲まれた一帯から素早く退避する。

剣は地面に突き刺さり、衝撃は音となって鼓膜を響かせた。……威力はある。やはりこいつも強い魔女だ！

「……手をつないだままじゃ、あの魔女にもろくに戦えない。一旦解除するわ」

「異論なし」

「仕方ないわ、ここから戦いましょう……！」

ほむらの汗ばんだ手が離れ、空中に留まっていた魔女たちが一斉に降下。無数の刃は大地を突き刺した。

ズドン、と腹の底にまで響くような音が臓腑にまで響く。

私のバリアを容易に打ち砕くだけの威力はありそうだ。
『ハズシタカ』
『ツギハ、アテル……！』
「喋ってる……！」
「魔女の中にはそういうものもいるわ。ただ、こっちの常識は通じないから、和解も何もないけど……」
「思っていることをしゃべってくれるだけってことか……ま、それはそれでかえってやりやすいかもね」
サーベルを取り出し、正眼へ。
私の構えを見た魔女たちはピクリと反応し、奴らも一斉に刃をこちらに向ける。
……手慣れている。
『カクゴ！』
「来い！」
一番前に出てきた金ぴかな鎧の魔女は、堂々と立ち向かっているが……私の狙いはそいつではない。
最優先に潰すべきは、やつらの中央にいる黒いマントを着た魔女だ。
『……』

他の魔女が時間停止を食らった中、あいつだけは動いていた。不確定要素の塊。無視する理由がない。

「停止時間で動いていたあの魔女さえ倒せれば……！」

「他の魔女も、一網打尽よ」

動きは決まった。あとは上手く事を運ぶのみ。

――時間停止を使えば七体の動きは止められる

――けど残りの一体を、時間停止が効かない私が倒せるかといえば、絶対に無理ね

――……時間停止できるならともかく一撃火力のランチャーは隙が多すぎて駄目、アサルトライフルで戦うしかない

――……なんて無力なのかしら、いえ、今は嘆いても仕方ない

ほむらは苦々しい顔でライフルを取り出した。

――数は多い、けど囲まれているわけじゃない

――ティロ・スピラーレで敵の陣形を固めれば、美樹さんの攻撃までの繋ぎになる

――敵を拘束してサポートに回るのが無難そうね

マミさんは両手にマスケットを生成し、優雅に構えた。

私は、さて。どうすべきか。

……ほむらは遠距離からの援護射撃、マミさんはティロ・スピラーレでの援護になるはず。

敵の魔女はみんな近接タイプだ、援護射撃は強力な味方になってくれるだろう。

この敵を見る限り、以前のガトンボの魔女みたいに遠くから使い魔を飛ばして、なんてことはやってこないはず。絶対は無いけど、どれも武人タイプだ。

流れとしては……こっちは遠距離から敵を削る。

相手はなかなか近づけない……近づいたら私が斬る。

だからあの時の魔女とは、正反対の状況だ。こっちが優位。

問題は数と敵の質だけど……まぁ、まだ接近戦だけなら分がありそうだ。

ほむらはアサルトライフル、マミさんの両手にマスケット銃が握られ、私が篭手とサーベルに魔力を込めた。

それは最低限の準備動作で、長考の末の動きというわけでもない。

各々の、ある意味最速のモーションだった。

何体もの魔女を倒してきた私達三人の、テレパシーすら使わない完璧な連携の、その最速の初動だったはず。

『――ショウメンヨリ、キル！』

『ミギヨリ、チカヨリテ、キル』

『ヒダリヨリ、ヤツヲ、キリステル』

だっていうのに、私たちが戦いの準備を整えるのと同時に、知性の無いはずの魔女たちは示し合わせたかのように散開した。

「なん……」

『タタカエ！』

号令を出したのは黄金の魔女。そして号令通りに動く魔女たち。

――あいつが司令塔だったのか!?

『コロス！』

あっけにとられたその隙すらも突いて、魔女はこちらへ飛びかかってくる。

「ああっ!?」

「！」

散らばる標的を追おうと、マミさんのマスケットは発射の直前に銃口が左右へと逸れた。

二発のティロ・スピラーレは中途半端な場所で炸裂し、開花する。
それらが生み出すリボンの檻は広範囲ではあるものの、動きの制限とするには少し甘い。それに、魔女に満足なダメージを与えることもできかったようだ。
「しまった、これじゃあ掠っただけ――」
『シトメル』
両足に車輪を備えた大柄の魔女が、そのままマミさん目がけて突進する。
手に握るのは巨大なハルバード。槍と斧を兼ねたあの武器は、その用途のどちらでも、私たちに致命傷を負わせるに違いない。
「うおっとぉそれはさせないッ！」
すかさず私は前へ出た。
あのハルバードくらいなら、私のバリアで防げるはずだ。
「マミさんほむら！　左から来る魔女を相手して！」
「！　了解……！」
「右は？」
「良いから！」
『オオオォッ！』
ハルバードの大振りに左手を差し向ける。

派手な青い火花と衝撃波を散らしながらも、障壁はなんとか一撃を耐えることができた。

『イノレ』

『マイル！』

問題は次だ。奴らは刃を構え、続々と仕掛けてくる。

「〝ティロ・スピラーレ〟！」

「当てる……！」

正面からの重い一撃は耐えた。

あとは左右から迫る魔女の対処だ。

マミさんとほむらは、片方の長い剣を持った魔女を対処してくれるだろう。今も戦っている音が聞こえてくる。

『オドレェ！』

「！」

バリアの展開によってしばらく動くことのできない私へと迫る、二刀流の魔女。

短いながらも二刀流を振りかざす４ｍ近い巨躯は、剣道の試合とは比べ物にもならない〝死の予感〟がする。

それでも相手は、剣を持った人型の敵。
人型が相手なら、片手がふさがっていようとも余裕がある。
他流試合で長物持った年上相手に勝ったこともあるんだぞ？　舐めないでよ！
「〝四跳ねの燈〟」
『!?』
威力任せの大振りな攻撃を、軽くいなす。
数メートルや数十キロごときの体格差があろうとも覆らない物理法則により、魔女の双剣は外側へと弾かれた。
片手だろうが関係ない。
油断しきったモーションで攻撃してきる奴なんて、素人みたいなものだ。
「〝門〟」
『グボォッ!?』
カニだの虫だのといったわけのわからない姿をした魔女よりも、よっぽどやりやすい。
無防備な魔女の首を跳ね飛ばした時、その思いは確信に変わった。
マミさんとほむらは、私の後ろで無事に攻撃を防ぎ、反撃できているだろうか？
『キリ、クズス！』

だけど、新手が来る。あっちを考える余裕もなさそうだ……！

バリアを隔てた大きな魔女が、ハルバードを腰だめに構え始めた。

魔女の攻撃だ、何が起こるかはわからない。

足元の車輪、重厚な鎧、巨大な体。

重戦車と呼ぶにふさわしい姿の、パワータイプの魔女。

緩慢な溜めから繰り出す一撃に、どれほどの威力が込められるだろうか。

経験上、ゲームであれ現実であれ、でかいやつの力を溜めた一発っていうのは、受けるにはキツい。

「二人とも、すぐにここから退避！　でかいのは任せて、後ろの他の奴を！」

二人の戦況をよそ見はできない。私はこいつを仕留めなくては。

『ドォオオッ！』

ハルバードが太い鉄を引きちぎったような音と共に、より巨大に、刺々しく変形する。

刃の先端部分だけで私達三人分を覆いつくせそうなほどの、規格外な武器に大変身だ。

ワルプルギスの夜を相手にする以外には用途もなさそうなオーバースペック。

少なくとも魔法少女に使う得物ではないことだけは確かな兵器に見える。

しかしその穂先は、ちっぽけな私に向けられている。
これ、セルバンテスのバリアーで防げるか……!?
『ツッセェエィッ！』
足元の車輪が唸る。突進により土煙が捲れ上がる。ハルバードがバリアを衝く。
青い衝撃は、半透明な面を白く覆い尽くした。
それが衝撃でも火花でもなく、バリア自体に入ったヒビであることはすぐにわかった。
凶器の穂先は容易く私のバリアを突き破り、地面までも何メートルか抉り取ってしまった。
「――割れる直前にヒビが入る事は、杏子との戦いで既に知っていた」
『!?』
そこに私はいない。私は砕け散ったバリアの後ろではなく、そこから少しだけ離れた場所に立っている。
「バリアにヒビが走って、曇った瞬間に姿をくらませば、アンタの次の動きも鈍くなると思ったんだよ」
突撃を終えて隙だらけになった魔女の足元で、私は大剣を振り絞る。
「正解だった」

『ガァッ!?』

会心の一撃。

重く堅い手応えだったけど、甲冑らしきものの隙間を狙った大振りは中まで到達した。

体を支えるための大事な芯までも斬られた魔女の胴体は、重みに任せて傾き、ちぎれ、伐採される大木のように転げ落ちていった。

「次っ！」

一番大きな奴は切り崩した。次の相手と戦わなければ。

周囲を状況を確認しようと、まずはマミさん達の方へと目をやった。

その時だ。

「緊急事態」

私のすぐ目の前に、切迫した表情のほむらが現れた。

何が起きたのかはわからない。理解するより先に、すぐに場面は移り変わっていた。

今さっきまでいた草原ではない。

コンクリートの上に、私は立っていた。

「!?」

何が起きた。この地面は？
コンクリート、道路。……舗装された路面。
ここは結界の中ではない。ここは……ワルプルギスの夜の外？

ほむらの時間停止の効果による瞬間移動であると、私は推測した。
一瞬だけ視界に入ったほむらがその理由の裏付けになるだろう。
つまり、ほむらは私を抱きかかえてワルプルギスの結界を脱出した？
一体何のために。
「何が……！」
理由は分かった。
私のすぐ真横に、答えが見えた。
「お願い……巴さんを助けるの、手伝って！」
「……うぐ、ぁあ……！」
緊急事態だからだ。
マミさんの両脚は、腿から先が無くなっていた。

どうしよう、どうしたら

「マミさん！」

急いでマミさんの脚に手を添える。

使うのは傷を治す回復魔法。正直、燃費はあまり良くないけど……そんなことを気にしている場合じゃない。

「巴さん、き、斬られたの……私をかばって、それで……」

「剣でか……取れた脚は？」

「え、脚……あ、うん、あるわ」

落ち着けほむら。いつものクールな感じで頼むよ。

「治療するならくっつけよう……魔法ならできるはず。ゼロからの再生は難しいけど、傷口を接合するのならきっと大丈夫」

「そうね、ええ……そうだ、盾の中に入ってるから」

ほむらが自分の盾を弄っている最中、風が吹き始めた。

吹き抜け、次第に強く、空気の量を増してゆく風だ。

『キャハハハハ！　キャハハハハハハ！』

見上げれば、ワルプルギスの夜の憎々しい巨体は再び、空の中に復活していた。

体が強敵を前に強張る。絶望感が首を擡げてきた。けど……今はやるべきことがある。打ちひしがれている場合じゃない。

「……はい、巴さんの脚」

「ほむらはそっちの脚に魔法を、私はこっちをやるから」

「ええ、わかったわ」

「グリーフシード、一つか二つあれば足りるはず……！」

グリーフシードで魔力を回復することが前提。出し渋りはしない。両手に癒しの力を込める。

マミさんの脚に全力で回復魔法を使おうとした、その時だった。

「……待って」

マミさんは手でそれを拒んだ。

「……マミさん？」

「……大丈夫」

大丈夫じゃない。そんな無理してる笑顔のどこに大丈夫な要素があるんだ。

冷や汗を流して、顔がびしょびしょだ。失血も多すぎる。

魔法少女だって全能じゃない。すぐに処置しないと、マミさんが死んでしまう。

「……私の治療に使っていたら、グリーフシードがなくなっちゃうわよ」

正論ではある。けど今はやめて。

「……ワルプルギスの夜は倒します。けどマミさんを見殺しにはできない」

「大丈夫。脚くらい、痛覚を切って……応急処置さえすればね」

マミさんのリボンが、切断された両足を巻き込みながら、過剰な包帯のように絡まってゆく。

「……」

私もほむらも、その様子を痛ましく見ていた。

確かに痛覚は遮断できる。リボンを強く巻けば止血もできるだろう。だけど傷が塞がるわけではない。

この処置はあくまでも応急処置に過ぎない。いや、もっともっと惨たらしい、先送りでしかないのだ。

「……うん、魔法のおかげね。立つくらいなら、なんとか」

リボンでぐるぐる巻きにした脚で、マミさんが立ち上がる。

立っているのに、バランスを取るのに必死。操り人形のような不安定さだ。

「……お願い、巴さん。グリーフシードを使って」

「この戦いが終わったあと、ゆっくり使わせてもらうわよ」
　余裕そうな笑顔もぎこちない。それでもマミさんは、この戦いに身を賭しているのだ。
「……マミさん、いけるんですか。脚がないってことは、着地も蹴りもできないってことですよ」
「リボンを使って移動するわ。どうせ空中戦だもの、ワイヤーアクションで戦うのに、脚はそれほど重要でもないわ。空の魔女と戦う訓練はやったのだし、いけると思う」
「……わかりました、信じてますよ」
「ありがとう」
　完璧ではない。万全ではない。けどこの最終決戦の場面で、そんなのは当たり前なんだ。
　マミさんもそれをわかっている。だから、私はマミさんの判断を信じ、尊重することにした。
「そんな……無茶よ」
「ほむら、それでもやるしかないんだよ」
　確かにきついだろう。空中で、すべてをリボンに任せて動くのは至難の業だ。
　けどマミさんは覚悟している。当人が覚悟を決めていて、私達が受け入れないわけに

はいかない。
「どうしても勝たなくちゃいけないのよ……もしもこの脚が無くなっても、ワルプルギスの夜が生み出す被害と比べれば可愛いものだわ」
「……ええ、そうね、確かにそう……冷静になりきれていなかったわ、ごめんなさい」
「ふふっ。この時ばかりは、全力を振り絞らないとね」
「！」

――全ての力を――

どうしてか、頭の中に煤子さんの姿が浮かんだ気がした。
「……全ての力が合わされば」
「え？」
「ごめん、二人とも。しばらく私抜きで……時間稼ぎでもいい、応戦をお願いできるかな」
二人は驚いたような顔をした。
けど私の中ではもう、これしかないと思っている。
負傷したマミさん。限られているグリーフシード。一度復活してしまったワルプル

ギスの夜。
　状況は最悪だ。一回目のチャンスが二度も三度も訪れる保証はない。
　なら、先に行える手は打つべきだろう。
「何か考えがあるのね？」
「はい。増援を……とにかく急ぎます。……数分かかるかも」
「数分……ワルプルギスの夜を押し返すのに、ミサイルを二、三発ってところかしら……けど、何をする気なの？」
「もちろん、ワルプルギスの夜をコテンパンにしてやるんだよ」
　私が不敵に笑うと、ほむらは重々しく頷いた。
「……大事な時だけど、時間がないなら長々とは聞かないわ」
「うん、ありがとう……そうだ、しばらくフォーリンモールの中央ミサイルだけは撃たないでもらえるかな。」
「わかったわ。それまではなんとかしてみる」
「任せておいて。今度こそ、きっちり仕事をしてみせるから」
　話が早い。さすがの二人だ。
「頼んだよ、二人共！」
　返事を聞く暇も惜しかった。

私は軽くジャンプすると、左手のセルバンテスが生み出すバリアを蹴って、勢い良く空を飛翔した。

空の上なら、バリアの連続蹴りができる！

目指すは風見野。

一刻も早く、杏子を探さなくては。

手負いのマミさん、ほむらの時間停止が効かない魔女、減りゆくグリーフシード、全快したワルプルギス、状況は悪い。

まだワルプルギスの夜を後方へと押し返すためのミサイルが何個も生きていることだけが救いだ。全体的な猶予は十分に残っている。ただ現状では、それを消耗し続けるしかないだけで。

「ふッ……！」

バリアを蹴る。

小さく縮め、弾丸のように回転する身体が、空中を上向きに飛んでゆく。

「はっ！」

今の時速は、普段この道路を走るトラックの数倍は出ているかもしれない。

緩やかに落下する体は風を切りながら、陸橋の下をギリギリに潜り抜ける。

そしてまた、バリアを蹴って浮上する。

――魔女を倒すための、単純な力が必要だ

私達には決定力が、火力が足りていない。
魔女の大群と立ち向かうにはどうしても杏子の力がいる。
あいつは他人とは組みたくない。足手まといとは一緒に戦いたくないと言っていた。
……けどそれならどうして、まだ戦いに姿を見せていない？
杏子の性格ならば、一日前には見滝原で待機していてもおかしくないはずなのに。
理由は色々考えられるけど、それは重要ではない。
杏子が風見野にいること。これだけは確実なんだ。半分勘だけど、きっと間違いない。
「杏子……！」
早く見つけないと、マミさんとほむらが危ない。
「杏子ぉおおお！」
私は灰色の空に叫んだ。

「――」

「杏子？　どうしたんだい」

杏子は頭を掠めた閃きに、〝ハッ〟と自嘲した。

「なるほどな、今わかったよ」

「空模様は明らかに悪くなっている。着実にワルプルギスの夜が――」

「っはァー、情けねぇ。ったくさぁ……なんでアタシは、あんたの言うことをここまで正直に真に受けちまったんだかね」

「どういうことだい？」

「わかったよ、今まさにな。ここからちょっと、こう歩けば……」

杏子が無人の大通りを横切って空を見上げた。

「……ほれ見ろ。あっちの方が断然、悪天候だ」

キュウべぇは言葉を返さない。

「あそこは丁度見滝原……か、その少し向こうだな。んー……天気予報をしっかり確認しとけば良かったか」

「僕の予想も完璧ではないからね、多少の誤」

槍の一閃。

「さ――」

キュゥべえの頭部は滑らかに切断され、動かなくなって地に落ちた。

「それ以上喋んな。あと、戻ってこなくていいからな。糞野郎め」

風見野にワルプルギスの夜がやってくるかもしれない。キュゥべえは杏子に対し、そのような情報を与えていた。

きっと嘘では無かったのかも知れない。嘘をつかないキュゥべえのことであるから、見滝原を滅ぼした次にはしっかり風見野にもやってきたのだろう。

だが当然ながら、それは杏子にとって歓迎できる状況ではない。

「……わずかに、炎が滾る感覚がある。ちっぽけだが、だからこそわかる感覚だ」

チリチリと火花を発する髪留めを横目に、杏子は見滝原の曇天を見上げた。

「アンタなんだろ？　さやか」

「杏子ぉおおお！」

やがて、遠くから嘆くような叫びが聞こえてきた。

「……へっ、ほら、やっぱりね」

目視で杏子を見つけるのは難しい。

屋外にいるかも謎だ。声で呼ぶか、テレパシーしかない。

……ここはまだ、嵐の最中というほどではないため、人が出歩いているかも。

大っぴらに空を飛ぶのは危険だ。ただでさえ今は、見上げるには丁度いい頃合いなのだから。

けどだからといって、声を張り上げないわけにもいかなかった。使える手は全て使うしかない。

『杏子！　どこにいるの！』

テレパシーを強く振り撒く。

相手が聞こうとしていなければテレパシーは届かない。でも杏子がわざわざ遮断しているとは思えない。

今はとにかく、信じて叫び続けることだ。

なんとしてでも杏子を見つけないと……。

「よう」

「え」

目の前に突然の杏子。

「久しぶりだなオイ」

「ぐえ」

そして、私の腹に食い込む膝。
「何しに来た」
言葉の端がフェードアウトし、私は民家の屋根に叩きつけられた。
「……いったぁ……」
着地点が丈夫な屋根で良かった。あと、ふっとばされた角度も幸いしたのだろう。人の迷惑にならなくて、安心したよ。ホント。
「オイ、気絶してねえだろうな」
突然現れて空中蹴りを決めてきた下手人は、私の真横に降り立った。
臨戦態勢。魔法少女の出で立ちだ。槍まで握り、いつでも戦いに赴ける姿である。
つまり杏子も、ワルプルギスの夜と戦うための準備ができていたってことだ。
「何しに来たって……わかるでしょ」
「まあな」
バツが悪そうな顔。やっぱりね。なんとなくそんなんじゃないかと思ってたよ。
「いでで、背中痛い……杏子ー、ちょっと起こして」
「……」
渋ったような顔をしながらも、杏子は黙って私の手を引いた。

立ち上がった私は見滝原へと向き直り、その先にある曇天を睨む。
「キュゥべえにでも足止めされてたんでしょ」
「ああ。アンタが呼びかけるまでは気づきもしなかった。ハハッ……我ながら情けないよ」
「戦いはもう何分も前から始まってるよ」
「チッ」
「途中参加でも大歓迎。一緒に来てよ」
杏子は答えず、ただ無言で動き出していた。

屋根の上を二人で走る。
さすがは肉体派の杏子だ。バリアによる空中移動を使っている私をいつでも追い抜けるくらいの速さで、風見野の空をフリーランしている。
『マミさんとほむらも一緒で、今は二人が食い止めてる』
『食い止めてるだぁ？　ハッ、まぁあいつらじゃその程度か』
『それでも一度は追い込んで、奴の結界の中にまで入れたんだ。結界の中には魔女がたくさんいて、それがワルプルギスの原動力になってる』
『へえ。そいつらがつえーってわけか。やられたの？』

やられた、か。

『……マミさんが怪我してる。あのまま続けていたら、私もダメだったかも』

『ほーぅ……？　オッケー、なら良かった』

『良かないでしょ』

『良いのさ。強い奴がいるなら、私は強くなれるんだ』

まーたこの子はそういう……。

『この世で最も強くなれなきゃ、どんな悪も倒せないからな』

『――……』

上機嫌な口調で発せられた何気ない言葉。

けどそれは、これまで杏子の口から語られることのなかった本心であるように思えた。

『……チッ、念話だと口が滑るな。忘れてろ』

『ねえ今』

『うっせえ！』

戦線離脱から、そろそろ三分経つ。

私たちは丁度、見滝原に入る頃だった。

赤い炎が踊っているみたい

『近づいてくとわかるけど、ほんとでかいね、ありゃあ……』
『うん。使い魔も周りに出してくるし、攻撃も容赦無いよ』
遠目に見えるワルプルギスの夜は、未だ暴威を振るっている。
マミさんとほむらは攻撃しているのだろうか。ここからではまだ、戦闘の気配は見られない。
『アタシは平気だけど、マミたちは死んでるんじゃないだろーね？』
『……三分までは保ってくれると信じてる』
『三分ねえ、見滝原からここまで来たんでしょ？　なら軽くオーバーしてるんじゃない？』
『……大丈夫』
高くそびえ立つ建物を見上げる。
魔力で強化した目が、その縁にある突起物を捉えた。
モールの屋上には似つかわしくない、物騒な現代兵器だ。
『うん、大丈夫。杏子』

『ああ？』
『ついてきて。……というか、ついてこれる？』
『こっちのセリフだよ、バカにすんな』
『一秒も待たないからね！』
『はっ』
セルバンテスで、真下へバリアを生み出す。
「じゃ、お先に」
「！」
私は強く反発する足場を蹴って、高く跳び上がった。
目指すはフォーリンモールの屋上。そこに設置されたミサイルこそ、私の目指すべき終点だ。
「ふっ！」
多段ジャンプの最後の一発はちょっと飛びすぎた。
足が痺れる衝撃に耐え、屋上の荒れたタイルを時々割りながら、全力でミサイルのもとへ駆ける。
「よし……！」
申し訳程度の薄いシートで覆われた発射台。

ミサイルはまだ発射されていないようだ。それはまだ、彼女たちが苦境に陥っていない証拠でもある。

私はシートを強引に引きちぎって、ミサイルを露わにした。

「つはぁ……！　くっそ、垂直はキツイなぁオイ……！」

杏子は少し遅れてやってきた。どうやって登ってきたのか、その方法には興味があるけど、今は気にしてはいられない。

「杏子！　これに掴まって！」

「はあ、おめ、はっ……何ほざいてるか解ってるか……！」

「私たちの重さでかなり沈むから弾道を上向きに調整して……つっても丼勘定だから噴射をその都度魔力で強化……」

「オイッ！　聞け人の話を！」

固定された台を、更に上向きに修正する。

操作には慣れていないけど、ほむらがやっていた通りにやればできないこともないはずだ。

……よし、なんとかミサイルの向きも変わった。

「弾道計算のメモ帳はチラ見しただけだけど大丈夫。どうせ軌道だって、空中を蹴ったりすれば補えるでしょ」

「……呆れて物も言えねえ」
「説明する暇はないんだ。私のバリアでの移動は、誰かと一緒にってのができるほど器用でもないし……」
「あーもういい、わかったよ、わかった。あんたが何考えてるのかはわかった、やってやるよ」
「やる前提で呼んだんだよ、今更何言ってんのさ」
ミサイルを抱きかかえるように、私はしがみついた。
先端を抱え込み、勢いで吹き飛ばされないように。
杏子も同じようにして、ミサイルに張り付いた。
「くそ、ふざけやがって……上手くいくわけねえだろこんな……」
「けど、マミさんを見殺しにはしたくないんでしょ？　だから乗った」
「もうお前ホント黙れ！」
「あっはは！」
さて、時間が惜しい。
だから……超特急でいくとしますか。

「ティロ……スピラーレ！」

巴マミはリボンを張り巡らせ、空中を飛び回りながらワルプルギスの夜を押し返している。

大量の使い魔を相手にするにはリボンと銃撃の相性は良く、未だに致命的な失敗はしていない。少なくとも、地上から戦いを見上げるほむらにはそのように見えた。

「でも動きは悪い……脚が使えないのは、やっぱり痛手なんだ」

問題は巴マミとワルプルギスの夜本体の相性が悪いことだ。

『アハハハハハ！』

『くっ……！　前進が早すぎる！』

脚を負傷した機動性を大きく失った巴マミでは、ワルプルギスの夜から飛んでくる炎を含め、全ての攻撃が厄介な壁であった。

今の巴マミは固定砲台としての火力には優れていたが、防御や回避面においては脆弱と言わざるを得ない。

『時間を止めるわ！　ミサイルで押し戻す！』

『数には限りがあるんでしょう!?　まだ私の攻撃で食い止め……きゃぁ!?』

『巴さん！』

強風に煽られ、巴マミが投げ出される。

それはワルプルギスの夜に近づき過ぎたためか、相手が本気を出したせいなのか。
「あのままじゃリボンで移動するなんてできない……今すぐにでも発射して、時間を止めないと……！」
ミサイルで押し返し、時間停止で巴マミを回収する。
魔力と物資の消耗は致命的だが、それしかないように思われた。
「でも……巴さんを守るには、やるしかない……！」
『その必要はないよ』
「……！」
その時、弾頭が風を切って、ほむらの頭上を横切った。

角度がコントロールされ、魔法の力で強化された噴射は、大質量のミサイルをまっすぐ標的へと運ぶ。
あと五百メートル、二百メートル。
巨大な敵の姿はもう、目を瞑る間もなくそこに迫る。
杏子の髪飾りは、ワルプルギスの夜に近づくほどに燃え上がった。
滾る炎は、かつて私と戦った時よりはるかに大きい。

流れる髪に炎の尾を引きながら、杏子の機嫌は最高潮のようである。
「よお！　てめー強いんだってなぁあ！」
ミサイルと、そしてブンタツを握った杏子が衝突するのは衝突は同時だった。
重心を捉えた二つの流星は、ワルプルギスの夜の巨体をまるで紙くずのようにふっ飛ばしていった。
それまで侵攻していた距離よりも遥かに後退させ、最も過疎な地帯にまで押しやったのだ。
『ふう、間に合ってよかった』
「！　美樹さん」
ワルプルギスの無重力空間から解放され、宙にあおられていたマミさんが正しい姿勢を取り戻す。
念の為、体を受け止められるようにマミさんの近くまで来てみたが、マミさんは自分自身で復帰することができたようだ。
『さやか、今のミサイル……』
『手動で撃てるように教えたのはほむらでしょ？　まあ、弾道はかなり無理やりだったけど』
『今一瞬見えた人って』

『杏子です。向こうでキュウベえに足止めされていたみたいで……』
『……卑劣な奴！』
キュゥべえはどうしても、魔法少女達に勝って欲しくはないのだろう。そんな雰囲気は前々から感じていた。
しかし杏子を足止めするってことは、私がいても勝てはしないとでも思っていたのだろうかね？
むかつくやつだ。もしこの戦いが終わったら、バリアの上に乗せて無限バウンドの刑に処してやる。
『おりゃぁあああ！』
遠くからテレパシーの叫びが聞こえてきた。
……杏子はもう、一人でワルプルギスと戦い始めているのか。
私も早く行かなくちゃ。

「最強の魔女って聞いたからどんなやつかと思えばァ！」
両剣が踊り、ワルプルギスの身体を切り裂いてゆく。
「ただデカいだけが能ってわけじゃねえだろうなァ!?」

漕ぐような剣捌きは、斬ると同時に杏子の身体を思い通りの方向に運ぶこともできた。

ワルプルギスはただ黙って斬られているわけではない。しっかり炎を吹いて反撃を行っている。

そこにいたのは紛れも無く本気を出しはじめたワルプルギスの夜。

無重力を生み出し、嵐を吹かせる難敵だ。

それでも彼女を前に、力は空回るばかり。

「図体だけで、強いだけでアタシに勝てると思ってんのか!?」

杏子は攻撃と共に、避けてしまう。

攻撃と共に、敵に吸い付くように接近することもできる。

攻撃と回避、攻撃と接近。杏子は無駄のない動きで、ワルプルギスの夜の表面をズタボロに切り刻んでいる。

「……佐倉さん……すごい」

「……バケモノね」

私達は駆けつけたはいいものの、杏子の奮闘を前にして動けないでいた。

……以前に言われた言葉を思い出す。

私達は黒子のようなものなのだと。それは、言葉のままだったということか。

『あの白化け猫に騙されていたのはアタシの大ポカだよ』
「！」
テレパシーから流れてきたのは穏やかな声だった。
『気付かせてくれたアンタらには感謝してる……けど、アンタらはさっさとお家に帰りな』
『は、はぁ!?　ふざけんな！』
『ハッ！　一番強いのはアタシなんだよ。アタシがこいつをぶっ殺してやる』
『バカ！　この魔女はさすがに、杏子一人じゃ――』
その時、空間が歪んで見えるほどの突風が吹き荒れた。
「わぷっ」
「きゃっ!?」
一帯を薙ぎ払う爆発のような風。
それは比較的遠くにいた私たちをも飲み込んで、吹き飛ばす突風だった。
「ぐっ……！」
流れる視界。止まらない体。それでも平らな地面でよかった。咄嗟に何度か受け身を取って、勢いを殺す。
――ここは１０ｔトラックの駐車場か？　いや、倉庫か。

住宅地のようにごたごたした場所だったら、一緒に飛んできた物に巻き込まれていたかも。

「がふっ……！」

それでも小さな倉庫の外壁に叩きつけられると、ちょっと痛かった。

物にぶつかって戦線離脱しなくて良かったと、前向きになるべきだろうか。

『ワルプルギスが、周りのものを吹き飛ばすくらいの風を発生させたみたい……！』

『の、ようですね……いたた』

マミさんはリボンで自らを地面へ固定し、辛うじて落下することもなく堪えたようだ。

けど、一緒に吹き飛ばされたであろうほむらと杏子の姿は見えない。

風は一瞬の事だったので、どこかにいるはずだけど……。

「……へっ、良いじゃんか。あれくらいで終わったら、何の面白みもないもんな」

私が辺りに二人の姿を探していると、倉庫の窓から杏子が這い出てきた。

受け皿になったのだろう、大きくひしゃげた雨戸を放り捨て、私の隣へ降り立つ。

彼女の腕の中には、ほむらが抱きかかえられていた。

「ほむら……！　無事？」

「よぇー奴が挑むからこうなるんだ」

「……」

目は閉じているが、呼吸はある。衝撃で気を失っただけのようだ。

「弱いやつは素直に、コソコソとな」

気絶したほむらは優しく地面へと預けられ、魔女を見据えたままの杏子は、向かい風に歩き出す。

「強い奴の背中に隠れていればいいんだよ」

槍を傍らに、風に向かって前進してゆく杏子の後ろ姿は、何者よりも頼もしかった。

しばらく感じたことのなかった、大人のように心強い背中。

――……つーわけだから、風見野はアタシのテリトリーだ、近づくなよ

――アンタは弱い、アタシには近づくな

私たちは前に歩き出した杏子を見て、何も言えない。動くこともできない。

やがて彼女の手が震え、ワルプルギスの夜を指差した。

「……よくも……やってくれたじゃねえかよ……クソったれが……お前は、アタシの敵だ……てめえは、弱者をいたぶるゴミ野郎だ……！」

怒っている。戦闘狂だからではない。それは私が今まで見たこともない、杏子が発す

る本気の怒り。

「てめえみてえな輩をぶっ潰すために……アタシはこの生命を燃やしてんだ……！」

髪飾りが噴くように燃え上がる。

火花が散り、その熱は風に乗って私にまで届いた。

……熱い。

「贖罪なんか許さねえ！　一度も！　二度目も無え！　てめえはとっくに線を超えた！　主文！　全部後回し！　てめえは……てめえだけは！」

――この世で最も強い魔女を知りたいのかい？

――それは、魔法少女を最も斃してきた魔女ということかな

――それなら間違いない、現在までで間接含め４１１名の魔法少女を葬った……

――ワルプルギスの夜だろうね

「死刑だッ!!　ワルプルギスッ!!」

第六章　それが望んだ結末か
この世界に神は居ない

†

「杏子、最近学校から帰ってくるたびに傷だらけじゃないか。一体どうしたんだい。……父さんに相談してご覧なさい」
「別に……平気だよ」
「……誰かに、ひどいことをされているんじゃないのかい。クラスの子とか」
「されてない。される前に……なんとかしてるもの」
佐倉杏子はある日を境に強くなった。
不安げにおどおどしていたのが一変し、力強く笑うようになった。
それはいつからだっただろうか。
夏休みが終わり、その頃に一度、ふさぎ込んでからだったか。

今では弱々しさなどかけらも無い。
「アタシは負けないよ。誰にだって」
「……モモだって心配しているよ。あまり、無茶なことだけはしないでおくれ」
「うん」
そう返事は返すが、杏子の生傷が絶えることはなかった。
それでも杏子はいじめられっ子らしく屈することはなかったし、弱音も吐かなかった。
むしろ、学業でも私生活でも、精力的に活動することの方が多くなったように、父には思えた。
父が杏子の振る舞いや生傷の由来を詳しく知ることになったのは、それからすぐのことである。
杏子ちゃんの暴力的な行いをどうにかしてもらえませんかと、担任からの電話で発覚したのであった。
「暴力は向こうからやってきてるんだよ」
「やり返してはいけないよ」
「右の頬を殴られて、左の頬を差し出したよ。それでも向こうは遠慮なんてしない。殴れる時には喜んで殴ってくる。父さん、その次は何を差し出したらいい？」

父は答えに窮した。
「悪い奴らに屈しちゃだめなんだ。アタシは負けるつもりはないよ」
杏子は茜色の金属でできたアンクを握りしめ、誓うように言った。
「……杏子、それは？　金属のなんて使ってないはずだけど」
「ああ、これは……信者の方に、いただいたんだ。大事にしてるの」
「おお、そうだったのかい……ならば、うむ。大切に使いなさい」
「もちろん！」

杏子は健やかに成長した。主に精神的に。
だが肉体の方は芳しくない。それは、ひとえに父の不甲斐なさ故であった。
杏子の父は新興宗教の開祖である。
既存のものの教義とは異なる、現代に則し、適した教義を定めたつもりであった。
だが新興宗教というそれだけで人々からの心情は悪くなり、かつて所属していた組織からは破門されたこともあって、地元でも鼻つまみ者としての扱いを受けている。
杏子がいじめられていたのも、日々の糧を得ることすら難しいのも、全てはそこに起因する。
父は日々の暮らしの中でその事実を再確認するたびに、次第に心を病んでいった。

「……杏子、今朝もお祈りしたのかい？」
「うん」
それでも杏子は。杏子だけは、常に高潔に、敬虔に信仰を深めていた。

「お姉ちゃん……」
「大丈夫だよ、モモ。ずっと離れ離れになるわけじゃない。またすぐに会えるって。ほら、泣かないで」
ある日、かつて父の妻であった女が教会を訪れた。
杏子は別れの理由を詳しく聞いていないが、久しぶりに見る母の顔には卑しさや悪意はない。子供を気遣う母としては疑いようもない人物であることは間違いなかった。
話は、既に何ヶ月も前から父と妻との間で進められていたらしい。
困窮もいよいよ極まり、二人の娘を妻に託そうという話になったそうなのである。
「……杏子。あなたも……」
「アタシは良い。アタシは、この街に残る。この街で、父さんの教えを守っていくよ」
だが杏子はそれを拒んだ。
妹のモモについては心配もするが、杏子にとっては父を放っておけなかったし、信仰し続けた教義を棄てることもはばかられたからだ。

「……そう」

母はそんな答えに対し、露骨に表情を歪ませた。

悪い人間でないことは杏子にはわかる。それでも、父や自分とは価値観が合わない人間なのであろうことは、この時なんとなく察せられた。

杏子と父だけになった暮らしは、依然として質素なままだった。

食うにも困る生活。服は最低限の着回し。住処は教会の寒々しい部屋。

学校での生活も大きな変化はない。杏子は相変わらずクラスでは避けられていたし、陰湿ないじめをうけることもあった。

それでも殴られれば殴り返すし、やられたままでいることはない。

給食を食い溜めすることを卑しいと言われようが、詐欺宗教だと侮辱されようが、杏子の信念が折れることはなかった。

ある頃から、教会に細々と信者が現れるようになった。

杏子が中学に入る直前である。

信者（というよりも寄付）の何人かは杏子が学校で見かけたことのある生徒とその親で、信仰というよりは人付き合いとしてのものでしかなかったのだが、それでも家族が

日々の息継ぎをするには十分な足しになるものであった。
後から父が聞いた話では、学校でいじめられていたところを杏子が助けに割って入ったことがあったのだという。
「知らねーよ。弱い奴が悪い奴にいじめられていたから助けただけだ」
杏子はすっかり擦れた口調でぶっきらぼうに言うが、それが照れ隠しであることは父にもわかっていた。
「私は、やはり暴力を歓迎することはできないけれども。立派なことをしたよ、杏子」
「！　……へへ」
貧しく、大変な環境で育ててきた。それでも杏子はこんなにも立派に、より善く育ってくれている。
父は誇りに思うと同時に、現状をどうにかしなければという焦りにも似た思いが日に日に募っていった。
そして本質的盲目的で、人の悪意に疎い父は、努力の選択を誤った。

「佐倉杏子ちゃんだね」
ある日杏子が戻ってくると、知らない男が教会にいた。
ボロの教会に似つかわしくない身なりの良い男。だがその笑みと雰囲気から発せら

れる気質はこれまでに見たこともないほどに醜悪。
　信者でないことは明らかだった。
「この教会の土地のことで、お父さんと大事な話があってきたんだ」
「誰」
「杏子ちゃんのお父さんの、お友達だよ」
　教会の奥から、父の声が聞こえる。荒い声だ。言い争いが、取っ組み合いか。いずれにせよろくなことではない。
「出て行って」
「それはできないなぁ。お父さんと大事な話があるからねえ」
「出て行け！」
「ははは、それはできないよ。この土地は、もう君たちの物じゃなくなるからね」
「そんな馬鹿な話……」
「うん。でも、杏子ちゃんのお父さんならきっと……君とこの土地だったら、君を助けると思うんだよね」
「……！」
　背後の扉が閉ざされる。
　そして物陰から複数人の作業着姿の男が現れ、杏子を遠巻きに囲い込んだ。

杏子はその時、数日前に父が教会の修繕について話していたことを思い出しかけたが、すぐに思索をやめた。

「杏子！　来てはいけない！　逃げるんだ！　……ぐ、ガッ……」

父の声が聞こえる。男たちの下卑た笑いが聞こえる。

杏子は身体を恐怖と、それ以上の怒りに震わせ、近くの長椅子の下に隠し置いていた長棒を拾い上げた。

「なかなか可愛いじゃないの。心中させてやる前に、何本か撮っておくか」

「シスターか……海外にも良い値段で売れそうやな」

じりじりと近付く男たち。

体格は雲泥の差があり、それは長棒をもってしても覆し難い。武芸を僅かにでも飾ったからこそ、杏子は絶対的な不利を悟っていた。

一人くらいならなんとかなる。

しかし、囲まれてはどうしようもない。掴まれて、それで終わり。

自分が何をした？

父が何をした？

悪いことはしていない。だというのになぜ、こんなにも……。

「僕と契約すれば、なんでもひとつだけ願い事を叶えてあげる」
絶体絶命の状況。
そんな窮地の中で、杏子は椅子の上に慎ましく座る〝それ〟の提案に……内心で悪魔の契約に違いないと勘付いていながらも、喜んで手を伸ばした。

「……父さん！」
魔法少女の姿になった杏子は全ての悪漢を蹴散らした。
そして彼女が扉を開け放った先で見たものは。
「やべぇ、このガキ槍を持ってるぞ!?」
「連中はどうした!?」
天井の梁から伸びるロープに首を括らされた、揺れる父の姿であった。

†

戦線に復帰しなきゃ

杏子の怒号に応じてか、空に浮かぶワルプルギスも一際に大きな声でせせら笑った。

黒い靄が周囲に渦巻き、そこから暗い影が、雨のように産み落とされる。

『ピュイィイイ』

『キィイイイィッ！』

『ケロケロケロケロ……』

「あれは……魔女か！」

ワルプルギスの近くに発生した異形の生物。ソウルジェムの反応が、それらは使い魔ではなく魔女であることを警告している。

いずれもコウモリ、鳥などの翼のある魔女たちだ。空を飛び攻撃できるタイプであることは、見た目からもわかる。

「いいよ、すぐに執行してやる……まずはお前達からだ、金魚のフン共……！」

杏子は八重歯を剥き出しにして、獰猛に笑っている。

私もマミさんも、彼女を止めることはできない。
止めなければ、一人で飛び込むのは危険だ……なんて。そうは、全く思えなかったから。
「まとめて相手してやらァ！　〝ロッソ・カルーパ〟ァ！」
髪留めの炎が噴火し、長く、大きな龍を成す。
『ガァアアアアアッ！』
火炎の龍は慟哭ように不吉な叫び声を上げ、鎌首をもたげた後、一番近くの魔女へ向かって炎を延ばした。
『ギェアアアッ！』
『オオオオオオオォッ！』
巨大な炎の龍はしっかりと魔女の腹へ噛み付き、灼熱の牙をその内部へと食い込ませる。
「アタシに喧嘩を売って、ただで済むと思うんじゃねーぞ!?」
魔女へ噛み付いた龍を基点にして、槍を携えた杏子が中へと持ち上げられた。
そしてそのまま……なるほど、これが杏子の空中戦のやり方か……！
髪留めで燃える炎の龍、ロッソ・カルーパ。

あれは私との戦いで見せたような、ただ噛み付き、燃やし、爆発するだけの龍ではないのだ。

操る自分自身をも持ち上げて運べる、空中での動きの要となる魔法だったんだ。

「どうしたノロマ共！　一発くらい決めてみなッ！」

空をうねうねと動きまわる杏子の軌道には、どの魔女も追いつけない。

鳥と龍の戦いの結果などは明白だ。龍が相手に有無を言わさず噛み付いて、身動きを取れなくしてしまう。

「だりゃぁッ！」

そして龍の尾として、杏子の槍は周辺の魔女を次々に貫き、龍以上に多くの相手を引き裂いてゆく。

無双だ。空中でも杏子の闘いぶりが翳ることは一切なかった。

「嘘……ロッソ・カルーパは、戦いの中では一度きりしか使えない魔法のはずなのに……」

マミさんは空でうねる龍を見上げながら、呆然と呟いた。

火炎龍は暗雲の中で暴れ周り、杏子の身体を運んで魔女を殲滅している。

こちらが手出しするまでもなく。

「……ワルプルギスの夜が、あまりに強力だから」

「え？」
「ワルプルギスの夜の力が強すぎるから……杏子の炎が燃えきっていないんだ」
「！　だからあの炎を、何度も使えるのね」
「ええ、多分……」
噛み付いても噛み付いても、炎の龍に消滅の気配は見られない。
いつまでも杏子の体の一部のように動きまわり、術者と同じように大暴れしている。

「最初から思ってたことなんですけど……」
「うん……」
「杏子……怖いな……」
荒れ狂うワルプルギスを目の前に、複数の魔女を相手に圧倒している。
鬼神だ。
戦闘狂、この二つ名はこの時今まさに、最もしっくり来るものだった。
「……でも」
「？」
「佐倉さん……きっと、形は違うかもしれないけど……間違いなく彼女も、正義の味方だと思うの……」

「……」

現場へ急行する時に聞いた、杏子のテレパシー。

先ほど気絶したほむらを抱き抱えた時の、慈愛に満ちた仕草。そして義憤。

「今まで私は、彼女を誤解し続けていたのね……」

殺気に満ちた形相で槍を振り回す、一人の少女。

怒り。闘志。敵意を剥き出しに荒れ狂う彼女の姿は、ヒーローと呼ぶにはちょっとキツいものがある。

けど私もマミさんと同じように、彼女の中にある〝正義〟の表情をしっかり目撃した。

戦闘狂バトルシスター。

戦いに傾倒する彼女は、すべてこの時のためのものだったのかもしれない。

『……杏子！　ワルプルギスの夜は、背中の結界に無数の魔女を保管している！』

「！」

『魔女のエネルギー総数がワルプルギスの命だ！　それまではいくら傷つけても再生してくよ！』

「へぇ、希望のある話じゃん……良いことを聞いた」

残る鳥の魔女は五体。

距離も高さもバラバラな場所から、杏子にターゲットを絞って迫っている。
さて、私達もそろそろボーッと見ているわけにはいかない。休憩は終わりだ。
『佐倉さん、今助太刀にいくわ！』
『ぁあ!?　引っ込んでな！』
『あんただけじゃ手のかかる相手でしょうが！　私達と一緒に、さっさと終わらせるよ！』
マミさんと共に地上から飛び立つ。
お互いに狙いは、杏子から離れた場所にいる魔女だ。
「鳥を撃つなんて、私にとっては簡単すぎる作業よ」
輝く弾丸は一番左の魔女を狙い、翼を貫いているようだった。
ということは、私は反対側の魔女を狙うべきだろう。
「杏子！　そこらの三体は任せたよ！」
「だからいらねえって言ってるだろ！」
「いいから！」
強情だなぁもう！
「〝五芒〟の斬〟！」
セルバンテスによる急接近からの乱切り。

翼、首、胴、脚、なんでもいい。とにかく相手に動く間を与えず、斬り裂き続ける。
『ギェ……』
刃の嵐に揉まれた魔女は細切れになり、風の中に散っていった。
「チッ、引っ込んでろってのに……！」
『これは杏子だけの戦いじゃないんだよ！』
『ぁあ!?』
燃え盛る龍の顎が、灼熱の牙をコウモリに突き立てる。
もがき暴れる魔女をその場で微動だにさせず、杏子の槍はまた別に迫る魔女の首を刎ねていた。
『私達はすでに決心したんだ。危険は承知、顧みずにここにいる』
『アタシより弱いくせに……』
『見くびるな、あんときドローだったでしょ！』
『はぁ!?　ドローだぁ？　よく言うぜ、本気でやってりゃあの戦いは……』
『ちょっとよそ見しないで！　上から魔女が！』
つい念話での言い合いに没頭してしまった。
気づけば、大鷲の鋭い鉤爪は私と杏子、二人の頭を狙っている。
が、その爪がこちらまで届くことはなかった。

大鷲は突如、爆炎に包まれ消滅してしまったのだ。
「っ……！」
「うぇ、けほっ、けほっ……！」
うっへ、酷い煙。助かったといえば助かったけど……現代兵器は、なかなかクるね。相変わらず。
『さっき起きたわ……手間をかけさせちゃったみたいだけど、今のでチャラということでいいかしら』
地上を見ると、そこにはＲＰＧを構えるほむらが立っていた。
『……ほむら、起きたんだ。無事で良かったよ』
『こっちの台詞でもあるけど。余所見している暇は無いでしょう』
『チッ……』
『……本気で、全力をもって挑みましょう。ほんの少しでも余力を残しておこうだとか、思わないで』
今まで何度も戦い続けてきた彼女が言うからこその、重みのある言葉だった。
杏子がそれを感じ取ったのかはわからない。渋々でも、承諾の意志を沈黙で示しているようだ。
……杏子と一緒に戦う、か。良い展開じゃん。

『佐倉さん。……遅くなっちゃったけど、また一緒に戦えて嬉しいわ』
『止せよマミ、あんたのそういう所が不吉だから距離を置いたんだぞ』
『えっ……？』
『どういうこと？』
マミさんとは、ワルプルギスの事があって別行動を取っていたんじゃなかったのだろうか。
『マミの言葉はいちいち縁起がわりーんだよ。古い洋画の台詞聞いてるみたいで気が滅入るんだよ』
『えっ、えっ!?　そ、そうなの？』
『ぶふっ』
私が噴き出した丁度その時、ほぼ同時にワルプルギスの夜の周囲に異変が現れる。
魔女を呼び出す黒い靄だ。

Ｂｒｙｎｈｉｌｄ
王騎の魔女・ブリュンヒルデ

Ｓｉｅｇｌｉｎｄｅ

反旗の魔女・ジークリンデ

Ｖａｌｅｎｔｉｎａ
黄銅の魔女・ヴァレンティーネ

Ａｄｅｌｈｅｉｄ
斬鬼の魔女・アーデルハイド

Ｌｅｏｐｏｌｄｉｎｅ
孤高の魔女・レオポルディーネ

Ｗｉｌｈｅｌｍｉｎａ
一騎の魔女・ヴィルヘルミーナ

……ついに騎士の魔女まで、結界の外に出てきたか！

『ほれみろ、厄介そうな奴らのお出ましだ。マミ、あんたのせいだからな』

『え、ええっ!?　なんでなんで!?』

『狼狽えていないで、迎え撃つわよ！』

そうだ。本気にならなくては。

奴らは、冗談交じりに戦って勝てる魔女達ではないのだから。

ようやくあの敵を……

『ジンケイ！　サンカイ！』

黄金の鎧を纏った魔女が、同じく金ぴかの剣を掲げて号令を出した。

『ショウチ』

『リョウカイ』

『ヨーソロー』

『マカセロ』

『……』

その号令だけで、複数の剣士の魔女が意志を同じくして整列した。

横に大きく広がる陣形。結界内で見たように、私達を多方向から襲うつもりなのだろう。

単純だけど、数の上で優っている相手にとっては当然の戦略とも言える。

こちらには杏子がいるとはいえ、相手もかなりの手練だ。ほむらの時間停止が効かない黒マントの魔女もいる。

まずは司令塔である黄金の魔女を倒すのがセオリーなんだろうけど、連中が陣形を崩

して勝手に暴れ回ったところでそれほど弱体化するとは思えない。
倒すなら……やっぱ黒マントだな。
『楽しそうな魔女じゃねえか、オイ』
でも杏子がわざわざその魔女を狙ってくれるかな。
むしろ自由に動いてもらった方が良いか？
『……一応、気をつけて。あのうちの一体はマミさんの脚を斬ったんだ。動きが早い。あと、黒いマントのはほむらの時間停止魔法を無効化できる』
『凄さがわからんね。……しかし、なるほど。時間停止か。どーりで』
ああ、打ち合わせしてないとお互いの能力すら擦り合わせできない。厄介だ。
『あっちのベレー帽の魔女は、銃と剣が一体化したものを使ってくるわ。多分、向こうの魔女の中では唯一の遠距離持ちよ』
マミさんが指摘した魔女は、金とは違う黄銅色に煌めく身体を持った魔女だ。
黄銅製の銃剣、そしてベレー帽。数百年前の戦争にありそうなデザイン。
……なるほど、確かによく見ればあれは銃だ。ぱっと見ると変な形の刃物だけど、不意打ちで撃たれたら大変だ。良い情報を貰った。
剣士ばかりだと思っていたけど、離れた位置から攻撃できるやつもいたとは。これは厄介なことになりそうだ。

『じゃあマミ、ベレー帽同士で仲良く撃ち合いをしてなよ。そっちの方がマミもやりやすいだろ』
『！　うん』
心做しか嬉しそうに返事をするマミさん。
『アタシは西洋剣共を叩き切る。片刃はさやか、おめーがやれ』
『ちょっと、杏子なに勝手に……』
ていうか片刃刀の魔女なんて一体しかいないじゃん！
『シュツゲキセヨ！』
『ほら、敵は待っちゃくれねーぞ！』
勢いに飲まれたまま、魔女たちとのリベンジ戦は始まった。
私は自分の敵を見据えて、睨む。
『――キナ』
片刃使いの魔女。見るからに侍。
「――へえ」
しかし、サーベルと日本刀。なかなか良いカードじゃないか。
今こんな時になんだけど、面白い。いっちょやってやりますか。
『キャハハハハハッ！』

「！」

いざ戦闘開始。

そんな瞬間、ワルプルギスの夜が強烈な突風をこちらへ放った。

……いやそれは正確じゃない。この風の目的は別にある。

『オソイ！』

風に乗せ、魔女を加速させるためのものだ。

追い風と共に一気に距離を詰めた魔女の刀は、私が打ち合おうとする前に首を跳ねるだろう。

けど、甘い。

「フッ！」

『!?』

棒高跳び、背面飛び。

背中を反らし、魔女の刀をギリギリで避ける。

マントが切り裂かれるのは仕方ない。ほとんど飾りのようなものだから。

「ッシ」

『ッ』

躱しながら放ったサーベルの突きは、魔女も魔女で複雑な動きによってそれを避けて

みせた。
　魔法少女の脚力で僅かに跳んだ私の下を、勢い付いた魔女が滑るように過ぎ去る。
「おっと」
『ホウ』
　去り際に放たれた2つの斬撃を篭手でいなす。
　そして確信する。

　――勝てる

　杏子とは全然違う。全然余裕。
　こいつには勝てる。

『撃(テ)エー！』
「！」
　マミさんはベレー帽の魔女と、早くも銃撃戦を繰り広げていた。
　彼女と魔女はお互いに銃というものを知り尽くしているのか、放たれる弾丸を当然のように避けている。

マミさんはリボンを使った縦横無尽な動きと、身体に魔力を込めた空中遊泳による回避だ。

対する魔女の方は、ワルプルギスの嵐が運んできた廃材を足場に、身軽に飛び移って対応している。

……どちらも技術は桁外れだ。マミさんは言わずもがな、特に魔女。

魔女なのに経験を積んだ達人のようなあの動きは、ちょっと卑怯だと思う。

「くっ……隙がない」

『撃(テ)エエィッ！』

魔女が放つ弾丸もまた、マミさんの操るマスケット弾と同じく単発式らしい。

それでも素早く移動しアクロバティックな態勢から合間なく正確に射撃してくる魔女に、マミさんはしばらくの防戦を強いられているようだった。

（ティロ・スピラーレを発動させるには集中する必要がある……相手の動きを補足して、しかも相手の射撃を避けながらは不可能！）

広範囲を打ち砕くティロ・スピラーレも、まだ発動できていない。

それほど余裕が無いということか。

『ヨソミカ』

「おおっと」
観戦してる余裕はないか。こっちもそこそこ強い相手だ。
けど、日本刀。間合いに親しみはあるし、勝手はわかる。
「〝三畳一間〟」
『!?』
高速のフェイントが、魔女の刀を打つことなく翻る。
身体は宙で捻られ、浅い跳躍が二歩分、身体を後退させた。
フェイントに身構えた手練れの相手が、フェイントに気付き反撃を繰り出す剣の間合い、およそ二歩。
その二歩分を、フェイントの戻しと同時に逃げる。
『――』
敵の刀が空を切る。
もう遅い。
一度〝斬れる〟と大きく振ってしまっては。
次の私の一撃を躱せない。
今までの誰もがそうだったように、あんたも例外なくね。
「〝断〟！」

切れ味は、他の魔女たちと何ら変わらないものだった

『――ミゴト』

「どうも」

魔女の首がこぼれ落ちて、魔女の身体は嵐の中へ飲み込まれた。

砂のようにあっけなく散ってゆくサムライの姿に、一抹ほどの虚しさを覚える。

……あの魔女はかつて、私と同じ魔法少女だった。

もしかしたら、私のように……武芸を嗜んでいたのかもしれない。

私もああなっちゃうのかな。

ま、後のことは、後に考えるけどね。

ふっ、それも武士の散りざまってやつよ。

……それよりも、今はワルプルギスの夜に勝てるかどうかだ。

『フッ……！』

「！」

マミさんの戦況に変化ありだ。

魔女が撃ち方をやめ、空中にあるリボンを足場に、接近を試みている。魔女も上手く避け続けるマミさんに痺れを切らしたのだろう。銃剣の刃物の方で、直接攻撃するつも

りだ。
　接近戦なら私が入り込む余地があるか……？　いや。
「かかったわね」
『!?』
　リボンの上を走る魔女は、マミさんの得意げな顔に危機感でも覚えたのだろう。
　まさしく人間業ではないバックステップで接近を取りやめ、剣撃から射撃状態へと切り替えた。
　身のこなしは素早い、判断力もある。強敵だ。だけど……。
「遅い。あなたはもう、蜘蛛の巣の中よ……！」
　マミさんの技術はそれを上回っていた。
　一帯に張り巡らされていたリボンの中の一本が、勢い良く引き抜かれる。
『……！』
　リボンがすり抜け、足場に緊張が駆け抜ける。見えざる音は既に魔女を取り囲んでいた。
　次にどう来るか、予想はつかない。魔女は迷わずに銃をマミさんに向けている。
　マミさんをどうにかすれば、それが自分の防御にもなるだろうと判断したのだろう。
　当然の反応だ。同じ立場なら、私だってそうするだろう。

「〝トッカ・リウート〟」

『――』

マミさんの手によって一条のリボンが引き抜かれると、リボンの結界は箍が外れたかのように、一斉に形を変えた。

足場としてしか活用されていなかったリボンは、そもそもが最初から罠だった。足場全体は急激に形を変え、中心部の魔女に向かって勢い良く弦を張る。

『ギッ……』

幾つものリボンが、その強い勢いで魔女の身体をバラバラに切断した。

引き金に指をかけたままの銃剣がその役目を果たすことはなく、風の中に溶けるように消滅した。

「……はぁ、はぁ……名誉に、思いなさい。なけなしの足場を使った、一度きりしか使えない必殺技よ」

二体目も撃破。

あとは、杏子の戦いか。

「おらぁあああッ！」

杏子を二体の魔女が取り囲んでいる。

一体の金ピカの魔女は遠目から、それを見ているだけだ。
それでも三対一だ。では一方的な魔女による虐殺が行われているかといえば、それは全く違う。
『イチゲキリダツ！　ボウエイ！』
「遠くからブツブツ指示出してんじゃねーぞオラァ！」
違った。違うにも程がある。
『オオオオォッ！』
『ユカセン！』
「さっさとどきなァ！」
杏子はたった一人で、三体を圧倒している。
離れた場所に浮かぶ司令塔の魔女を目指し、二体の魔女を弾き飛ばしながら突き進んでいた。歯牙にもかけないとはまさにあれのことだろう。
二体の剣士は杏子の猛攻を食い止めようと本気で襲いかかってはいるものの、どんな攻撃も、どんな妨害も通用していない。既に魔女の扱っている武器さえ、ズタズタに引き裂かれていた。
猛る炎の龍に、荒れ狂うブンタツの前には、魔女の剣でも刃が立たないというのか。
『クイトメ――』

「もう終いだよ、クソ野郎共め」

杏子が二体の魔女の間を通り抜ける。

ブンタツの両端の刃は、二体の首を同時に切断した。

炎を引き連れて迫る赤い死神は、もうすぐそこに。

安全圏から指示を出すだけの魔女は、その手に握った黄金の剣を振り上げることもできていない。

『ダレカ、ダレカオラヌカ――』

「他人をこき使い、弱者を虐げ、そのくせ一人じゃ何も出来ない野郎が……この世で一番ムカツクんだよッ！」

ブンタツの刃が魔女を十文字に切り裂く。

なんてことはない。四等分にされた魔女は断末魔をあげることも出来ず、すぐに消滅した。

……まさか、あの強い魔女を三体同時に仕留めてしまうとは、驚きだ。

「……」

いや、驚くな。感心している場合じゃない。違和感がある。

私もマミさんも魔女を倒した。杏子も三体……。

――あと一体は、どこに消えた？

いや！　あの魔女はマズい！
ワルプルギスの次の動きに気を配ることもなく、注意を他の全てに向ける。
その魔女が隙を狙ってくるとしたら、まさに今、ひとつの戦いが終わったこの時だ……！
　そしてあの魔女が狙うのは……！
「ほむら！」
「え……」
『ショウヲキラセ、オウヲタツ』
　地上から援護射撃の構えを取ったほむらの背後では、黒衣の魔女が凶刃を振り下ろしていた。

不覚を、取った

「うそっ……」
『ワレラニ　ジユウヲ』
ダガーがほむらへ。

――駄目だ、遠すぎる
――諦めるな、守るんだろう

「シッ！」
サーベルを浮かばせ、左手のセルバンテスをサーベルの柄に叩き込む。
突き出す腕の余分な力は抜く。重さはいらない。速さだけが必要だ。
それはサーベルを弾頭にした弾丸。私にできる、最速の遠距離攻撃。
「届け――！」
サーベルは切っ先を向けて、まっすぐ狙いの場所へ疾走する。
だけど。

『ニンム　カンリョウ……！』
「つぐ……!?」
遅かった。間に合うわけがなかった。
魔女の振り下ろす大きなダガーは、一掻きでほむらの左腕を切断してしまった。
「ぁあぁぁあぁあッ!?」
「暁美さん!?」
魔女め、手練れだ。なんて手際だ。
私達魔法少女の前から姿を晦ませ、銃の照星に気を取られているほむらの背後に回るとは。
そして出遅れたとはいえ、私のサーベルを避け、しかもほむらの左腕を切断した。
『――』
黒衣の魔女は、腕を抱えたままこちらへやってくる。
わざわざマミさんと、杏子と、私がいる、戦力の密集地へだ。
「やりやがったな……テメエ」
杏子が猛っている。
「よくも暁美さんを……！」
マミさんも既にフリーだ。敵はあいつ一人だけ。全員で迎え撃てる状態。

なのに魔女はこちらに向かってくる。
なぜだ。ほむらの腕だけを切り取って、それをどうするつもりなんだ。
なぜ、私達の方に向かってくる。
「……そうか」
向かう先はワルプルギスの夜の結界。人質か？
いや、そんな戦局を見極め方をするのか。それよりはワルプルギスの夜にグリーフシードの補給するために動いている……こっちの方が納得がいく。
まあ、何にせよ。
「させるわけないだろ」
どちらにせよそんなこと、許してやるわけがない。
こいつがどのような理由で動いているとしても、関係ない。ほむらの腕は返してもらうぞ。

ｓａｌａ
殉葬の魔女・サラ

ｅｍｙ
身投げの魔女・エミ

ｊｉｌｌ
磔刑の魔女・ジル

ｒａｒａ
鎮魂歌の魔女・ララ

「ワルプルギスの夜は、あまりにも強くなりすぎた。数々の魔法少女たちが討伐のために結託したものの、いつだって結末は敗北だけだった。それでも、エントロピーを凌駕した魔法少女の力だけが、ワルプルギスの夜に対抗できる唯一の手段であることに変わりはない」

キュゥべえが空を見上げ、ひとり呟く。

「本来ならほとんど誰も望まない〝力の願い〟はとても強力だ。けど、〝そんな願い事〟は大昔から何度も叶えられているし、繰り返されているんだよ。さやか、杏子」

暗雲の中に現れた新たなる四つの影。
巨大な魔女の姿。
「君たちは知らないだろう。結託した百数十人の魔法少女のうちの何人が、力を願ったのか」
ほむらは腕から止めどなく血を流し、ソウルジェムのついた左腕は今なお魔女の手の中にある。
「君たちは知らないだろう。かつてワルプルギスの夜が来る前日に、何人もの魔法少女が打倒ワルプルギスのためだけに願いを叶えた過去を」
ワルプルギスの夜は笑う。
「確かに佐倉杏子、美樹さやか。君たちは非常に稀な、強力な魔法少女だ。それでも彼女たちの絶望を、君たちだけに受け止めきれるはずがないよね」

「……新手、か」
髪留めの炎に異変を悟った杏子が、一番先に振り向いた。けど、それも僅差だ。
私達みんなが目の前から来る黒衣の魔女を一切無視して、ワルプルギスを見た。

ワルプルギスの夜の前には、新たに四体の魔女が立ちはだかっている。

『……』

全身を鎖のようなものでぐるぐるに縛った魔女。

『……』

両手に自分ほどの長さはあろう巨大な針を掴んだ魔女。

『……』

長い杖を大事そうに抱きかかえた魔女。

『……』

胸の前で手を組んだ魔女。

どれも女性の人型。どれも巨体。それぞれ十メートルはあるだろう。

そして、見た目だけでは量りきれない強さをもっていることを直感した。杏子の髪留めの火力を見れば解りやすい。

……うなじから背筋にかけてがピリピリする。

圧倒的な強者。いや、自分よりも遥かに高みにある……格の違う相手。

「ふん、あいつらも全部、ぶっ潰せばいいんだろ……！」

杏子もわかっているはずだ。それでも戦意は潰えていない。

「……ほむらの腕が先決だ。時間を止めるための盾も、ソウルジェムもそこにある。助けないと」

「ええ……だけど」

難色を示したのはマミさんだ。けど理由はわかる。

「後ろからこっち来てる魔女が持ってるんだろ？　振り向きたいなら振り向けば？　死ぬと思うけどな」

杏子の言葉は冗談ではない。本気だ。

確かに今、あの四体の魔女に後ろ姿を見せてしまったら……すぐに殺されるという確信がある。

「ぐ……ぁああ……ソウルジェムが、私のっ……！」

「……！」

……だからって。

黙ってそのまま、突っ立っているわけにはいかないでしょうが。

「全力で盾を展開します。マミさん、ほむらの腕を取り返してください」

「もちろん、そのつもりよ」
「……アタシを呼んでくれた礼だ。近づいた奴は対抗して食い止めといてやるよ」
「ありがとう」
　杏子も連携してくれるのならありがたい。こっちはこっちで、能力を活かした専守防衛に回らせてもらおう。
　杏子が四体の魔女を攻める。私は四体の魔女からの攻撃を防ぐ。その間にマミさんが黒衣の魔女からほむらの腕を取り返す。これだ。
「てめーら四天王ってとこか……なら、次は阿行と吽形でも出てくんのかよ？　見せてくれよ、なあ」
　厄介そうな敵にも怯まず、杏子はブンタツを抱えたまま前進する。
　……もともと一人で戦うと決めていた彼女のことだ。何が相手でも躊躇など無いのだろう。
「……絶対に行かせない」
『……』
「マミさん、任せました」
　私の背後ではマミさんと黒衣の魔女が至近距離で対峙している。距離としてもこっちのが近い。けど……私は、四体の魔女の攻撃を防ぐ盾とならなくてはならない。

腕の奪還は全てマミさんに託すこととなるだろう。
「暁美さんの腕を渡しなさい」
『ドケ』
「そう……残念だわ」
傍にあった足場のリボンが三本、マミさんに似つかわしくない強引な動きで引きちぎられる。
『ジユウノタメニ』
魔女の大きなダガーもまた、彼女の好戦的な動きに反応して構えられた。
私が見るべきはマミさんではない。
杏子の戦いだ。
マミさんの一騎打ちによる勝利を確実なものとして、ほむらの腕を奪還するために、あの四体の魔女の攻撃を防がなくてはいけない。
流れ弾がこちらへ飛んでくれば、マミさんの戦いに大きな支障が出てしまう。
ほむらの盾さえ……時間停止さえあれば、どんな窮地でも冷静な、最善の対処ができる。それを失うわけにはいかない。
何より、今まで何回も戦いを繰り返したほむらの命を、ここで途絶えさせてなるものか。

絶対に、私の盾で守り抜いてやる。
「テメェら全てが敵なら、全て斬るまでだ！」
ロッソ・カルーパが、長い杖を抱きかかえた魔女に食らいつこうと首を伸ばす。
『……』
「ぐッ……!?」
けど炎の竜が大口を開く前に、顎が何かに弾かれた。
大きな壁に激突でもしたかのような弾かれ方だ。接近を拒む、見えざる壁のような……。
私と同じバリア、シールド、そういったものが展開されたということか。
『ＬＡＬＡＬＡ――ＬＡＬＡ――……』
いた、あれだ。
『杏子、あいつだ。手を結んで歌っている魔女』
四体の中で大きな動きを見せている魔女は、不気味なことに一体もいない。
けど何もしていない魔女ばかりでもない。なら、障壁を生み出しているのは、何かをしている魔女だろう。
とすれば、小さく慎ましく歌っているあの魔女こそが原因だと私は推測する。

『確証はあんの』
『ごめん、七割勘』
『どの道ぶちのめしに行くけどな！』
なら聞くなよ、と言う前に杏子は既に竜の首を伸べていた。
「〝ロッソ・カルーパ〟！」
『ＬＡ――……』
歌う魔女には、やはり竜は届かない。
しかしあの魔女は異変を察知したか。――それとも焦ったか。
一瞬、杏子に顔を向けた。
わずかな反応。それが答えだ。
「よし、この見えない壁はアンタのモンだな……いいぜ。その壁ぶち破って、引き裂いてやる」

嘘でしょ

「いくぞブンタツ、久々に刃応えのある相手だッ！」
『ＬＡ――……』
敵に牙をむくことを諦めた龍は、辺りに散らばった廃材に噛み付いた。
廃材を軸に加速移動する杏子が魔女へと迫る。
そして、振るわれたブンタツは〝何か〟に喰い込んだ。
『……！』
「おお、通るじゃん？　秒読みの命だなオマエ」
強力な魔女によるシールドは堅かろう、と思いきや、案外簡単にブンタツの刃が入った。
一撃で空間を切り裂いて、侵食している。魔女が展開する障壁全体は最後の蝋燭のように、薄く発光していた。
想定外のダメージを受けて、壁を保てなくなったか。どの道、魔女の防御能力は、私のバリアーほどもないらしいことは判明した。

杏子の炎が相手に反応して強くなっていることもあるだろうが、それにしても相手の守りは柔い。

あの魔女が防御重視、あるいは専門の魔女だとしたら、その陥落も時間の問題か。

『……』

ああ、だからあとは、あいつだ。

杏子とは離れた位置に浮いている、二本の巨大な針を持った魔女。

奴はその一本をこちらへ向け、やり投げに近い投擲の構えを見せている。

私の役目は、他の魔女の攻撃を防ぐことだ。

……針は、刺すもの。貫くもの……。

魔女の防御の薄さに希望を感じている暇はない。こっちの防御力がどこまで通用するかもまた、大きな疑問だった。

「！　チッ、やっぱ全部を一度に相手はできねえかっ。さやか！　なんとかしやがれ！」

「言われなくても」

『ヤアッ』

針は投げられる。

まっすぐこちらに向けて放たれるそれの速度は、多分、視認からどうこうするのは無理だ。

小細工できる速度でない事は承知の上。それでも、ただ単純に防御して貫かれるよりは、抗ってみてもいいと思えた。

あの針が、ほぼ一瞬でこちらへ到着するなら――

――相手の投擲動作を見て、こっちも動く！

投擲。その瞬間、私は力任せに左腕を振り抜いた。

「――あ」

左フックは、完璧にそれを捉えていた。

タイミングばっちり。丁度、向こうから飛来したそれの先端部分に当たるジャストミートだ。

でもこれ、ダメだ。

真っ白に輝くそれは、もはや針と呼べるシロモノではなかった。

これは針なんて優しいものじゃない。レーザービームだ。

バリアで殴って弾くなんてできないタイプの攻撃だった。

「うぐっ！」

それでも私のバリアは、魔女が放った光の槍を殴り飛ばした。
角度をつけた防御は結果として正解だったらしい。大出力のレーザーの軌道を逸らし、真後ろへ貫通させるという最悪の事態だけは回避できたのだ。
「……つぅぅう……！　いったいじゃないの……！」
最善の防御の代償は、私の左手。
レーザーの直撃は逸らした。それでも、途中でバリアは砕かれてしまった。
私の腕も災難ばっかだな……いだだだ。痛覚切っておかないと駄目だなこれ。
銀色の篭手も、手首から先は一緒に吹き飛んでしまったらしい。痛々しく焼けた断面がグロテスクで、つい目を覆いたくなる。
『……』
「……セルバンテス……！」
けど、目を逸らしてもいられない。
私は篭手を再生成し、中身の無い左腕を再び前方へと向けた。
やりたくはないけど、第二波が来る。
……こうなれば気合だ、何度だって防いでみせるしかない。
『ハァッ……』
再び高く掲げられた針。

そしてそいつの後ろには、こちらへ杖を向けているまた別の魔女。その背後に展開される巨大な黒い魔法陣。
バリアを貫通する針と、更にもう一つの何かが来る。

――……何度だって……防げるのか、これ

白銀の光線と、赤黒い何かがこちらへ迫る。
私の頼もしいはずの左腕は軽すぎて、本当に空っぽのように感じられた。
『無茶は……しなくていい！　私の命のために、死なないで！』
ほむらの心の叫びが聞こえる。
『ッ……！　くそっ、一体殺ったってのに！』
杏子の思念が伝わる。
「かかったわね、終わりよ！」
マミさんの宣言が鼓膜を打つ。

杏子とマミさんは、それぞれの相手を倒すところまで来たらしい。
声を聞くに、マミさんの決着はもう数秒くらいかかりそうだ。けど、その数秒以内で

私とマミさんは消し飛ぶ公算が高い。
ほむらは自分の腕の奪還よりも私達を優先して欲しいらしいが、それは聞けない相談だ。ワルプルギスの夜を相手にする場合、ほむらがいなければ勝ちの目が極端に薄くなってしまう。
「……」
そうだ、大事なのはほむらの腕だ。
時間を止める、時間を巻き戻す能力。
ワルプルギスの夜との闘い方は、この一連の戦闘で随分と前進してきた。
再び街へ突入されれば、見滝原に大きな被害が及ぶ。ワルプルギスを郊外へ吹き飛ばすほどのミサイル攻撃は、ほむらにしか操れない。
……ほむらを守るんだ。
そうだ、怯えることはない。躊躇する理由なんてない。
相手がどうしようもないほど強い魔女二体だとしても、私がここから動けないとしても、相手の攻撃からマミさんを守るだけなら、ギリギリでなんとかできるはずだ。
最悪の場合でも、……本当に最悪の場合でも。
もし私達が敗北し、この街が全壊したとしても。
ほむらの盾さえあれば、ほむらが無事でさえいれば、また挑戦することはできるんだ。

ここで私が死ねば、次は勝てるかもしれない。
ここで私が死ねば、また戦えるかもしれない。
……ああ。残念ながら、私が生き残りつつ、なんて甘ったれた選択肢はもう残されていないっぽいな。
いや、まあなに。命を賭ければ不可能じゃないという道が残されていることに、心から感謝しようじゃないか。
圧縮した思考が終端にたどり着く。
私は心の中で呟いた。
『いけっ！　マミさん、やっちゃえ！』
そう、決してマミさんにだけは振り向かないでほしいから。
だからお別れの言葉はナシ。ただ背中を押す言葉だけを残して。
（〝アンデルセン〟！　〝セルバンテス〟！）
私が持てる二つの魔法武器を生み出した。

大剣アンデルセンは、強力なエネルギー波、〝フェル・マータ〟を撃つことができる。
弱点は真上から振り下ろすようにしなければ発動できず、燃費が非常に悪いということ。発動中は、体の移動が不自由だということ。

篭手のセルバンテスは、バリアを張れる。
バリアは半端な攻撃なら全て弾き飛ばす。正面からだろうが、バリアの内側からだろうが、あらゆるものの接触を拒む頼もしい盾だ。
蹴って勢い良く移動することもできるし、篭手で殴れば攻撃にも転用できる。
そして……バリアの防御能力は、内側でも有効。
いつかの魔女結界の中でそれを知った。
……フェル・マータは、魔力を注げば注ぐほど、威力を増す。うん、大丈夫なはず。
ハイリスクなのは当然だけど、欲張るほどリターンが増える諸刃の剣だ。
私にできるのは、ひたすらリターンを欲張ることのみ。
そして……ソウルジェムが無事なら、身体がどうなろうが……魔法は途切れない……！

「こい……」
左腕の篭手をマミさんの方へ向ける。
右腕に握る大剣アンデルセンは、魔女へと向ける。
「くそがァ！　どけ！　邪魔してんじゃねェエ！」
二体の魔女は私へ攻撃を向けようとしている。今にもそれは放たれるだろう。
杏子はもう一体の残った魔女に阻まれ、苦戦しているようだった。

やっぱりそうだ、ここはもう、私がやるしかないという事だ。
この選択が間違っていなくて良かった。ほんと、私の読みはいつでも冴えてるね。
『ヤアッ！』
『エイッ……』
銀の槍と黒い雨が輝きだした。さあ、今だ。
「一泡吹かせてやる……」
頭上に掲げたアンデルセンを、勢い良く振り下ろす。

――〝フェル・マータ〟！

片腕で振り下ろすアンデルセンは、針を投げてくる魔女へ向ける。
あの魔女が投擲する巨大な針は、光のようなエネルギーとなってまっすぐこちらを貫こうとしてくる。
スピードは驚異的だし、威力も防ぎようがない厄介な攻撃だ。
けど、逆にその分だけ、どこから撃ってくるかもわかりやすい。
『……！』
投げ放たれた銀の光線を飲み込み、フェルマータの青白いエネルギー波が魔女を襲っ

た。

フェルマータの波濤は、バリバリと音を立てながら魔女の外郭にダメージを与えてゆく。

「っ……！」

わかってる。私のフェル・マータではあの魔女の針を防ぐことは出来ない。

フェルマータが飲み込んだ魔女のレーザーは勢いを相殺されることなく、かなりの余力を残して私を襲った。

アンデルセンの刀身の一部分を削り、私の右親指を消し飛ばし、右肩を〝掠める〟とは言えないくらい、深く抉ってみせたのだ。

「……っふ……！」

フェルマータを貫き、剣を貫き、私をも貫いた針だったが、その向こう、反対側の手によってに展開されたバリアーを破るには至らなかった。

青い障壁に阻まれ消し飛んでゆく銀のエネルギーを横目にした瞬間、私の口元は安堵に緩んだ。

……これでいい。これで、マミさんに針の攻撃は届かない。

「……！」

心の底からの安心の中で、魔女が展開する魔法陣から放たれた無数の赤黒い雨粒が全

身に降り注ぐ。
ざくり、さくり。
小さな、しかし驚異的な数の黒い弓矢が、無防備な私を蝕む。
頭を、肩を、胴を刺し、貫いてゆく漆黒の一本一本が、私の意識を朧気に霞ませてゆく。
けど……。
右目も、頬も、……多分頭蓋骨をも、魔女の矢は何本か貫かれている。
それでも、ソウルジェムで繋ぎ止められた私の精神が、左腕の感覚だけはしっかりと認識できている。
魂さえ無事なら平気だ。
（私の守りだけは、崩させない）
フェルマータを放ち続ける。バリアを展開し続ける。レーザーから、黒い矢からマミさんを守るために。
身体はどんどん崩れてゆく。血は流れ落ちる前に、傷口から抉られ消失していった。
瞬く間に私の体積が消えてゆく。
私というものが消えてゆく。
けどこれでいい。

マミさんの戦いを、無事に守ることができれば、私はそれでいいのだ。これが最善の手なんだ。

『さやかァ！』
『美樹さん!?』
『さやか！』

聴覚を失った私の魂に、みんなの声が響いてくる。

心配をかけてしまったことは申し訳ないと思う。黙って捨て石になったことも、ちょっと気を咎める。

でも良かった。最期に大手柄を上げられたよ。

私が死ぬのは残念だけど、ほむらとマミさんと杏子がいれば、残りのワルプルギスの夜を倒すことも、やりようによっては不可能ではないはずだ。

うん……多分、そう。大丈夫。きっと大丈夫だ。

『マミさん、ほむらに腕を……時間の停止で、あの魔女たちを止めてください。攻撃は杏子に。そうすれば、勝てるから』
『ふざけんなてめぇ！　勝手に捨て駒になってんじゃねえぞ！』

『頼んだよ……じゃあ……』
『さやかぁ！』
脳も、心臓も……というか、上半身の殆どを失ってしまった私には、もうまともな思考能力は残されていなかった。
辛うじて繋がっていた右腕も、上から浴びせられる矢と針の光線によって、ついに崩れ落ちてしまう。
皮一枚程度で繋がった左腕も、敵の攻撃を全て防ぎきる前に事切れてしまうだろう。
だから……その前に、マミさん。
多分、もうあの黒衣の魔女を倒したのだと思いますが。
腕を、ほむらのもとに……よろしく、おねがいします。

私の意識はそこで途絶えた。
ほとんど黒ずんでしまったソウルジェムと下半身だけになった自分が落ちているのだという漠然とした感覚だけが残っている。
そして、ワルプルギスの嵐に巻き込まれ、適当な瓦礫のひとつとして宙を舞い、ゴミのように空へ吐き出されて。
私の残存した下半身が勢い良くどこかへ叩きつけられ、最後に無意味な出血を辺りに

散らして……そのまま動かなくなった。

……三人とも、頑張って。

私はここで、みんなを見守ってるからね。

ごめん。今までありがとう。

また、戦わなければいけないのね

「……ッ」

轟音の嵐の中で、杏子の含むような舌打ちはよく響いた。

少なくとも巴マミは、その幽かな音が聞こえたらしい。

『……マミ、魔女は殺っただろ。腕をさっさと、ほむらに返してやれ』

『う、うん！』

巴マミと反旗の魔女との決着はついていた。

堅実な射撃とリボンの拘束の合わせ技によって、難無くとはいかないまでも、堅実に倒すことができたのだ。

反旗の魔女が抱えていた左腕をリボンで絡め取ると、巴マミは辺りの瓦礫をリズムよく蹴り飛ばしながら、暁美ほむらのもとへ跳んでいった。

「だから弱い奴は嫌なんだよ」

全身を鎖に包んだ魔女に対峙しながら、杏子はそう漏らした。

いつもの彼女とは違う、いつかのような涙ぐんだ声だった。

「強い奴に立ち向かって、勝手に死にやがる。正しいことをしてるのに潰されちまう」

正義は必ず勝つ。

――いつ？

悪が栄えたことはない。

――どれくらい？

この世には確かに不条理が存在している。それを覆すために、正義を貫き通すために佐倉杏子は力を願った。

しかしそれでも自分の手の届かない場所で、悪は成ってしまう。

「……なあ、さやか。どうしてアンタが死ななきゃならなかったんだ。あんた、とびっきりの良い奴だろうがよ」

善が挫かれる。

「なぜ死んだ」

ブンタツの鋭い双頭が魔女の鎖を引きちぎる。

力任せに暴れる両剣の軌道が、無限に紡がれ増殖してゆく鎖の防御を急速に引き裂い

てゆく。
「何故……殺したァ！」
ついにブンタツの刃は、鎖に覆われた身投げの魔女の本体に届いた。
華奢な幼児体の腹を真横に薙ぎ払って、トドメの縦振りは頭頂部から股間まで両断せしめる。
十字に開いた魔女の切断面から覗く向こう側の二体の魔女は、既に杏子へと標的を移していた。
「絶対に許さない……神が許そうが、悪魔が受け入れようが……！　てめえらという存在を、塵一つ残さずこの世から消して……！」
『キャハハハハ！　キャハハハハキャハハハ！』
ワルプルギスの夜の高笑いがすぐそこで響く。
さやかはひとつだけ計算を間違えていた。
本来なら無視してはいけない一番大きな問題を、勘定に入れ忘れていたのだ。
奴が黙って見ているわけもないというのに。
黒い靄が闇夜のように辺りを包み、しかし一瞬で嵐に吹かれて、晴れる。
「チッ」

取り払われた暗闇の中には、最初からそこにいたかのように、使い魔の大群が林立していた。

嵐の中一帯を埋め尽くすほどの、大量の使い魔達。

遠距離攻撃の手段に乏しい杏子にとっては、数体の魔女が現れるよりも厳しい増員だろう。

「ザコに構ってる暇はないんだよ！」

トランプの兵隊。小さなぬいぐるみ。使い魔の濁流。

その中でも真っ先に、白馬の群れが杏子に押しかけた。

「くっそ……どけ！」

炎の龍が噴き上がり、杏子を囲む使い魔を焼き払う。ブンタツは縦横無尽に暴れ回り、一掻きするだけで数体の使い魔を切り裂いた。

その光景は、角砂糖に群がる大量のアリを思わせる。それでも杏子がやられる気配はなかった。

周りを使い魔が埋め尽くしても、危なげもなくそれらを断ち切って、杏子は濁流を進んでゆく。

陶器製の馬体のうちのひとつが、嵐の中を真っ直ぐに突き進み、杏子の腹を蹴ろうとしても、ブンタツは決して間合いに入れさせない。

背後から襲おうとするトランプ兵も、か細いレイピアごと炎の竜に飲み込まれて消滅する。

「どこだてめえら！　出てこい！　二体同時でかかってきやがれ！」

怒りも力も最高潮だ。髪留めの炎は消えることはなく猛り、ブンタツの切れ味は冴えたまま。

強化された肉体は少しの疲労も感じてはいない。今の杏子は、何者と対峙しても負ける要因はなかった。

『……』

だがそれは対峙した場合に限った話であり、見えない位置からの一方的な奇襲を受けてしまえば。

その結果はわからない。

杏子の勘は冴える。

彼女は計算高いタイプではなく、経験や直感を頼りに動く人間だ。

理由を上手く説明できない嫌な予感には特に敏感で、それを回避する術に長けている。

「！」

しかしいくら彼女でも、光の早さで迫るものが、いつどこから来るのかもわからなけ

れば、回避のしようはない。

「――」

使い魔の渦に向けて投げ放たれた光線の針が、杏子の頭部を消し飛ばす。

「――？」

光の針は使い魔の濁流ごと、杏子の頭部を一直線に貫いてしまった。

銀白の光線は杏子の首から上を綺麗にえぐり、消失させた。

さやかのバリアさえ貫通する攻撃だ。身体が強化されているとしても、磔刑の魔女の攻撃を打ち消すには到底至らない。

『目も、耳も、鼻も、口も……ああ、畜生、そうか、頭をやられたか』

首のない杏子の身体が力なく、宙から落ちてゆく。

胸元のソウルジェムは無事だった。が、自分の失われた頭部を修復できる魔法少女はいない。

体の支配はできず、ただ魂にのみ意識のある死体として、杏子の死は確定した。

『畜生……ふざけやがって……』

華奢な身体が嵐の中で、真っ逆さまに落ちてゆく。

奇跡的に光線の直撃を避けた、わずかに燃える髪留めと共に。

『絶対に諦めない……まだアタシは、こんなところで死ぬわけにはいかない。やつをぶっ潰すまでは、絶対に諦めない……絶対に……』

首のない杏子と髪留めが、大きな川へ静かに墜ちた。

山吹色の輝きが骨を固め、神経をつなぎ、筋肉を修復する。

魔力の消費はバカにならない。しかし、それでもやる価値のある治療だった。

「……治ったわ、なんとかなるはず」

「……」

ほむらは左手を握りしめる。確認は一度だけで十分だった。

さやかが死んだ。

暁美ほむらは、さやかが魔女の集中攻撃を受け、身を挺して巴マミを守り……死んだ。

彼女の壮絶な最後を、皆が見ていた。

（……この腕は、さやかの魂そのものよ）

更に強く、左手を握りしめる。

「いけるわ、ちゃんと動くみたい」
「なら、時間の停止を。佐倉さんがまだ戦っているわ。時を止めて、一度態勢を整えないと」
「ええ……、……え？」
「暁美さん？」
暁美ほむらは、地上から見る嵐の中から、小さな人影が降りてくるのを見た。
紅いスカートの裾をばたばたと風にはためかせながら、真っ逆さまに水面へと落ちてゆく影。
首のない杏子の姿を。
「……」
「……そんな」
つられて目線を送った巴マミも、それを見てしまった。
『キャハハハハ！　キャハハハハハハ！』
ワルプルギスの夜は、なおも楽しそうに笑っている。
「やれやれ。僕はおすすめしなかったはずなんだけどな」
「！」
呆然と立ち竦む二人の脇を、白猫が通る。

彼は無感情な赤い目で、水面へ落ち行く杏子を見送っていた。
「まどかなら、ワルプルギスの夜に勝てたかもしれないけどね」
杏子の身体が水面に叩きつけられ、小さな飛沫が上がった。
「……佐倉、さん、まで」
「杏子はずっと前から、この日のために力を蓄え、力も磨いてきた。それでもここが限界だったみたいだね」
「……」
「いいや、これは褒めているんだよ。まさか、剣の魔女たちを全て片付けてしまうなんてね。杏子とさやかのポテンシャルは本当に凄まじいよ」
「あなたは……あなたは、なぜ……」
盾の中からハンドガンを取り出し、インキュベーターの頭部に押し付ける。
銃口はガタガタと震えていた。
「なぜ……!?」
「ワルプルギスの夜が強力過ぎた。それが全てなんじゃないかな?」
「彼女たちは、私達は、全力でっ……!」
「全力を出したネズミなら、ライオンに勝てるとでも思っていたのかい?」
「……!」

事実しか言わないインキュベーターの言葉は、暁美ほむらの胸を強く締め付けた。
だが茫然自失とする最中でも、ワルプルギスの夜が率いる魔女や、使い魔達の行軍は止まらない。
次の標的は暁美ほむらと巴マミだ。
今もメリーゴーランドの白馬を先頭に、使い魔の群れが押し寄せている。
マミは深手を負い、ほむらも病み上がり。さやかと杏子はいない。
使い魔の群れに対しても対抗できるかどうかは怪しかった。
「……暁美さん、お願いがあるの」
「え……？」
「最後まで諦めない……今だってそうよ、私は諦めない。……勝つために、いつか全てを守るために……暁美さんにも、まだ戦いを諦めないでいてほしいの」
巴マミの手が、ほむらの左手を握った。それだけで、ほむらは彼女の意図を汲み取った。
「……また、やり直せというの」
「あなたの重荷になるとは、わかっているわ。これまで積み上げてきたものを、戦いの苦労も全て、ふりだしに戻ってしまうなんてね。……とても辛くて、大変なことだわ」
「……」

「それでもね。本当の白紙にだけは、するべきではないと思うんだ……」
本当の白紙。それはやり直しも何もない、完全な敗北。
「今まで編み出してきた戦術や、経験……魔女の情報……その全ては、きっと暁美さんの次に活かされるはず。無駄にはならないのよ」
「……」
さやか達との、訓練の日々が脳裏に浮かんでくる。
さやかが考えた空中の戦術、相談しながら割り当てた合理的なミサイルの位置、グリーフシードを使うタイミング。
全てが新たな息吹で、暁美ほむらにとっての希望の光だった。
作戦を練るごとに勝利への現実味は増し、ワルプルギスの夜を突破する実感を噛みしめることができた。
時間を巻き戻せば、あのさやかや、あの杏子とはもう逢えないかもしれない。
けど、あの日々さえもなかったことにしていいとは、決して思えない。
さやかや、杏子が残してくれたものを受け継ぐ。
それこそが、自分がこの時間でできる、唯一の反撃になるのではないか。
「……巴さん、ありがとう」
「うん」

暁美ほむらが、左腕の盾を掴む。袖の上に雫が落ちた。
「本当にありがとう、ござい……ました……」
「うん」
巴マミは、彼女の頭を撫でてやった。
ねぎらうような、慈しむような優しい手つきであった。

貴女の祈りとその背中に

暑い日差しに、目を開けた。

「……」

暑い。夏の日差しが、私とベンチに降り注いでいた。

見滝原の町並みの上には青。

更に上を仰ぎ見れば、高くに入道雲が昇っている。

懐かしい、あの日の景色だった。

「ほら、干からびちゃうわよ」

「……？」

隣から、ペットボトルを差し出される。

馴染み深い、よく冷えたスポーツドリンクだった。

「ありがとう、ございます」

「いいのよ」

キャップを捻り、口を付ける。

ごくり、ごくりと喉が鳴る。このまま息を止めて、最後の一滴まで飲み干せてしまいそう。

けど、一気に飲むのは良くないことだから、少しだけ。

後はまだ、残しておくことにした。

「……ふう」

涼やかだ。

「お疲れ様、さやか」

「……」

けれど、そこで伸びをしたくなるような、清々しい達成感は無い。

私は、ねぎらいの言葉をくれた彼女に、ついに顔を向けた。

そしてやはり、私は、納得するのだ。

「大変だったわね」

「……煤子さん」

ほむらと瓜二つの彼女の姿に、思わず瞳が潤んでしまう。

黒髪を高いところで縛っただけの、でも、やっぱり私の中では特別だった、彼女の姿に。

「煤子さん……私」

「うん」
「煤子さんが守りたかったもの、守れなかったよ」
「……」
ベンチの上から望める見滝原。
この景色も、あの日々のかげろうにすぎない。
私の本当の見滝原は今頃どうなっているのだろう。
杏子がうまくやっているだろうか。
ほむらが、マミさんがうまくやれているだろうか。
確証はない。そして、……自信もなかった。
ワルプルギスの夜が振りまく底なしの絶望を前にしては、多分……杏子にも、限界が来るだろう。
現状、ほむらが時間遡行してくれていることを祈るしかない。
「……はあ。力をつけて、臨んだつもりだったんだけどな」
「さやかはよく頑張ったわ」
「うん……自分で言っちゃお、頑張った」
「ええ、誇っていいわ。さやか」
「うん……うん……けどね……煤子さん」

ああ、だめだ。涙が止まらない。
「やっぱり悔しいよ」
「……」
「守りたかったよ」
「……」

金色の夕焼けが空を覆う。
伸びる影の中で、杏子は長い棒を振るっていた。
「せいっ」
教えてもらった動きとは、少しだけ違っている。
魔女との実戦の中で最適化され、自分なりに工夫し、改善された型だった。
「はあっ！」
「でも、その構えは少しオーバー気味じゃないかしら」
「……」
後ろから白い手が、棒を握る手を包み込んだ。
そのまま動きをガイドして、懐かしい型を再現してみせる。

「ほら、こう。基本は大事よ」
「……もう、今では私の方が上手いですよ」
「あら、そうかしら」
「……そうですよ、煤子さん」
煤子が背負った夕焼けは眩しすぎて、思わず涙が出てきてしまった。
「真面目にやってきたものね」
「……はい。自分で言えます……頑張って、きましたから……ずっと」
「……ええ」

かんかんと、二つの棒が乾いた音を打ち鳴らす。
軽めの練習。長棒同士の懐かしい打ち合い稽古だった。
からん。
しかし何度やっても、すぐに杏子の棒が先にはたき落とされてしまう。
何度も拾って、何度も握り直しても、二、三回ほど打ち合うだけでまたすぐに落とされる。
「うっ……ぇう……」
「ほら、そんな顔じゃ当たらないわよ」

杏子は乱雑に棒を振り回すだけだった。
涙と乱反射する夕陽で何も見えないだけではない。型も何もない振り回すだけの棒術で、力なく暴れているだけなのだ。
「もっと強くならなきゃいけなかったのに……」
「……」
「強くなって、どんな悪い奴にも立ち向かえるように……なりたかったのに……」
杏子の棒の側面が叩かれ、得物が地面に転がってゆく。
「悪い奴が最強だ、なんて、そんな話……あっていいわけないだろ……」
「……」
階段の上に積んだ水滸伝のページが、生ぬるい風に吹かれてぱたぱたと捲れていった。

「身を粉にしても、骨を砕いてみせても、報われないなんてね」
手の中のスチール缶が〝ぺこん〟と軽く潰される。
さやかの手にあるペットボトルも、小さな音を立てた。
「ひどい話もあったものよね。……本当、ひどい話。本にもできないくらいひどい話よ、

こんなのはね」

　積み重なった水滸伝を拾い上げ、優しくページを捲る。

「愛と希望のヒーローが、結局は何もできずに息絶えるなんて、そんなのあんまりよね」

　杏子はアスファルトに落ちる涙を止めること無く、頷いた。

「精魂尽き果て、全て燃やしきってしまっても、それでも何も守れないだなんて」

　本を閉じる。

「ひどい話」

　缶をベンチに置く。

「本当にひどい話」

　夕陽を背に、輪郭のぼけた黒い煤子が杏子の手を取る。

「ねえ、こんなの望んだ結末じゃないわよね？」

「……当然……です！」

　杏子は涙を拭って力強く答えた。

「最後には、愛と勇気が勝つストーリーじゃないといけないわよね？」

　麦わら帽子を取り、ベンチから立ち上がった煤子が、さやかの手を取る。

「ねえ、さやか。このままでいいの？」

「……このまま、どうすることもできないよ、今の私にはもう私にはどうしようもないから……うん……わかってる。でも」

夏の日差しに汗ばんだ手が、煤子の手を強く握った。

「論理的でも現実的でもないし、叫んだって虚しいだけ……けどやっぱり、絶対に、こんなの納得出来ない……！」

「うん」

煤子は二人に優しく笑いかけた。

暑い夏の陽の下で。

眩しい斜陽の中で。

「正義は必ず、最後には勝たなきゃいけないわ。……必ず。絶対に、どんな強い相手だとしても、必ず」

空き缶をベンチの上に置き、斜陽を見据える。

「巻き戻しても、祈っても手に入れることのできない、正真正銘本当に、一度きりの奇跡を使ってでも」

陽に灼けそうな水滸伝の表紙に麦わら帽子を被せ、振り返る。
「さやか、杏子」
さやかと杏子は、あの日の煤子と向き合っていた。
ずっとずっと年上のようでいて、近い存在だった彼女に。
「あと一歩が届かないのなら、その奇跡をあなた達に託す。背中を押してあげる」

Ｈｏｍｕｌｉｌｌｙ
此岸の魔女ホムリリィ

『この世界の因果と私の因果とは、決して相容れない』
『これは私ではできないこと。だから、あなた達に受け取ってほしい。受け取って、使ってほしい』
『……それがきっと、……道を踏み外してしまった私に残された、最後の使命』

白馬の軍勢……

ゆっくりと目を開ける。
目覚めは日曜の朝のように緩やかだった。
『……』
私は、自分がベンチに腰を降ろしていることを自覚できた。
自分には下半身しかなく、それ以外の部位は青い炎のようなもので構成されているということも。
『……』
揺らめく顔を、ベンチの隣に向ける。
隣の席には、潰れていないスチールのコーヒー缶が置かれていた。
『……』
夢の中で……いや。
魔女の結界の中で、煤子さんと話していた。
煤子さんは私の励まし、力をくれた。

……いや、それは正確じゃないか。
昔にくれた力を、今日ここで目覚めさせてくれたのだ。
『ありがとう、煤子さん。これで……』
炎の身体が、急速に元の姿を取り戻してゆく。
背骨を、肋骨を、内臓を、神経を、筋肉を、脂肪を、皮膚を、体毛を。
それは魔法少女が持つ治癒魔法とは比べ物にならないほどの力。
半分以上消し飛んだ身体を再構築する奇跡。
「これで戦える」
胴体、腕、頭、全てが復活し、魔法少女の衣装を纏う。
「……正義は、必ず勝つ！」
そして左腕の篭手でしかなかったセルバンテスが、全身を包み込む。
銀の装甲は左腕だけに留まらず、腕から胸へ、胸から身体へと延長し、一式の鎧となって全身を覆い尽くした。
「いくぞ！」
最後に顔を隠すフルフェイスのヘルムを装着すると、私は坂から飛び立った。
あの暗雲に蔓延る魔女たちを、一刀両断するために。

川の端で、水面から死体が立ち上がった。

『……』

首のない杏子が立ち上がり、濡れる身体が滝のような雫を落とす。

『ワルプルギスの夜は随分、街の方へ侵攻しちまったらしいな』

首からロウソクのように灯った赤い炎は、離れた場所に浮かぶワルプルギスの夜を見据える。

ワルプルギスの夜が通り過ぎた後でも、まだ川岸には強風が吹き荒れていた。

杏子の赤い裾はバタバタと風に吹かれ、濡れた生地は既に乾きつつあるが、首から灯った炎が風に巻かれて消える気配はない。

『……アタシはまだ負けちゃいねーぞ、オイ』

首なしの杏子が水面を歩く。

怒りを込めた強い足取りで、一歩、一歩と、ワルプルギスの背を追う。

『アタシは……ここだっつってんだろーがッ！　このクソ野郎！』

『キャハ……』

ワルプルギスの夜が侵攻をやめ、笑いが止まった。

背中にただならぬ悪寒を感じ取ったのだ。
すぐ目の前にいる二人の魔法少女よりも遥かに危険な、その魔法少女の燃える闘志を。
『もういっぺん殺してみやがれ！　ワルプルギスッ！』
『――キャハ』
ワルプルギスの夜が進路を逆転させた。

『アハ、アハハハアハハハハ！』
嵐の中に使い魔が充填される。
ワルプルギスの夜の中にはまだまだ、多くのエネルギーが貯蔵されていた。
使い魔を呼び出すだけならば、その余力は無限であると言ってもいい。
『ヒヒィイイィッ』
『アォォオオォォッ』
白馬や狼が、空から川へと押し寄せる。
数多の動物たちによる行軍は、もう一つの川が空から流れ落ちてくるような壮大さで、たったひとりの杏子の元へ向かっている。
『……今のアタシには、全部見える。あんたらの、ちっぽけすぎる灯火がな』

槍の合成を介さずに、杏子の左手にブンタツが握られた。
赤黒い双頭の槍。あらゆるものを断ち切る、彼女の決戦重装だ。
だが今は、それとはまた別の武器がある。
『クソ野郎にひれ伏したクソッタレ野郎共……意志も心もない、強い奴にへこへこする金魚の糞なら――もっと強い奴（アタシ）の配下に寝返りやがれ！』
杏子が灯す炎の中から、怪しげな紅が輝いた。
『〝ロッソ・ファンタズマ〟！』
炎の揺らめきが不協和音となって鳴り響く。
『……！』
その瞬間、使い魔の群れの白馬たちは動きを止め、痙攣し、そしてすぐに目を赤く光らせた。
『ウルルルゥ……ウルルルアアッ！』
白馬の群れが暴れだし、他の周りの使い魔を狂ったように蹴り潰し始める。
ゾウも小人も関係ない。白馬以外の全ての使い魔を敵として見定め、駆け回る。
杏子の炎に心を奪われ、意のままに操られてしまったかのように。
『……やれやれ、陰気な能力だな、こいつは』
空から一頭の白馬が降りてきた。

それは長年の飼育されてきた愛馬のように洗練された動きで、杏子の傍らで立ち止まる。

杏子も迷わず、その白馬の使い魔の背に跨った。

『やっぱアタシは、こいつでガンガンいくのが良い』

頭の上でブンタツを三度回し、杏子を乗せた白馬は空へと駆け出した。

全身を銀の鎧に包んだ騎士は大剣を片手に、マントをひらめかせながら空を飛ぶ。

白馬に跨る聖女は両剣を片手に、白馬に跨りながら空を翔ける。

数多の可能性と因果を束ねたその欠片が、今この時、彼女たちを軸に収束した。

あったかもしれない未来の力と、誰かが背負うはずだった法外な力の一端。

それら全てを吸収し、二人はより強い存在へと変身したのだ。

ありえない力。ありえるはずもない力。

けどそれこそ、今二人にとって、何に代えても必要なものだった。

暁美ほむらは、盾に手をかけたまま動きを止めた。
過去に戻ることを躊躇したわけではない。巴マミにもそれはわかる。
先ほどまでこちらへ侵攻してきたワルプルギスの夜が、急に停止したかと思いきや、その進路を逆転。
もと来た方向へと戻ってゆくのだ。
「……？　なに、これ」
「使い魔もこっちへ来ない……いえ、むしろ使い魔達は、こっちとは逆の方へ向かってる……？」
何かがおかしい。何かが起きている。
見滝原から、標的を過疎地へと変えたわけでもあるまい。
「……あの使い魔達は、どこへ目指しているというの？」
「一斉に、ひとつの方向に向かってるわね……ワルプルギスの夜を基点に、どこかへ攻め込んでいるみたいだけど」
暴風域は川の水も巻き上げて、薄い霧を発生させているためか、視界は遠方まではっきりしない。
その向こうに何があるのか、視認することは叶わなかった。
しかし、声は聞こえた。

『討ち取ったりッ！』
「!?」
「この声は」
「そんなはずは……確かにあの時、杏子が死んだのを……!?」
何が起こっているのかは定かで無い。見知らぬ危険があるのかもしれない。
それでも、この時間を諦めていた二人は、真相を確かめることに躊躇はなかった。
「いきましょう、暁美さん」
「ええ」
二人はまもなく、圧倒的な光景を目にすることとなる。
「!?」
「避けて！」
少し走る間に、霧の中から巨大な物体が飛来した。
視界の悪い中である。正面からでなければ、二人共咄嗟に避けられなかったかもしれない。
軽自動車ほどの大きさの物体は、緩い放物線を描いて地面を抉り、やがて止まった。
「……何かしら。街にある物にしては、綺麗すぎるわね」
「わからない、向こうから飛んできたということは……魔女の一部？　でもこれ、どこか

で……」

それは四角い、大きな金色の金属だった。

真鍮のようでもあるし、黄金のようでもある。表面の滑らかな金属塊だ。

「あ、歯車!?　その破片だわ!?」

「！」

二人が霧の先を見る。

先程から向こう側が、妙に騒がしいことを思い出した。

あの先には……。

白んだ景色を見つめていると、今度は霧が大きく歪んだ。

霧が大きく膨らみ、穴が空き、突風が押し寄せる。

『アハハハハハ！』

「――」

一瞬だけ降りかかり、過ぎ去っていった巨大な影。

ほむらの真上を、半壊したワルプルギスの夜が暴風と共に通過していった。

『ちっ、タイミングが合わねえか』

霧の中から馬蹄音が近づいてくる。その高い影も見えた。

巴マミはグレーのシルエットにマスケット銃を構え、暁美ほむらは盾を掴んだ。
『結界に突っ込んでやろうかと思ったが、復活が早いな。本体を蹴り飛ばしちまった』
霧を割って現れたのは、白馬に乗った――断たれた首の上に炎を灯した、杏子だった。
当然、二人は驚きのあまりに絶句する。
一番に口を開いたのは、すぐそこに現れていたインキュベーターである。
「君は……君が内包しているその魔力は、一体何なんだい、杏子」
『……』
インキュベーターは柄にもなく動揺しているらしかった。
それもそうだろう。通常ではありえないことが起こっているのだ。
いつかの、どこかの世界での果てしない未来からめぐりめぐった奇跡の欠片であるなど、彼が推測として立てられるはずもない。
インキュベーターがいかに高度な知能を持っていたとしても、彼女からあふれる力の説明はできない。
ただただ、白馬の上の杏子に向かって、疑問を投げかけるのみ。
「その魔力量は尋常じゃない……君の願いでは、瞬間的なものだとしても、そこまでにはならないはず――」
続きの言葉はブンタツの切っ先によって遮られた。

その狭間にあったインキュベーターの頭が、綺麗に吹き飛び、アルファルトを転がってゆく。

『よくアタシの前にノコノコと姿を現せたな。ちったぁ反省しやがれ』

「……佐倉さん、その姿は、一体……？」

『ああ、これかい？』

「その使い魔に乗って……それに、首が」

『首なんざ無くても平気なくらい、強くなっちまったってことかね』

杏子は自分の首の断面から何かを取り出し、掴んで二人に見せた。

二人は一瞬だけ後ろに引いてしまったが、それを見て頭に疑問符を浮かべる。

杏子の手に握られていたのは、赤錆びた金属で作られたアンク。

それが一体何を示すのかは、この場にいる誰にもわからないだろう。

『まあ……信じる心に、限界なんか有り得ないってことだ』

杏子はそう言うと、再び静かに白馬の歩を進めた。

「杏子……！」

ほむらは背を向ける彼女に声をかけようとして、後ろからの音に気づく。

ダカ、ダカ、ダカ。硬い足音が、無数に聞こえてくる。

街に似つかわしくない馬蹄音だ。

それらは霧の向こうから続々と増えてくる。
陶器製の白馬の大群。
使い魔の群れはゆっくりと行軍し、暁美ほむらと巴マミの脇を抜けてゆく。
静かに。だが、しっかりと意思のある足取りで、先頭の杏子を追うように続いてゆく。
その数は濃霧のせいもあり、とても数え切れそうにない。
二人は目を赤く輝かせた使い魔たちが恐ろしかったのだろう。
その場で身動きを取ることも、物音を立てることもできなかった。
『さて』
杏子が馬の足を止めると、使い魔達も停止した。
『じゃあもう一丁ワルプルギスをぶっ殺して、結界に突入してみるか！』
ブンタツを掲げ、杏子が叫ぶ。
『いくぞお前ら！死ぬまで戦え！　〝ロッソ・ファンタズマ〟！』
『『オォオオォオオオ!!』』
白馬の群れの背が燃え上がり、首のない杏子達が上に現れた。
全ての馬が杏子を乗せ、全ての杏子はブンタツを握り、それを高く掲げ雄叫びをあげている。
辺りを埋め尽くす魔法少女の大隊。

希望に溢れるというよりは、それが味方であったとしても恐怖を覚えるほどの壮観だ。

『突撃！』

『『オオォオオオォッ!!』』

合図とともに、白馬の大隊が動き出す。

自分たちの脇を騎馬が疾走してゆくのを見送って、そこで初めて二人は気付く。

〝ここからの戦いは、彼女だけのものなのだ〟、と。

それでいいのよ、二人とも

『アハハハハハ！』

ワルプルギスの夜は元の姿勢を取り戻し、再び空へ浮上した。

様々な力を扱える魔法少女とはいえ、空中に留まっての戦闘となると、体の自由は多くない。

だが杏子には関係のないことだ。彼女はただ、まっすぐ空を駆け上るのだから。

『あれだけズタズタになったってのに、もう完治か』

『アハハハハハ！　アハハハハハハハ！』

ワルプルギスの夜は既に無傷の状態にまで戻っている。

結界内のエネルギーが補填されたのだろう。

この魔女を倒したければ、完璧なまでの無力化を行わなくてはならない。

『いいぜ……もう一度バラして、今度こそ結界とやらに突っ込んでやる』

『アハハハハハッ！』

ワルプルギスの前に複数の魔女が立ちはだかった。

数は見るに数十。それらの強弱はともかく、どれも正真正銘、立派な魔女だった。

使い魔では幻惑魔法によって利用されてしまう事に気付いたワルプルギスの対抗策なのだろう。

『……』

杏子の炎が艶めかしく光るが、効果はない。

『フン、やっぱり魔女までは操れねぇか……なら、アタシが直々に全てぶっ潰す』

魔女の大群に、杏子が単騎、突入した。

白馬が跳ね、杏子は一体の魔女の上を取る。

馬の速さは使い魔の時の比ではない。杏子に支配された白馬の使い魔は、既に別の存在へと変質しているのだ。

『なんだぁ？　大将を守ってるにしちゃあ、随分と手薄じゃんかよ』

バトンを扱うかのように滑らかな動きで、ブンタツを片手で取り回す。

回して振り払う。身体に力を込めない腕だけの動作だったが、ブンタツの刃が届く圏内にいた二体の魔女は、その間に切り崩された。

馬は、魔女の合間を跳ねて翔ける。

敵将に狙いを定めた立ち回りだが、それまでにいる魔女たちは皆、容易く斬られ堕ちていった。

杏子はワルプルギスに向かってほぼまっすぐに移動していたが、小物の魔女を無視してはいない。
彼女が通るだけで、魔女が消滅していってしまうだけで。
『ほら追いついたぞ、どうすんだ』
『！』
気がつけば、既にワルプルギスの懐の中。
振り返らぬ道中には屍の山。
魔女の残党には、白い騎馬隊が立ち向かっている。隔てるものも、身を守る物も、何もない。
『とりあえず落ちてみるか!?』
ブンタツの片刃がワルプルギスの腹に突き刺さる。
同時に強い魔力の波長が傷口へと注ぎ込まれた。ワルプルギスの夜の中に、杏子の魔力が浸透してゆく。その感覚には彼女も気づいていた。しかし、ワルプルギスの身体に変調はない。
毒の類でも爆発物の類でもない。弱化させる効果を帯びた魔力でもなかった。
どちらかといえば注ぎ込まれたそれは、硬く強くする〝強化〟の魔力であり――。
『らぁッ！』

突き刺したブンタツを、杏子は真下に振り切った。
『アハ――ッ　ッ!?』
刃はワルプルギスの夜を切り裂くことも、引きちぎることもなかった。
ワルプルギスの夜は傷口を中心に強制的に身体を〝強化〟させられた。
刃は魔女自体に大きなダメージを与えることなく、かわりに杏子の桁外れの力でもって、大地へと巨体を放り投げたのである。
硬いコンクリートの大地がワルプルギスの夜の巨体を押し潰す。
それはブンタツで何度か斬られるよりも大きなダメージだった。
『さあ……這いつくばったんじゃあ、存分な力は出せねーよなぁ!』
そして、逃げ場のない追撃が襲ってくる。
『アハ……アハハハハッ!　アハハハハハ!』
ワルプルギスを中心に、一般家屋ならば吹き飛ばし破壊してしまうほどの風が放出された。
風は杏子の真下から襲いかかる。まともに受ければ、風圧のみで骨折することすらあり得る。が。
『それが最後の足掻きか!』
今の杏子のブンタツは風さえも断ち斬る。

刃先は風圧の壁を鋭く割って、杏子をほぼそのままの速度でワルプルギスへと落下させてゆく。

『ヤアッ』

『！』

あと少しで刃を押し付けようというその時、気配を悟った杏子はブンタツを翻し、風に任せて空へと舞い上がった。

杏子がいた場所には、銀色のレーザーが虚しく過ぎ去ってゆく。

『……』

磔刑の魔女。

『ああ、そういや居たな、お前』

空高くで、杏子は敵の姿を確認した。二本の針を両手に握る、細長い黒服の魔女だ。

『お前がアタシの首を、ふっ飛ばしたんだっけな』

その姿を認めるや、杏子が跨る馬は進路を変更。難き磔の魔女へと転身、ワルプルギスへ迫る時以上の速度で駆け出した。

杏子の首から滾る炎は、怒りに強く燃えている。

白馬は磔刑の魔女に迫る。

相手の魔女は、動きが早い魔女ではない。迫り来る騎馬から逃げることも、そこから

繰り出される攻撃を避けることもできないだろう。

『……ハッ』

だから迎撃するしかない。機動力のない磔刑の魔女には、もとよりそれ以外の行動は選択肢に存在しない。

しかしそれ故の自信もある。

握っていたもう一本の針を、杏子へとまっすぐ放り投げた。

『――』

馬の上の杏子はそれを避けるかと思われた。避けたところで、一撃を加えてくるだろうと。

しかし杏子は容易く、光の槍に胸を貫かれてしまった。

『――カ、ハッ』

胸は大きく抉れ、腕も首も、身体と別れてしまう。

針が通過した肉体の断面には、焼け焦げ、赤く燃える跡だけが残っていた。

燃える傷口が、その炎が一際大きく、杏子を包んで燃え上がる。

『!?』

『ハハハハハッ！　どこ狙ってるのさ、眩暈か?』

燃えて消えゆく杏子の真上から、もう一人の杏子が飛びかかる。

磔刑の魔女には何が起こったのか理解できなかったようだが、第三者の視点から観戦していたマミとほむらにはよく見えていた。
「あれは……！　佐倉さんが、レーザーにやられたように見えたけど」
「……杏子が作った幻？　何故……いえ、けど間違いなく魔女を騙した。なら本体は……」
杏子が磔刑の魔女の真上から、ブンタツを振り上げて襲いかかる。
『……！』
『エイッ……』
しかし磔刑の魔女の真後ろには、杖を抱くもう一体の魔女が隠れていた。
この時を狙っていたかのように静かに顔を見せたその伏兵は、磔刑の魔女の後方より、紫水晶があしらわれた杖を杏子に向けている。
『おっと……』
この時、杏子は敵の狙いに気づいた。杖から放たれる禍々しい気配が、空中に存在感を増してゆく。
このための準備は既に整っていたのか、杖を向けたほぼ一瞬で、磔刑の魔女の正面に巨大な黒い魔法陣が描かれる。
『そうか、てめぇも……』

ゆっくりと回る魔法陣の壁を前に、杏子の白馬は勢いを止められなかった。
白馬は緊急回避しようと側面を向ける体勢で、杏子と一緒に魔法陣へと突っ込んでしまう。
『――』
宙に魔法陣の文字や線が、触れる杏子や馬の身体に鋭く食い込み、突き刺さる。魔法陣を構成する全てのラインは、鋼のワイヤー以上の鋭さと切れ味を持っている。
投げ出された勢いそのままに、杏子は魔法陣によってバラバラに引き裂かれてしまった。
『……？』
細かな肉片が、赤い炎に包まれ、燃え尽きる。
杏子としての実体は、もはやそこには存在しない。
『ハハッ、てめぇも眩暈なわけだ！』
そのような攻防を交わす間に、騎馬の大群はワルプルギスの夜へと突撃をかけていた。
二体の魔女は騙されていたのだ。二人の杏子の幻に。
『雑兵如きに構ってられるかよ！』
杏子は最初から真っ直ぐワルプルギスの夜だけを狙っていた。

一度自分を殺めた魔女に仕返しを、などとは微塵も考えていない。
彼女の目的は、どうあってもただひとつ。最も強い相手との戦いなのだから。
『おらぁあぁあッ！』
再び大地に叩き落とされたワルプルギスに、杏子と、杏子の分身の大群が畳み掛ける。
『アハ……!?』
『おらぁっ！』
『どうした！　立ってみやがれ！』
『せいやぁッ！』
ワルプルギスの夜を囲むように円を描いて走り、騎馬に乗った杏子達がブンタツで切り刻んでゆく。
外側から削られてゆくワルプルギスの夜は、同時に地面へ押し付けられるように斬られていた。
力がブーストされた杏子の大群、そのひとつひとつに質量があるのか、攻撃力があるのかは定かではない。
しかし事実として、ワルプルギスの夜はその場で動くことができなかった。
『……！』
偽物に踊らされた磔刑の魔女は、すぐさま針を杏子へと向け直す。

が、肩の上にそれを掲げて迷う。
どれが本物の杏子か、全く分からないのだ。
『……ヤル』
杖を持つ魔女が前に出る。魔法らしい攻撃方法を持つ、魔女の中でもかなり特異な個体だ。
『……ハァア……』
一点集中の槍が通じない数の相手であれば、それら全てに襲いかかる攻撃でかかるしかない。
殉葬の魔女は再び、巨大な魔法陣の生成を開始した。
「あの魔女、佐倉さんを攻撃しようとしてる！」
「何が起こっているのか……けど、考えても仕方ない。今は杏子を守らなきゃ」
巴マミや暁美ほむらも黙ってはいない。マミはマスケット銃を生成し、ほむらは盾を掴む。
銃口は魔法陣へ向けられ、また巴マミの空いた方の手は、暁美ほむらの頭へ優しく置かれた。
「変な触り方でごめんなさいね」
「いいえ、触れ合っていれば停止は有効……確実な手段よ、見た目なんて気にしない。

……あいつに勝つためならね」

盾を回す。時間停止の発動だ。

「……」

「……」

しかし、流れる風景が変わった様子はない。

「あっ」

「え？」

「……砂が、落ちきった」

時は止まらなかった。

それは暁美ほむら最大の弱点。

〝鹿目まどかとの出会いをやり直す〟という帰還内でしか砂時計の砂をせき止めることのできない彼女は、ワルプルギスの夜との超長期戦中において、能力を失ってしまうのだった。

そして大きな魔法陣は、邪魔者の介入無しにその攻撃魔法を完成させる。

「いけないっ！　佐倉さんが！」

「ごめんなさい！　なんとか今の状態から、あの魔女を倒して……！」

「ええ、けど大人しく当たってくれるかしら……！」

マスケットの単発射撃は攻撃力が低い。
決定力に欠ける方法は諦め、リボンを増やし巨大な大砲を生成する。
それでも、あの魔女の攻撃を止められるかは疑問だった。
「だめ、間に合わない……！」
黒い魔法陣が攻撃を完成させた。
破壊の弓矢による精密な掃討攻撃。範囲は広大、ワルプルギスを囲む杏子の位置全てと、その周辺数十メートル。
『……エイッ』
弓矢の大群は魔法陣から現れ、空へ飛翔し、ゆっくりと弧を描いて降り始める。
狙いは正確だ。撃ち漏らしはないだろう。
『……』
ワルプルギスの夜に攻撃を続ける杏子達の中の一人が、矢の群れを見上げている。ふと、杏子は心の内だけで微笑んだ。
「ごめん、ちょっと遅れちゃったね」
『まったくだ』
飛来する矢に対抗したのは、杏子でも、巴マミの主砲でもない。
音の壁を破るギリギリの速度でまっすぐやってきた、銀色の騎士である。

「でも大丈夫」
　騎士は矢の寸前でピタリと急停止し、左手に握った大剣を矢へ向けて掲げた。
「今度はちゃんと、全部守るから」
　矢の群れが障壁に阻まれ、当たったそばから砕けて散る。
　障壁は、澄んだ海のように薄い水色。暗い暗雲に包まれた見滝原の中で、見えないその壁は青空のようにも見えた。
　矢が何発当たっても、いつまで当たっても、巨大なスクリーンが破れることはない。
　銀の鎧の騎士が、大きな剣を掲げている限りには。
「あれは……！　あのバリアは！」
『や。ほむら、マミさん』
　フルフェイスの騎士から響くのは待ち望んでいたもの。
　さやかの声だ。
『私に任せて』
「……!?」
　矢の猛攻は打ち止めとなり、宙に描かれた魔法陣は消滅した。
　しかし魔女としても、ここで黙り続けているわけにはいかない。目の前に出現した謎の敵を排するべく、より効果的な攻撃へと切り替えつつある。

「さあ、次は何する気？　迎撃か、防御か……でも、どっちも無理だよ。今の私はさっきより……もっと強いんだ」

銀の兜に顔を覆ったさやかの表情は、誰にも見えない。

けど彼女は微笑んでいる。

好戦的に？　それは少し違う。もっと、心底楽しそうに。

あの時初めて、枝を自在に振るえるようになった時のような。子供のような笑みだった。

「……〝フェル・マータ〟！」

振り下ろした大剣が白銀の極光を放ち、目の前のバリアを打ち破る。

『ヤダ……』

銀の奔流は速やかに魔女を飲み込み、すぐに途絶えて消えた。

杖を抱いた魔女の姿はもう、跡形も残っていない。

無駄にならなくて本当に良かった

「……よし」

身体は絶好調。鎧も服みたく軽い。剣は自分の腕のようだ。

こんなに強いフェルマータを撃ったのに、疲労感が全くない。

大技を撃っても疲れないということは、ほとんど魔力を消耗していないということ。

その魔力はどこから来ているのか……それはきっと、いや、間違いなく煤子さんに由来するものなのだろう。

「……」

下では杏子達が白馬に乗ってワルプルギスの夜をリンチしている。事情を知らなければひどい光景だ。

マミさんとほむらは無事……だけど戦闘に参加できる余裕があるかといえば、どうだろうか。二人共重症を負って満身創痍って感じだ。

ほむらは以前、今日の時間経過によって自分の魔法が使えなくなることを打ち明けていた。

ほむらの魔法の使用期限は多分既に切れている。これ以降は時間停止は使えないだろう。

ワルプルギスの夜を速やかに問題なく倒すためには、結界の中に入る必要がある。けど結界に突入するためには、結界が露出しているわずかなタイミングで時間停止を用いるのがベストだ。

ワルプルギスの夜を一度消滅させ、その隙に結界へ……は、停止無しだとかなり難しい。

……というより、今となってはワルプルギスの夜を倒すのに、もう本体を消耗させたほうが早いかもしれないな。

街を舞台に暴れることになる。そこが難しいところだけど、今の私と……杏子なら、被害を最小限に抑えることも不可能じゃない。

『ヤアッ』

「！」

ふと目を離していると、銀の針がこちらへ放たれていた。

「ああ」

私は迫る鋭い閃光を、右手で弾いてかき消す。

それはセルバンテスと同質の力。圧倒的な絶対防御。

「ごめんね、あんたらを計算に入れてなかったよ」
『……』
両手にエネルギーが凝縮された針を持ち、それらを投擲することで強いレーザーを放つ魔女。
私はこの魔女によって致命傷……というか死傷を負った。ある意味仇敵だ。
けど今は、かなりどうでもいい。
何故かって、今私の中で噴き上がっている力の源には際限がなくて、その余った飛沫でさえ、あの魔女の攻撃を防いでしまうには十分すぎるのだと、理解できているからだ。
『セイッ』
懲りずに二投目が来る。まっすぐ私の中心を狙って。
「くどいよ」
針の銀色のエネルギーは私の寸前で不可視の障壁に阻まれ、広がり潰れて千切れ消え去ってゆく。
もうあの魔女の攻撃では、私の生み出すバリアは破れない。
……いや、多分、誰も破れないんだと思う。
〝全てを守れるほど強くなりたい。〟

……言葉にできるほど具体的な何かを経たわけじゃないけど、今はその願いが、そのまま叶ってしまっている気がするんだ。

私に守れないものはない。

誰が傷つくこともない。

今の私にはそれが可能なのだと、本能的にわかっている。

「シッ」

フェルマータの下位の下位。大剣に魔力を乗せて、横振りで払うだけの名もない技。

『ビ、ギィ……』

見えざる魔力の衝撃波が魔女の頭部を鈍く打ち砕き、残された本体も首の後を追うようにして崩れて消え去った。

……強敵のはずだったのに、あっけない最期だ。

もちろん数分前の自分には扱いようのない技だとはわかっているけど、こう日常の動作のように簡単に出来てしまうと、少し切ない。

「……すごい力」

だけど強大な力はまだまだ溢れてくる。次から次へと間欠泉のように、際限なく。

この世界に存在させておくには、発散させておかなければ危険な事が起こりそうです

らある。そう錯覚するほどに大きな力だ。
　ワルプルギスの夜を地面にはりつけて嬲っている杏子を見るに、彼女も力を持て余しているのだろう。
　今までは魔力を温存する戦い方に苦心していたのに、なんてことだろうね。
「……ま、こういうのも悪くはないけど」
　大剣を空へ振る。剣から迸った青い輝きは宙に散らばり、空気中へと溶けこんでゆく。
「圧倒的な力を持った正義のヒーローだって、嫌いじゃないよ」
「……！」
　地上のマミさんは真っ先に異変に気付いたようだ。
　巻いたリボンを取り払い、完治した自分の脚を確認している。
「おお」
　次は杏子。彼女も気づきやすい方だろう。
　無くなった頭部が再生成され、無意識に魂で見ていた景色がより鮮明に、元通り鮮やかになるのだから。
「ちょっと巴さ……あれ、これって……」

そしてしばらくして、ほむらも体の変化に気づいたらしい。
ちょっとした擦り傷も、切断された脚も、消えてなくなった首でさえも。
今この時、私の力が及ぶ範囲にいる人の全ての傷は消え去った。
「へっ、生き返った気分だ」
頭部が蘇った杏子は長い髪を束ね直し、固く固く結んだ。
『やっちゃえ、杏子』
『おう』
一騎が宙に飛び上がり、ワルプルギスの歯車に着地した。
歯先の上でブンタツを翻し、華麗に構える。あの一騎が、彼女こそが本物の杏子なのだろう。
「お前は人を殺し過ぎた」
『……アハハハ！　アハハハハハ！』
無重力、高重力、乱気流。あらゆる空間効果を発動させ、自分の周囲を振り回している。
力場に巻き込まれた建造物を基礎ごと砕いて、壁を割り、破片を操り敵へと投げる。
恐ろしい攻撃だ。
普通の魔法少女なら空へ放り出され、無数の瓦礫に巻き込まれてすぐさま絶命する過

酷な空間だろう。
「そうやって何人も殺してきたんだな」
けど、杏子は微動だにしない。真の強さを手に入れた彼女には、どんな力場にも屈することはない。
時折鋭利な破片によってわずかに傷ついたとしても、傷は私の力によって瞬時に塞がってしまう。
「……」
そして空を舞う瓦礫達は、見えざる壁に阻まれる。
広域に展開されたバリアによって、どこへ飛散することも、こちらへ襲いかかることもできずに微塵になってゆく。
これぞ完封。ただの勝ちではない、後々のことまで考えた最善の勝利。
「さあ、時間だ」
杏子が両手でブンタツを掲げる。
こうなってしまっては、ワルプルギスも無力なものだ。
最強の魔女の伝説はここで終わる。
「神に祈れ」
『……！』

「アタシは赦してやらねーけどなァ！」

ブンタツが爆ぜるように燃え上がり、高層ビルほどの高さまで火柱が上がった。

炎の塊は下から暗雲を照らし、どす黒い赤の雲は、地獄の光景を見ているかのような禍々しさだった。

……地獄。そんなものがあるとしたら多分、そこがワルプルギスの行く末なのだろう。

煉獄。消えない炎がワルプルギスを焼く。

破壊と再生を急速に繰り返し続け、ワルプルギスの夜はそのエネルギーを使い果たしてしまった。

『アハハ……ハ……』

炎に焼かれ朽ち果てる。最悪の魔女には、なんともお似合いな結末だ。

「……倒した？」

「……」

紅い炎はそこにあるものを焼き尽くしてしまうと、役目を終えたことを理解したようにすぐに消え去った。

そこには何も残っていない。時間が停止していないにも関わらず、ワルプルギスの夜

が復活する兆しもない。
「……終わった」
コンクリートの地面が赤く爛れ、中心部には杏子だけが立っていた。
ワルプルギスの夜を失ったためか、操っていた白馬の使い魔も消え去っている。
「終わりました、煤子さん」
杏子は真っ赤に熔けた地面を眺めていた。そこには何の原型も残っていない。
魔法少女たちが数百年に渡って繰り広げてきた死闘は、ようやく終わったのだ。
「……ありがとうございます」
空に残った旋風が解け、暗雲が晴れてゆく。
魔法少女達の夜は、明けた。
「……雨？　かしら」
晴れた空から、暗い雨粒がやってくるのが見えた。
また魔女の攻撃でも来るのかと、みんなは身構えている。
「いえ……」
けどそれは、警戒など無用なものだった。むしろ逆で、私達への癒やしと言ってもいい。
落ちてきたのは、雨のように降ってくる大量のグリーフシードだ。

「……ジャックポットってやつかね」

今まで倒してきた分の魔女が一気にグリーフシードへ還元され、地上へ落ちてきたのだ。

さながら、ワルプルギスの夜を撃破した報酬、ってところだろう。

「あはは。これを使い切るのはいつになるやら……」

落ちてくるシードのうちの一つをキャッチして、掌の上でまじまじと見つめる。

負の力が完全に浄化されたグリーフシードには濁りひとつない。

「……」

魔法少女にとっては魔力を回復してくれる、命をかけてでも手に入れたい必須のアイテムだ。

けどそれと同時に、この石ころは私達の行く末でもある。

嵐の中に閉じ込められた魔女達の哀れな末路。

絶望を振りまくだけ振りまいて、最後には魔法少女の食事扱い。救われないもんだ。

グリーフシードを握りしめる。

私はこの石の中に彼女らの思念が籠っていないことを、ただただ祈った。

「外、晴れてるらしいよ」
「もう？　まだ避難指示解除されてないんじゃない？」
「でも外は全然そんな感じじゃないんだって」
「ほんとに……ちょっと見に行ってみましょ」
「うん、行こう」
　避難所では既に外の様子が伝わっていた。
　軋み続けていた建物が急に静まり返ったのだ。様子を身に出るのも無理はない。
　そこに快晴が広がっているともなれば、気にならない方が無理な話だった。
「……さやか達は、勝ったようだ」
「うん。みたい、だね」
　人が出口に押し寄せるのを遠巻きに眺めつつ、キュゥべえとまどかは言葉を交わしていた。
「信じられない事が起こったよ。本当に、全く予期していなかったことだ。あんな逆転劇になるとはね」
「……さやかちゃんだもん」
「？」
「だって、さやかちゃんだもん」

「なんだい？　それは」
「うぃひひ……親友だからこそわかることなんだよ、キュゥべえ」
まどかは上機嫌そうにキュゥべえの頭を撫で、笑うのだった。
「……やれやれ。契約者を頻出してくれる、便利な魔女だったんだけどなぁ」

ゲームオーバー

有り余る魔力を用いて、私はゆっくりと黒い地上に降り立った。
着地とともに、鎧全身が重々しい音を立てる。
「……さやか？」
怪訝な表情でほむらが訊ねる。
隣のマミさんも似たような顔だった。私が本当にさやかであるのか、疑うような……。
「どう見たって私……ああ、そっか」
銀のヘルムのフェイス部分を魔力稼働で跳ね上げる。
魔法で透視していた視界よりもより鮮やかな、いつもの色彩のみんなが見えた。
「フルアーマーさやかちゃんです」
「……何が起こったの？」
ボケにつっこみが入らない。悲しいなぁ。
「私は、嵐の中で……魔女の攻撃に引き裂かれた貴女を見たわ」

「そして佐倉さんもね」
私も魔女にこっぴどくやられたのは覚えている。
確かに、痛覚を切っていなかったら到底耐えられない、拷問のような死に際だったと思う。
だから見ていないけど……マミさんの口ぶりでは、その後に杏子もやられたのだろう。首が無かったのはそのせいか。
「うん……確かに、一時は死にかけたよ。上半身消し飛んで、遠いところまで風に煽られて……だけど、ソウルジェムはギリギリで無事だったみたい」
消えたのが上半身だったからこそ助かったのだろう。
下半身だったら臍のソウルジェムが壊れてたな。
「ソウルジェムが無事なら大丈夫なのは知ってるけど、だからってあの死傷から……信じられないわ」
「……ま、それは正直、私もね」
「……あは、あはは……勝利の余韻に浸っている反面、戸惑いを隠せないわね」
緊張感は一気に抜けきらなかった。
疲労感がどっと押し寄せてくることもない。どことなく微妙な後味の勝利だ。
けど、私達は間違いなく強敵を打ち破った。それだけは確かなこと。

「……よし」
「終わった？」
「ああ」
降ってきたグリーフシードを全て回収した杏子は、黒い大地の中央で祈りを捧げていた。
膝を折って手を組む仕草は、普段の乱暴な彼女からは全く想像できないものだ。
祈る先はグリーフシード……かと思いきや、自前のアンクである。
「佐倉さんも無事だったのね……良かった」
「まあな」
膝についた灰を払って、杏子がこちらに向く。
ワルプルギスを撃破した張本人である彼女の表情は、晴れても沈んでもいない。無表情だ。
……私と同じで、まだ整理がついていないのだろう。思考も、感情にも。
「あなたも生き返ったのね」
「……おかげさまでね」
「？」

杏子はじっとほむらを見て、複雑そうな顔をしていた。
……うん。今の私にはわかる。杏子の複雑そうな内心が、手に取るように。
「おい、暴れるなよ?」
「え?　……えっ!?」
なんて心のなかでクスクス笑ってたら、突然杏子がほむらを抱きしめたではないか。
その奇行にはさすがの私もびっくりである。いや、されたほむらの方がびっくりしてるだろうけど。
「ちょ、ちょっと、なに……!」
「……なんでもない」
どう見てもなんでもないことはないはずだけど、情緒不安定な杏子の抱擁はすぐに終わった。
残されるのは顔を赤くして慌てるほむらばかり。
「一時的にだけどさ。神様が、アタシらに奇跡をくれたんだよ」
「え?」
ああ……神様ね。私は思わずクスリと笑った。
面白かったわけではない。その通りかもしれないと、彼女に共感したのだ。
これまでの私の人生、そして夢を叶えてくれた奇跡。神様、その通りと言う他ない。

「しかしこの奇跡も、一度きりみたいだね……さっきこそ大暴れできたけどさ、もう底から漲るようなパワーは出てこないよ」
「あー……確かに、そう言われてみれば、よ、鎧が重く……」
「解除しときなよ。知らないうちに魔力を食ってるかもしんねーぞ」
「そ、そうしておこうかな」
全身を包む鎧を解除し、剣も消滅させる。
体は元通り、普通の魔法少女の姿に戻った。
……また膨大な魔力を使わない限りには、また先程までの姿にはなれそうもない。
「奇跡、か……二人共、力を願ったからかしらね」
「強さを求める心が、力を呼び覚ました？　ふふ、強引だけど、ロマンがあって良いわね」
「へ、かもね」
ロマン。確かにそうだ。
……けど、手に入れた新たな能力は、私は癒やしの力で、杏子は惑わしの力だ。
私の願いも杏子の願いも、同じ力の願い。
単純な私達の願いを強化した奇跡なのだとすると、癒やしならそれに多少の説明は付くものの、幻影や幻惑の理由を説明するにはちょっと不十分なように感じる。
あの奇跡はもっと別の……例えば、別の何者かの願いなんじゃないかな、と思ってし

まうのだ。
私達の意志とは別の何か……。
「〝この世界の因果と、私の因果〟……因果、か」
暁美ほむら、煤子、時間遡行、平行世界、因果……。
護りの力……癒やしの力……美樹さやか。
美樹さやかと癒やしの力、か。
ふと脳裏に、幼馴染の顔が浮かび上がってきた。
「……ほむら」
「？　え、なに、ちょ……」
私はほむらを優しく抱きしめた。
杏子に続いて二人目だ、そこまで驚きはしなかったけど、驚いてはいる。
……細い身体だ。
「よく頑張ったよ、今まで……今まで本当によく頑張ったよ」
「……」
全ては、地獄のような時を何度も繰り返し、挑戦してきた一人の少女の願いが始まりだった。
何度も何度も戦い続け、決して挫けることなく戦い続けてきた彼女の、最初の強い願

いが、この時を呼び寄せたのだろう。
　私は……きっとその重さを、知っている。
「ほむらがいるから、今この時があるんだろうね」
「……」
「……お疲れ様。ありがとう、ほむら」
「……！」
　嵐は過ぎ去った。快晴を見上げた人たちは、段々と街へ戻ってくるだろう。
　ここもそう長くは居られたものではない。
　だけど暫くの間だけ、ほむらは周囲を気にすることなく泣いた。
　努力が報われ、願いが叶ったことを理解して、堰を切ったように嗚咽し続けた。

　おめでとう……お疲れ様、よく頑張ったわね。
　本当にみんな、よく頑張ったわ。

　これでもう、私は思い残すこともない。

……だってそうでしょう、私の願いが叶ったのだもの。
完成されたこの世界に何を望むというのかしら。

繰り返すことは、これでおしまい。
これで私は満足だわ。

……最高のゲームオーバーよ、ありがとう。

見滝原の被害は、極大のスーパーセル到来にもかかわらず、かなり小規模な被害で済んでいた。
衰えることなく突き進むであろう気象予測とは裏腹に、スーパーセルは早い段階で消滅してしまったのだ。
観測所の誤探知、誤報、統計の誤り……。
……まあ逆に色々と風当たりが強くなった所もあったみたいだけど、局所的に残っているとてつもない風害の傷跡は、観測所の人々の首の皮をなんとか繋げたようだ。

しかしそんなことよりも驚くべきは、今回の災害による死傷者と負傷者の数だ。
局所的な被害であったとはいえ、避難に遅れた人々はゼロではない。
少なからず巻き込まれ、何百人と犠牲が出たはずである。
が、それも極端に少なかった。
理由は……不明。
気味の悪いことに、強風によって瓦礫の下敷きになった人や、飛来した物にぶつかって怪我をした人たちの傷が、ほぼ完全に癒えてしまっているというのだ。
ある人は、こうだ。
家屋の下敷きになり、身動きが取れず出血だけが続き、絶望の中で意識を手放した人がいた。
だけどその人が目を覚ましてみれば、破れた服と血溜まりがあっただけで、自分は一切の傷を負っていなかったのだという。
……いやあ、恐ろしい話もあったもんだよね。こわいこわい。

見滝原は未曾有……であろうはずの大災害から難を逃れた。
街は風でちょっと荒れていたものの、それもすぐに元に戻るだろう。
数日の休みがあったものの、学校もすぐに始まるらしい。

良かった良かった。

……と、他人事だけど、実は今日がその嵐明けの登校初日。

「……ふんふんふーん」

いつもの登校風景。いつもの青空。

見慣れた道を歩いてゆけば、いつもの場所に彼女たちがいる。

「さやかちゃーん！」

「さやかさん、おはようございます」

「おはよう」

「おー、おっはよー！」

まどか、仁美、そしてほむら。

「きゅっぷい」

『おお、キュゥべえもいたか、おはよ』

「うん、もちろんだよ」

キュゥべえは特に悪びれもせず、当然のようにまどかの肩に乗っていた。

……まぁ、これからも折にふれてキュゥべえが茶々を入れてくるだろうけど、ワルプルギスの夜を乗り越えたまどかにはそんな手も通用しないだろう。

心配は無用だ。

「……」
「睨まないでよ」
　ほむらの目は相変わらず、そうは言ってないけどね。
「ところでさやか、杏子について話を聞いているかい？」
『え？　杏子？』
「うん。彼女はしばらくこの付近からも姿を消すらしいんだ」
『えっ』
『え？』
　それは初耳だ。
　っていうか、え？　なんで？
「理由は聞いてみたけど、僕には意味がわからなかったよ」
『なんて言ってたのよ。せっかく平和が戻ってきたっていうのに、復学もしないであいつは……』
「さあね、元々何を考えているのかわからない魔法少女だし……ええとね」
　キュゥべえは思い出すようにしっぽを横に振った。
「〝煤子さんはまだ消えずに、この世を彷徨っているのかもしれない〟」

「……」
「〝煤子さんを探しにいってくる〟」
「……」
「彼女はそう言って、たくさんのグリーフシードと一緒に旅に出た。グリーフシードは有り余るほどあるからね、実力もあるし心配はいらないけど」
『……煤子さんって、さやかちゃんの、あの？』
「うん、だね……そうか」
彼女は魔女になった煤子さんを探しに行ったのか。
……確かに、煤子さんの魔女を倒した記憶はない。ワルプルギスと一緒に消滅した……っていう可能性があるかといえば、なさそうだ。
まだ魔女としてどこかにいるかもしれない。その読みは、意外と現実的なのかも。
『……煤子、ね』
ほむらは思案している様子。
彼女の中ではほとんど確信的に思い当たっているのだろう。
ただ、それに干渉する必要性はないと考えているようだ。
「さやかも彼女に心酔しているんだろう？　君はどうする？　杏子と同じで、煤子っていう人を探しにいくのかい？」

『え？　さやかちゃんも旅に出ちゃうの？』
煤子さん。私にとってかけがえのない恩人。
とても大切な人。また、一度でもいいから会いたい人……。
『ううん、私は行かないよ』
「そう？　意外だな」
『でも、探すのを無駄なこととは思わない。正直杏子と一緒に探しに行きたいよ。意義のあることだと思う……けど』
私の横を歩くほむらを見る。
『多分、煤子さんはなんてことのない、こんな平穏な日々を望んでいるから』
『……』
『私はその中で、生きていくつもりだよ。ずっと』
そう、私はこんな日々を守っていきたい。
まどかを守り、ほむらを守る。二人の日常を守っていくために、私はここで生きていきたい。
それも、煤子さんが望む願いでもあったのだと思うから。
『そう、それでいいのね？　さやか』
『うん！　もちろん』

私はほむらに微笑みかけた。ほむらも、薄く口元で笑い返してくれた。
「い、いけませんわ……」
「え？」
そんな私達の様子を見て、勘違いした仁美が走り去っていく。
私達は慌ただしくその後を追いかける。
青い空。爽やかな風。
こんな日々を送って行こう。

『おはよ』
『あっ、マミさん！　おはようございます！』
『おはよう』
『おはようございまーす！』
これから再び魔法少女として、見滝原を守っていこう。
ワルプルギスの夜を倒しても、この世から魔女が消え去ったわけではない。
私はまだまだ、戦い続けなくてはならない。
この手の届く限りに、人々全てを守っていこう。
かけがえのない笑顔を守るために、絶望に悲しませないために。

日常を守り抜くために。

とん、とん。

「ん？」

しかしその日常の前に、ちょっとした非日常的な出来事が待っていた。

私の右腕を、一冊の本が小突く。

本の表紙には管楽器の文字があった。

「さやか、おはよう。早速だけどこれ返すよ。新鮮で面白かった。ありがとう」

「恭介、おは……あれ？」

恭介は左手に持った本を私に差し出している。

「あ、上条くんおは、よう……？」

「……？　あ、あれ？」

「……恭介、その左手……」

杖もつかず、二本の脚で私達と並んで歩く彼の姿。

腕にはギプスもなく、元気に手まで振っている。

恭介は左手に持った本を軽く掲げて、言った。

「完治、だってさ」

「……うそっ」

「本当」

拍子抜けしたような、けど空元気でもなんでもない、恭介の自然な笑み。

それはまさに、彼の言うことが嘘ではなく、真実ということで。

「……マジで？」

それは、よく晴れた日の出来事だった。